



コーパス調査に基づく現代日本語におけるスタンス表出システムの解明と日本語教育への応用：一人称代名詞・文末詞・陳述スタイル・ヘッジの分析

肖, 錦蓮

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2022-03-25

(Date of Publication)

2023-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8236号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1008236>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博士論文

コーパス調査に基づく現代日本語におけるスタンス表出
システムの解明と日本語教育への応用：一人称代名詞・
文末詞・陳述スタイル・ヘッジの分析

令和4年1月

神戸大学大学院国際文化学研究科

肖 錦蓮

目次

第 I 部 研究の枠組み	1
第 1 章 問題提起	1
1.1 はじめに.....	1
1.2 日本語におけるスタンス表出の例.....	2
1.3 日本語学習者のスタンス表出.....	4
1.4 本研究のねらいと構成.....	5
第 2 章 スタンス研究の前提	8
2.1 スタンスの定義.....	8
2.1.1 一般的な「スタンス」	8
2.1.2 言語学におけるスタンス	9
2.2 スタンス表出の種類.....	14
2.3 本研究におけるスタンスとスタンスマーカー	19
第 3 章 先行研究	21
3.1 コーパスとコーパス言語学.....	21
3.1.1 コーパスとコーパス言語学の定義.....	21
3.1.2 日本語コーパス言語学.....	22
3.2 一人称代名詞に関する先行研究	33
3.2.1 日本語学における一人称代名詞	34
3.2.2 日本語教育における一人称代名詞.....	39
3.3 文末詞に関する先行研究	40
3.3.1 文末詞の使用実態	40
3.3.2 日本語教育における文末詞.....	45

3.4 陳述スタイルに関する先行研究	49
3.4.1 陳述スタイルの使用実態	50
3.4.2 陳述スタイルのシフト	52
3.5 ヘッジに関する先行研究	54
3.5.1 日本語学におけるヘッジ	54
3.5.2 日本語教育におけるヘッジ	58
第4章 リサーチデザイン	60
4.1 研究目的	60
4.2 使用するコーパス	60
4.2.1 本論文で使用するコーパスの全体像	60
4.2.2 本論文で使用する母語話者コーパス	63
4.2.3 本論文で使用する日本語学習者コーパス	64
4.3 使用する統計手法	66
4.3.1 仮説検定 (T検定と分散分析)	66
4.3.2 相関分析	67
4.3.3 主成分分析	68
4.3.4 クラスタ分析	69
4.3.5 コレスポネンダンス分析	70
第II部 現代日本語におけるスタンス表出	72
第5章 現代日本語における一人称代名詞使用	72
5.1 現代日本語における一人称単数代名詞使用	73
5.1.1 研究目的とリサーチクエスチョン	73
5.1.2 データ	74
5.1.3 分析手順	75
5.1.4 結果と考察	76
5.1.5 まとめ	88

5.2 現代日本語における一人称複数代名詞使用	88
5.2.1 研究目的とリサーチクエスチョン	88
5.2.2 データ	89
5.2.3 分析手順.....	90
5.2.4 結果と考察	90
5.2.5 まとめ	101
第6章 現代日本語における文末詞使用	103
6.1 本章の目的とリサーチクエスチョン	103
6.2 データ	104
6.3 調査項目	104
6.4 分析手順.....	105
6.5 結果と考察	107
6.5.1 RQ1 文末詞の使用量変化	107
6.5.2 RQ2 多用される文末詞	110
6.5.3 RQ3 文末詞の使用場面	110
6.5.4 RQ4 辞書・教材の記述提案—文末詞「わ」を例に—	112
6.6 まとめ	114
第7章 現代日本語における陳述スタイル選択	115
7.1 本章の目的とリサーチクエスチョン	115
7.2 データ	116
7.3 分析手順.....	116
7.4 結果と考察	119
7.4.1 RQ1 ジャンル影響による常体率の変化	119
7.4.2 RQ2 年代影響による常体率の変化.....	122
7.4.3 RQ3 ジャンル影響と年代影響の関係	125
7.4.4 RQ4 辞書・教材の記述提案—助動詞「だ」を例に—.....	127

7.5 まとめ	129
第8章 現代日本語におけるヘッジ使用	130
8.1 日本語におけるヘッジの重要性	131
8.2 ヘッジ語形の使用実態	133
8.2.1 研究目的とリサーチクエスチョン	133
8.2.2 データ	134
8.2.3 調査項目	135
8.2.4 分析手順	136
8.2.5 結果と考察	137
8.2.6 まとめ	148
8.3 ヘッジ語形の典型的語義	149
8.3.1 研究目的とリサーチクエスチョン	150
8.3.2 調査項目	151
8.3.3 使用するデータ	151
8.3.4 分析手順	152
8.3.5 結果と考察	153
8.3.6 まとめ	161
8.4 ヘッジ機能に対する母語話者意識	162
8.4.1 研究目的とリサーチクエスチョン	164
8.4.2 手法	164
8.4.3 結果と考察	166
8.4.4 まとめ	173
8.5 辞書・教材の記述提案—「ね」「ちょっと」「頃」を例に—	174
8.5.1 研究目的とリサーチクエスチョン	175
8.5.2 対象項目	176
8.5.3 分析手順	177
8.5.4 結果と考察	177
8.5.5 まとめ	182

第Ⅲ部 中国人日本語学習者のスタンス表出	183
第 9 章 中国人日本語学習者の一人称代名詞使用	183
9.1 本章の目的とリサーチクエスチョン	183
9.2 データ	184
9.3 対象者	184
9.4 分析手順	186
9.5 結果と考察	187
9.5.1 RQ1 学習者・母語話者別の FSP 使用量	187
9.5.2 RQ2 習熟度別の FSP 使用量	193
9.5.3 RQ3 FSP の共起語	195
9.6 まとめ	198
第 10 章 中国人日本語学習者の文末詞使用	200
10.1 本章の目的とリサーチクエスチョン	200
10.2 データ	201
10.3 対象者	201
10.4 調査項目	202
10.5 分析手順	203
10.6 結果と考察	204
10.6.1 RQ1 学習者・母語話者別の文末詞使用量	204
10.6.2 RQ2 使用される文末詞	207
10.6.3 RQ3 習熟度別の文末詞使用量	212
10.7 まとめ	214
第 11 章 中国人日本語学習者の陳述スタイル選択	215
11.1 本章の目的とリサーチクエスチョン	216
11.2 データ	216

11.3 分析手順.....	218
11.4 結果と考察.....	221
11.4.1 RQ1 常体シフトの発生時期.....	221
11.4.2 RQ2 常体シフトの発生パターン.....	222
11.4.3 RQ3 常体シフトを助長する要因.....	227
11.5 まとめ.....	229
第12章 中国人日本語学習者のヘッジ使用.....	231
12.1 本章の目的とリサーチクエスチョン.....	231
12.2 データ.....	232
12.3 対象者.....	233
12.4 調査項目.....	233
12.5 分析手順.....	235
12.6 結果と考察.....	236
12.6.1 RQ1 ヘッジ使用量.....	236
12.6.2 RQ2 マーカーヘッジ.....	238
12.6.3 RQ3 ヘッジ習得段階モデル.....	245
12.7 まとめ.....	247
第IV部 まとめ.....	249
第13章 知見の教育的応用および制約と課題.....	249
13.1 本研究の知見のまとめ.....	249
13.2 日本語教育現場への提言.....	255
13.3 教科書を利用したスタンス指導の一例.....	257
13.3.1 文末詞に関するタスクシート案.....	259
13.3.2 一人称代名詞の表記選択タスクシート案.....	263
13.3.3 ヘッジに関するタスクシート案.....	267
13.3.4 陳述スタイルの選択タスクシート案.....	272

13.4 本研究の制約と課題.....	276
参考文献	278
付録.....	286
付表 1 ジャンルごとのヘッジ語形頻度 (8.2)	286
付表 2 「が」の語義整理 (8.3).....	289
付表 3 「けれど」の語義整理 (8.3).....	290
付表 4 「たり」の語義整理 (8.3)	291
付表 5 「ね」の語義整理 (8.3)	291
付表 6 「ちょっと」の語義整理 (8.3)	293
付表 7 「やはり」の語義整理 (8.3)	295
付表 8 「ほう」の語義整理 (8.3)	296
付表 9 「感じ」の語義整理 (8.3)	297
付表 10 「頃」の語義整理 (8.3)	297
付表 11 母語話者内省調査用の質問項目 (8.4)	298
付表 12 ヘッジ語形の意味緩和度のスコア (8.4)	308
謝辞.....	314

第 I 部 研究の枠組み

第 I 部は、4つの章から構成される。まず、第 1 章では研究の背景について述べる。第 2 章「スタンス研究の前提」において、スタンスの定義や表現形式、分類方法などのスタンスに関わる研究について概観し、本研究におけるスタンスの定義を行う。また、第 3 章「先行研究」においては、まず、コーパス研究のこれまでの発展について概観を行ったあと、4つの主要なスタンスマーカに関する従来の研究を整理し、その課題を指摘しておく。第 4 章「リサーチデザイン」においては、本研究の目的、使用するデータ、研究手法などについて概観する。

第 1 章 問題提起

1.1 はじめに

グローバル化が進み、人と人との接触や交流が進む現代社会においては、言語によるコミュニケーションの重要性がますます高まっている。この点を踏まえ、言語研究においても、語用論など、コミュニケーション場面における言語の具体的な使われ方の解明を目指した研究が広く行われるようになってきている。また、言語教育の分野においても、従来のように語彙や文法を教え込むのみならず、実際のコミュニケーションの場で、適切な言語理解や言語使用を行えるように、学習者を支援するコミュニケーション志向型言語教育の重要性が広く認識されるようになってきている。

スムーズなコミュニケーションを行うためには、適切な内容を伝えるだけでなく、適切な方法でそれを伝えることも重要となる。実際、伝達する事実は同じであっても、異なる語彙や文法形式を選択することによって、書き手や話し手は当該の事実について、個人の気持ち、態度、価値判断、評価を間接的に表出することができる。このとき、書き手や話し手個人の気持ち、態度、価値判断、評価を「スタンス」という。スタンスを表出する際には、様々な語彙や文法形式の助けを借りることが多いが、こうした言語的工夫を「スタンスマーカ」と総称する (Biber, Johansson, Leech, & Finegan, 1999)。

スタンスマーカは英語においてはすでに幅広く議論されており、前述の Biber et al. (1999) を含め、コーパスを用いた計量的研究も少なくない。一方、日本語の場合、スタンスマーカに関する研究は少なからず存在しているものの、その大部分は主観や内省による理論的なものであって、実際の言語データを分析した計量的かつ実証的な研究は必ずしも十分ではない。加えて、日本語学習者のスタンスマーカ使用状況についても十分に研究

されていないのが現状である。母語話者は言語とともに、言語が使われる談話環境を同時に習得しているため、スタンスマーカの理解や使用は必ずしも困難なものではない。一方、教室環境で日本語を知識として学ぶ学習者にとって、スタンスマーカの理解や使用は極めて困難となる。この点については、教育における援助が期待される場所であるが、現在の日本語教育は基礎的な語彙や文法の習得に重きに置いており、自然なコミュニケーションにおいて、談話に込められたスタンスを正しく理解し、自分自身が適切な形でスタンスを表出できるように支援する情報はほとんど示されていない。

以上をふまえると、コミュニケーションを図るうえで重要な役割を果たすスタンスマーカについて、大規模な言語データベースを用い、それらの用法やスタンスの現れ方を詳細に分析するとともに、日本語学習者による使用状況と習得上の課題の調査・分析を行うことが今後必要になってくると思われる。なお、広義のスタンスマーカの範囲はきわめて広いいため、本研究では、一人称代名詞、ヘッジ、文末詞、陳述スタイルの4種類に絞って研究を行っていく。また、日本語学習者は現在世界の各地に広がっているが、本論文においては、世界の日本語学習者の圧倒的大部分を占める中国人日本語学習者に議論を限定する。

1.2 日本語におけるスタンス表出の例

スタンスというのは次章で詳しく検討するように、必ずしも明確な概念ではない。研究者によってその定義はまちまちである。しかしながら、様々な語彙や表現を選択することによって、話者が自身の立場や態度を言語的に表出することがスタンスの具体的な表れであると考えられる。スタンスには、いろいろな側面があるが、本研究では、(1) 一人称代名詞、(2) 文末詞、(3) 陳述スタイル、(4) ヘッジ、4つの点について注目していくこととした。なお、これらの点に注目した背景に関しては第2章を参照されたい。以下は現代日本語書き言葉均衡コーパス (Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese : 以下 BCCWJ) から抽出した用例である。

一人称代名詞

- (1) 工場の廃止というのは、そんなにたくさんあるものではないというふうに私は考えております。(典拠：BCCWJ, 国会会議録)
- (2) 俺だってそう考えたさ、当然だ。(典拠：BCCWJ, 出版・書籍)

文末詞

- (3) 頑張って、今のままでは彼とも別れがくるわよ。(典拠：BCCWJ, 知恵袋)
- (4) 「それは、やっぱり別れかしらね」と、千佳子は言い切った。(典拠：BCCWJ, 図書館・書籍)

陳述スタイル

- (5) このような既存の中小企業を積極的に支援することが重要である。(典拠：BCCWJ, 新聞)
- (6) 感染を防ぐためにも、外出を控えることが重要です。(典拠：BCCWJ, 広報紙)

ヘッジ

- (7) しかしどちらが正しい反応かは疑問で、たぶん個人的判断による。(典拠：BCCWJ, 図書館・書籍)
- (8) おそらく多くの場合、穏便な話し合いで解決することが多かったと思われる。(典拠：BCCWJ, 図書館・書籍)

まず、(1) と (2) は一人称代名詞に関わるものである。(1) の例では、「私」を使うことによって、中立的でフォーマルな印象を与えているが、(2) では、「おれ」を使うことで、くだけたニュアンスや相手と親しみやすい雰囲気生まれると言えるだろう。2 つの例は、場面の改まり度が一人称代名詞の選択に影響する可能性を示している。

次に、用例 (3) と (4) 文末詞に関するもので、(5)、(6) とも一般的に女性が多用する終助詞とされる。こうした語を使うことで、話者が女性であることを示している。さらに、(5) の場合は断定の意味合いを和らげる働きがある。(6) の場合は、話者が女性であることのみならず、一定の年齢や社会的地位を持っていること、さらには最後に「ね」を添えることによって、相手への配慮を示していることがわかる。

(5) と (6) は陳述スタイルに関するものである。(7) (8) はいずれも広義の報道媒体であるが、(7) では一般的な読者を対象に事実を中立的に述べようとして常体が選ばれている。一方、(8) では納税者である地域の住民を想定読者としてより相手に配慮する記述とするため敬体が選ばれている。このように、日本語では同等の内容を伝える場合であっても、陳述スタイルの選択により、異なる書き手の態度を示すことが可能になっている。

(7) と (8) ははヘッジに関するものである。「たぶん」、「おそらく」という言葉を挟むことによって、主張しようとする内容を弱め、自分自身の責任を回避するようなニュアンス

が含まれている。

このような要素のスタンス表出は日本語学の枠組みにおいては十分に議論されておらず、研究する余地が大きいと考えられる。

1.3 日本語学習者のスタンス表出

前節において、日本語においてスタンスが様々な語や表現の形で出現することを見てきた。こうした選択は学習者においても行われているが、学習者の場合、スタンスを正確に使いこなすことは必ずしも容易ではない。以下の例を見てみよう。(9)と(10)は「多言語母語の日本語学習者コーパス」(International Corpus of Japanese as a Second Language, 以下 I-JAS), (12)は台湾の日本語学習者の日本語による作文を時系列的に収録した LARP at SCU コーパス (Language Acquisition Research Project at Soochow University, 以下 LARP), (11)は日本語学習者の作文に対して日本語教師による誤用タグを付与した学習者作文コーパス「なたね」から取った例である。

一人称代名詞

(9) 最近、私は、僕はちょっと忙しくなって。(I-JAS, 男性, 中国語母語話者)

文末詞

(10) 実家に帰ったら、ご馳走が待ってくれるかしら。(I-JAS, 女性, 中国語母語話者)

陳述スタイル

(11) この中に、90%女性です。職場では、女性の給料は男性の平均の半分だけである。

(「なたね」, 中国語母語話者)

ヘッジ

(12) 少子化は先進国で必ず起こる問題なのです。(LARP)

用例 9-12 は学習者のスタンス表出に関わるものである。(9)においては、話者は相手と親しい関係を演出するため、本来「僕」という表現を使いたかったと考えられる。しかしながら、はじめから「僕」を言い出すのではなく、その前により中立的で、時としてよそよそしい感じを与える「私」を選んでしまっている。このように、ある程度上級の学習者であっても、どの一人称代名詞を使うかを即座に判断して、正しいものを選択することは極めて困難であるように思える。

(10) は少子化について書かれた作文から取り出された例である。この文脈で「必ず」といった断定表現を表す表現を使ってしまうと、言い切るニュアンスを読者に与えてしまう恐れがあると考えられる。この場合、少子化の程度が小さい国も存在するため、このような文脈では、「少子化は多くの先進国で起こる問題です」と言ったほうが妥当であると思われる。

(11) の例は 20 代の女性が会話に「かしら」を使用している例である。「かしら」は現実の日本語会話では使用されなくなってきており、ドラマや漫画などの創作でしか使わない女性のセリフとなっていることがしばしば指摘されている。普通の会話で「かしら」を使うと、不自然な言葉遣いとなったり、相手が違和感を感じたりすることになりかねないと思われる。

(12) の例では、学習者による陳述スタイルに関わる例である。最初の「です」に示されるように、学習者は明らかに敬体を文章のスタイルとして選択している。にもかかわらず、そのすぐ直後で常体を使っており、スタイルの統一が破られている。これは、学習者が陳述スタイルを意識せずに文章を書いている可能性を示している。

世界の日本語学習者の中で、中国人日本語学習者は総体的に見て日本語の習熟度は極めて高い。しかしながら、そうした中国人学習者であっても、実際の日本語を話したり書いたりする際には、スタンス表出という点において、様々な問題が見受けられることが明らかになった。このような要素のスタンス表出は日本語教育においては十分に指導されておらず、研究する余地が大きいと考えられる。

1.4 本研究のねらいと構成

上記を踏まえ、本論文のねらいを、(1) 現代日本語における 4 種の主要なスタンスマーカの使用実態とその意味特性を調査したうえで、(2) 中国人日本語学習者によるそれらの使用状況と使用上の課題を解明し、(3) スタンスマーカ指導の方向性を検討すること、の 3 点とする。

本研究は、全 4 部、13 章構成をとる。第 I 部「研究の枠組み」においては、第 1 章「問題提起」では、日本語母語話者および学習者のスタンス表出の事例を示し、スタンスマーカの研究の必要性と本研究の意義について述べる。第 2 章「スタンス研究の前提」では、スタンスおよび関連概念の定義、各種のスタンス表現形式を整理したあと、本研究におけるスタンスの定義を行い、調査対象とするスタンスマーカを示す。また、第 3 章「先行研究」

では、代表的な日本語コーパスを概観したあと、4種のスタンスマーカーごとに、主要な先行研究を概観する。第4章「リサーチデザイン」では、本研究の目的、使用するコーパス、統計手法などについて概説を行う。

第Ⅱ部「現代日本語におけるスタンス表出」は、4つの章からなり、日本語母語話者コーパスを用いてスタンスマーカーの用法解明を行う。

第5章「現代日本語における一人称代名詞使用」では、現代日本語における一人称代名詞の使用実態とそれを用いて表出されるスタンスの解明を目指す。一人称代名詞について、語・異形・文字種という3段階の分析を行い、一人称代名詞のフォーマル度と共起語を合わせて調査することによって、現代日本語のブログにおける一人称代名詞の使用実態や機能の諸相を観察する。

第6章「現代日本語における文末詞使用」では、現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)を使用し、先行研究では手薄な小説に注目し、7種類の文末詞について、経年変化、典型性、使用場面の3つの観点から調査を行う。

第7章「現代日本語における陳述スタイル」では、BCCWJを使用し、ジャンル差と年代差という2つの観点を組み合わせて、日本語における常体・敬体の使用実態を調査し、そこに見られる常体・敬体のスタンスを議論する。

第8章「現代日本語におけるヘッジ使用」では、まず、言語環境別に見たヘッジ語形の使用実態の解明と典型的ヘッジ語形の特定と、主要ヘッジ語形の典型的語義の特定を行う。次に、母語話者内省調査に基づき、強い意味緩和機能を有するヘッジ語形を特定する。最後に、コーパス調査と母語話者内省調査で得られた知見を踏まえ、外国人学習者向けの発信型辞書の記述を考案する。

第Ⅲ部において、新たに日本語教育の視点を加え、「日本語学習者のスタンス表出」の問題を扱う。第Ⅲ部は4つの章から構成される。

第9章では、学習者の発話データを用い、(1)使用量、(2)共起語の2つの観点に注目しつつ、習熟度が上がるにつれ、学習者が適切な量のFSPを適切な形で使用できるようになっているかどうかを調査する。

第10章では、学習者の発話データを用い、(1)使用量、(2)種類、(3)習熟度の影響の3つの観点に注目しつつ、学習者が文末詞を逸脱的に使用しているかどうかを検討する。

第11章では、時系列的にデータを収集した日本語学習者作文コーパスを用い、学習者の作文における文体の変化を調査し、文体が敬体から常体へと変わるシフトの発生時期、常体

シフトを助長する要因などを解明することを目指す。

第 12 章では、学習者の発話データを用い、(1) ヘッジ使用量、(2) マーカーヘッジ、(3) ヘッジの習得段階の 3 点に注目し、習熟度がヘッジの習得状況にどのような影響を及ぼしているかを調査する。

第 13 章では、まず、各章のまとめを述べたあとに、各章から得られた知見をもとに日本語教育への提言を行う。また、既存の教科書を利用しつつ、授業の中で追加的に利用できるタスクシートの在り方について検討する。最後に論文の結びとして、本研究における制約と今後の課題を述べる。

第2章 スタンス研究の前提

第1章では、(1) 言語が意味表出に加え、スタンス表出を担っていること、(2) スタンス表出を担うスタンスマーカ―に関して、多くの学習者が問題を抱えていること、(3) 日本語学的にも、日本語教育学的にもスタンスマーカ―の研究は十分とは言えないことを指摘したうえで、本論文の狙いと構成について紹介した。

以上で述べたように、本研究は、スタンスを主たる調査対象とするわけであるが、スタンスというのは極めて幅広い概念であって、研究者によって用語の使い方は異なる。すなわち、以下の研究を進める前提として、まず、まずもって行うべきことは、スタンスという用語の定義の確認である。そこで、以下では、言語学におけるスタンスの定義やスタンスマーカ―の分類方法を概観したうえで、本研究における「スタンス」の定義を行う。

2.1 スタンスの定義

本研究では、「スタンス」について議論をしていくわけであるが、スタンスは先行研究において、様々な類似概念で議論されている。例えば、「モダリティ」や「評価」、「主観性」といったものである。以下においては、これら全体を「スタンス」と総称したうえで、従来の言語研究において、こうしたスタンス要素がどのように定義されているかを見ていくこととしたい。

2.1.1 一般的な「スタンス」

日本語における「スタンス」の一般的な理解を確認するため、『広辞苑』(第6版)、『大辞泉』(第2版)、『新明解国語辞典』(第3版)の3種の辞書の記述を概観する。

表1 国語辞書における「スタンス」の定義

辞書	スタンスの定義
広辞苑	事にあたる姿勢, 立場
新明解国語辞典	当局者として取るべき姿勢, 観点
大辞泉	立場, 態度

いずれの辞書においても、スタンスはゴルフや野球などの専門用語の意味が主として扱われている。言語学的なスタンスに近い定義として、『広辞苑』は「事にあたる姿勢, 立場」,

『新明解国語辞典』は「姿勢，観点」，『大辞泉』は「立場，態度」という語義を記載している。ここから，スタンスというものがある特定の姿勢，立場，態度に関わることが明らかになるが，いずれの辞書においても，これらの概念が言語学的意味合いを持つことについては触れられていない。

2.1.2 言語学におけるスタンス

言語学においては，「スタンス」の定義や構成要素をめぐって，これまで多くの議論がなされてきた。まず，その名称に関しても，スタンスのほか，「モダリティ」(modality)，「評価」(evaluation, appraisal)，「態度」(attitude)，「認知的モダリティ」(epistemic modality)，「メタ談話」(metadiscourse)，「主観性」(subjectivity) など，様々な用語が使用されている (Hyland, 2005 ; 龍・許, 2010)。

スタンスという用語を使用した研究の中で，特に見逃せないのは Biber et al. (1999)，Hyland (2005) および Du Bois (2007) である。

はじめに，Douglas Biber はコーパスを用いた統計的言語研究者として知られる。ただし，Biber はコーパスを一かたまりとして分析するのではなく，様々なジャンルにおいて個々の語や表現や頻度がどのように変化するかを詳細に調査し，得られた結果を統計的に分析して，ジャンルごとの言語特性を特定する研究を精力的に進めた。Biber の研究の一部として知られるのが Biber et al. (1999) である。これは話し言葉と書き言葉のコーパスを丁寧に分析し，それぞれの言語媒体において英語がどのように使用されているかを実証的・計量的に示した書物である。従来 of コーパス研究が書き言葉に偏っていたのに対し，書き言葉と話し言葉を等しく扱ったものとして，英語の文法研究のマイルストーンであると評価されている (McEnery, Xiao & Tono, 2006, p.85)。

この本においては，様々な語彙や文法の使用のみならず，スタンスについても，1つの章を構成している (第 12 章 : The grammatical marking of stance)。この章の冒頭でスタンスについて，以下のような定義が示されている。なお以下英語文献からの引用は拙訳による。

話し手または書き手は一般的に，命題内容の伝達に加えて，個人的な感情，態度，価値判断，または評価を表現する。つまり，「スタンス」を表している。

In addition to communicating propositional content, speakers and writers commonly express personal feelings, attitudes, value judgements, or assessments; that is, they

express a ‘stance’ (p.966) .

「話し手または書き手」という表現にも見られるように、スタンスは話し言葉にも書き言葉にも出現する。また、個人的な感情、態度、価値判断、評価などの要素から構成されているものと言える。

第2に、Ken Hyland は学術目的における英作文（アカデミック・ライティング）の書き方をモデル化し、教育的に示した研究者として知られる。Hyland もまた、様々な学術分野ごとに好まれる文体や構造について行っているが、それらの研究を通して、読み手にとって読みやすい文章を書くうえで、議論の流れを明示化する「メタ談話標識」(metadiscourse markers) を適切に使用することが重要であると主張している。Hyland (2005) は、8分野の240本の英語論文を調査し、さらに各分野の専門家へのインタビューも行ったうえで、これらのメタ談話標識が以下のような下位構造を持つと主張している。

図1 Hyland (2005) によるメタ談話標識の枠組み

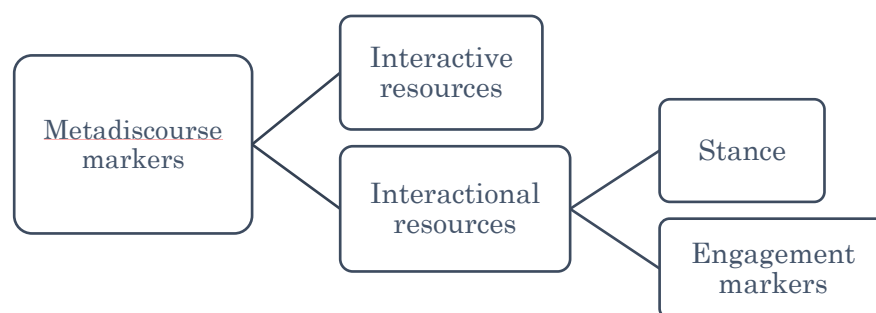


図1で示されるように、スタンスは、読み手を議論に巻き込む働きを担う「engagement markers」と合わせて、「interactional resource」として「メタ談話標識」の下位分類に組み込まれている。それぞれの定義は以下のように示されている。

表2 メタ談話標識の関連概念の定義

関連概念	定義
メタ談話標識 (metadiscourse markers)	談話を展開する際に使用される言語リソースまたは、読み手もしくはコンテンツに対する書き手のスタンス

議論展開標識 (Interactive resources)	書き手の優先解釈を明示的に示すため、議論を組み立てる助けになる言語要素 : in addition, but, and, in other words
対人関係標識 (Interactional resources)	命題情報と読み手に対する書き手の態度に注意を促すことによって、議論に読み手を巻き込む言語要素
スタンス (Stance)	書き手が自分自身を表出し、自分の判断・意見・関わりを示す際のやり方に関係する言語要素 : might, definitely, I, unfortunately
関与性マーカー (Engagement markers)	読み手への明示的な言及または、読み手との関係を構築するための言語要素 : you can see that, note that, you

Hyland (2005) が定義したスタンスには書き手の判断や意見のみならず、書き手がどのように自分自身に言及するのにも含まれている。文章における書き手の提示のしかたに重きをおくのはほかの定義と比べ斬新な試みである。

第3に、Du Bois (2007) は、新たな観点からスタンス表出行為 (stance taking) のプロセスに焦点を当てた研究である。氏は、スタンステーキングを説明する際に、「スタンスを示しているのは誰か」、「何に対してスタンスを示しているのか」、「誰のスタンスに対して答えているのか」という3つの問題点を明らかにすることが重要であると述べた後、スタンスの定義について、以下のように示している。

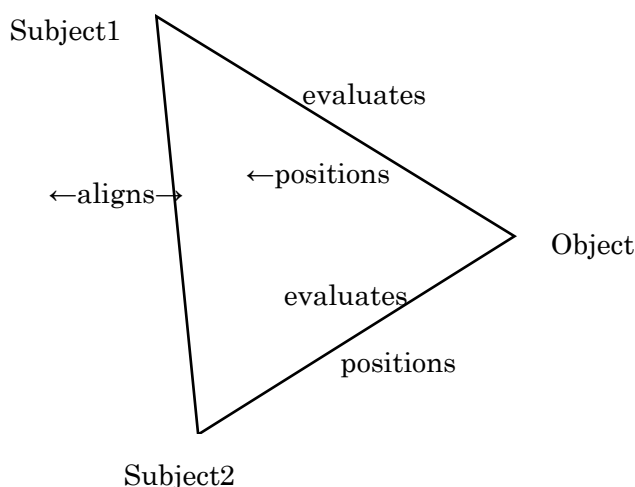
スタンスは、社会的行為者による公的行為であり、明白なコミュニケーション手段を通じて対話的に達成される。(スタンスを示す際に) 社会文化分野のあらゆる顕著な側面に関して、スタンスの対象を評価する、主体(自分あるいは他人)の立場を定める、会話参加者の間において立場を調整するという3つことが同時に行われる。

Stance is a public act by a social actor, achieved dialogically through overt communicative means, of simultaneously evaluating objects, positioning subjects (self and others), and aligning with other subjects, with respect to any salient dimension of the sociocultural field (Du Bois, 2007).

上記で分かるように、スタンステーキングには、ある主体がある対象について「評価する」

(evaluate), 「主体 (自分) の立場を定める」 (position), 「会話参加者の間において立場を調整する」 (align) という 3 つの行為が相互に関わり合っている。ここで着目すべきは, スタンステーキングは, 個人の中で完結するものではなく, 会話の参加者は相互に態度表明や交渉などを通して, 調整によって定められることである。Du Bois によれば, このスタンステーキングのプロセスは三角形の図で示すことができる (図 2)。

図 2 Du Bois (2,007) におけるスタンステーキングのプロセス



上の図は 2 人の話者何らかの事柄について議論をしている場面を表している。それぞれの話者は議論される事柄を評価したり, それに対する自分の立場を示したりする。また, 2 人の話者間には, 相互調整の機能も働いている。

すでに, Hyland (2005) によって, メタ談話という概念が示されたが, このほか, 「評価」 (evaluation, appraisal) や「モダリティ」 (modality) といった概念もスタンスの議論でよく取り上げられている。以下ではこれらについての定義を見ていく。

Vande Kopple (1985) では, メタ談話は「談話についての談話」 (discourse about discourse) とされ, 「書き手または話し手は読み手または聞き手と交流するために使用する言語表現である (the author's or speaker's linguistic manifestation in his text to interact with his receivers)」のように概括的に定義されている。メタ談話の定義を具体化した Crismore, Markkanen, & Steffensen (1993) では, メタ談話は「書き言葉, あるいは話し言葉において, 命題の内容に何かを付け加えるものではなく, 聞き手や読み手が与えられた情報を整理, 解釈, 評価するのを助けるための言語要素 (linguistic material in texts, written or

spoken, which does not add anything to the propositional content but that is intended to help the listener or reader organize, interpret and evaluate the information given) (p.40)」であると定義されるようになった。

Hunston & Thompson (2000) によれば, evaluation は「話し手または書き手が陳述されることまたは命題に対して示す態度, 立場, 視点, または感情を表す広義の用語 (Evaluation is the broad term for the expression of the speaker or writer's attitude or stance towards, viewpoint on, or feelings about the entities or propositions that he or she is talking about(p.5)」であると定義されている。

Martin (2000) によれば, appraisal とは「感情, 判断や評価についての交渉を行ったり, または評価を増幅させたり, 評価に関与したりするために使用される意味論的リソース (semantic resources used to negotiate emotions, judgement, and valuations alongside resources for amplifying and engaging with the evaluations (p.145)」である。

英語のモダリティに関する研究においては, must, may, can などの法助動詞の表す意味を扱うものが一般的である。しかし, モダリティの定義について統一的な見解が存在せず, ここでは, 代表的なものとして, Palmer (1986), Halliday (1994), 澤田 (2006) を見てみよう。Palmer (1986) は, モダリティを議論する際に, 発話の主観的特性が重要な基準であると述べ, モダリティを「話者の主観的態度と意見 (speaker's subjective attitudes and opinions)」であると定義している。一方, Halliday (1994) は, モダリティについて, 「話している内容の蓋然性や義務性についての話し手の判断 (speaker's judgement of the probabilities, or the obligations, involved in what he is saying (p.75)」であると定義している。モダリティが話し手の主観的態度を表明する言語要素である点については, Palmer と大きく変わるものではない。

英語学者である澤田 (2006) はモダリティについて, 次のように述べている。

モダリティとは, 事柄 (すなわち, 状況・世界) に関して, たんにそれがある (もしくは真である) と述べるのではなく, どのようにあるのか, あるいはあるべきなのかということを表したり, その事柄に対する知覚や感情を表したりする意味論的なカテゴリーである。(p.2)

以上で見てきたスタンスは, 日本語においても研究されているが, 日本語では, スタンス

という形で直接的に問題にアプローチすることはほとんどない。日本語学の分野においては、話し手または書き手の感情、態度、評価などといったスタンスを総括的に表す用語として、「モダリティ」がよく取り上げられる。

モダリティは、日本語文法研究において古い歴史を持つ分野である。宮崎 (2002) は従来の研究における代表的なモダリティの規定を概観したうえで、モダリティについて、次のように述べている。

文は客観的な事柄内容である「命題」と話し手の発話時現在の心的態度（命題に対する捉え方や伝達態度）であり「モダリティ」からなり、モダリティが命題を包み込むような形で階層構造化されている。(p.2)

モダリティとは、言語活動の基本単位としての文の述べ方についての話し手の態度を表し分ける、文レベルの機能・意味的カテゴリーである。(p.7)

この規定によれば、言語活動の基本単位としての文を作り出す際には、まず対面するのはモダリティの選択ということである。文をどのように述べるのかには話者の命題に対する捉え方や態度が現れるため、モダリティはコミュニケーションをするうえで重要な要素であるといえよう。

以上本節では、はじめに Biber et al. (1999), Hyland (2005), Du Bois (2007) のスタンスの定義を紹介したあと、その他の研究者による関連概念（メタ談話, 評価, モダリティ）の定義を概観してきた。

2.2 スタンス表出の種類

前節において、我々はスタンスおよびその関連概念の定義を確認してきた。実際の言語使用においては、こうしたスタンス要素は何らかの具体的な語彙や表現を選択することによって実現される。本節では、広義のスタンスに含まれるタイプについて概観していくこととしたい。特に注目して取り上げる研究者は Biber et al. (1999), Hunston & Thompson (2000), Hyland (2005), 井上 (2002) である。

まず、スタンスはどのように言語によって具現化されるかについて、Biber et al. (1999) はスタンスを表す語彙的または文法的表現を「スタンスマーカ―」と定義し、その表現形式には以下の 5 種類があるとしている。なお、(1) は語彙的スタンスマーカ―、(2) ~ (6)

は文法的スタンスマーカの範疇に入る。

- (1) 語彙的標識 : nice, difficult, love, appreciate
- (2) 副詞類 : unfortunately, kind of, I guess, as one might expect
- (3) 補文節 : I hope that, I'm happy that, It's amazing that
- (4) 法助動詞 : might, have to
- (5) 名詞+前置詞句 : the possibility of
- (6) 副詞+形容詞・名詞句 : I'm really happy for you.

(pp.967-971)

さらに、スタンスの意味的区分について、以下のようにまとめている。

表 3 スタンスの意味的区分

意味区分	説明	例
認 識 的 ス タ ンス (epistemic stance)	陳述された内容の実現可能性, 現実性の確率の度合いに関する 意見の表明	It was <u>definitely</u> a case of exploiting child labor.
態 度 的 ス タ ンス (attitudinal stance)	陳述された内容に対する話者の 個人的な気持ち, 感情, 態度の 表明	<u>Fortunately,</u> this did not stop the women from trying.
発話スタンス様式(style of speaking stance)	陳述の真実性に対する自己の立 場の再確認表明	I don't think it was her mother, <u>to tell you the truth.</u>

次に、Hunston & Thompson (2000) は、評価 (evaluation) の表現形式について、以下の3種類があると述べている。

- (1) 比較基準 (comparators) : 形容詞と副詞の比較級, 程度副詞, 消極性を表す表現
例 : just, only, un-, not, never, hardly, lack
- (2) 主観性マーカー (markers of subjectivity) : 法助動詞, 確実性マーカー, 特定の副詞・名詞・動詞, 分裂文など

例 : may, definitely, possibly, necessarily

(3) 価値マーカー (markers of value) : 良し悪しを表す語彙

例 : success, failure, tragedy, triumph

(p.21)

(1) と (2) は主として文法的なものであるのに対し, (3) は語彙的なものが多いとされる。さらに, 評価の意味的区分について, 評価には「良し悪し」(good-bad), 「確実性」(certainty), 「期待性」(expectedness), 「重要性」(importance) の4つのパラメーターが関係するとしている。

さらに, Hyland (2005) は, stance の下位分類やその機能と表現形式について, 以下のようまとめている。

表 4 stance の下位分類 (Hyland, 2005)

種類	機能	例
ヘッジ (hedges)	命題に対する書き手の完全の関与を保留する	would, may, perhaps, possible
増幅詞 (boosters)	確実性を表現し, 読み手との関与と連帯を示す	must, surely, definitely, obviously
態度マーカー (attitude markers)	命題に対する書き手の感情的な態度を示す	agree, surprisingly, important
自己提示 (self-mentions)	一人称代名詞の使用によって, 命題の情報, 書き手の感情的情報, 書き手と読み手との対人的情報を示す	I, we, my, our

コーパスに基づく Hyland (2005) の枠組みでは, 400 種類の表現が網羅的に収録されている。自己提示のような人称代名詞のみならず, 書き手の態度や評価を表すものなども含まれているため, 多角的な分析が可能である。これまでに言語学および言語教育学の分野において, アカデミック・ライティングをはじめ, 新聞, 学位論文, 学習者の論説文など, 様々な言語データの分析に用いられてきた(龍, 2010; 徐, 2015; Lee, 2009; Lee, 2013; 小森, 2016a; 小森,

2016b)。

最後に、日本語学におけるスタンスマーカーについて考えよう。なお、日本語学においては、スタンスという言葉でこの問題を論じたものは少なく、多くはモダリティ表現として扱われている。例えば、井上（2002）は、モダリティの概説である森山・安達（1996）を参照し、モダリティの表現形式と下位類型について、以下のようにまとめている。

表5 モダリティの表現形式（井上，2002）

表現形式	例
述語の活用形，各種の述語付加形式	行 <u>け</u> ，行き <u>ます</u> （述語の活用形），行き <u>なさい</u> （接辞相当表現） 行く <u>だろう</u> （助動詞相当表現），行く <u>よね</u> （終助詞）
文副詞（文副詞相当表現）	<u>たぶん</u> 行く， <u>どうも</u> 行く <u>ようだ</u> ， <u>はたして</u> 行く <u>んだろうか</u> ， <u>幸い</u> （ <u>幸いにも</u> ） <u>うまく</u> いった
感動詞（間投詞）・間投助詞	えーと，あのう，え？，あれ？，う～んなど，私は <u>ね</u> ，今回の結果を <u>ね</u> ，大変うれしく…
イントネーション	行く。（断定），行く↑（疑問）

また、モダリティの分類については、他の多くの研究者と同様、井上（2002）は以下の2分類を示している。

表6 モダリティの種類（井上，2002）

分類	例
命題内容に対する話し手の判断の在り方を表すもの（判断のモダリティ，対事的モダリティ，命題めあてのモダリティ）	<p>a 真偽判断のモダリティ（認識的モダリティ）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 確言（～ϕ），推量（だろう，まい），蓋然性判断（かもしれない，にちがいない） ・ 証拠性判断（らしい，ようだ，（～し）そうだ），当然性判断（はずだ）伝聞（（～する）そうだ），説明（のだ，わけだ） <p>b 価値判断のモダリティ（当為評価のモダリティ）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 適当（べきだ，ほうがよい），必要（（～し）な

	ければならない, ~ざるをえない) ・ 容認・非容認 ((~し) てもいい, (~し) てはいけない)
聞き手に対する発話態度・伝達態度を表すもの(発話・伝達のモダリティ, 対人的モダリティ, 聞き手目あてのモダリティ)	・ 述べ立て ・ 表出(意志, 願望) ・ 働きかけ(命令, 依頼, 禁止, 勧誘) ・ 疑問・問いかけ・確認, 強調

上記を見て気づくように, 日本語のモダリティは文末部に置かれることが多い。これは日本語が膠着語であるため, 文の構造は語順によって決定され, 述部が文の後ろにあることに関係していると考えられる。文末に見られるモダリティ表現のうち, 敬体と常体に表される「丁寧さ」や頻繁に使用される終助詞は日本語を特徴づけるモダリティといえよう。

井上(2002)では, 「よ」などの終助詞は聞き手に対する働きかけを表すものとして, 発話・伝達のモダリティの一種と位置づけられている。しかしながら, 現在の日本語教育では, 「『を』『に』」のような文の構造に関わる格助詞を重視し, 「『ね』『よ』」のような聞き手との関係に関わる終助詞を軽視する傾向にある(野田, 2005, p149)。そのため, 学習者は相手に不快な気持ちを起こさせかねない終助詞の使い方をしてしまうことがあるという指摘もなされている。野田(2010)も「ね」や「よ」のような終助詞を間違えると「聞き手に悪い印象を与えやすい」とし, コミュニケーションを重視した日本語教育のために終助詞の教育も取り入れるべきだと提言している。しかし, 従来の研究の多くが母語話者の内省と主観に基づくものであり, 大規模なコーパスを用いて, 終助詞のスタンスを客観的な言語学の裏付けによって示す研究はまだ少ない。

以上で見てきたように, 広義のスタンスには様々なタイプがあることがわかった。以下は, それぞれの関係を示した表である。

表 7 先行研究における分類方法

先行研究	種類	下位類型
Biber et al. (1999)	3	①認識的スタンス, ②態度的スタンス③発話スタンス様式
Hunston & Thompson (2000)	3	①比較基準マーカ―, ②主観性マーカ―, ③価値マーカ―
Hyland (2005)	4	①ヘッジ, ②増幅詞, ③態度マーカ―, ④自己提示
井上 (2002)	2	①命題内容に対する話し手の判断の在り方を表すもの ②聞き手に対する発話態度・伝達態度を表すもの

このように、広義のスタンスの分類については、物事あるいは相手に対する話者の主観的態度を重視する点で共通しているが、いくつかの違いがある。Hyland (2005) は「ヘッジ」と「増幅詞」を独立した項目として立てるのに対し、Biber et al. (1999) はそれらを「認識的スタンス」の下位類に収めており、井上 (2002) では、ヘッジと増幅詞は「命題内容に対する話し手の判断の在り方を表すもの」の下位分類である。また、Biber et al. (1999) は「発話スタンス様式」、Hyland (2005) は「自己提示」をスタンスの下位項目として認めているが、Hunston & Thompson (2000) と井上 (2002) はそれらの存在について言及していない。

2.3 本研究におけるスタンスとスタンスマーカ―

2.1 と 2.2 で見てきたように、「スタンス」とは何か、その定義や構成要素をめぐって、これまで多くの議論がなされてきた。これまでの内容を踏まえ、本研究では、スタンスを「書き手または話し手が、言及される内容に対して示す立場、判断、意見、感情などの主観的態度である」と定義し、これらを表出する具体的な言語表現をスタンスマーカ―と呼ぶ。

本研究は、Hyland (2005) をベースとし、それぞれの観点について、具体的な調査項目を以下のように設定する。

表 8 本研究で扱うスタンスマーカー

Hyland (2005) の分類	本研究の分類 (扱われる章)
自己提示	一人称代名詞 (5 章と 9 章)
ヘッジ	文末詞 (6 章と 10 章)
増幅詞	
態度マーカー	陳述スタイル (7 章と 11 章)
	ヘッジ (8 章と 12 章)

なお、「ヘッジ」と「増幅詞」は意味の陳述を調整するという点で共通しているため、本研究では、話者の意味の陳述を緩和するヘッジに限定して議論を行う。また、態度マーカーに含まれる語の範囲は膨大であるため、本研究では、文末詞と陳述スタイルの 2 種を取り上げて議論する。以上のように、本研究では、様々なスタンスマーカーの中で、(1) 一人称代名詞、(2) 文末詞、(3) 陳述スタイル、(4) ヘッジの 4 種類に絞って研究を行っていく。

第3章 先行研究

第1部では研究の枠組みを扱うわけであるが、すでに、第1章においては、スタンスマーカを研究する重要性と必要性について述べた。第2章においては、言語学におけるスタンスの定義やスタンスマーカのカテゴリ方法を概観したうえで、本研究における「スタンス」の定義を行った。

すでに述べたように、本研究はコーパス言語学の手法を主な分析手法として採用したうえで、広義のスタンスに含まれる様々な言語的要素選択の中で、(1) 一人称代名詞、(2) 文末詞、(3) 陳述スタイル、(4) ヘッジの4種類に絞って研究を行っていく。そこで、3章では、はじめに3.1においては、コーパスとコーパス言語学の定義について概観したあと、いくつかの代表的な日本語コーパスを紹介する。3.2～3.5においては、スタンスの具体的な現れとして注目する4つの観点を取り上げて、過去の研究を整理して示したい。

3.1 コーパスとコーパス言語学

コーパスを使用して研究を行おうとする前に、まずコーパスの定義や特徴を知ることが不可欠であると思われる。そこで、3.1では、コーパスとコーパス言語学の定義や特徴を概観したあと、(1) 母語話者コーパス、(2) 関連ツール、(3) 学習者コーパスの3つに分けて、日本語コーパス言語学の主な業績をまとめておく。

3.1.1 コーパスとコーパス言語学の定義

Corpus という語は元々ラテン語で「体」を意味する語であったが、後に「資料の総体」として使われ、次第に言語分析で用いられるデータベースを指すようになる(後藤, 2003)。コーパスとは何か、どのような特徴を持つかについて、研究者によって異なる見解が示されているが、以下では、石川(2020)、丸山・田野村(2007)を中心に紹介する。

石川(2020)は主要な英英辞書や国語辞書におけるコーパスの定義、言語学者による定義を概観したうえで、コーパスを「書き言葉や話し言葉などの現実の言語を大規模に、基準に沿って網羅的・代表的に収集し、コンピューター上で処理できるデータとして保存し、言語研究に使用するもの(p.13)」であると定義し、コーパスを用いた言語研究を「コーパス言語学」と総称している。

コーパスに基づく言語研究においては、文法や語法の分析、文法書・辞書の編纂、言語教育への活用、言語処理技術への応用など、幅広い研究成果が世に出ている(丸山・田野村,

2007)。コーパス言語学は英語研究に端を発するとされているが、日本語においても、最近ではコーパスを用いた研究が盛んに行われている。

3.1.2 日本語コーパス言語学

コーパス言語学はもともと英語中心に発展してきた。コーパス言語学が日本で意識されるようになるのは、1990年代に入って英語コーパス言語学の成果が知られるようになってからである（後藤，2007）。後に英語学の領域でコーパスを利用した研究が本格化するようになるのに対し、日本語を対象としたコーパス言語学的研究はコーパス整備不足のため長い間不活発であった（前川，2007）。しかし、近年に入り、多くのコーパスが公開されており、日本語におけるコーパス研究も盛んになってきている。ここでは、(1) 母語話者コーパス、(2) 学習者コーパス、(3) 関連ツール、の3つに分けて、代表的なものを取り上げて、日本語コーパス言語学の主な業績をまとめておく。

3.1.2.1 主要な日本語母語話者コーパス

(1) 『現日研・職場談話コーパス』

『現日研・職場談話コーパス』は、『女性のことば・職場編』、『男性のことば・職場編』の2つの調査研究で得た談話の書き起こしテキストを元に作成されたものである。これらは1990年代に行われた先駆的な試みであり、職場での会話を調査協力者自身に録音してもらうという収録方法は画期的なものであると評価されている。『女性のことば・職場編』は現代日本語研究会が1993年9月から10月にかけて、首都圏の有職女性19名（20代～50代）を調査協力者として収集した職場での自然談話データである。その文字起こしデータを収録したCD-ROMと、それに基づく研究論文10本が『女性のことば・職場編』として1997年にひつじ書房から刊行された。一方、『男性のことば・職場編』は現代日本語研究会が上記と同様の方法で、1999年10月から2000年12月にかけて収集した有職男性（21名）の職場での自然談話データである。そのデータを収録したCD-ROMと、それに基づく研究論文12本が『男性のことば・職場編』として2002年にひつじ書房から刊行された。『現日研・職場談話コーパス』を用いた研究では、日本語における男女差をめぐる議論がなされており、実際の会話ではいわゆる男性語や女性語の使用が減少していることが明らかにされている。

(2) 『名大会話コーパス』

『名大会話コーパス』は、2001年から2003年に行われた科学研究費基盤研究「日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究」（研究代表者：大曾美恵子）の研究成果であり、129会話（約100時間）の日本語母語話者同士の雑談が収録されている。会話は大半が親しいもの同士の雑談であり、参加者年代は10代から90代までと幅広い。本コーパスは、日本語母語話者を対象とする会話コーパスの中で最も規模の大きなものであるが、話者の85%が女性であり、48%が20代と、話者の性別・年齢に偏りが見られる。

(3) 『日本語話し言葉コーパス』

国立国語研究所・情報通信研究機構（旧通信総合研究所）・東京工業大学が共同開発した「日本語話し言葉コーパス」（Corpus of Spontaneous Japanese：以下CSJ）が2004年に公開された。CSJは現代日本語の自発音声を形態論情報や節単位情報、印象評定データなどの多くの研究用情報とともに格納したデータベースであり、約750万語、時間にして660時間の音声が含まれている。CSJに収録された音声には学会講演や模擬講演、朗読と再朗読、対話などが含まれているが、約90%が学会講演と模擬講演という2種類のモノローグ音声であり、日常生活の中で交わされる会話は含まれていない。

(4) 『BTSJ 日本語自然会話コーパス（ストランسكريプト・音声）2018年版』

『BTSJ 日本語自然会話コーパス（ストランسكريプト・音声）2018年版』（以下はBTSJコーパス）は宇佐美まゆみ氏の監修によって構築されたものである。BTSJコーパスは人間の相互行為に重きをおく語用論的分析のために構築されている。最新リリースには合計333会話（約79時間）が収録されており、そのうち203会話（約40時間）には音声も付いている。BTSJコーパスは「言語社会心理学的アプローチ」（宇佐美，1999）、「総合的会話分析」（宇佐美，2008）の理論に基づき、年上と年下・同年代同士、同性間・異性間、初対面・友人同士、教師と学生の会話等々、会話参加者の年齢、性別、親疎関係などの社会的属性や、雑談・討論・依頼などの発話場面を統制して収集されている。そのため、研究目的に応じて、話者の属性や対話相手との関係、発話場面など話者の話し方に大きな影響を与える社会的要因を考慮に入れた分析することが可能である。この点が、BTSJ話し言葉コーパスの最大の特徴である。

また、すべての会話は基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese) に基づいて書き起こされており、話者の年齢・性別などの背景的情報や会話の状況のみならず、発話の重なりや沈黙、割り込みなど、語用論的分析に不可欠な情報が付与されている。このため、分析項目の検索や集計が効率的になることで、語用論的研究の妥当性や信頼性が高まるとともに、大量のデータを用いてその知見を計量的にも検証できる。

さらに、BTSJ コーパスは日本語母語話者の会話のみならず、日本語母語話者と日本語学習者の会話も収録している。日本語母語話者の会話データと比較することによって、学習者の日本語使用を解明することが目指されている。

(5) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 (Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese : 以下 BCCWJ) は国立国語研究所のコーパス整備計画 KOTONOHA の一部として、2006年4月から構築が開始され、2011年に一般公開された。

BCCWJ は書き言葉の生産実態を反映する出版コーパス、流通実態を反映する図書館サブコーパスに加え、特定目的サブコーパスの3つのサブコーパスから構成されている。各サブコーパスは、さらにいくつかのレジスターに分かれている。国立国語研究所コーパス開発センター (2015) に基づくと、レジスターごとのサンプル数と語数は下表のとおりである。

表1 レジスターごとのサンプル数と語数

サブコーパス	レジスター	対象期間	母集団	サンプル	語数 (万)
出版 SC	書籍 (PB)	2001-2005	約 485 億文字	10,117	2,855
	雑誌 (PM)	2001-2005	約 105 億文字	1,996	444
	新聞 (PN)	2001-2005	約 64 億文字	1,473	137
図書館 SC	書籍 (LB)	1986-2005	約 479 億文字	10,551	3,038
特定目的 SC	白書 (OW)	1976-2005	1006 冊	1,500	488
	教科書 (OT)	2005-2007	145 冊	412	93
	広報紙 (OP)	2008	100 自治体	354	376
	ベストセラー	1976-2005	951 冊	1,390	374

	(OB)				
	知恵袋 (OC)	2004-2005	約 312 万質問	91,445	1,026
	ブログ(OY)	2008-2009	約 346 万記事	52,680	1,019
	韻文 (OV)	1980-2005	139 冊	252	25
	法律 (OL)	1976-2005	718 法律	346	108
	国会会議録 (OM)	1976-2005	32,925 会議	159	510
合計				172,675	10,493

上記のように、BCCWJ は 13 のレジスターにまたがって 1 億 490 万語のデータを格納しており、ある程度の時間幅を持った言語資料を収録している。日本語の多様なレジスターの実態を調査できるのみならず、時系列調査を行うことも可能となる。ただし、各レジスターのデータの収集期間はばらついているため、BCCWJ を用いてジャンル間の経年変化を比較する際に、調査対象の収集年代を統制する必要がある。

また、表 1 からわかるように、書籍（出版・書籍，図書館・書籍，ベストセラーを合わせた）は全体の 60% を占めており、量的にとくに重要である。出版・書籍レジスターについては、2001 年から 2005 までの 5 年間に出版された書籍を母集団として、日本十進分類法（Nippon Decimal Classification : NDC）及び発行年によって層別が行われ、全体に対する各層の構成比率を基準にサンプル数が決定された。図書館・書籍については、1986 年から 2005 年までの 20 年間に出版された書籍のうち、東京都内の公立図書館に所蔵されている書籍を母集団として、NDC 及び発行年によって層別に抽出したものである。ベストセラーは 1976 年から 2005 年までの 30 年間において、『出版年鑑』および『出版指標年報』のどちらかに、各年のベストセラーとして上位 20 位までにあげられた書籍を母集団として、無作為抽出方法により抽出したものである。出版・書籍，図書館・書籍と異なり、ベストセラーについて層化は実施しなかった。国立国語研究所コーパス開発センター（2015）に基づく、書籍データの NDC ごとの内訳は下表のとおりである。

表 2 書類データの NDC ごとの内訳

NDC	構成比 (PB)	構成比 (LB)	構成比 (OB)
0.総記	3.3%	2.3%	2.9%
1.哲学	5.5%	4.9%	10.1%
2.歴史	8.6%	10.2%	4.5%
3.社会科学	25.0%	19.6%	12.6%
4.自然科学	10.2%	6.1%	2.0%
5.技術工学	9.2%	6.2%	3.2%
6.産業	4.4%	3.4%	1.1%
7.芸術	6.5%	8.0%	7.2%
8.言語	1.8%	2.0%	1.7%
9.文学	21.1%	33.0%	52.7%
n.記録なし	4.4%	4.4%	2.2%
合計	100.0%	100%	100%

上記のように、出版・書籍においては、社会科学の構成比が最も高いのに対し、図書館・書籍やベストセラーにおいては、文学が最も多い。これは、出版サブコーパス、図書館サブコーパス、特定目的サブコーパスそれぞれの設計方針によるもので、書き言葉の異なる実態の反映となっている。

BCCWJ はオンライン及び DVD にて公開している。オンライン検索ツールとして、申込不要のサイト「少納言」と登録制サイト「中納言」の 2 種類がある。また、データを格納した DVD を入手することも可能である。

(6) 『日本語日常会話コーパス』

国立国語研究所共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」(2018～2021 年年度) では、200 時間規模の日常会話をバランスよく収録した『日本語日常会話コーパス』(Corpus of Everyday Japanese Conversation, 以下 CEJC) の構築を進めている(小磯ほか, 2017)。2000 年代に入ってから様々な日本語の会話コーパスが公開されてきたが、制約点として、(1) 自然な日常場面の会話が足りない点、(2)

親しい者同士の雑談や電話会話、大学での会話が主な対象であり、話者や場面にも偏りが見られる点、(3) 音声データを提供しているものがあるが、映像データを提供するものはほとんどない点、などがあげられる。(小磯ほか、2016, 2018)。そこで、CEJC は以下の3点の設計方針を立てた (小磯ほか、2018)。

1. 多様な話者・場면을バランスよく格納する
2. 日常場面において当事者たちの動機・目的に基づき自発的に生じた会話を記録する
3. 音声テープだけでなく映像テープも収録して公開する

こうした日常会話をバランスよく収録するために、コーパス構築に先立ち、約 250 人を対象に、会話の形式、場所、時間、相手などの観点から会話行動調査を実施した。収録にあたっては、個人密着法を中心に多様な日常場面の会話を収録し、行動調査の結果と照合して不足する場面の会話を特定場面法で補足する方法を採用している。個人密着法と特定場面法について、小磯ほか (2018) は以下のように解釈している。

個人密着法：性別・年代等の点からバランスを考慮して選別された調査協力者に収録機材等を一定期間貸し出し、協力者自身に会話参加者との日常会話を収録してもらう方法。調査を実施する研究者は原則として介在しない。

特定場面法：職場での会合や店舗での店員とのやり取り等、個人密着法では技術的・倫理的に収録が難しいと思われる場面を特定し、調査者が主体となり収録する方法。調査者は介在するが、日常場面の中で自然に生じる会話を対象とする。

本公開に先立ち、2018 年 12 月に 126 会話 (50 時間) を対象とするモニター版が公開された。また、2021 年 2 月に、50 時間のデータを 2020 年度版として追加公開した。CEJC モニターの公開形式について、映像・音声・転記テキスト・短単位情報・メタ情報・検索システム (映像再生機能付き) を含むハードディスクでの公開 (2018 年度版のみ) と、短単位情報での検索と文字列検索が可能なオンライン検索システム「中納言」での公開 (2018 と 2020 年度版)、の 2 種類がある。モニター公開データの概要は下表のとおりである。

	2018 年度版	2020 年度版
時間数	50 時間	50 時間
会話数	126 会話	141 会話
語数	610,959	636,121

3.1.2.2 主要な日本語学習者コーパス

(1) 『KY コーパス』

KY コーパスは鎌田修・山内博之の両氏によって構築され、1999 年に初版が一般公開された。学習者発話は言い直しや誤用を多く含むため、形態素解析が困難であると言われるが、2008 年には形態素情報と誤用タグが付与されたデータが公開され、2013 年に検索システムを備えた「タグ付き KY コーパス」として Web 公開されている。山内 (n.d.) は、OPI のインタビューでは、被験者の能力レベルが明示されており、インタビュー構成が簡明で比較が行いやすく、発話単位の認定が比較的容易であると述べている。KY コーパスでは、90 名の日本語学習者（中国語・韓国・英語それぞれ 30 人）が口頭能力試験（OPI）に受験したときの発話が収録されている。学習者の習熟度は OPI の基準によって初級 5 名、中級 10 名、上級 15 名、超級 5 名に調整され、異なるレベルの学習者間の比較ができる。

(2) 『日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース』

『日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース』（以下作文対訳 DB）は国立国語研究所の宇佐美洋氏らによるプロジェクト「日本語学習者による言語運用とその評価をめぐる調査研究」の中で開発されたものである。初版が 2000 年に公開され、2001 年にはオンラインでのデータ配布が始まった。作文対訳 DB は「本格的な日本語学習者コーパスの先駆」（石川，2012，p.228）と呼べるものであり、中には 20 ヶ国で収集した学習者作文（母語訳付き）と比較用の日本語母語話者による作文（合計 1500 編）が含まれている。とビックはたばこ、学校教育、大学受験、仕事などの 10 種類がある。作文対訳 DB を用いて、誤用分析や母語干渉の有無、異なる母語を持つ学習者の比較などの分析ができる。

(3) 『日本語学習者言語コーパス』

『日本語学習者言語コーパス』は東京外国語大学の海野多枝氏を中心に構築され、2009

年からオンライン公開が始まった。2011年版には台湾・イギリス・ウクライナで収集された1756編の作文（総語数27万語）が含まれている。作文の内容は様々であり、予定を述べる、許可を求める、助言するなど8種類の機能別タスクによるものと、日記タスクの2種類からなる。また、学習者の性別、国籍、先行、学年、年齢、居住地、学習経験、日本語学習年数に関する調査が行われ、学習者の日本語学習年数は1～7.5年である。（石川，2012，pp.230-231）

(4) 『日本語学習者作文コーパス』

「日本語学習者作文コーパス」は、2010年から2012年に行われた科学研究費基盤研究「自然言語処理の技術を利用したタグ付き学習者作文コーパスの開発日本語」（研究代表者：李在鎬）の研究成果であり、2013年から「<http://sakubun.jpn.org/>」で一般公開を行っている。本コーパスには初級から上級の日本語学習者304名（韓国144名、中国160名）の作文データ（総語数11万語）が収録されており、学習者の日本語能力がデータ収集時に行われた語彙テストと文法テストの得点によって判定されている。作文のテーマは、(1)「外国語が上手になる方法について」（192名分）と(2)「インターネット時代に新聞や雑誌は必要か」（112名分）の2種類がある。(1)は当該科研グループが収集したものであり、(2)は東京外国語大学の伊集院郁子氏が収集したものである。

(5) LARP at SCU コーパス

LARPのホームページで記載された説明文によれば、LARPは台湾の東呉大学で行われた日本語習得研究プロジェクトLARP at SCU（2004年～2011年）の成果である。2003年9月に日本語学科に入学した者の中から37人がプロジェクトに参加した。1年の後期から4年の卒業間際まで、夏期冬期の休暇を除いた3年半にわたり、学習者は、月1回与えられたトピックについて辞書を参照せずに600字程度の作文を書き（作文1）、その後、作文を一度朗読し、作文の内容について、教師と1対1でフォローアップインタビューを受ける。インタビュー完了後、学習者は作文を修正し、第2稿を提出する（作文2）。LARPには、作文1と作文2、インタビューを書き起こしたテキストが収録されている。また、入学前の日本語学習歴、家族に日本語を話す者がいるかどうか、留学の有無など、学習者の言語背景資料が公開されているほか、学習者の日本語能力を判定するために、1年後期のはじめと2年前期のはじめに、合計2回のSPOTテスト(Simple Performance-Oriented Test)

を行った。LARP の特徴は特定の学習者の一定期間における日本語産出を継続的に収集したことにある。LARP を使用することで、学習者の L2 習得がどのように進むのかを観察できる。

(6) 『中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断発話コーパス』

『中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断発話コーパス』(Corpus of Japanese as a Second Language, 以下は C-JAS) は 2013 年に公開された、中国語母語話者 3 名、韓国語母語話者 3 名、計 6 名の日本語学習者の約 3 年間の縦断調査による発話コーパスである。収録したデータ量は約 46.5 時間分(約 57 万語)であり、オンラインの検索システムで形態素単位や文字列で用例を検索することができる。さらに、文法習得の観点から、統語・文法・発音の誤用には誤用タグが付与されている。当時公開されているデータで特定の学習者を 3 年間追跡して会話データを収集し、形態素や誤用タグを付けたコーパスはなく、貴重なデータとして活用されている(迫田, 小西, 佐々木, 須賀, 細井, 2016)。

(7) 『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』

『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(International Corpus of Japanese as a Second Language, 以下 I-JAS) は異なる 12 言語を母語とする日本語学習者 1000 人の発話・作文の大規模コーパスである。2016 年に第 1 次データが公開され、2020 年に第 5 次データの公開に伴い、1000 名分の学習者データと 50 名分の日本語母語話者のデータが揃い、すべてのデータが公開となった。

I-JAS は、各学習者に対して、ストーリーテリング、対話、ロールプレイ、絵描写、ストーリーライティング、メール文、エッセイの 7 種類のタスクを行っている(迫田ほか, 2016)。そのうち、学習者と母語話者が同時に参加しているタスクには、イラストのストーリーを話すストーリーテリング (ST)、イラストについて説明する絵描写 (D)、学習者と調査実施者が行う自然な対話 (I)、設定された場面に応じて、与えられた役を演じて会話するロールプレイ (RP)、ストーリーテリングと同じイラストを見て作文をするタスクストーリーライティング (SW)、の 5 種類がある。I-JAS を使用することで、母語話者と学習者の比較だけでなく、学習者間において、母語別、レベル別、技能別、学習環境別にデータの比較も可能である。

I-JAS では、学習者の属性、言語環境、日本語学習経験などの背景情報(全 20 項目)に

ついて調査が行われているのに加え、学習者には J-CAT(Japanese Computerized Adaptive Test)と SPOT(Simple Performance-Oriented Test)の 2 種類の日本語能力テストを実施し、レベル判定を行っている。J-CAT のホームページでは、以下のような説明がある。

J-CAT は日本語学習者を対象とした日本語能力の判定をインターネット上で、時間・場所の制約なしに実施できるアダプティブテスト（適応型テスト）です…回答の正誤により、能力別に異なった問題を提示することで、効率的に能力測定を行い、従来の試験より所要時間を短縮し、かつ能力推定精度を向上させています。（出典：<https://j-cat.jalesa.org>）

また、J-CAT のスコアと習熟度との対応づけについて、ホームページでは、以下の表が示されている（表 3）。

表 3 J-CAT のスコアと習熟度

J-CAT スコア	習熟度
(0～100)	初級前半
(100～)	初級
(150～)	初級後半
(200～)	中級前半
(250～)	中級
(275～)	中級後半
(300～)	上級前半
(325～)	上級
(350～)	超級

I-JAS では、学習者にレベル判定を行っているため、習熟度が上がるにつれ、日本語がどのように発達していくかを調査・分析することができるようになる。

(8) 『YNU 書き言葉コーパス』

『YNU 書き言葉コーパス』（以下は YNU）は横浜国立大学が作成したコーパスであり、

日本人大学生・韓国語母語話者・中国語母語話者各 30 名による、12 のタスクの書き言葉の資料（合計 1080 編）が収録されている。データを収めた CD-ROM と、それに基づく研究論文 8 本が『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』として 2014 年にひつじ書房から刊行された。「KY コーパス」の書き言葉版を目指して作られたこのコーパスはタスクの達成、詳細さ・正確さ、読み手配慮、体裁・文体という 4 つ評価項目に基づき、学習者を上位群・中位群・下位群（それぞれ 10 名）の 3 つのグループに分けている。12 種類のタスクは、(1) 伝達媒体（PC メール、携帯メール、手紙、レポート、新聞への投書）、(2) 内容（自発型・頼まれ型）、(3) 読み手との関係（読み手特定・親、読み手特定・疎、読み手不特定）、(4) 文章の長さ（やや短い、やや長い）を考慮して設定されている。

以上で見てきたように、現代は日本語において、様々なコーパスが開発され、コーパス構築や分析の助けとなる関連ツールも確立してきている。本研究はすでに述べたように、コーパス言語学を基盤的な枠組みとして分析を行うわけであるが、そのための前提条件はすでにそろっていると考えられる。

3.1.2.3 主要な関連ツール

(1) 形態素解析器 ChaSen（茶筌）

形態素解析はあらゆる種類の日本語解析の前処理として必須のプロセスである。日本語処理の世界で幅広く使用されている形態素解析器の 1 つが、奈良先端科学技術大学院大学で開発された日本語形態素解析システム ChaSen（「茶筌」）である。ChaSen は文を単語単位に分割し、品詞を付与する機能を持っている。1996 年に β 版が公開されたあと、1997 年に Version1、1999 年に Version2 が公開され、以後も改良が続けられており、解析速度と解析精度が向上している（石川、2012、pp.80-82）。2019 年 12 月の時点では 2.3.3 バージョンが公開されている。ChaSen を使用することによって、高速で簡便に用例・コロケーションなどの情報を抽出し、利用できる。

(2) 形態素解析用電子化辞書 UniDic

形態素解析用電子化辞書 UniDic の構築が 2000 年前後国立国語研究所を中心に始まった。当時既存の形態素解析システム用の辞書では、言語単位認定が等質でないや見出し語に揺れがあるなどの問題が発見され、このような問題に対処するために、より正確で精度が高い辞書データベースの開発が期待されている（伝・小木曾・小椋・山田・峯松・内元・小磯、

2007)。UniDic は元々「日本語話し言葉コーパス (CSJ)」のアノテーションデータを作成するために構築されたのが始まりだったが、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』構築時からは「解析用辞書を使った短単位自動解析の結果を人手修正していく」という作業方針が採られるようになり、現在では人手アノテーション作業のコスト削減ツールとしても利用されている。現在サイトで公開されている解析用 UniDicS は現代語用 UniDic と古文用 UniDic の 2 種類があつて、話し言葉だけでなく、書き言葉や古文にも対応している。

(3) 計量テキスト分析ソフトウェア KH coder

KH Coder は樋口耕一氏によって開発された、文章型データを計量的に分析するためのフリーソフトウェアである。2001 年に最初の版が公開されたあと、統計分析や可視化などの機能が追加され、改良が続いている。樋口 (n.d.) は KH Coder が大きく 2 段階の分析機能を備えていると述べている。第 1 段階では、データから多くの語を自動的に取り出して、その結果を集計・解析する。語と語の結びつき方を描く「共起ネットワーク」という方法がこの段階では多用される。第 2 段階では、分析者が主体的にデータからコンセプトを取り出して集計することで、分析を深めることができる。2 つの段階を設けることで、第 1 段階で大量のデータを機械的に抽出できるとともに、その結果を参考にして第 2 段階では、分析者独自のコンセプトを使った分析に踏み込むことができる。また、第 1 段階の結果と照らし合わせることで、第 2 段階の独自コンセプトの妥当性を確認できる。

以上、3.1 では、コーパスとコーパス言語学の定義について概観し、いくつかの代表的な日本語コーパスを取り上げて紹介した。続く 3.2～3.5 においては、スタンスの具体的な現れとして注目する 4 つの観点を取り上げて、過去の研究を整理して示したい。

3.2 一人称代名詞に関する先行研究

一人称代名詞を 1 つあるいは少数しか有しない英語や中国語と比べて、日本語の一人称代名詞は多数存在する。それらが使用者の身分や立場、その時の状況に応じて使い分けられる。したがって、日本語の一人称代名詞は量的にも質的にも多様多彩であるとされている (三輪, 2010)。量的にというのは種類の豊富さを指し、質的というのは一人称が含まれるニュアンスや使われ方が複雑だということである (p.58)。日本語の一人称代名詞に関する研究は多くなされているが、ここでは、日本語学における一人称代名詞と日本語教育における一人称代名詞という 2 つのタイプに分けて概観する。

3.2.1 日本語学における一人称代名詞

一人称代名詞は「対話の場における話し手と相手の具体的な役割を明示し確認するという機能」を持つとされている（鈴木，1973）。氏によれば，日本人の一人称代名詞の規則性を基本的に支えているものは，人間関係の上下である。それに加え，一人称代名詞の選択は「話し手が言語という一種の座標系の内部で，自分自身の位置を明らかにする行為」であるとされている。また，日本人は特定の相手との権力関係，親疎の度合いなどに応じて，一人称代名詞を使い分けていることから，日本人の言葉による自己規定が「相対的で対象依存的な性格」を持っていることが指摘されている。

つまり，日本語においてはコミュニケーションをする際に，相手との上下関係および親疎関係などを判断し，自分をどのように表現するのかを考え，複数の一人称から適切なものを選択することが要求される。異なる一人称を選択することによって表出されるスタンスは変わってくる。

宮島（1977）では，一人称を文体的特徴が出やすい品詞の1つとし，語の文体という観点から次の表4のように一人称代名詞を3段階に分けた。

表4 一人称の文体的特徴（宮島，1977）

文体	特徴	例
俗語	書き言葉にはあられせず，もっぱら，砕けた，下品な話し言葉で使われるものである。	あっし
日常語	積極的な文体の特徴をもたず，どのような種類の話し言葉，書き言葉にも自由に使われる中立的な層である。	わたくし，わたし，あたし
文章語	もっぱら書き言葉や改まった話し言葉だけに使われるものである。	小生，それがし

一人称代名詞の使用に現れる性差について，井手（1979）は，男児にとって，「オレ」は自分の強さを誇示したり，男の子同士の仲間意識を表現したりするという機能を持つ自称詞であると述べている。男児は幼児期にすでに，一人称を使うことによって，自分の男らしさをアピールすることができることが示された。女兒については「オレ」に相当する機能を

持つ人称代名詞がなく、女兒が使う「ワタシ」はフォーマルな場面に用いる語感がある一人称であると述べている。

張（1996）は中国の短編小説と日本語の訳を比較し、使用される一人称代名詞には以下のようなものとされる。

表 5 中国語の原文と日本語の訳文に使用される一人称代名詞（張，1996）

	中国語原文	日本語訳文
内訳	我，咱，我们，咱们，老子	おれ，こっち，こちら，わたし，あたし， わし，おれさま，おら，ぼく，わたしたち， おれたち，ぼくたち，わしら
種類	5	13
使用頻度	197	131

表 5 からわかるように、日本語の訳文に使用される一人称代名詞の種類は原文の 2 倍以上であることや、日本語の訳文における一人称代名詞の使用頻度は中国語原文の 7 割に満たないことが明らかである。張（1996）は日本語の人称代名詞は種類とその使用頻度とは反比例の関係をなす原因について、以下のように述べている。

人称代名詞の種類が多いのは、人々はお互いの身分や関係を非常に重視して、ついそれらの違いに応じて、複雑な人称代名詞の体系を作りあげてしまうと考えられる。しかし、いくら丁寧な言い方をしても、人称代名詞は所詮自分や相手を直接指し示す表現にほかならないから、率直さは免れない。そこで動詞の後ろの「てくれる」、「てあげる」、「ていただく」のような表現も数多く作り出され、これらの使用によって、文中の「私のために」、「あなたのために」というような直接的な表現を避けることができるようになる（張，1999）。

村上（1999）は、『現代雑誌九十種の用語用字』と『汉语词汇的统计与分析』を比較した。その結果、中国語の人称代名詞の使用率は日本語より高いことが明らかになった。また、一般的に通用する日本語の一人称代名詞として、以下の 18 種を挙げている（下線部は複数形）。

わたし、わたしたち、わたしども、わたしら、わたくし、わたくしたち、わたくしども、
 わたくしら、ぼく、ぼくたち、ぼくら、おれ、おれたち、おれら、おいら、よ、わがは
 い、われわれ

庵・中西・高梨・山田（2001）によると、「私」と「僕」は待遇的に中立で、「俺」は仲間語としてぞんざいなイメージを持つとしている。また「僕」の使用場面については、成人男性も使えるが、会議などの改まった場では避けられる傾向が強く、その場合は「私」や「わたくし」が使われるとしている。さらに、「あたし」は『わたし』の『w』音が弱まってできたものであり、仲間内でしか使えず、学校や職場では使えないことが指摘されている。

西川（2003）はアンケート調査（216 家庭）および観察調査（5 歳男児 9 名）を通して、子どもによる自称詞使用の発達変容を明らかにした。2 歳でほとんどの子供が「愛称・名前」を用いている。その後、男児は「ぼく」、「おれ」を合わせて使うようになり、幼児期は両親に「愛称・名前」、友達に「おれ」、学童期中頃は両親に「ぼく」、友達に「おれ」を用いる傾向が観察された。これは会話する場において、一人称が自分と相手の距離を示す手がかりとして機能しているものであると考えられよう。一方女兒が使用する自称詞は、両親に対しても友達に対しても、「愛称・名前」が一貫して多く、就学後に「わたし」の使用が散見されるという傾向が示された。

熊抱（2006）は、日本語の一人称代名詞は話者の性別や発話場面に影響されると述べており、場面のフォーマルさの度合いと一人称代名詞の選択との関係を以下の図 1 にまとめている。

図 1：日本語の一人称単数（熊抱，2006）

←Informal		Formal→	
(男性) 俺	僕／自分	わたし	わたくし
(女性) あたし	自分	わたし	わたくし

使用される場面のフォーマルさからみれば、男性専用とされる「俺」と女性専用とされる「あたし」は主にインフォーマルな場面で使用され、かなりフォーマル度が増した場面になると、男女ともに「わたくし」を使用する傾向がある。男性専用とされる「僕」と男女問わずに使える「自分」や「わたし」はニュートラルな場面で使用されるのが一般的であるとさ

れる。

語源の観点から人称詞を考察した三輪（2010）は、日本の一人称が卑下と自尊という相反のニュアンスを含むアンビバレントなものであると述べている。具体的に、「ボク」や「ワタクシ」などを例に挙げながら以下のように説明を行っている。

ボクは自分を従僕にみたてる一人称ですが、その服従姿勢をとおして自己を守り、さらに自分を主張する姿勢がうかがわれます。……ワタクシは公の地位を持たずに宮中に奉仕する女性への呼称に由来するとされ、今日では謙遜の一人称の代表のようにも言われますが、公的な場所での畏まりや慎みをとおしてかえって自己を顕示する一人称であり、時には教養をそれとなくみせびらかす一人称にもなります。

(pp.58)

石川（2018）は『みんなの日本語』の第1課に出現する「わたしはマイク・ミラーです」という例文を取り上げ、BCCWJを用いて検証を行った結果、現代日本語において、1人称代名詞の中で「ワタシ」（語彙素）は最も高頻度であること、それ以外も4割近く出現すること、(2)「ワタシ」の表記は「わたし」よりも「私」が圧倒的に多いことなどを明らかにした。

日本語は一人称単数代名詞に接尾辞「たち」、「ら」、「ども」を付け加えることによって、複数を表示できる。日本語の一人称のスタンスを論じた研究はほとんど単数形に焦点が置かれ、複数形のスタンスに注目した研究が限られている。鄭（2001）は、話し手の属性と「聞き手包含・非包含」という2つの観点から53本の映画シナリオを調査し、人称代名詞に後接する複数形接尾辞「たち」と「ら」のふるまいについて考察した。その結果、関東では「たち」、関西では「ら」を好む傾向が示された。また、関東では、女性に比べ男性の「ら」の使用率が高いこと、一人称複数代名詞に聞き手を包含する文に比べ、聞き手を排除する文のほうが「ら」の使用率が高いことが報告されている。つまり、「ら」は男性が相手と一線を画するような文脈に使われやすいことが報告されている。

鄭（2001）で取り上げた「聞き手包含・非包含」という観点は英語で「clusivity」（包含度）と呼ばれる。英語の一人称複数代名詞のスタンスを議論する際、clusivityを手掛かりとしたアプローチが一般的である。Filimonova（2005）は、clusivityを「包含的」と「排

除的」を区別するために作られた用語として扱う。また「包含的」と「排他的」について、以下のように述べている（日本語訳は筆者による）。

包含的および排他的という用語は伝統的に、人称代名詞を使用するに際して、話者も含む指示対象のセットに受信者が含まれるか除外されるかを区別するために使用される。

The terms inclusive and exclusive are traditionally used to denote forms of personal pronouns which distinguish whether an addressee is included or excluded from the set of referents which also contains the speaker. (p.III)

包含度の観点から見れば、一人称複数代名詞のスタンスについて、話の相手である聞き手を含めて言う場合と含めないで言う場合がある。一人称複数代名詞に対話の相手を含めるかどうかは、相手との *involvement*（関与）の高低に関係するとされる。Tannen(1989)は、*involvement* を「個人を他の人間、場所、事物、行為、概念、記憶、言語、などと結びつける相互的、感情的つながりである(an interactional, even emotional connection individuals feel, which binds them to other people as well as to places, things, activities, ideas, memories, and words)」のように定義している。一人称複数代名詞包含形の使用の背後には、対話の相手との感情的関わりを高めようとする意図があるといえる。

三輪(2005)は、日本語においては包含形と排他形の区別がはっきりせず、いずれもこの両方の意味に使われることを指摘している。また、おおよその傾向として、「タチ」がつけば包含形、「ラ」がつけば排除形である可能性が高いと述べている。また、包含形としての「われわれ」は、聞き手と話し手を同じ一つのカテゴリーにまとめることができることから、相手を自分の側に引き寄せる効果が期待されるという指摘もある(佐藤, 2007)。

Wieczorek(2013)によれば、関与度の起源の1つはBrown and Levinson(1987)のポライトネス理論にまで遡ることができる。ポライトネス理論は実際の言語使用における機能を重視する。氏によれば、包含形を使うのは、相手に近づきたい心理の表れであるため、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジの一種として捉えることができる。一方、排他形を使うのは他者と距離を置きたいのを表すため、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジの一種として捉えることができる。

3.2.2 日本語教育における一人称代名詞

前述したように、日本語母語話者は自分自身に言及する場合、その時の状況によって、様々な一人称代名詞を使い分けている。このような複雑な振る舞いを持つ日本語一人称代名詞は、日本語教育においてどのように取り扱われているのであろうか。

大浜・荒牧・曾（2001）は広範囲に使われている18冊の日本語教科書を調査した。その結果、一人称単数代名詞は「わたし」、「私」、「僕」、「ぼく」、「あたし」、「わたくし」、「おれ」、「俺」、「わし」の9種、一人称複数代名詞は「私達」、「私たち」、「わたしたち」、「僕達」、「ぼくたち」、「われわれ」の6種が出現したと報告されている。

曾（2004）は、約300本の作文における学習者の一人称代名詞と、8冊の教科書で使用される一人称代名詞を比較し、語別・機能別の出現回数や、使用パターンを量的に分析した。その結果、(1) 学習者の作文における一人称代名詞の出現回数は、教科書の5倍であり、学習者が一人称代名詞を過剰使用していること、(2) 教科書に現れる一人称代名詞は、使用量が少なく、使用パターンも類似していること、(3) 一人称の機能について、学習者の作文においても、教科書においても、「話題導入」の使用割合が高いことなどが明らかになった。

小玉（2016）は、『みんなの日本語』初級および中級本冊における「私」、「僕」、「俺」の出現頻度や扱われ方を概観し、記述式のタスクシートを使って、男性の学習者および母語話者による一人称の使用について比較調査した。その結果、『みんなの日本語』において、「僕」と「俺」は「私」に比べて頻度が圧倒的に少数で、「存在が埋もれてしまい、意味合いや使い方が目立たなくなっている」ことが明らかになった。また、小玉は「僕」の登場場面を分析し、テキストから得られる情報のみでは、「僕」はどのような相手に対して使えるのか、口頭でのやりとりなのか文章でのやりとりなのか明確に判別できないと述べている。さらに、小玉は日本語母語話者10名と中級以上の日本語学習者25名を調査対象とし、相手を引っ越し祝いのパーティに招待するというタスクを使って、男性の学習者および母語話者の一人称使用状況について調査した。学習者は多くの場面で「私」を多用するのに対し、母語話者は、上司のような目上の相手に対して「私」を多く選択しているが、同僚・秘書・友人といった同格または目下の相手に対して、「僕」や「俺」を合わせて5割以上使用していることが確認された。このような違いは教科書による「僕」や「俺」のインプットが少ないことによるという考察がなされている。一般に、「私」は汎用性の高い一人称代名詞と思われるが、にもかかわらず、同格や目下の相手に対して「私」を使うことが必ずしも多くなかったことは興味深い知見である。しかし、この理由については説明されていない。

以上で概観したように、日本語の一人称が持つ多様性と機能の複雑性をめぐって、母語話者や日本語学習者による一人称代名詞の使用実態の究明が進められており、それぞれの一人称代名詞のスタンスの解明も試みられている。一方、課題も少なからず残されている。例えば、従来の研究のほとんどが母語話者の内省に基づく理論的記述、もしくはいくつかの例を挙げてスタンスを説明したものであり、大規模なデータベースを踏まえて、一人称代名詞の使用実態とスタンスを解明するものはそれほど多くない。こうした課題に対して、近年では現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）をはじめ、大規模な日本語コーパスが整備されつつあるため、一人称代名詞の使用実態とスタンスをより客観的なアプローチで研究する基盤が整いつつあるといえる。また、大規模なデータを用いて、学習者による一人称代名詞の使用状況を調査した研究が少なく、特に習熟度が一人称代名詞の使用にどのような影響を及ぼしているかについていまだに解明されていない。この点については、学習者の産出を大量に収集した学習者コーパスを利用し、一人称代名詞の使用状況を習熟度別に調査することが重要になると考えられる。

3.3 文末詞に関する先行研究

日本語には、女性がよく使用する傾向にある女性語と、男性がよく使用する傾向にある男性語が存在し、このようなジェンダー差異は、日本語を特徴付けるものの一つであろう。安田ほか（1999）は、日本語のジェンダー差異が、(1) 終助詞（「わ（上昇調）」「ぜ」など）、(2) 呼称、(3) 音変化、(4) イントネーション、(5) 語彙、(6) 文法（体言止め、言いさし）、(7) 敬語（「お」を含む）、(8) パラ言語、(9) その他（ディスコース、表現方法など）によって表現されていると述べている。このうち、「わ（上昇調）」など文末に使用される終助詞が、代表例として盛んに研究されている。本研究では、女性がよく使用する「かしら」などの終助詞、および「わよ」のような2つの助詞（「わ」「よ」）が組み合わさったものを「文末詞」と呼ぶこととする。以下では、文末詞に関する先行研究を、現代日本語における使用実態と日本語教育学における文末詞に分けて概観する。

3.3.1 文末詞の使用実態

以下では、(1) 自然会話、(2) ドラマ、(3) 小説における文末詞の使用実態を調査した先行研究をそれぞれ概観する。

3.3.1.1 自然会話における文末詞

90年代以来、実社会の自然会話における文末形式の使用状況に関する調査研究が進められ、その代表的なものとしては、尾崎（1997）、中島（1997）、小川（1997, 2004）、水本・福盛・高田（2007）、水本（2010）、水本（2012）があるが、いずれの研究でも、文末詞が以前ほど使用されなくなってきたことが報告されている。

職場における女性の文末形式に着眼した尾崎（1997）では、「わ」の使用は衰退に向かい、「だわ」は、もはや皆無に近い「死語」、「旧女性専用形式」に近づきつつあることが報告されている。また、同じく女性職場における自由談話の録音資料を調査した中島（1997）も、「わね」、「わよね」、「かしら」の衰退傾向を指摘し、「かな」、「かね」、「だよね」などの男性的疑問表現が中立的疑問表現として女性にも使用される傾向にあるとしている。小川（1997, 2004）は1996年収集の大学生（129名）の親しい者同士による会話データを調査した結果、「のよ（ね）」、「過去形+の」（e.g. 「やめたの」「待ってたの」「いやがってるって感じだったの」）は現代の若い女性特有の文末詞であり、従来、女性特有とされる「わ」、「体言+よ」（e.g. 「こっちの籠の中よ」）は現代若者の会話には少ないことが報告されている。

1996年に実施した小川の調査以来2004年まで文末詞の使用実態に関するデータは見当たらなかった。水本・福盛・高田（2007）は2005年6月から2006年2月にかけて、関東圏に10年以上居住し、かつ標準語を話す20代～40代の女性36人の会話データをデータとし、文末詞の代表とされる「かしら」、「わ」、「わよ（ね）」、「わね」、「Nね」、「Nよ（ね）」、「のよ（ね）」の7種の使用状況を調査した。その結果、各年代の文末詞使用率は40代（13.22%）、30代（8.17%）、20代（2.36%）と、年代が下がるにつれ低下していることが報告されている。これにより、現在の若い世代（20代～30代）のカジュアル会話での文末詞の使用は稀少であることが明らかになった。

一方、水本（2006）は、ドラマにおいて、平常は中性化した言葉使いをする若い女性が、相手への反論・抗議・主張といった感情的な場面で女言葉に転じると述べている。水本（2010）では、このスイッチ型の使用法が、現代の若い女性たちの会話でも同じく現れるかどうかを確認するため、20代から50代までの標準語話者48名を調査対象とし、会話する2人が対立的な立場になるようロールプレイを実施した。その結果、20代、30代の若い世代は自然会話と同様に、強い主張度の場面設定における会話でも、文末詞はほとんど使っていないこと、40代は下位年代より若干使用率が增加するが、全体的に使用傾向が強いこと、50代は

他の年代より頻繁に文末詞を使用していることが報告されている。

また、なぜ文末詞の使用は現在の40代を過渡期として一気に衰退したのかについて、水本（2015）は「調査当時（2008～2009）40代の女性が80年代に20代を迎えたゆえ、折りしも『男女雇用機会均等法』が制定された年代（1985）年であり、日本女性らが積極的に社会進出をするようになった頃である」と述べている。

さらに、水本（2012）は現代の若い女性が実際にどのような文末表現をするのかを調査するため、首都圏に生まれ育った20代前半の女子学生12名を対象に、高主張度文脈におけるロールプレイ実験調査を行った。その結果、10名が全く文末詞を使用することなく、従来の男性文末詞「～よ」（大丈夫じゃないよ）、「文末詞なし」（許せない）などを使用していることが明らかになった。

3.3.1.2 ドラマにおける文末詞

文末詞は日本語の男女差を示す代表形式として長年認識され、ドラマや小説や漫画などにも積極的に使用されてきた。金水（2003）により、ドラマや文学作品において文末詞は役割語として「使い手の人物像を瞬間的に受け手に伝える」機能を持つとされている。「役割語」、即ち、ステレオタイプの言語は、現実の言葉とは少し異なるにもかかわらず、それが人々の共有知識であり、キャラクターを描写するための材料となっている。

自然会話との比較対象として、テレビドラマの登場人物たちによる会話を調査した研究には、水本・福盛・福田・高田（2006）、水本・福盛・高田（2008）、水本（2010）、澤田（n.d.）があげられる。

水本ほか（2006）は2005年に放映されたドラマ10本をデータとし、20代～30代の女性登場人物による文末詞の使用実態とその機能を調査した。その結果、(1) ドラマで使用回数が上位3位である文末詞は「わ」系、「のよ」、「N+よ」であること、(2) ドラマにおける「わ系」の使用率は会話の75倍に達すること、(3) ドラマにおける20代前半の文末詞の使用率は自然会話の約30倍であることが報告されている。ドラマにおける文末詞の使用頻度の高さは、脚本家には「女性はやわらかく丁寧に、協調的に、きれいな言葉を使用する」というフィルターが存在することに関連するとされている。また、使用場面に関しては、女性言葉の優しい・上品といった従来のイメージとは異なり、抗議や反論など感情を表出する主張度の強い場面で、強いイメージとしての文末詞の使用が際立つことが報告されている。さらに、氏はドラマの個々の登場人物たちを、文末詞使用頻度により、50%以上の多使用型、

10%から 50%未満の時々使用型、10%未満のほとんど不使用型の 3 種類に分類し、観察した。その結果、多使用型の職業は「キャリア系」と「専業主婦型」に集中すること、また、時々使用型では、普段は使わないが、「主張、言い切り」「立場や主張の説明」「反問、抗議、つつこみ」「反論、否定」「皮肉、嫌味、気取り」などの場面で突如女性言葉にスイッチすることが明らかになった。

水本ほか(2008)では、脚本家へのアンケート調査により、ドラマの登場人物に文末詞を使わせる原因として、「登場人物の役柄作りや、場面の効果的演出を狙う」という脚本家の意識が働いているが挙げられている。また、ドラマ 15 本(トレンディドラマ 10 本、昼間の連続ドラマ 5 本)を調査データとし、個々の文末詞の使用頻度と使用場面、及び使用者のキャラクターを観察した。その結果、(1) 年齢が高くなるにつれて文末詞が使用される傾向があること、(2) ほかの種類ドラマと比べ、「昼ドラ」に登場する女性キャラクターは、文末詞使用率が高いこと、(3) 「昼ドラ」で使用される文末詞は、上品さや女っぽさを表出し、登場人物のイメージや言葉を柔らかくする「ソフト機能」が作用していること、という 3 つの事実が明らかになった。

水本(2010)は水本ほか(2008)を引き継ぎ、ドラマの登場人物から高頻度話者 6 名、スイッチ型話者 4 名の台詞をデータとし、使用回数の多い文末詞上位 5 種「かしら・わ・わよ・わね・のよ」の使用場面を分析した。その結果、(1) 「わ」以外は全て、ソフトの場面と比べ、高主張の場面と皮肉・嫌味の場面での使用がより多いこと、(2) 「かしら」や「わね」は従来の上品な使用例より、皮肉・嫌みの場面での使用例のほうが多いことが報告されている。

従来のソフト機能よりタフな機能を持つ文末詞の使用例の多さは、ドラマにドラマチックな非日常的な対立場面が多いことによるという考察がなされている。また、文末詞などの女言葉が元来、主張の度合いを和らげる目的で使用されてきたため、脚本家の意識には「女性言葉を使わせれば、強い自己主張の場面でも相手との関係を和らげることができ、幾分なりとも女性らしさが保たれる」という考えがあることにも関わるとされている。

澤田(n.d.)はドラマにおける文末詞の経年変化を調査した。1988 年放送のドラマと 2009 年から 2014 年のドラマにおいて 20 代の女性登場人物が使用する文末詞の使用率、使用種類、使用方法を調査した結果、文末詞の平均使用率は「過去のドラマ」の 21%から「現代のドラマ」の 4%へ減少しているほか、平均使用種類数も 8.7 種類から 2.5 種類に減少していることが報告されている。

3.3.1.3 小説や漫画における文末詞

テレビドラマのほか、小説や漫画を対象に文末詞の使用実態を調査する研究も少なくない。小説における文末詞は自然会話と同じように使用衰退現象が見られるかどうかについて、山路（2010）は 20 代、30 代である女性作家の作品で女性登場人物が必ずしも女性語を使用していない傾向が強いと述べている。具体的なデータを示した研究として、因（2003）が取り上げられる。

因（2003）は 60 年代に出版された 2 つのマンガ『トロイカ』（1965）、『レモンとサクランボ』（1966）と 80 年代以降に出版された 3 つの作品『日曜日は一緒に』（1987）、『おたんこナス』（1995）、『火消し屋小町』（1998）を調査対象とし、小説におけるジェンダー表現の使用の特徴を分析した。その結果は以下の 3 点にまとめられる。(1) 初期の 2 つの作品において、ジェンダー表現の使用の特徴は登場人物の生い立ち・立場など人格に呼応したものとなっており、人物像の造形に寄与している。(2) 『トロイカ』では、高い頻度で女性は女性語、男性は男性語を用いており、個人差は見られず、若い女性ならいかにも女性らしい類型的な言葉使いをしている。(3) 80 年代後半以降に発表された作品のなかで、女性たちが親しい友人同士で話している状況で使っているのは、「女性語＋中性語」の組合せである。

また、因（2003）は女性の男性語使用は、「他人格モード」を実現する手段として有効に機能し、「深刻さの緩和」「心情告白の照れ隠し」「挑戦や反論への道づくり」「肯定しにくい感情の吐露」など、素の自己のままでは行いにくい表現をすることを容易にしていると述べている。「女性語使用=抑圧、男性語使用=解放」という単純な結びつけ方がよくないことを示唆する点で興味深い。

Vanbaelen（2003）は『流しのした骨』を資料として選択し、2001 年 6 月に筑波大学の大学生・大学院生（18-24 歳、男 27 人、女 57 人）を対象に、小説の会話文の自然さ判断や言い換えタスクによる質問紙調査を行った。その結果、小説の会話文において性差マーカ―が読み手・被験者にとって「自然」なものと判定されても、同じものが必ずしも話し言葉において使用されるわけではないことが判明した。さらに、性差マーカ―「かしら」および「わ」は小説中の会話文では未だに許容されることが確認された。

因（2007）は翻訳漫画 6 作品に登場する女性人物の言葉遣いを質的に分析し、ジェンダー標示形式の使用がどのような要因に動機付けられ、何を指標しているかを検証した。女性ジェンダー標示表現の使用に選択性が見られる場合、選択を動機付ける要因には、(1) 個人

の属性（年齢，社会経済的条件，個人的人格的素養），（2）言語行為の攻撃性の有無，（3）発話者の表現意図といったものがあり，ジェンダー指標形式の使用の全てが伝統的な女性役割を強化するとは限らないことが明らかになった。

因（2006）は小説，マンガ，エッセイなどを対象として，ジェンダー標示形式が意図的に選択されていると考えられる例をいくつか分析した結果，攻撃的意図のある発話に，話者の通常の話し方からは逸脱と見なされ，女性のジェンダーを強く示す表現が選択されていると述べている。

山路（2006）は，1990年代以降に書かれた小説を対象に，終助詞「わ」の機能を探った。同一人物による「わ」の使い分けを分析した結果，「わ」使用場面には，強気な態度または相手を見下した態度を示しているという共通した特徴があるという。また，「わ」の使用によってもたらされるイメージについて大学生の男女を対象にアンケート調査を行った結果，「わ」の使用は強気な態度や相手を見下した態度を表すというイメージが，若年層の読み手には共有されていることが示唆される。

上述のように，現実社会で若い世代を中心に消滅傾向にある文末詞が，テレビドラマや小説などの中では未だに使用されていることは先行研究から明らかにされた。かつて日常的に使用されていた文末詞は，時代の流れとともに，ドラマや文学作品の中で多彩な働きをしており，場面の中で発話者の様々な意図を示す手段として機能しうらようになっていえる。

3.3.2 日本語教育における文末詞

日本語教育において，実際の会話から徐々に姿を消しつつある文末詞を積極的に指導すべきかどうか，もし指導する場合，どのような情報を提示すべきかについて，多くの研究者は言葉の性差の観点からその問題と対策を探ってきた。

小川（1997）は「日本語の話し言葉では，男女差別が目立つので，外国人学習者にとっては，聞き手に違和感を与えないように話しをすることができているのかが気になる点である」と述べている。

トムソン・飯田（2002）はオーストラリアの学習者を対象に男性語・女性語の意識調査を行った結果，回答者全体としては，性差の認識，受け取り方にばらつきはあるが，性差の学習には意欲的であること，回答者の学習レベルが上がり，日本語話者との接触頻度が高くなり，日本滞在期間が長くなると，性差の認識度が上がる事が判明された。

文末形式をどのように教育現場に取り入れるかについて、鈴木(2007)は渡部(2006)の初級教科書分析などをもとに、(1) テレビドラマ等では現在でも男女差が大きく、学習者は男女差のある話し方をする必要はないが、理解する必要はあること、(2) 日本語においては、話し手の性とは異なる話し方や極端に男女差のあるスタイルを主体的に選択することが談話のストラテジーとして機能しているため、スタイルの選択により付加された重層的な意味を理解するためには、学習者も母語話者が持つ男女差についての共通認識を知る必要があることや、日本語の教科書においても、女性が女性語を、男性が男性語を話すという典型以外の使用についても扱うこと、が重要であると述べている。

文末詞の指導の必要性を踏まえると、次に問題になるのはそれをどうしようするかである。この点についても様々な提言がなされている。安田ほか(1999)は日本語の男女差は発話者の心理が深く関わる問題であると指摘したうえで、その指導にあたっては、(1) より女性らしい表現、より男性らしい表現のグループをそれぞれ学習者に提示し、学習者が自分で人間関係的、場面的要素を考慮しつつどちらかのグループを選択し、使い分けていく運用能力を指導することが必要である、(2) 自分の性を前面に出すかどうかについて日本人が一定した意識を持っているわけではなく、その場の心理によって使い分けていることを学習者に示す、という2つの方針が重要であると述べている。

トムソン・尾辻(2009)はビジネス日本語の教科書を取り上げ、それをジェンダーの視点から検討した。従来の教科書分析を発展させ、教科書の内容分析だけでなく、教科書著者チームとの質疑応答、授業観察、教師と学習者へのインタビューをデータとし、教科書がどのように作成され、ジェンダーが表現され、そして、それがどのように使われ、学ばれるかを考察した。分析の結果、熟練の教師が教えた場合でも教科書を批判的に使いこなすのは難しいこと、教科書にまつわる事象は非常に複雑であることが明確となり、「言語資源」としての「女言葉」・「男言葉」を自分のものとして使いこなせるように学習者を支援するためには、女同士、男同士の会話の提示だけではなく、解説やタスクを入れる必要があることが指摘されているが、具体的にどのような解説やタスクを入れるかについての説明はなされていない。

鈴木(2010)は、言葉の男女差の変化に対して、日本語教育がどのような対処を行うことができるのか、が、困難な問題であると指摘している。鈴木(2007)では、日本語教科書の会話は、調査に基づいた日本語の実態に合わせて改良する必要があるといった大まかな方針が示されている。その改良方法とはどういうものかについて、鈴木(2010)では、「教科書

等の会話文中の女性の発話を女性的な言語形式から中立的な言語形式を使用したものへと変更し、現実には日本で使われている学習者の年齢層に近い女性の発話に近づける」と説明している。一方、鈴木は同じ文献で「日本語のバリエーションとして、女性的な発話、男性的な発話を紹介し、その特徴を示すべきである」と指摘している。

各々の使用場面で文末詞の意味機能が変化しつつある傾向にある中、水本（2009）は「教える側の教師たちが文末詞に対する意識の変化に常時注目し、変化の性格を吟味しながら、学習者に文末詞知識・情報を正しく伝える役割がある」と主張している。また、水本（2015）は今後の指導方法の在り方として、「(1) 現状として 50 代以上の女性たちは未だ女言葉を用いることがある、また、古い映画や小説などの文学作品には、若い女性による女言葉を使用することが見られるという事実を踏まえ、男女の言葉づかいの差異の存在を説明する必要がある、(2) その上、どの年代が使用しないのかという事実も正しく説明する必要がある」と主張している。」の 2 点を提案している。

Siegal & Okamoto（2003）はアメリカ国内で広く使われている 7 冊の日本語教科書を調査した結果、教科書は日本の男女の典型を描いており、モデル会話は多くの場合、伝統的ジェンダーの規範に順応していることをいくつかの例文とともに報告した。この研究では、例文を提示するのみにとどまり、統計的な立証には至っていない。トムソン・飯田（2007）は似たような結論を出している。トムソン・飯田（2007）は「現実には女性は男性より丁寧に話すものである」というように、一義的な「女言葉」の規範を実際の使用に求める通説があり、現存の日本語教育の教科書や教科書も「男言葉」「女言葉」を規則として提示するアプローチが主流であると指摘している。

Kawasaki & McDougall（2003）は日本国内で 92 年から 96 年に出版された中級の教科書 3 冊のカジュアル会話から各キャラクターの最初の 400 発話をスクリプト化し、文末詞別に、男言葉、中立言葉、女言葉、その他の 4 種類に分類し、Okamoto and Sato（1992）の自然会話データと比較した。その結果、教科書の中のキャラクターの話し方は男性も女性もステレオタイプ化されていることが報告されている。教科書は過剰に一般化された日本社会を示しているため、学習者の社会言語能力の上達の助けにならないとしている。

水本ほか（2009）は自然会話（水本ほか，2006）と同じ分析法を用い、日本国内の日本語教育現場で広く使用されている日本語教科書（主に初級・中級の教科書，聴解副教科書，日本語能力試験の聴解，日本留学試験の聴解など）から，1994 年以降に発行されたもの全 39 冊を選出し，20 代から 30 の若い世代の女性キャラクターが登場するダイアログを調査

分析した。その結果、近年の日本留学試験を除き、日本語教科書中に現れる若い女性の文末詞使用率は、実社会における自然会話の10倍から15倍と非常に高いことが報告された。以上を踏まえ、水本ほか(2009)は「教科書に示された通りに文末詞を使った会話を教室で若い女性に練習させれば、実際とは異なる不自然な日本語を学習者にインプットしてしまうことになる」という問題点を指摘している。

水本(2011)は日本人日本語教師を対象に、教科書における文末詞の使用実態についてどのように考えているかをアンケート調査したところ、日本語教育関係者の多くが、現在の若い世代の女性が文末詞を使用しなくなっているという現状に気づいていること、一方、日本語教科書の現状をよしとしている回答者も3分の1近く存在することが報告されている。文末詞が「正当な日本語という感じがする」というような意見を持つ教師も少なからずいることが興味深い。

一方、日本国内の研究の数に比べ、中国国内において、日本語教育の視点から日本語の文末形式を論じる論文はまだ少ない。中国の「知網」で「女性終助詞+教科書」をキーワードとし検索したところ、日本語教科書における文末詞の出現状況に関する調査研究は2本しか見当たらなかった。具体的な調査対象や調査の結果は以下表6のとおりである。

表6 中国国内の文末詞出現状況に関する先行研究

論文	調査対象	調査結果
范惟 (2012)	① 教科書 初級の『標準日本語』(上下)(旧版) 初級の『標準日本語』(上下)(新版) 『新編日本語』(1, 2, 3, 4) ② 日本語能力試験 1994年, から2005年までの1級能力試験	①『標準日本語』と『新編日本語』は丁寧体での会話例が多いため、教科書に現れる女性終助詞の使用率は非常に低い。女性終助詞の導入は遅く、一般的に中級教科書に導入した。 ②日本語能力試験の聴解問題においては、女性終助詞の高頻度の使用が現在も続いている。

曹春玲 (2015)	教科書 『日本語初歩』, 『わかるビジネス日本語』, 『コミュニケーションに強くなる日本語会話』, 『なめらか日本語会話』 『日本語会話中級』	①終助詞を出現頻度の多い順から見ると「ゼロ形式>よ>ね>の>わ」となる。 ②「の」「わ」は主に中年女性に使用され、「のよ」「わよ」「わね」などの複合形式はすべて女性の会話に出現する。
---------------	---	--

范 (2012) と曹 (2015) は日本語能力試験や現存の教科書の問題点について有益な知見を提供したが、課題も残されている。まず、1点目は調査対象とする教科書が限られていることである。『標準日本語』は中日両国の専門家チームが協力し編纂したものであるのに対し、曹 (2015) の調査対象教科書はすべて日本国内出版された中高級学習者向けの会話教科書である。中国国内で出版された教科書を取り上げた研究は少ないようである。また、2点目は、教科書の使用状況と実際の会話の比較が行われていないことである。范 (2012) は独自のデータを示すことなく、例文を提示するのみにとどまっている。曹 (2015) は教科書の陳述文総発話数に占める各終助詞の割合を示しただけである。

以上で概観してきたように、文末詞の意味機能は流動的であり、世代や個人によって感じ方が異なるだけでなく、同じ形式であっても使用文脈やジャンルによって使用効果が異なる。先行研究はそれらの諸点について多くの知見を明らかにしてきたが、大規模なデータベースを用いて、小説における文末詞の使用実態や時代変遷を調査したものはいまだに不十分であると思われる。

3.4 陳述スタイルに関する先行研究

書き言葉であれ、話し言葉であれ、日本語には敬体と常体という 2 つの基本的な産出モードが存在する。敬体と常体に代表される日本語の陳述スタイルは、対話者との親疎・上下関係や場の改まり度による社会的コンテキストだけで決定されるわけではなく、話題に対する話者の心的態度や談話の展開によっても選択されるとされている (生田・井出, 1983)。また、ある談話内で陳述スタイルは固定されているわけではなく、敬体と常体が相互にシフトすることで、コミュニケーションをスムーズに進めるための戦略として機能している。以下では、陳述スタイルの使用実態と陳述スタイルのシフトに分けて先行研究を概観していく。

3.4.1 陳述スタイルの使用実態

野田（1998）は文の種類を「心情文」「従属文」「事実文」「主張文」「伝達文」という5種に分けて、丁寧体の文と普通体の文が混ざって使われている文章・談話を取り上げ、丁寧さという点から、文章の構造を分析した結果、丁寧体が基調である文章は聞き手を意識する主張文や伝達文を中心に構成されているのに対し、普通体が基調である文章は聞き手を意識しない事実文を中心に構成されているという結論に至った。

熊谷（2001）は混用の出現位置と投書者の性別に着目し、新聞投書における混用の実態を調査した。その結果、普通体を基本とした投書の終わりの部分に丁寧体が使用されたり、丁寧体を基本とした投書の展開部分に普通体の混用が見られたりすることや、女性の投書に混用が多いことが明らかにされた。

石黒（2006）は、各種のエッセイを調査し、文体選好に影響を与える要因に関して、(1) 相手を意識すると丁寧体、語り手の心情の吐露は普通体となりやすい、(2) 事実や報告を表す文は普通体になりやすく、判断や説明を表す文は丁寧体になりやすい、(3) 独立性の高い文は丁寧体、依存性の高い文は普通体となりやすいという3つの傾向を明らかにしている。

北村ほか（2006）は、コミュニケーションにおける話し手と聞き手の在り方によって、伝達場面を「共在」、「非共在」、「疑似共在」の3つに分けている。不特定多数の聞き手に発信される新聞・論文などのような非共在の場では、「だ・である」体が典型的に用いられている。一方、非共在の場において、「です・ます」が用いられると、聞き手の存在が顕在化し、話し手と聞き手があたかも疑似共在しているかのような場が作り出される。伝達場面の構造を文法記述に生かす立場は示唆に富んでいる。

鶴澤（2009）では、月刊絵本『こどものとも』を対象に、1956年から2007年にかけての104冊の本文を「文体（常体・敬体）」の観点から調査した結果、時代変遷による変化は確認されなかったが、全体的に見れば、敬体のみの作品が7割、常体のみの作品が2割、混合作品が1割あると報告されている。敬体で書かれた作品が圧倒的に多いのは、低年齢にとっては、敬体の方が抵抗なく受け入れられやすいためであると述べている。また、常体の混用については、常体の使用は「報告的な地の文」の中で主観的な文を強調するためであると述べている。

「です・ます」体がわかりやすさにつながる要素として機能しているという鶴澤の指摘は東ほか（2006）でも言及されている。東ほか（2006）は、子供向けの新聞、外国人向けの情報などわかりやすさを優先した文章には、「です・ます体」が用いられることが多いと述

べ、多くの「書くメディア」において、「です・ます体」がわかりやすさのマーカ―として機能しているのは、「です・ます」を使用することで、話し手・聞き手が擬似的に顕在化されていることによると結論づけている。

中村（2011）は評論・エッセイ・論説的文章を調査した結果、丁寧体を基本とした文中での普通体の混用は、(1) 箇条書きをするとき、(2) 問題提起および問題を解答するとき、(3) 複数の事柄を対比的に取り上げて書くとき、(4) 書き手の判断・意見を書くとき、(5) 手順・順序や科学的事実を提示するときに起こりやすいと述べている。

演説における常体と敬体の使用状況を扱ったものとしては、田中（2016）、丸山（2016）があげられる。田中（2016）は、雑誌『太陽』創刊年（1895年）の演説と『岡田コレクション』（大正時代～昭和10年代）の演説を資料として、明治時代から昭和10年代までの演説の文末表現の変遷を調査したものである。文末に常体と敬体のいずれを用いるかについて、各時代の敬体率（敬体文の数を文の総数で割った比率）を計算した結果、時代が進むに従って、敬体率が次第に増加していることを示した。

演説で使われる日本語は敬体が中心となったという田中（2016）の指摘は丸山（2016）でも検証されている。丸山（2016）は、「岡田コレクション」に収録された大正から昭和前期の演説、および平成期における内閣総理大臣の演説を対象として、文末表現のバリエーションを分析した結果、大正から昭和10年代の30年間の間で、そしてさらに平成期へと移るに従って、「ル」形の割合が減ってきており、文体がより丁寧な形に変化していったと結論づけている。

明治前期の新聞記事に見られる文体の経年変化を調査した研究には島田（2017）がある。島田（2017）は明治7年から20年までの『読売新聞』の文体に注目し、敬体・常体・文語体の推移を調査した。その結果、(1) 明治15年まで敬体は70%程度用いられていたが、それ以降は衰退した、(2) 常体の文末は明治11年から15年までを中心に10～20%程度用いられていたが、それ以後はほとんど使われない文体となった、(3) 文語体は明治十六年以降一気に増加し、その後は文語体中心の書き方となった、という事実が明らかになった。なぜこのような変化が起こったのかについては、島田は明治初期に使用される敬体や常体は話し言葉的な表現と結びつきやすいのに対し、文語体はそのような結びつきがなく、時制の表現も豊富であるため、新聞の「書き言葉」に相応しい文体であると結論した。

以上で見たように、先行研究は、日本語における敬体・常体の使用状況についていくつかの側面を明らかにしてきた。これらの知見は有益なものであるが、いくつかの点について制

約も残る。1点目は、話し言葉の分析に比べると、書き言葉の分析が必ずしも十分ではないことである。2点目は、ジャンル影響が十分調査されていないことである。従来の書き言葉の文体使用に関する研究では、新聞、雑誌、絵本などのテキストを個別に取り上げて調査を行っている。しかし、ジャンルの分類にはこれ以外にも多様なものが存在するため、複数のジャンルを同一の基準に基づいて比較し、分析を加える必要があると思われる。3点目は、年代変化が考慮されていないことである。島田（2017）では、明治前期の新聞記事に見られる文体の経年変化を分析しているが、現代日本語を調査対象とする研究はなされていない。言葉は時代とともに変化するものである。常体と敬体の言語形式が変わっていないとしても、使われる社会の変化とともに、片方が多用されるようになってきている可能性が考えられる。また、ジャンルによって年代の変化パターンに違いがあるかについても必ずしも明らかにされていない。

3.4.2 陳述スタイルのシフト

三牧（1993）はテレビの対談番組の録画データを分析し、丁寧体から普通体へのスピーチレベルシフトが、(1) 新話題への移行、(2) 重要部分（結論・意志・事実・論点等）の明示と強調、(3) 注釈・補足・独話等の挿入、という3種の談話展開標識機能を持つと述べている。

宇佐美（1995）は同性・異性、目上・同等・目下などの社会的属性を統制したペアによる準自然会話の実験を行い、丁寧体を基調とした会話において、普通体へのダウンシフトが、いつどのような目的で行われるか、について分析を行った。その結果、ダウンシフトが起こるのは、(1) 心的距離が短縮するとき、(2) 相手のレベルに合わせるとき、(3) 独り言・自問をするとき、(4) 確認のための質問・答えをするとき、(5) 中途終了型発話のとき、であることが分かった。

田中（2004）は、『太陽コーパス』に含まれている雑誌『太陽』創刊年（1895年）に掲載されている演説記事を資料に、文末表現に着目して調査を行ったものである。その結果、敬体を主に使う演説中に常体が混じるのは、話し手の思いが強く現れる文であること、常体を主に使う演説中に敬体が混じるのは、演説の冒頭や末尾に位置する文、話題が転換する位置にある文など、相手や場面に対する意識が強く現れる文であることなどが明らかにされている。

このような複雑な機能を有するスピーチレベルシフトは、非母語話者によって習得が困

難である。三牧（2002）は日本人大学生の初対面会話を調べた結果、同学年ペアでは会話の基本的なスピーチレベルが統一されるだけでなく、他のレベルの比率も相似となることを示した。母語場面の初対面会話において、スピーチレベルの比率が相互に類似しているという三牧（2002）の指摘は篠崎（2012）でも検証されている。一方、母語話者同士による初対面会話は基本的なスピーチレベルが敬体であったのに対し、学習者の談話では、相手と異なる基本レベルを選択する例や、スピーチレベルの比率が非対称である場合が多いことが確認された（三牧，2007；篠崎，2012）。

日本語学習者によるスピーチレベルシフトの原因を考察した研究には寺尾（2010）がある。初～中級日本語学習者と日本語母語話者を対象に、2つの会話場面（対教師／対友人）で使用された文末形式を縦断的に分析した結果、母語話者はデスマス／非デスマス形について、場面に応じてスピーチレベルを切り換えているのに対し、学習者のスピーチレベルの切り換えには、「各形式のチャンク的な使用」や「否定文では非デスマス形式を優先」など待遇性以外の要因が関わっていることが明らかにされた。

宇佐美（1995）でも課題として指摘されている通り、話し言葉のスピーチレベルシフトは日本語学習者にとって最も習得困難なものの1つである。これは、書き言葉における文体の使い分けにも通じるものである。中道（1989）は「文章を通して一定の文体が維持されることは非常に強い要求」であり、また、「文法的・意味的な正しさよりも文体的なふさわしさが優先されることさえある」と主張している。高野（2011）はレポートや論文を書く際に、いかに専門性があり、文法が正確であっても、文体が不適切な場合、読み手に与える印象の低下は避けられないと述べ、文体の使い分けの重要性を説いている。

日本語学習者と母語話者の文体の使用実態を比較した研究には金（2016）がある。金（2016）は「日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス」の作文を対象とし、母語話者と学習者の文体選択傾向を調べた結果、読み手が目上のタスクの場合は、母語話者と学習者の間で基調文体が一致しているのに対し、読み手が同等または目下の場合や不特定（投書）の場合、一定数の学習者は母語者とは異なる文体を選ぶ傾向があることを明らかにした。特に投書の場合、両者の常体の使用率には40%近くの差がある。また、レベル別の使用状況については、母語が韓国語であるか中国語であるかを問わず、日本語能力が低いほど不自然な文体選択を行うことが分かった。仁田（2009）は丁寧体と普通体の選択について、「典型的な書き言葉では、通常、文末は普通体が用いられるものであるため、丁寧体と普通体の対立ということは問題にならない」としており、「丁寧体を用いることの方が不自然になる」と指摘

している。金 (2016) の調査結果と合わせて考えると、学習者の常体の使用率の低さは無視できない問題点であると考えられる。

日本語のスピーチレベルシフトに関する研究は、これまでに多くの観点から行われており、その中で様々な知見が示されてきた。しかしながら、日本語学習者のスピーチレベルシフトについて言うと、話し言葉の分析はなされているが、それに比べると、書き言葉の分析は必ずしも多くない。この点については、金 (2016) が重要な研究であるが、同研究が利用したデータは縦断的に収集したものではないため、学習段階の上昇に伴う文体の使用状況の変化のパターンはまだ完全に明らかになっていない。

3.5 ヘッジに関する先行研究

従来、日本語の特徴は、「曖昧表現の多さ」(中山, 1985), 「聞き手への配慮を顕示する言語」(岡本, 2006) であることが指摘されてきた。物事の確かさや可能性を表すヘッジは、コミュニケーションを図るうえで重要な役割を果たしている。ヘッジに関する研究は多くなされているが、ここでは、言語学におけるヘッジと日本語教育学におけるヘッジという2つのタイプに分けて概観する。

3.5.1 日本語学におけるヘッジ

ヘッジとは何かについて、研究者によってその定義が様々であるが、最初は「事柄をより曖昧にする機能を有する語 (words or phrases whose job it is to make things fuzzier)」として定義された (Lakoff, 1972, p.195)。ヘッジの例として、“sort of”や“kind of”などが挙げられている。また、その下位分類について、Lakoff (1973, p.471) は、命題内容を強調するもの (intensifier) と曖昧化するもの (deintensifier) の2分法を取っている。しかしながら、後述するように、ほとんどのヘッジ研究は後者の意味のものを主たる対象としている。

熊坂 (2003) は、Brown & Levinson (1987) のポライトネスの理論を引用し、ヘッジが他者に自由な行動を邪魔されたくないという「ネガティブ・フェイス」の侵害を和らげるための基本的な手段であると述べている。また、ヘッジは対立する要素を含む概念として、以下の3つの次元が関連しあうとされている。1つ目は、ヘッジは、発話の失礼さ、感じの悪さを緩和する機能 (他者防衛) と、発話内容に対する責任を回避する機能 (自己防衛) を有することである。2つ目は、ヘッジは命題内容の解釈を曖昧にするというテキスト上の機能

と話者の態度を伝える対人関係的機能の両方を有することを指す。3つ目として、対人関係的な機能を有するヘッジは、意図的に用いられるものと、発話状況に強制されるものがあることが指摘されている。

同様なことは Nittono (2003), Fraser (2010) においても指摘されている。Nittono (2003) はヘッジの機能を、言及される内容に対する「不確実性」を表す機能と、話し手と聞き手の関係を緩和させるなど人間関係に関わる「待遇性」の2つに分けている。Fraser (2010) では、ヘッジは語用論的言語能力に関わる「修辭的ストラテジー」(rhetorical strategy) として捉えられ、発話された内容に関する「命題的ヘッジ」(propositional hedging) と発話行為の効力に関する「発話行為的ヘッジ」(speech act hedging) という2種類に分けられる。堀田・堀江 (2012) は、前者を「可能性や程度性、類似性など命題内容の不確かさを表す機能」、後者を「情報に対する話し手の捉え方(発話態度)を緩和させたり、感情や思考などの発話内容を緩和させたりする機能」としている。

上記で見てきたように、ヘッジはコミュニケーションを図るうえで、重要な位置付けを占めているといえる。以下では日本語を分析対象にした研究を挙げ、ヘッジの使用状況を分析した研究を挙げる。

Lauwereyns (2002) は、ヘッジを「不確かさや可能性、ためらい、近似性を言語的に表現する曖昧表現」と定義し、発話表現、副詞、接続詞、接辞として使用される26種の言語形式について、性差、年代差、場面の改まり度の3つの観点から考察した。その結果、女性は男性よりも、若者は年配者よりも、改まり度の高い場面では低い場面よりも、多くのヘッジを使用したと報告している。女性は断定を避けるヘッジ表現を好む傾向があることは Lakoff (1990) においても指摘されている。

友達同士の会話におけるヘッジを分析した Nittono (2003) は、ヘッジの表現形式やヘッジ行動の影響要因を以下の表7のようにまとめている。

表 7 ヘッジの表現形式やヘッジ行動の影響要因 (Nittono, 2003)

ヘッジの型	(1) 語彙 (副詞, 助詞, 動詞, 形容詞等) (2) 非語彙 (笑い, ポーズ, イントネーション等)
ヘッジ行動の影響要因	(1) 社会的要因 (年齢, 性, フォーマリティ, 職業等) (2) 会話行為的要因 (依頼, 断り, 申し出, 意見表明等) (3) 場面設定的要因 (グループサイズ等) (4) その他: 実証されていない要因が多い

入戸野 (2004) では, 日本人の友人間のグループ会話をデータとし, 形式と機能の両面から考察している。その結果, 語彙・語句による 138 種のヘッジのうち, 形式については, 助詞が約 55%, 間投詞が約 12%, 副詞が約 10%, 機能については, 「正確な情報を伝達したい」という意思表示機能が約 20%, 「人間関係を向上させる」機能が約 80%を占めたと報告されている。

袁 (2018) は日本語のヘッジがどのように中国語に訳されているかを調査した研究である。データは『ナオミとカナコ』, 『お義父さんと呼ばせて』, 『戦う! 書店ガール』, 『結婚しない』, 『家族ノカタチ』の 5 本のドラマである。ドラマの中国語字幕では, ヘッジの訳出は全体の 6 割, 訳出されなかったヘッジとしては, 「と思う」と「ちょっと」が目立つことが報告されている。

以上で紹介した研究の多くは談話分析を中心とするものであったが, 最近では, 書き言葉におけるヘッジへの関心も高まってきた。Lee (2009) は Hyland (2005) の分類モデルに従い, 「朝日新聞」と New York Times の社説に出現したスタンス表現を分析したものである。さらに, Lee・楊 (2013) では中国の新聞「新京報」の社説も比較対象に加えられ, 3 言語の比較から, 日本語の社説では増幅詞が少ないことが観察された。同様な結果は, 日本語と英語の論文の比較を行った Lee (2006,2011) においても確認され, 日本語における増幅詞の過少使用は, 論文, 社説というジャンルを超えて現れる日本語の全般的特徴であると結論づけられている。

小森 (2016a) は, 「と思われる」「と考えられる」「と言える」に注目し, これらの意見述べの表現が日本語母語話者の学術論文においてどのように使用されているかを調査したものである。データは, 定評がある学術誌から日本語学, 日本語教育, 日本文学, 哲学, 社会学に関わる論文を各分野 10 本, 合計 50 本を収集したものである。各表現の引用節の内容

や共起語を手がかりとし、メタディスコースの観点から分析したところ、「と思われる」「と考えられる」はヘッジのカテゴリーに入り、言及内容に対する全面的関与を避け、読み手との対話の場を作る機能を持つことや、「といえる」は増幅詞のカテゴリーに入り、言及内容の妥当性を後押しし、読み手との間に信頼関係を構築する機能があることが報告されている。

東泉・高橋（2020）は、「<主張>もちろん<異論><逆接表現><主張>」という談話構造で用いられる副詞「もちろん」をヘッジ用法と呼び、3つのコーパスを用いてその使用実態を調査した。その結果、(1)「もちろん」のヘッジ用法は全用例数の割以上を占めること。(2)「もちろん」のヘッジ用法は、書き言葉より話し言葉、対話より独話で多用される傾向にあること、(3)ヘッジ用法の「もちろん」を用いた談話構造は<主張>を補強する効果をもたらすこと、が明らかにされた。

以上で概観してきたように、日本語学におけるヘッジに関する研究は、これまでに多くの観点から行われており、その中で様々な知見が示されてきた。しかしながら、いくつかの課題も認められる。

1点目は異なる研究が、異なるヘッジを分析対象としており、得られた結果を比較して議論できないことである。この点について、新しい研究の前提として、分析対象とするヘッジを整理し、認定の基準を示すことが重要になろう。

2点目は調査する資料が特定の場面のデータに限られ、ヘッジ語形の振る舞いへの言語環境の影響がほとんど考慮されていないことである。ヘッジは話し言葉においても、書き言葉においても重要な語彙項目とみなされている。また、内容ジャンルの違いによってヘッジ語形の使用状況が異なる可能性も存在する。よって、異なる内容ジャンルを収録した話し言葉および書き言葉コーパスを用い、話し言葉・書き言葉別およびジャンル別にヘッジ語形の使用量や高頻度語形を調査する必要があるだろう。

3点目は産出モード（話し言葉・書き言葉）や内容ジャンルと結びつきやすいヘッジ語形にはどのようなものがあるかは解明されていないことである。よって、言語環境を手掛かりとし、ヘッジ語形がどのようにグルーピングできるかを調査することが必要であろう。

4点目は言語環境の影響をあまり受けずに安定して出現するヘッジ語形は明らかになっていないことである。ヘッジ語形を教える際に、多様なヘッジ語形の中からより重要なものを取り出し、それらを優先的に導入するのが望ましい。この点について、コーパスデータを調査し、幅広い言語環境で共通して多用される典型的ヘッジ語形の特定を行う必要がある

だろう。

5 点目はヘッジを調査した研究では、ヘッジがどの程度陳述内容を緩和するのかにも注目する研究が少ないことである。ヘッジの重要性を考える際に、従来の研究ではヘッジの使用頻度に焦点が当てられ、ヘッジの緩和度が無視されているようである。ヘッジの実際の使用例を見ると、様々なヘッジの中に、語によってヘッジの緩和度が異なる可能性が存在する。また、1つの語が持つ複数の意味用法の中に、ヘッジの緩和度には違いがあるかもしれない。この点について、母語話者の内省調査を行う必要があるだろう。

3.5.2 日本語教育におけるヘッジ

日本語学習者のヘッジを対象にした研究としては、山川（2011）、堀田・堀江（2012）、小森（2016b）が挙げられる。

山川（2011）は、KY コーパスを用い、初級から超級までの日本語学習者（韓国語母語話者、英語母語話者 20 名ずつ）のヘッジ使用を調査した結果、日本語レベルが上がるにつれ、ヘッジの使用頻度が高くなることと、上級、超級レベルでは、複数のヘッジを組み合わせて使用していること、を明らかにした。また、ヘッジの機能に関して、学習者のレベル向上に従って、「不確実性」の機能を持つヘッジの使用が減り、「待遇性」の機能を持つ使用が増えることから、学習者にとって、相手との関係を調整する「待遇性機能」と比べ、発話内容に対する「不確実性」を表すヘッジの使用は比較的容易であると結論づけられている。なお、同様の結果が堀田・堀江（2012）においても指摘されている。

堀田・堀江（2012）は、ロールプレイデータを用いて、勧誘に対する断り行動中のヘッジに注目し、日本語学習者（中国語母語話者 23 名、韓国語母語話者 10 名）と日本語母語話者（30 名）の使用を比較した。その結果、日本語母語話者と学習者間の相違点としては、以下 2 点が挙げられる：(1) 学習者は上級であっても、日本語母語話者よりヘッジの数も種類も少ない、(2) 学習者は日本語母語話者に比べ、「ちょっと」や「思う」などを多用しており、「かな」など高度な語用論的能力を要する終助詞の使用は少ない。それは、ヘッジに関する学習者の運用能力が十分ではないこと、教室内での指導が十分でないことに関係していると指摘されている。

小森（2016）は、日本語を母語とする大学教員と日本語学習者（それぞれ 16 名、うち中国語母語話者 4 名）の意見文を集め、ヘッジと強意詞の使用の違いがあるかについて考察した。その結果、(1) ヘッジは、使用数や使用率の上では大学教員と学習者の間に大きな違

いはないこと、(2) 学習者は「強意詞+断定表現」を多用しているのに対し、大学教員は同様の文脈でヘッジを使用すること、(3) 大学教員はヘッジを文章構造と関連付けて使用していること、の3点が示唆された。

学習者のヘッジ使用に関する研究は、これまでに異なる観点から行われており、その中で様々な知見が示されてきた。しかしながら、いくつかの課題も認められる。1点目は、中国語を母語とする日本語学習者のヘッジ使用状況を調査した研究はあるが、習熟度間の比較が行われていないことです。堀田・堀江(2012)と小森(2016)では、中国語を母語とする日本語学習者を調査対象に含めているが、習熟度を区別せずに、学習者全体の使用状況を横断的かつ包括的に調査している。この点については、習熟度の上昇に伴ってヘッジの使用状況はどのように変化するかを調査すべく、学習者のヘッジ使用状況を習熟度別に調査することが必要になる。

2点目は、学習環境を考慮して調査した研究がないことです。3つの先行研究はいずれも日本国内でデータ収集が行われたため、対象者は日本国内教室で日本語を勉強している学習者である。この点については、学習環境の影響がヘッジ習得にどのような影響を及ぼしているかを明らかにするために、日本国内教室の学習者のほか、中国にいる日本語学習者を加えて比較分析を行うことが必要になる。

3点目は、調査対象の人数が限られていることです。サンプルの人数が少ないと、得られた結果の信頼性が低い恐れがある。調査の信頼性を高めるために、より大きいサイズの学習者コーパスを利用し、習熟度の発達とヘッジ使用の関係を量的に分析することが重要であろう。

第4章 リサーチデザイン

第I部では研究の枠組みを示すわけであるが、すでに、第1章において、スタンスマーカ―を研究する重要性と必要性について述べた。第2章において、言語学におけるスタンスの定義やスタンスマーカ―の分類方法を概観し、本研究における「スタンス」の定義を行った。第3章において、4種のスタンスマーカ―に関わる先行研究を整理し、その課題を指摘した。続く本章では、本研究の目的、使用するデータ、研究手法などについて概観する。

4.1 研究目的

すでに述べたように、スタンスマーカ―は種類も膨大であり、意味・機能も様々である。にもかかわらず、言語学においても、日本語教育学においても、それぞれのふるまいについて十分に研究されているとは言いがたい。このことを踏まえ、本論文においては、(1) 現代日本語における4種の主要なスタンスマーカ―の使用実態とその意味特性を調査したうえで、(2) 中国人日本語学習者によるそれらの使用状況と使用上の課題を明らかにし、(3) スタンスマーカ―の指導のための提言を行うことを目指す。

4.2 使用するコーパス

すでに述べたように、スタンスマーカ―の研究については、主観や内省を重視した理論的アプローチによるものが多く、日本語教育の観点も加味し、実際の言語データを分析した計量的かつ実証的な研究は必ずしも多くない。こういった現状をふまえ、本論文においては、(1) 日本語母語話者コーパス、(2) 日本語学習者コーパス、の2種類をデータとして用い、スタンスマーカ―にかかわる様々な問題を多角的に議論していく。以下、まず4.2.1において本論文の各章で使用するコーパスの全体像を概観する。次に、4.2.2で母語話者コーパスについて、4.2.3で日本語学習者コーパスについて、それぞれ詳細を紹介する。

4.2.1 本論文で使用するコーパスの全体像

本論文では、第II部において「母語話者によるスタンス表出」を扱い、続く第III部において「中国人日本語学習者によるスタンス表出」を議論する。

第II部および第III部はそれぞれ4つの章で構成され、順に、一人称・文末詞・陳述スタイル・ヘッジという4種のスタンス表出を分析する。以下は、各章で使用するコーパスの一覧である(表1)。

表 1 本論文の各章で使用するコーパスの一覧

部	章	調査内容	使用するデータ
Ⅱ部：母語話者分析	5章	一人称	・現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) (ブログ, 知恵袋, 国会会議録)
	6章	文末詞	・BCCWJ (書籍：文学)
	7章	陳述スタイル	・BCCWJ (9ジャンル)
	8章	ヘッジ	・BCCWJ ・日本語日常会話コーパスモニター公開版 (CEJC) ・多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS) (母語話者発話)
Ⅲ部：中国人日本語学習者分析	9章	一人称	・I-JAS
	10章	文末詞	・I-JAS
	11章	陳述スタイル	・LARP at SCU コーパス
	12章	ヘッジ	・I-JAS

Ⅱ部「現代日本語におけるスタンス表出」においては、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)を用い、母語話者によるスタンス表出を調査・分析する。すでに述べたように、スタンスはきわめて状況的・対人的・可変的なものであり、計量的分析は必ずしも容易でない。現代日本語におけるスタンス表出の安定的な傾向を探るためには、幅広いジャンルを包含し、かつ、圧倒的に大量の日本語データを収集したコーパスが必要となる。この目的にかなうのが BCCWJ である。BCCWJ は書き言葉のコーパスであるが、小説中の会話文や、国会での発言、また、会話性の強いウェブ上のブログや質問掲示板(知恵袋)の書き込みなど、話し言葉性を有するデータも包含しており、日本語の諸相を観察する目的に適したデータである。ただし、4種のスタンス形式のうち、ヘッジについては、用法がとくに不安定で、BCCWJ だけでは安定した傾向を取り出すことが困難であったため、ヘッジの分析に限り、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」(I-JAS)の母語話者発話データと、「日本語日常会話コーパス」(CEJC)という2種の話し言葉の資料を補助的に参照する。

学習者と母語話者のスタンス表出を明確な形で対比するには、Ⅲ部「日本語学習者によるスタンス表出」においても、BCCWJ と同じ書き言葉、つまりは、学習者の作文コーパスを

分析するという方向性が考えられる。しかし、これには3つの問題がある。1点目は、学習者の作文の多くは、授業中に、あるいは授業後の課題として書かれたもので、見本にしたがってフォーマルな文章を紋切り型的に書く場合がほとんどで、学生自身のスタンスが表出される場合が少ないということである。2点目は、利用可能な学習者の作文データのサイズが限られていることである。3点目は、学習者の作文コーパスは、個々のトピックに即して書かれたものが大半で、トピックの影響が強いということである。これらの制約を検討した結果、Ⅲ部「中国人日本語学習者 (NNS) によるスタンス表出」においては、現在アクセス可能な日本語学習者コーパスの中で最大の規模を有する「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」(I-JAS) の発話データを中核データとして議論を行う。

なお、陳述スタイルについても、I-JAS のロールプレイデータを用いて調査を行うことができるが、中納言を用いて I-JAS のロールプレイにおいて助動詞「だ」がどの程度使用されているかを調べたところ、以下の結果を得た。

図 1 I-JAS の「だ」の検索画面

サンプル ID	連番	発話番号	話者	前文脈	キー	後文脈	語彙素	語彙素読み	品詞	活用型	活用形	調査地	母語
CCH03-RP2 音声ファイル ブレインテキスト フェイスシート	4080	00200	K	が、 あります。 この 人 私より、 料理を 作る、 こと には、 上手	だ	と、 上手 と思います # あー「 、 あ「 い)、 あなた が す、 推薦 する 人が い る	だ	ダ	助動 詞	助動 詞-ダ	終止形- 一般	中国語 (中国D 有)	中国 語
CCH06-RP1 音声ファイル ブレインテキスト フェイスシート	1630	00100	K	ち、 おー「 その 仕事 には (うんう ん)、 えー「 上手 に できる と 思います # そう です ねー # あー「	だ	から、 あー「 時間、 時間が 減つ ても (うん) うー「 同じ の、 お、 同じ 量の	だ	ダ	助動 詞	助動 詞-ダ	終止形- 一般	中国語 (中国D 有)	中国 語
CCH07-RP1 音声ファイル ブレインテキスト フェイスシート	5770	00300	K	に アルバイト を する ー あ「 、 あの「 経 験 は、 あーあー「 あつて、 あの「 、 私 より 優秀	だ	と 思います # え「 そう あなた より 優秀 な 人が いる なんて 信じ られない けど、 まあ「 で	だ	ダ	助動 詞	助動 詞-ダ	終止形- 一般	中国語 (中国D 有)	中国 語

学習者の発話には、「～上手だと思います」「～優秀だと思います」など、常体が使用されている例は見られるものの、大部分は会話の末尾ではなく、文の節内での使用である。このような用例は、厳密に言えば、常体の使用例であるとは言いがたい。要するに、I-JAS の発話データでは陳述スタイルの出現数が限られていることが確認された。学習者の陳述スタイル使用を観察するには、常体と敬体両方が一定数使用されていることが必須でもあるため、陳述スタイルを論じる 11 章に限って、I-JAS に代え、様々なトピックに関する台湾人学習者の作文を縦断的に収集した「LARP at SCU コーパス」を使用する。

4.2.2 本論文で使用する母語話者コーパス

4.2.1 では、本論文の各章で使用するコーパスの全体像を概観した。続いて、4.2.2 では母語話者コーパスについて、4.2.3 で日本語学習者コーパスについて、それぞれ詳細を紹介する。

まず、第Ⅱ部の分析で主として使用する母語話者コーパスは「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese: BCCWJ)である。BCCWJは、すでに3.1.2.1節で紹介したように、現代日本語の書き言葉1億語を含む大型コーパスであり、多くの日本語研究において使用されている。

BCCWJの特徴の1つは、内容的・時間的に幅を持ったデータが含まれていることである。前者については、全体で13ジャンル(出版・雑誌, 図書館・書籍, 出版・書籍, 出版・新聞, ブログ, 国会会議録, 知恵袋, ベストセラー, 韻文, 教科書, 広報紙, 白書, 法律)からデータが収集されている。また、その大半について、1976年から2005年まで約30年間のデータが収集されている。

もともと、BCCWJのデータは膨大で、それらすべてを混在して使用するのには、文脈や状況に大きく影響を受けるスタンス表出の研究手法としては適切ではない。そこで、本研究では、章ごとに、研究の目的に即してBCCWJのデータを選択して使用することとした。以下では、章ごとに、使用するデータを具体的に紹介する。

まず、5章「現代日本語における一人称代名詞使用」では、主にBCCWJのブログを使用する。ブログは校閲を得た新聞や公文書などに比べ、個人の自由な意見表出の場であり、自分自身に言及する機会が多く、直接的な形でスタンス表出がなされている可能性が高い。また、使用場面が一人称代名詞使用に与える影響を調査するには、フォーマル度の異なる2つのデータを利用する。具体的にはインフォーマルなデータとしてYahoo!ブログ、フォーマルなデータとして、国会における議員等の(主として原稿あり)発言を記録した国会会議録を使用する。

次に、6章「現代日本語における文末詞使用」では、BCCWJの書籍のうち、日本十進分類法(NDC)に基づく文学ジャンルのデータを使用する。これは、「わ」「かしら」などの文末詞は小説内発話に多いためである。なお、BCCWJの書籍(文学)には、「出版・書籍」「図書館・書籍」「ベストセラー」の3種の内部区分があるが、本研究ではこれら3種をまとめて扱う。

また、7章「現代日本語における陳述スタイル使用」では、日本語における常体・敬体の使用状況をジャンル差と年代差という2つの観点から調査する。BCCWJの13ジャンル(3種の書籍を集約すると全11種)のうち、話し言葉的な性質の強い「国会会議録」と、日本

語として特殊性の高い「韻文」を除く、残りの 9 ジャンルを調査対象とする。なお、年代別の調査については、各ジャンルの刊行年代にばらつきがあるため、以下の 2 つの観点で行う。1 つ目は、マクロ的な時間の観点である。30 年間のデータが揃っている「法律」「白書」「書籍」の 3 ジャンルを対象に、1976～1980 年、1981～1985 年というように、5 年単位で調査を行う。2 つ目は、ミクロ的な時間の観点である。2001 年以降のデータが収録された「雑誌」「新聞」「教科書」の 3 ジャンルを取り上げ、1 年ごとに調査を行う。

最後に、8 章「現代日本語におけるヘッジ使用」では、幅広い言語環境で共通して多用される典型的ヘッジ語形の特定を行うため、書き言葉に加え、話し言葉も分析対象に加える。8 章で使用するデータは BCCWJ, CEJC, I-JAS(母語話者発話データ)の 3 種である。

BCCWJ については、13 ジャンル(出版・雑誌, 図書館・書籍, 出版・書籍, 出版・新聞, ブログ, 国会会議録, 知恵袋, ベストセラー, 韻文, 教科書, 広報紙, 白書, 法律)のうち、前述のとおり、「出版・書籍」「図書館・書籍」「ベストセラー」を同じ「書籍」ジャンルとみなして 1 つにまとめる。次に、書籍については、話し言葉的な要素がより多く含まれる小説類をほかと区別するために、サンプル ID に表示された日本十進分類法(NDC)の第 1 次区分情報を利用して、「文学以外」(書籍 1)と「文学」(書籍 2)を分けて扱う。上記の 12 変種のテキストのうち、書き言葉の特徴が強い「新聞(PN)」、「雑誌(PM)」、「書籍 1(B1)」、「書籍 2(B2)」、「教科書(OT)」の 5 ジャンルを今回の調査対象とする。

CEJC は、多様な場面の日常会話を収録する。ここでは、2018 年にリリースされたモニター公開版のデータを分析対象に加える。また、異なる言語を母語とする日本語学習者、および日本語母語話者の話し言葉および書き言葉を横断的に収集した I-JAS に含まれる母語話者の発話データをあわせて利用する。I-JAS の母語話者発話には、イラストに基づいてストーリーを作って話すストーリーテリング(ST)、イラストについて説明する絵描写(D)、15 項目の話題をめぐって学習者と調査実施者の間で行う対話(I)、設定された場面(依頼・断り)に応じて与えられた役を演じるロールプレイ(RP)の 4 種類の発話タスクがあるが、これらすべてを分析対象とする。

以上より、8 章で扱うコーパスデータは、書き言葉 5 ジャンル(PN, PM, B1, B2, OT)と、話し言葉の 5 ジャンル(ST, D, I, RP, CEJC)、合計 10 種となる。

4.2.3 本論文で使用する日本語学習者コーパス

第Ⅲ部の分析で主として使用する「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」(I-JAS)

は、すでに 3.1.2.2 節で紹介したように、世界の日本語学習者および比較用の母語話者のインタビュー発話を中心にデータを集めた大型の日本語学習者コーパスである。I-JAS は、そのほかの日本語学習者コーパスに比べ、多くの利点を持っている。

表 2 各種の日本語学習者コーパスと比較した I-JAS の特徴

	コーパス (公開年)	中国人学 習者数	レベル 判定	性別 情報	母語話者 データ
書き言 葉	作文対訳 DB (2001)	78	○	×	○
	日本語学習者作文コーパス (2013)	160	○	○	×
	なたねコーパス (2012)	115	○	○	×
	Larp at SCU (2011)	37	○	○	×
話し言 葉	C-JAS (2013)	3	○	○	×
	KY コーパス (1999)	30	○	×	×
	I-JAS (2020)	200	○	○	○

このうち、(1) 大量の中国人日本語学習者による産出を集めている、(2) 日本語母語話者との比較が可能である、(3) 学習者の習熟度情報を入手できる、(4) 学習者の性別情報を入手できる、(5) 最新のデータを集めている、という 5 つの要件を同時に満たしているのは、2020 年にリリースされた I-JAS のみである。

すでに 3.1.2.2 節で述べたように、I-JAS では、複数のタスクが設けられているが、学習者と母語話者が同時に参加しているタスクには、イラストのストーリーを話すストーリーテリング (ST)、イラストについて説明する絵描写 (D)、学習者と調査実施者が行う自然な対話 (I)、設定された場面に応じて、与えられた役を演じて会話するロールプレイ (RP)、ストーリーテリングと同じイラストを見て作文をするタスクストーリーライティング (SW)、の 5 種類がある。ほかのタスクと比べ、対話 (I) では、参加者が自分自身の経験や意見について話しているため、一人称代名詞、文末詞、ヘッジが出現しやすいと推測される。したがって、本研究の 9 章、10 章、12 章では対話 (I) のデータを使用する。

11 章「学習者の陳述スタイル使用」では、常体シフトの発生時期、常体シフトの発生パターン、常体シフトに影響を与える要因に焦点を当て、中国人日本語学習者による陳述スタ

イル使用を調査・分析する。このため、本章に限って、I-JASに代え、幅広いテーマについての学習者の作文を縦断的に収集した「LARP at SCU コーパス」を利用する。3.1.2.2節で述べたように、LARPは、月1回に学習者にトピックを与え、辞書を参照せずに書いた作文を3年半にわたって収録している。学習者は全体で33種のトピックについて作文を書いており、「私の部屋」「高校生活」のような私的なものから、「ゴミ問題」「少子化」のような公的なものまで、陳述スタイルの変化が生じやすいデータの構成となっている。この点において、LARPは学習者による陳述スタイルの多様性を調査するのに適したデータだと言える。

4.3 使用する統計手法

言語データを量的に記述・分析するにあたり、統計的なアプローチが有効であり不可欠でもある。本節では、本研究において使用する各種の統計手法のうち、仮説検定（ t 検定と分散分析）、相関分析、主成分分析、クラスター分析、コレスポンデンス分析について、それぞれ紹介しておく。

4.3.1 仮説検定（ t 検定と分散分析）

標本のデータから得られた結果を母集団に一般化してよいかどうかを判断する際に用いられるのが、仮説検定である。コーパス研究のほとんどが標本調査なので、単語やコロケーションなどの頻度差を扱う際には、仮説検定が必要になる。

仮説検定には様々な形のものがあるが、本研究では、第8章でヘッジの意味緩和度判定における男女差を調査する際に、また、第9章で女性学習者による「私」と「あたし」の使用量の差を調査する際に、2群の平均値を比較する t 検定（ t test）を使用する。

また、第8章でヘッジの意味緩和度判定における話者の職業差を調査する際に、また、第9章で男性学習者による「私」「僕」「俺」の使用量の差を調査する際に、3つ以上の平均値を比較する分散分析（ANOVA: analysis of variance）を用いる。

さらに、第8章で言語環境（産出モード・内容ジャンル）別のヘッジの使用量を比較する際に、複数のコーパスから得られた頻度の差の有無を検査するカイ二乗検定（chi-square test）を使用する。

このうち、 t 検定は2群の平均値の差が統計的に見て意味があるかどうかを検定する際に用いられる。標本抽出による誤差が考えられるため、2群の平均値は見かけ上差があるように見えても、その差がそのまま母集団に当てはまらない可能性がある。統計学では、標本調

査で得られる差が母集団でも再現されると考えられる場合にのみ、実質的な意味のある差、つまり有意差 (significant difference) があると見なす。このとき、有意差がないのに差があると言ってしまう誤った判断 (第 1 種過誤, α 過誤) を行うリスクの最大許容域を有意水準 (significance level: α) と呼び、手元のデータから得られる実際の確率値 (p) と比較する。有意水準は通常、5%, 1%, 0.1%の中から選択するが、言語研究の分野では 5%が一般的である。手元のデータから計算された t 統計量に由来する p 値が事前に決めた有意水準より小さければ、得られた差が統計的に有意であると結論する (石川・前田・山崎, 2010)。

t 検定は 2 つの平均値の差の検定に使用できるが、3 つ以上の平均値の差の有意性を確認するには、分散分析が必要になる。分散分析では、データに影響を与える原因を「要因」と呼び、要因の数が 1 つの場合は「一元配置分散分析」を、2 つの場合は「2 元配置分散分析」を行うことができる。なお、最近の統計の実践では、 t 検定を分散分析の一部に含める考え方もあるが、本研究では両者をわけて扱う。

最後に、名義尺度に属される人数や回数の頻度の差を統計的に検証する際に広く用いられるのが、カイ二乗統計量を用いた比率検定 (カイ二乗検定) である (竹内・水本, 2004)。カイ二乗検定を利用する際に留意すべきこととしては、比率値ではなく粗頻度を使うこと、また、期待値や実測値が 5 以上であること (セルの 2 割以上で期待値が 5 未満となる場合は、フィッシャーの正確確率検定などの使用が推奨される) などがあげられる (石川・前田・山崎, 2010)。カイ二乗検定では、カイ二乗統計量 (χ^2) を計算する。この値があらかじめ決められた限界値を上回れば差は有意であると判断する。自由度が 1、有意水準を 5%に設定する場合、限界値は 3.84 である。

4.3.2 相関分析

本研究では、11 章において、どのような要因が常体シフトに影響を及ぼすかを調査する際に、また、12 章において、異なる習熟度の学習者が典型的に使用するヘッジを特定する際に相関分析を利用する。

相関分析 (correlation analysis) とは、「複数の変数がどの程度の強さで相互に関係しているか、つまり、一方が変化すれば他方もそれにつれて変化するという直線的な関係がどの程度の強さで見られるかを調べる統計的分析手法」 (石川・前田・山崎, 2010) である。相関分析には様々な手法があるが、データの尺度が間隔尺度・比例尺度の場合はピアソン相関、順序尺度、名義尺度の場合はスピアマン相関を利用する。

一方が増えるにつれて、他方も増えることが「正の相関」、一方が増えれば他方が減ることが「負の相関」と呼ばれる。2つの変数の相関の強さを示す「相関係数」は-1から1までの範囲をとり、その絶対値が1に近ければ近いほど相関が強いことになる。相関係数の解釈の目安として、一般に、絶対値が.7を上回れば「強い相関」、.4を上回れば「中程度の相関」、.2を上回れば「弱い相関」があるとされる（石川・前田・山崎，2010）。

4.3.3 主成分分析

本研究では、8章「現代日本語におけるヘッジ使用」において、幅広い言語環境で共通して多用される典型的ヘッジ語形の特定を行う際に、主成分分析を利用する。主成分分析（principal component analysis : PCA）は、手元に多くの変数がある場合、元の多量の変数が提供していた豊富な情報をできるだけ損なわずに少数の変数に集約するための統計手法の1つである。一般に、数個の変数を合成する場合、平均が広く使用されるが、頻度を単純に足し合わせ、平均にするだけでは、個々の変数の分散が考慮されていない。一方、主成分分析を使うことで、データ間の分散と相関関係も加味しながら、全体のデータの情報を代表する値を取り出すことができる。

元の変数が合成されてできた新たな変数は主成分といい、一般に複数の主成分が取り出される。このとき、第1主成分が含む元データの情報量は最も多く、第2主成分、第3主成分となるにつれて包含する情報の量は減少してくる。統計ツールである Seagull-Stat を用いた主成分分析では、(1) 相関係数行列、(2) 固有値・寄与率表、(3) 固有ベクトル表、(4) 主成分負荷量、(5) 主成分得点の5つの表と、(6) 負荷量散布図、(7) スコア散布図の2つの図が出力される（石川・前田・山崎，2010）。

以下、石川・前田・山崎（2010）の解説に基づき、これらの出力の意味を示す。まず、相関係数行列では、変数間が互いにどのような関連性を持っているかを確認することができる。固有値・寄与率表では、固有値、寄与率、累積寄与率の3つの指標が示される。まず、固有値は、合成された主成分の分散であり、その主成分の説明力を表している。この値が大きいほど、元データの情報を多く含んでいることとなる。寄与率は、固有値の総分散に占める比率を百分率で示した値である。累積寄与率は、その成分までの寄与率を足し合わせた和である。主成分の数を決める際に、様々な基準が提案される。相関行列を用いた分析の場合広く使用されているのは、(1) 固有値 1.0 以上のものを採用する、(2) 累積寄与率が 60～80%以上となる主成分までを分析対象とする、(3) スクリーンプロット図で傾斜がなだらか

になる前までの主成分を採用する、の3つである。絶対的な基準がないため、分析の目的に照らして判断されることになる。

固有ベクトル表で示された固有ベクトルは、個々の変数にかかる重みのことで、主成分負荷量はそれを調整した値である。これら2つの指標値は同じことを別の基準で示しているだけなので、通例は主成分負荷量表のみを見ておけば良い。主成分負荷量は各変数と主成分との関係の強さを示す相関係数であり、0～±1の範囲を取る。

複数の主成分から2つの主成分を取り出し、片方の負荷量を横軸に、もう片方の負荷量を縦軸にとり、散布図としてまとめたものが負荷量散布図である。

主成分得点は、個々のケースがそれぞれの主成分によって特徴づけられる度合いを示す得点（スコア）である。複数の主成分得点をそれぞれ組み合わせて、散布図に布置させてまとめた図がスコア散布図である。主成分分析の結果を解釈する際には、スコア散布図と負荷量散布図を比較しながら行っていく必要がある（石川・前田・山崎，2010）。

4.3.4 クラスタ分析

本研究では、11章において、学習者を常体シフトの発生時期によってグルーピングする際にクラスタ分析を利用する。クラスタ分析とは、「データが持つ情報を手がかりにして、距離の近いデータ同士をまとめてクラスタを構成する統計手法」（石川・前田・山崎，2010）である。

クラスタ分析には、様々なタイプが存在する。まず、データをクロス表で整理するとき、縦方向に入るデータを変数、横方向に入るデータをケースと呼ぶが、変数を手がかりにしてケースを分類することをケースクラスタ分析、ケースを手がかりにして変数を分類することを変数クラスタ分析と呼ぶ。

また、階層的クラスタ分析と非階層的クラスタ分析の区別もある。階層的クラスタ分析は、「散らばった個々のデータについて、最も類似したものを順番に仲間に引き入れながら、次第に大きな階層構造を持つ集合を作っていく」（石川・前田・山崎，2010）方法であり、言語研究で用いられることが多い。階層的クラスタ分析では、デンドログラム（樹形図）が得られ、それに基づき、分析者がデンドログラムのどこかで区切るのかを判断する。区切り方については絶対的な基準がないため、研究の目的に照らし合わせながら、それぞれのグループの特徴よくあらわれるところを探さなければならない。一方、非階層的クラスタ分析は、「手元のデータをいくつのクラスタに分類するか、分析者が事前に決めておく」

(石川・前田・山崎, 2010) 手法である。この手法では、デンドログラムが出力されないため、言語研究で使用されることがごく少ない。

クラスター分析では、クラスターの結合法(最近隣法, 最遠隣法, 重心法, Ward 法など), 距離の定義方法(ユークリッド距離, 平方ユークリッド距離, 相関係数など)の組み合わせによって, 結果が異なる場合があるが, 「Ward 法」と「平方ユークリッド距離」の組み合わせが個人差研究にふさわしいとされている(竹内・水本, 2014)。

4.3.5 コレスポネンス分析

本研究では, 5 章において, 一人称複数代名詞の表現形の典型的な使用場面を調査する際に, また, 7 章において, ジャンル差と年代差のどちらがより常体・敬体の使用状況に大きく影響を及ぼしているかを調査する際に, 8 章において, ヘッジ語形が持つ語義がどのようにグルーピングできるかを調査する際に, さらに, 9 章において, 学習者と母語話者がどのように分類されるのかを分析する際に, それぞれ, コレスポネンス分析を利用する。

コレスポネンス分析 (correspondence analysis) とは, 「頻度表における行・列の関係を組み替え, 頻度表に含まれる情報を少数の成分(次元)にまとめることで, 行・列を整理する解析法」(石川・前田・山崎, 2010) であり, 日本語では対応分析とも呼ばれている。頻度などをまとめたクロス集計表に含まれる情報を少数の次元にまとめるとともに, 結果として散布図が出力され, すべての情報を可視化できることがコレスポネンス分析のメリットである。コレスポネンス分析では, ケースと変数の区別がなされず, 縦方向に入るデータを第 1 アイテム, 横方向に入るデータを第 2 アイテムとし, 各アイテムは複数のカテゴリーからなる。行と列を入れ替えても分析結果に影響が生じないため, コレスポネンス分析は幅広く使用されている。

コレスポネンス分析の結果として, まず固有値・寄与率・累積寄与率の表が表示される。固有値はそれぞれの次元が第 1 アイテムと第 2 アイテムの連関をどれくらい説明できるかを示す指標である。固有値を百分率に加工した値が寄与率である。累積寄与率はその次元までの寄与率を足し合わせた値である。元のデータの連関をどれくらい説明できるかを示す累積寄与率について, 統計学的基準が存在しないが, およその目安として, 第 2 次元までで累積寄与率が 80%程度に達せば, おおむね分析がうまくいっていると推定される。

固有値・寄与率・累積寄与率のほかに, 各アイテムの得点表と散布図が出力される。アイテムの得点表は, 個々のアイテムに与えられる重み(スコア)をまとめている。この値によ

り、第 1, 2 次元を軸とした散布図でプロットされる位置が決まる。

コレスポンデンス分析では、分析者は散布図を見ながら、次元の持つ意味について解釈を行っていくわけである。その際、軸の正方向と負方向を区別して考察するのが基本の方法である。また第 1 アイテムと第 2 アイテムをあわせて解釈することで、考察をさらに深めることができる。

以上本章では、本研究のリサーチデザインについて紹介してきた。4.1 節「研究目的」では、本研究の研究目的を紹介した。4.2 節「使用するデータ」では、本論文全体で使用するデータを概観したあと、各章で使用するデータの詳細を紹介した。4.3 節「使用する統計手法」では、仮説検定、相関分析、主成分分析、クラスター分析、コレスポンデンス分析のそれぞれについて紹介を行った。

第Ⅱ部 現代日本語におけるスタンス表出

第Ⅰ部では、スタンス研究の重要性や前提、関係する先行研究について概観した。続く第Ⅱ部では「現代日本語におけるスタンス表出」の問題を扱う。第Ⅱ部は、4つの章から構成される。はじめに、(1) 一人称代名詞、(2) 文末詞、(3) 陳述スタイルの3点について概観した後、日本語スタンス表現の中でとくに重要な位置を占めるものとして、(4) ヘッジについて調査を行う。

第5章 現代日本語における一人称代名詞使用

すでに述べたように、第Ⅱ部では、(1) 一人称代名詞、(2) 文末詞、(3) 陳述スタイル、(4) ヘッジという4種類のスタンスマーカーについて、その使用実態や意味特性を調査する。まず、本章では一人称代名詞に注目したい。

現代日本語における一人称代名詞を議論しようとする場合、3つの点に関して調査の範囲を定める必要がある。1点目は話し言葉か書き言葉かという点である。2点目は、様々な日本語の資料の中で、どのジャンルのものを用いるかということである。3点目は、日本語において、一人称代名詞のうち、単数形と複数形のいずれに注目するかということである。1点目については、本研究では書き言葉を対象を絞る。というのも、書き言葉においては話し言葉には存在しない文字種の選択がなされ、スタンスが話し言葉以上に細かく表出されていると考えられるためである。2点目については、日本語の様々なジャンルのうち、本研究ではブログに絞って調査を行う。ブログは校閲を得た新聞や公文書などに比べ、個人の自由な意見表出の場であり、直接的な形でスタンス表出がなされている可能性が高いためである。そして、3点目については、本研究では単数形と複数形両方を議論の対象とする。英語のスタンス研究でもしばしば指摘されているように、文章の書き手が自分自身に言及する場合、単数形を使うか複数形を使うかは極めて興味深い研究課題である。ただし、日本語の人称代名詞の多様性は英語以上に大きく、単数形と複数形を合わせて議論した場合、分析が拡散する恐れがある。そこで、5章では、単数形と複数形の議論を5.1と5.2に分けて進めていく。

なお、以下では、一人称単数代名詞 (first-person singular pronoun) を「FSP」、一人称複数代名詞 (first-person plural pronoun) を「FPP」と呼ぶことにする。

5.1 現代日本語における一人称単数代名詞使用

すでに述べたように、英語と比較した場合、日本語では一人称代名詞として使用できる表現の幅が圧倒的に広い。以下は現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）から取った一人称単数代名詞（FSP）の例である。

- (1) 俺の一体どこがいいんだろうとボクは思っていたが、美奈は素直にボクに惹かれたようだった。
- (2) ぼくも上手ではありませんが、詩や物語などを書いたりしています。
- (3) ぜひわたしのブログに遊びにいらしてください。お待ち申しあげます。
- (4) ほんの些細なことだけど・・あたしにはすごく大事！
- (5) 凡人のわたくし「ブラックマンデー」とか色々調べてみました。

上記の例で示されたように、FSPを決める際に、3つの段階の選択が可能である。まず、1点目は語の選択である。例えば、男性の書き手が自分自身に言及する場合、「私」を使うこともあれば、「僕」や「俺」を使うこともあるだろう。2点目は異形の選択である。例えば、ある書き手が自分自身を指す言葉として、「私」を使用すると決めた場合、実際には「わたし」、「あたし」、「わたくし」などといった異形の中からいずれかを選択する。日本語において、こうした異なる異形の多くは「役割語」（金水，2003）の性質を持ち、話者のスタンス表出に決定的な影響を及ぼすとされる。最後に3つ目は表記の選択である。日本語は漢字、ひらがな、カタカナという3つの表記体系を持つ言語である。例えば、「私」という語を使用するとき、漢字（「私」）、ひらがな（「わたし」）、カタカナ（「ワタシ」）の3つの表記の中から選択することができる。表記方法の違いはその語が喚起されるイメージの違いに結びつき、漢字表記と仮名表記の間で意味の乖離を生じさせる可能性がある（奥垣内，2010）。FSPの場合も同様、表記の選択がスタンス表出に影響を及ぼすと考えられる。

以上3点をもとに、本研究では、ブログにおいてFSPはどの程度存在するか、そのうちより典型的なものはどれか、また異なる語・異形・文字種の選択によって、各々のFSPはどのようなスタンスを表出しているのかを明らかにする。

5.1.1 研究目的とリサーチQUESTION

前述したように、現代日本語におけるスタンスマーカ―としてのFSPの問題は先行研究

においてもある程度扱われている。しかしながら、その多くは内省に基づく議論が中心であり、本研究で述べた3段階の選択（語・異形・文字種）まで考慮に入れた分析は極めて少ない。

そこで、本研究では、これらの3段階の選択を考慮に入れて分析を行うこととしたい。本研究は現代日本語において使用されるFSPの実態を解明するとともに、個々の代名詞が表出するスタンスを明らかにすることを目指す。

具体的には以下の4つのリサーチクエスチョン（RQ）を議論の対象とする。

RQ1 現代日本語のブログにおいて、FSPの表現パターンは、語・異形・文字種に注目した場合、それぞれ何種類存在するか。そのうちより典型的なものはどれか。

RQ2 高頻度で使われているFSPは、フォーマル度に注目した場合、それぞれどう異なっているのか。

RQ3 現代日本語のブログにおいて、高頻度で使われているFSPに関して、語・異形・文字種が異なれば、共起語がどのように変化するのか、またそれぞれの代名詞がどのようなスタンスを表出しているのか。

RQ4 コーパスから得られた知見をふまえることで、辞書や教材におけるFSPとしての「私」の記述をどのように改善できるか。

なお、RQ4については、本来、すべてのFSPについて、既存の辞書記述の改善を考えるべきであるが、ここでは、最も典型的なFSPである「私」をサンプルとして取り上げ、この問題を考えることとしたい。

分析に先立ち、RQ4を除く3つのRQに即して、先行研究から考えうる仮説を立てておこう。RQ1については、語・異形・文字種の組み合わせでFSPの表現パターンは何十種類に及ぶ可能性があるが、ブログで使用される種類はそれほど多くないと予想される。RQ2については、熊抱（2006）の指摘と同様に、フォーマルな場面では「私」の使用が優先されると予想される。RQ3については、語・異形レベルでは、異なるFSPの共起語は大きく変わるのに対し、文字種レベルでは、類似した共起語パターンが見られるのではないかと予想される。

5.1.2 データ

RQ1 と RQ3 では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（Balanced Corpus of

Contemporary Written Japanese : 以下 BCCWJ) のブログジャンルのデータを使用する。総語数がおおよそ 1000 万語である。

RQ2 では、フォーマル度の異なる 2 つのデータを利用する。具体的にはインフォーマルなデータとして、BCCWJ のブログ、フォーマルなデータとして、BCCWJ の国会会議録を使用する。

5.1.3 分析手順

RQ1 については、まず中納言で検索対象をブログに限定し、キーの条件を「品詞」の「中分類」が「代名詞」となるよう設定してから検索を行う。検索結果がダウンロード上限の 10 万件を超えたため、1 回目は 15 ジャンルの中の 10 ジャンルのデータを、2 回目は残りの 5 ジャンルのデータをダウンロードし、2 つのファイルを 1 つの Excel ファイルに統合する。次に、手作業で FSP と思われるものを抽出し、FSP に「たち (達, タチを含む)」、「ら (等, ラを含む)」、「ども」が後接するものを複数形として、さらに単数形と複数形に分ける。5.1 では単数形、5.2 では複数形を扱う。最後に、FSP を対象とし、検索結果に含まれる「語彙素」、「語形」、「キー」の情報に基づき、Excel のフィルター機能を使って語レベル、異形レベル、文字種レベルごとの頻度を調査する。以上で得られた情報を踏まえ、3 段階 (語・異形・文字種) でそれぞれの FSP は何種類存在するかを表にまとめる。

RQ2 については、フォーマル度の観点から FSP の特徴を明らかにする。発話データの書き起こしにおいて、文字種の違いが意味を持たないため、語形の単位で調査を行う。文字種の違いを考慮せず、当該の語形全体を指す場合は、全カタカタ表記とし、二重カギカッコで挟む。例えば、例えば、《ワタシ》は「私」、「わたし」、「ワタン」をすべて包含する。RQ2 で分析対象とするのは《ワタシ・ワタクシ》、《ボク》、《オレ》、《アタシ》の 4 種である。

まず、4 種の FSP について、BCCWJ のブログと国会会議録を使用し、頻度調査を行う。前者 (ブログ) の頻度を日常的な場面における出現頻度 A とし、後者 (国会会議録) の頻度を改まった場面における出現頻度 B とする。次に、A に対する B の比率を FSP の「フォーマル度スコア」とする。フォーマル度スコアが高ければ高いほど、該当する FSP はフォーマルな場面に使用される傾向が高いと考えられる。最後に、フォーマル度スコアによって主要な FSP の並び替えを行う。

RQ3 については、共起語の観点から FSP の持つスタンスを解明する。まず、(1) 語の選択の例として、漢字で表記される、語レベルで上位 3 位の「私」、「僕」、「俺」を比較し、次

に、(2) 異形の選択の例として、語彙素が「私」であり、ひらがなで表記される、異形レベルで上位3位の「わたし」、「あたし」、「わたくし」を比較し、最後に、(3) 文字種の選択の例として、「私」、「わたし」、「ワタシ」を比較する。具体的には、まず、それぞれのFSPの直前・直後15文字分の文脈を切り出し、日本語形態素解析ソフトウェアであるKH coderで分析する。次に、KH coderの「抽出語リスト」機能を使い、9語のそれぞれ頻度上位100の共起語を抽出し、グループごとに比較を行う。

RQ4については、「私」を例に取り上げ、RQ1~3のコーパス調査で得られた知見をふまえることで、既存の辞書記述をどのように改善できるかを検討する。

5.1.4 結果と考察

5.1.4.1 RQ1 表現パターン

すでに述べたように、日本語のFSPを選ぶときに、語の選択、異形の選択、文字種の選択という3段階の選択がある。その点を踏まえて計量的に調査したところ、以下の表1の結果が得られた。

表1 FSPの表現パターン

順位	語	異形	文字種	頻度	構成比 (%)
1	私	9	16	20240	72.48
2	僕	2	4	3856	13.81
3	俺	2	4	3036	10.87
4	我	1	5	242	0.87
5	わし	3	5	173	0.62
6	己	2	5	165	0.59
7	我が輩	1	4	65	0.23
8	うち	1	3	37	0.13
9	わっし	2	2	35	0.13
10	麻呂	1	4	31	0.11
11	拙者	1	1	21	0.08
12	わて	1	2	7	0.03

13	余	1	2	5	0.02
14	こちとら	1	1	4	0.01
15	わちき	1	2	3	0.01
16	朕	1	1	3	0.01
17	余輩	1	1	1	0.001
18	拙僧	1	1	1	0.001
合計	18	32	63	27925	100

ブログには、144987 件の代名詞が出現しているが、そのうち、FSP と思われる例は 27925 件である。これらは、語のレベルでは全 18 種、異形のレベルでは全 32 種、文字種のレベルでは全 63 種になることが明らかになった。母語話者の書き手は何らかのスタンスを伝えるために、60 種類以上もの代名詞のバリエーションの中から、適切なものを無意識に選択して使っていると考えられる。石川 (2018) の一人称単数代名詞のリストと比較すると、ブログの 18 種のうち、17 種が重なっていることがわかった。ブログのみに現れる FSP は古語的な存在である「わちき」で、書籍にはあるがブログに出現していないものは「てまえ」「身共」である。さらに、先行研究では「うち」は女子学生の間で一人称としての使用が増えつつあることが報告されている (荻野, 2007; 小嶋, 2012)。今回のブログの調査でも「うち」の使用は認められ、51 の用例が出現している。

次に、ブログにおいて使用されるすべて FSP のうち、典型的であるものにはどのようなものがあるのかを見てみよう。表 1 から分かるように、語のレベルでいうと、18 種の語のうち、「私」の比率が圧倒的に多く、全体の 7 割を上回っている。2 位の「僕」は全体の 13.81% を占めており、「俺」(10.87%) はそれに次ぐ。「私>僕>俺」という頻度の順位は BCCWJ の書籍を調査対象とした石川 (2018) の結果と一致している。「私、僕、俺」の 3 語は文章の内容と関係なく、現代日本語の FSP として典型的なものであるといえよう。次に、どの表記が典型的であるのかを確認するため、上位 5 語であるものを表 2 でまとめた。

表 2 典型的な FSP 表記形

	FSP 表記形	頻度	構成比 (%)
1	私	17057	61.08
2	僕	3158	11.31
3	俺	2268	8.12
4	わたし	1246	4.46
5	あたし	875	3.13

表 2 で示されたように、漢字表記が最も高い比率を占めることは「私、僕、俺」の 3 語に共通している。したがって、漢字表記は 3 語の標準的な表記であると言えるだろう。さらに、文字種を区別する場合、上位 5 語の頻度和は全体の 9 割近くを占めることが確認された。この 5 種は典型的な FSP であると言えるだろう。RQ2 では、引き続きこの 5 語を調査対象とする。

18 冊の日本語教科書を調査した大浜ほか (2001) の結果と比較すると、表 2 で示された典型的な 5 語は教科書に載せられているが、優先順位にはズレがあることがわかった。教科書における 5 語の頻度順は「わたし」>「私」>「僕」>「あたし」=「俺」である。

以上で見たように、実際の日本語は教育で扱われている以上に圧倒的に多様な表現のパラエティを持つ。また、初級の日本語教科書として定評のある『みんなの日本語 (初級 I)』では、一人称単数代名詞としては、ひらがなの「わたし」と漢字の「僕」の 2 種類のみが紹介されており、個々の一人称代名詞にどのような違いがあるのか、また異なる文字種がどのような意味を持っているのかなどの解説は見られない。したがって、教科書において、これらの表現の機能・意味区別についての指導が足りない可能性が高いと考えられる。

5.1.4.2 RQ2 フォーマル度

RQ2 では、典型的な一人称単数代名詞の 5 種 (私、僕、俺、わたし、あたし) に注目して、それぞれのフォーマル度にはどのような違いがあるのかを観察した。ただ、国会会議録では、会話が書き起こされた際に、「私」と「わたし」、「僕」と「ぼく」、「俺」と「おれ」など表記のずれが見られている。以下では、こういった表記の違いを考慮せず、当該の発音形全体を指す場合は、全カタカタ表記とし、二重カギカッコで挟む。例えば《ワタシ》は「私」、「わたし」、「ワタシ」をすべて包含する。RQ2 の頻度調査では、ブログと国会会議録における《ワタシ・ワタ

クシ・ボク・オレ・アタシ》を調査対象とする。《ワタクシ》(「わたくし」「ワタクシ」を含む)を調査対象に入れるのは、漢字で書かれた「私」は「ワタクシ」と発音される可能性も存在するためである。以下フォーマル度の結果である。

表3 一人称単数代名詞のフォーマル度

FSP	ブログ	国会会議録	フォーマル度
《ワタシ・ワタクシ》	185.78	285.33	1.54
《ボク》	37.80	4.12	0.11
《オレ》	29.77	1.00	0.03
《アタシ》	12.44	0.00	0.00

表3から分かることは以下の3点である。

1点目は、主要な4種類のFSPのフォーマル度は《ワタシ・ワタクシ》>《ボク》>《オレ》>《アタシ》と順に下がることである。例(6)～(8)のように、《オレ》と《ボク》、《アタシ》はくだけた言い方であり、個人的なことについて話す時に使用されやすい。それに対し、例(9)のように、国会における発話のような非常に改まった場面では、「私」の使用が最も優先的であると言えよう。

- (6) この流れに乗って次はぼくの番だ!!! (ブログ)
- (7) 俺が気になったメニューはこちら! (ブログ)
- (8) さっき公式サイト見て知ったあたしってファン失格かなあ… (ブログ)
- (9) 今私が申しあげましたように、大変な金額で領収証を発行し、物を買っておるわけです。(国会会議録)

2点目は、ブログのようなくだけた場面では、4種類のFSPがすべて用いられているのに対し、国会会議録では、《ボク》と《オレ》の使用例が少数存在するが、《アタシ》の出現が確認されないことである。国会議員は特殊な集団であるため、このよう結果は偏った男女比にもよると考えられるが、主にくだけた場面で使用される《オレ》の頻度を見れば分かるように、フォーマルな場面では《オレ》と《アタシ》を使用しないのが一般的であると言えよう。また、国会会議録における《オレ》の用例を確認したところ、51例のうち、50例は

以下の例 10 のように、話者が他人の意見などを間接引用する形で使われている。

- (10) 同じ農業内部で、隣はもらっておれはもらえない。これは非常に悩ましい問題でありまして… (BCCWJ, 国会会議録)

このことは、《オレ》は改まった場面で自分自身の意見を表出する目的では使用しにくいことを間接的に裏付けている。

3 点目は、ブログでは《オレ》より《ボク》のほうが多用されることである。ブログにおける言葉のやりとりは、書き言葉であっても、くだけた話し言葉的文体が用いられているため、FSP の使用傾向も話し言葉に似通っているように思われるが、「話す場合では、男性のほとんどが《オレ》を使用している」という野原 (2014) の結果と比較すると、ブログと話し言葉間では、FSP が異なる使われ方をしていることがわかった。ブログでは、《オレ》より《ボク》が選好されやすいのは、ウェブ上で公開されていることに関係すると考えられる。広い読み手が意識される際に、より丁寧で親しみやすいイメージを持つ「僕」に対する好感度が上がるのではないかと推測される。

5.1.4.3 RQ3 FSP の共起語

RQ3 では、(1) 語の選択、(2) 異形の選択、(3) 文字種の選択が共起語に及ぼす影響を調査する。

まず、(1) 語の選択について、「私」、「僕」、「俺」の上位共起語 100 語を抽出し、重複しているものを削除したところ、表 4 のような結果を得た。なお、表 4 では 10 語のみを例として示している。

表4 「私」、「僕」、「俺」の共起語

私	僕	俺
母	皆さん	嫁
娘	ママ	女
初めて	世界	泣く
苦手	幸せ	強い
日本	信じる	全て
嬉しい	夢	全然
人生	普通	欲しい
人間	本当に	生きる
息子	恋	マジ
住む	高校	食う

(11) 私は母と一緒に旅行へ行っただことが無いばかりか、母を措置入院させるまでは、母の言葉を受け止めたことはありませんでした

(12) 家の近所の祭りにママが僕を連れて行ったんです。

(13) 何だ、簡単じゃん。俺が、強くなればイイんだッ！

上記を見ることで、ブログの中で、3つの語がそれぞれ異なるスタンスを表出していることがわかる。まず、「私」は「母」、「娘」、「息子」、「住む」など家族や暮らしについて語る時に使われる。また、「人生」や「人間」など、自分自身を内省的に振り返って自分の意見や考えを表すときにも「私」が使われる。

次に、「僕」は自分の「恋」や将来の「夢」、また自分が「信じ」ていることや自分の「幸せ」など、極めて個人的な内容について語る場合に用いられる。このことは、「僕」が母親に言及する場合、「母」ではなく、「ママ」を選ぶことにも示されているだろう。

最後に、「俺」は「嫁」や「女」など自分と関係する女性について語る場合に多く用いられる。また、「俺」は「全て」や「全然」など強い男性のニュアンスを示す言い切り表現と共起しやすい。「俺」は、「強い」イメージと強く結びついており、「マジ」や「食う」などくだけた男らしい話し方を連想させるものとなっている。

次に、(2) 異形の選択について、「わたし」、「あたし」、「わたくし」を比較したところ、表 5 の結果を得た。なお、分析は上位 100 語に対して行ったが、以下は 10 語のみを例として示したものである。

表 5 「わたし」、「あたし」、「わたくし」の共起語

わたし	あたし	わたくし
母	頑張る	それぞれ
気持ち	気	会社
時間	部屋	時代
父	ダメ	登記
主	幸せ	東京
短歌	涙	お話
非難	嫌い	宗教
神	女の子	由
感謝	絶対	申し上げる
解答	愛する	皆さん

(14) それで、神はわたしに耳を傾け、助けを求めるわたしの叫びを聞いてくださいました。

(15) みんなと一緒にあたしがダメなんかな。

(16) 料理は全て我流のわたくし、色々と教えていただけののもありがたい。

「わたし」は「母」、「父」、自分の「気持ち」や「時間」の使い方など家族や生活を語る語彙と共起しやすい。また、「主」や「神」に対して「感謝」を述べ、何らかの「解答」を求める場面で自分自身に言及するとき、「わたし」が用いられる。

「あたし」は自分の「幸せ」や好き嫌い、「愛する」ことを語る語彙と共起しやすい。また、「あたし」は時に「頑張る」決意を表明したり、時に自分が「ダメ」だと責めたりする、「涙」もろく「気」弱い「女の子」というイメージを連想させやすいものとなっている。

一方、「わたくし」は丁寧語（「お話」）や謙遜語（「申し上げる」）、または古語的な「由（よし）」と共起しやすい。「わたくし」がかしこまった言い方であり、フォーマルな場面で使わ

れやすいためであろう。また、共起語分析では文末の「です・ます」を対象外にしているが、用例を確認すると、「わたくし」のほとんどの用例が敬体と伴って出現することが確認された。これは「わたくし」のフォーマル度の高さを傍証する。

最後に、(3) 文字種の選択に関して、以下では、(A)「私」「わたし」「ワタシ」の組み合わせと、(B)「僕」「ぼく」「ボク」の組み合わせを例として検討を行う。

はじめに、(A)の組み合わせについて比較したところ、表6の結果を得た。これもまた、分析した100語のうち10語のみを例として示したものである。

表6 「私」, 「わたし」, 「ワタシ」の共起語

私	わたし	ワタシ
考える	生きる	出勤
車	主	女
初めて	非難	両親
苦手	神	フレンド
個人	短歌	モノ
日本	解答	父親
乗る	感謝	お客様
人生	泣く	ダメ
生活	元気	ダンナ
女性	お母さん	予定

(17) 被写体に対して愛情が無かったら、人の心を打つ作品は撮れないし、その気持ちは絶対に伝わる（見ている人に）と私は考えています。

(18) わたしには力があります、祈祷があります。わたしは単独でも世界と戦うことも可能なのです。

(19) ダンナの腰痛・肩痛などは、ワタシがみてるからいつもタダ。

漢字表記の「私」は、「車」、「生活」、「苦手」なこと、「初めて」の体験など日常の暮らしに関する語彙や、「日本」、「生活」、「女性」などについて自分の「考える」ことを客観的に

述べる語彙と共起しやすい。

ひらがなの「わたし」は、自分の生き方や、「元気」だったり、「泣い」たりするなど個人的なことを述べる時、また、主や神に対して、感謝を表したり、解答を求めたりする文脈で使用されやすい。一定のフォーマリティを持った文脈で使用されるという点においては、「私」と共通しているが、一方、相違点としては、「私」は一般の報告文など客観的・社会的文脈で出現しやすいのに対し、「わたし」は私的で、文学的・哲学的・内省的な文脈と結びつきやすいことが挙げられる。

カタカナの「ワタシ」は、「お客様」向けに店の「出勤」の「予定」などについて書く記事や、グルメ情報や「フレンド」との旅行記などに関する記事に使用されやすい。また、「モノ」「ダンナ」「ダメ」などカタカナ表記の語と共起しやすいのが特徴である。非外来語をあえてカタカナ表記にするのは、堅苦しくない雰囲気を作り、読み手との距離を縮めようとする意識の現れと想定できる。また、「モダン・おしゃれ・気取った」などのイメージ（奥垣内，2010）を読み手に与えることができる。ブログにおける「ワタシ」の使用は、ややおどけた言い方をすることによって、書き手とは一線を画したおしゃれで親近感のあるキャラクターを作りだすためではないかと考えられる。

続いて、(B) の組み合わせについて比較したところ、表 7 の結果を得た。

表 7 「僕」, 「ぼく」, 「ボク」 の共起語

僕	ぼく	ボク
皆さん	死ぬ	美奈
良い	想い	合う
大好き	外	東京
世界	苦しい	店
幸せ	思想	嬉しい
女性	同胞	選ぶ
信じる	詩	オススメ
気持ち	みじめ	先生
友達	哲学	嫌い
個人	感心	賛成

- (20) ローンに追われまくりながら生きていくのも僕の幸せなのかもしれません。
- (21) ぼくはきみたちの標本箱のなかで死ぬわけにはいかない。ぼくは同胞のあいだで苦しい孤立をつづける。
- (22) ボクの食べ歩いたカレーのお店を上空から地図で見てください。「【西荻窪】「まるとマイタウン東京」ブログ」ボクが書く西荻窪のおいしいものやなごみ、ボクの西荻窪ライフを綴ります。

「僕」は「友達」のことや自分の「世界」観、「幸せ」、「大好き」なものや「信じる」ことなど「個人」に関することを客観的に語る場合に用いられる。

「ぼく」は文学的・哲学的・内省的な文脈での使用が多い。例えば、恋人に「想い」を伝える歌詞や「同胞」を「苦し」く「みじめ」な生活から救うことを描写した現代詩において、主人公は自分のことを「ぼく」と言う。柔らかいイメージを持つ「ぼく」を使用することで、読者との距離を縮められ、共感を得やすくなると考えられる。

「ボク」と共起しやすい語として「美奈」という人名が出現している。これは、ブログで掲載された小説の登場人物の名前である。書き手は一人称の視点（ボク）から彼女「美奈」とのストーリーを展開させることで、読み手を物語に没入させる効果が期待できる。しかしながら、登場人物と同じ視線で小説を書くと、主人公の行動と作者の想いを同等なものと思えられすいというデメリットも考えられる。カタカナの「ボク」を使用することは、作者と主人公との間に少し距離感をおき、これは作者の物語ではなく、主人公の物語であることを読者に伝えるためではないかと考えられる。

また、読者に自分が「選ん」だおいしい「店」や「オススメ」料理を紹介する文章に「ボク」が用いられやすいことも確認された。店のスタッフブログにおいてカタカナの「ワタシ」が選ばれやすいのと同様、食べ物の感想やレビューを記録するブロガーは、親しい空間を作るために、新奇・軽妙な感覚を持つカタカナ表記を使用していると考えられる。

以上で分析してきたように、現代日本語の FSP の使用に関して、(1) 語の選択、(2) 異形の選択、(3) 文字種の選択それぞれは書き手が表出しようとするスタンスと深く関わっていることが確認された。

まず、語の選択に関して、(1) 「私」は家族や生活、または内省的で幾分改まった内容について語る場合に選ばれやすいこと、(2) 「僕」は極めて個人的な内容を個人的視点から語る場合に多く使われること、(3) 「俺」は男性らしさを強調し、男性としての強さや強い判

断力を強調したい場合に多く用いられることが明らかになった。

また、異形の選択に関しては、(1)「わたし」は個人的で身近なことを語る場面で自分に言及するときに多く使われていること、(2)「あたし」は気弱い女の子を想定させやすいものとなっていること、(3)「わたくし」の使用はフォーマルな場面と結びつきやすく、へりくだった姿勢の現れであることが判明した。

最後に、文字種の選択については、(1)漢字表記の FSP は一般の報告文など、一定のフォーマリティを持った客観的・社会的文脈で自分に言及するときに使用されやすいこと、(2)ひらがな表記の FSP は一定のフォーマリティを持った個人のエッセイなど、文学的・哲学的・内省的な文脈で自分に言及するときに使用されやすいこと、(3)カタカナ表記の FSP は自分自身を客体化しながら、くだけた日記や個人ブログなど、個人生活を軽妙に記述する文脈で自分に言及するときに選ばれやすいことが分かった。

5.1.4.4 RQ4 辞書・教材の記述提案—「私」を例に—

RQ4 では、RQ1～3 のコーパス調査で得られた知見をふまえ、「わたし(私)」について新たな辞書・教材記述を提案する。新しい記述では、コーパスの頻度調査の結果に基づき、(1)類義語内での頻度優先性、(2)表記、(3)フォーマル度の3つの情報を示す。なお、(1)については全一人称単数代名詞の頻度を100として、その中で当該語(語彙素)の占める割合を比率値で示す。(2)については、「私」「ワタシ」「わたし」3語の頻度を100として、当該表記の占める割合を比率値で示す。(3)については、ブログ頻度に対する国会会議録頻度の比率値で示す。これらを用いて、類義語・関連表記間の関係性を示す。また、学習者が当該語の実際の用例に触れられるよう、(4)用例をあわせて示す。これはすべてコーパスから取り出したものであるが、とくに長いものについては筆者が短くするなど改編を加えている。用例記載にあたっては、当該語を含む代表的な文型を挙げ、当該語の用法を示すこととする。なお、新しく提案する記述の特徴を示すため、既存辞書(『広辞苑』第7版)の記載を参考として併記する。

表 8 「私」の辞書記述提案

<p>—既存辞書の記述—</p> <p>『代』（ワタクシの約）話し手自身を指す語。「わたくし」よりくだけた言い方。</p>
<p>—新しい辞書・教材の記述提案—</p> <p>語義：話し手や書き手自身を指す語。</p> <p>【語法ノート】</p> <p>a) 頻度優先性：類義語の中で最も広く使われる。【関連語頻度：私（72.5%）＞僕（13.8%）＞俺（10.9%）＞そのほか（2.8%）】。</p> <p>b) 表記：漢字表記が圧倒的に多いが、時にそのほかの表記もある。漢字表記は一般の報告文など、一定のフォーマリティを持った客観的・社会的文脈で自分に言及するとき、ひらがな表記は一定のフォーマリティを持った個人のエッセイなど、文学的・哲学的・内省的な文脈で自分に言及するとき、カタカナ表記は自分自身を客体化しながら、くだけた日記や個人ブログなど、個人生活を軽妙に記述する文脈で自分に言及するときに選ばれやすい。【表記別頻度：私（91.2%）＞わたし（6.7%）＞ワタシ（2.1%）】。</p> <p>c) フォーマル度：類義語の中では、最もフォーマルな言い方。ただし、使用範囲は広く、日常的な場面においても、改まった場面においても使える。【フォーマル場面での頻度優先度：私（+54%）＞僕（-89%）＞俺（-97%）】。</p> <p>d) 用例</p> <p>① 一の《名詞》：「一の足」；「一の子ども」；「一の姿」</p> <p>② 一は…：「まったくその通りだと一は思います」；「あまりに無謀だと一は感じていません」；「何度も一は主張しています」</p> <p>③ 一が…：「一が思ったのは、有益な情報を集める作業が重要だということです」；「一が食べた時の感想」；「一が使っているパソコン」</p>

既存の辞書記述には、提供された情報の量が不足しており、表記の典型性に関する情報が示されておらず、使用場面についても言及されていない。母語話者向けの性質が強いため、外国人学習者にとって実用性が高いものとは言い難い。そこで、改定案として、「私」が様々な一人称代名詞の中で最も高頻度であることや、漢字表記が最も典型的であること、フォーマルな場面においても日常的な場面においても使用されることなど、コーパス調査で明らか

かになった「私」の用法特性を記載するのにくわえ、それぞれの場面の代表的な使用例を示すようにした。これらの用例を見れば、「私」は多様な場面で使用しうるニュートラルな一人称代名詞であるという認識が深まるだろう。

5.1.5 まとめ

5.1 では、コーパスデータを利用し、語・異形・文字種という 3 段階の分析を行い、FSP の共起語を合わせて調査することで、現代日本語のブログにおける FSP の使用実態や機能の諸相を考察した。以下では、RQ4 を除き、RQ1～RQ3 で得られた結果をまとめる。

RQ1 (表現パターン) については、日本語のブログにおいて、FSP の表現パターンは語のレベルでは全 18 種、異形のレベルでは全 32 種、文字種のレベルでは全 63 種になり、高頻度 FSP として「私、僕、俺、わたし、あたし」などがあることが確認された。

RQ2 (フォーマル度) については、(1) 主要な 4 種類の FSP のフォーマル度は《ワタシ・ワタクシ》>《ボク》>《オレ》>《アタシ》と順に下がること、(2) 国会会議録では、《ボク》と《オレ》の使用例が少数存在するが、《アタシ》の出現が確認されないこと、(3) 知ブログはウェブ上で公開されているため、広い読み手が意識され、《オレ》より丁寧なイメージを持つ《ボク》が選ばれやすいこと、の 3 つが確認された。

RQ3 (共起語) については、現代日本語の FSP の使用に関して、(1) 語の選択、(2) 異形の選択、(3) 文字種の選択は書き手が表出しようとするスタンスと深く関わっていることが確認された。

5.2 現代日本語における一人称複数代名詞使用

前に述べたように、文章の書き手が自分自身に言及する場合、単数形を使うか複数形を使うかによって話者のスタンスが異なってくることがある。しかしながら、従来、日本語における一人称複数代名詞 (FPP) に関する研究は限られている。以下では、FPP の使用実態と意味特性に注目し、主要な FPP のスタンス表出の特徴を探ることとしたい。

5.2.1 研究目的とリサーチクエスチョン

すでに述べたように、先行研究で見たように、日本語の FPP 表現形は前部要素(「私」、「我」、「俺」など)、および後部要素(「たち」、「ら」、「々」など)の組み合わせによって多くのバリエーションが存在すると想定される。しかしながら、先行研究では、それらの表現形の幅や代表形、またそれ

らのスタンス機能について、必ずしも全体像を明らかにしているとは言えない。そこで、本研究は、BCCWJ のブログデータを用い、主要な FPP 表現形のスタンス機能と使用実態を明らかにすることを旨とし、以下の 5 つのリサーチクエスチョン (RQ) を設定する。

- RQ1 FPP 表現形は最大何種類存在するか。また、代表形にはどのようなものがあるか。
- RQ2 高頻度 FPP 表現形はそれぞれどの程度のフォーマル度を持つか。
- RQ3 高頻度 FPP 表現形はそれぞれどの程度の相手包含度を持つか。
- RQ4 高頻度 FPP 表現形はそれぞれどのような使用場面と結びついているか。
- RQ5 コーパスから得られた知見をふまえることで、辞書や教材における FPP としての「私たち」の記述をどのように改善できるか。

なお、RQ5 については、本来、すべての FPP について、既存の辞書記述の改善を考えるべきであるが、ここでは、最も典型的な FPP である「私たち」をサンプルとして取り上げ、この問題を考えることとしたい。

分析に先立ち、RQ5 を除く 4 つの RQ に即して、先行研究から考えうる仮説を立てておこう。RQ1 については、肖 (2019) の調査により、FSP 表現形の種類が 63 種類存在していることが明らかになっており、FPP についても同じく 60 から 70 種類のバリエーションが存在するのではないかと予想される。また、「私達」や「我々」など、《ワタシ》と《ワレ》を含むものが多く出現し、くだけたニュアンスを伝える《ボクたち》や《オレたち》など《ボク》や《オレ》を含むものの頻度は極めて低いと予想される。RQ2 についていえば、《ワタシ》と《ワレ》を含む表現形は高いフォーマル度を持つのに対し、《ボク》や《オレ》を含む表現形はフォーマル度が低いと予想される。また、RQ3 については、相手包含形に関しては、語ではなく、文脈依存の要素が多いことから、はっきりした語との関係性は見られないのではないかと予想される。RQ4 については、FPP の中で、「我々」が最もフォーマルで、政治や経済に関係する語などフォーマルな語彙と結びつきやすいのに対し、「私たち」はより幅広い一般的な語と結びつくと予測される。また、「僕たち」や「俺たち」はくだけた私的な趣味や個人生活に関係する語彙と結びつき、各表現形の共起語パターンは FPP の後部要素と関係しないのではないかと予想される。

5.2.2 データ

4.1.2 と同様に、RQ1 と RQ3 では BCCWJ のブログデータを使用し、RQ2 では BCCWJ のブログと国会会議録を使用する。

5.2.3 分析手順

RQ1 について、まず 5.1.3 の処理で得られたブログの FPP を分析対象とする。FPP の基本的な形式は「一人称指示部＋複数指示接尾辞」となるが、FSP と同様に、3 段階の選択（語・異形・文字種）があると考えられる。検索結果に含まれる「語彙素」、「語形」、「キー」の情報に基づき、Excel のフィルター機能を使って語レベル、異形レベル、文字種レベルごとの頻度を調査する。また、全体を頻度順に並べ替えたうえで、上位 10 語を代表形として抽出し、以下の RQ の調査対象とする。

RQ2 については、発話データの書き起こしにおいて、文字種の違いが意味を持たないため、語形の単位で調査を行う。文字種の違いを考慮せず、当該の発音形全体を指す場合は、全カタカタ表記とし、二重カギカッコで挟む。例えば、《ワタシタチ》は「私達」、「私たち」、「わたしたち」をすべて包含する。RQ2 で分析対象とするのは《ワタシ／ワタクシタチ》、《ワレワレ／ラ》、《オレタチ／ラ》、《ボクタチ・ラ》の 7 種である。具体的には、BCCWJ のブログと国会会議録を用いて、5 語の頻度を調査し、前者(ブログ)の頻度に対する後者(国会会議録)の比率を「フォーマル度スコア」とする。

RQ3 については、10 語の用例から、無作為に 100 例ずつ抽出し、分析用サンプルとする。前後の文脈によって 10 語の用例を手作業で相手包含形と相手排除形に分け、相手包含形の例が全体に占める比率を「相手関与度スコア」とする。最後に、「相手関与度スコア」と「フォーマル度スコア」により、10 語の並べ替えをそれぞれ行う。

RQ4 については、まず、上位 10 語の用例から、それぞれ直前・直後 15 文字分の文脈を切り出し、日本語形態素解析ソフトウェアである KH coder で分析する。次に、KH coder の「抽出語リスト」機能を使い、10 語のそれぞれ頻度上位 100 の共起語に調査対象を絞る。最後に 10 個の代名詞を第 1 アイテム、共通する共起語を第 2 アイテムとする頻度表を作成し、コレスポンデンス分析を行う。なお、第 1 アイテムには 10 カテゴリー(頻度上位の 10 語)、第 2 アイテムには 640 カテゴリー(重複するものを除いた共起語)が存在する。

5.2.4 結果と考察

5.2.4.1 RQ1 表現形

語、異形、文字種を区別して、BCCWJ に出現するすべての表現形を調査したところ、以下表 8 の結果を得た。

表 8 FPP の表現形

	表現形	頻度	累計構成比		表現形	頻度	累計構成比
1	私たち	681	28.8%	32	わしら	5	97.3%
2	我々	400	45.7%	33	わたしら	5	97.5%
3	私達	275	57.3%	34	ワタシたち	5	97.7%
4	僕ら	176	64.8%	35	アタシたち	5	97.9%
5	僕たち	108	69.3%	36	私共	4	98.1%
6	われわれ	89	73.1%	37	あたしら	4	98.2%
7	俺たち	74	76.2%	38	私等	3	98.4%
8	わたしたち	71	79.2%	39	ワタシ達	3	98.5%
9	我ら	61	81.8%	40	アタシら	3	98.6%
10	俺ら	35	83.3%	41	アタシ等	3	98.7%
11	俺達	34	84.7%	42	オイラ達	3	98.9%
12	僕達	30	86.0%	43	ワシら	3	99.0%
13	オレたち	26	87.1%	44	あたい達	2	99.1%
14	私ら	25	88.2%	45	アタクシ達	2	99.2%
15	われら	24	89.2%	46	わたくしども	2	99.2%
16	ぼくたち	24	90.2%	47	おいら達	2	99.3%
17	私ども	23	91.2%	48	吾ら	2	99.4%
18	あたし達	15	91.8%	49	ぼく達	2	99.5%
19	うちら	14	92.4%	50	ワタシら	1	99.5%
20	ぼくら	13	92.9%	51	アタイら	1	99.6%
21	僕等	12	93.4%	52	アタクシども	1	99.6%
22	ボクたち	12	94.0%	53	あつしたち	1	99.7%
23	ボクラ	12	94.5%	54	オラたち	1	99.7%
24	おれたち	10	94.9%	55	おいらたち	1	99.7%
25	我等	9	95.3%	56	オイラたち	1	99.8%
26	あたしたち	8	95.6%	57	われ等	1	99.8%
27	わたし達	7	95.9%	58	吾等	1	99.9%

28	俺等	7	96.2%	59	我輩達	1	99.9%
29	オレら	7	96.5%	60	余たち	1	100.0%
30	ボク達	7	96.8%	61	おれら	1	100.0%
31	アタシ達	6	97.0%			2365	

ここで注目すべきことは 4 点ある。1 点目は、一人称単数代名詞の表現形のバリエーションと同じく、60 種を超えるバリエーションが確認されたことである。これは事前の予測を裏付けるものであるが、日本語の一人称代名詞表現形は、単数形の場合も、また複数形の場合も、極めて多様な幅を持つことが新たに明らかになった。

2 点目は、本研究で得られた FPP 表現形の幅が日本語教育で指導されているものを大きく上回っていることである。大浜ほか(2001)は 18 種類の日本語教科書を調査しているが、そこで報告された FPP は 6 種類しかない。本研究の上位 10 語に限って比較しても、「僕ら」、「俺たち」、「我ら」が含まれていない。日本語教育の目的が日本語で一般的に見聞きする語彙を幅広く学ぶことであるとするならば、従来の日本語教育で提示されている代名詞表現形の幅はあまりに狭く、こうした語について追加して教えていく必要性があるだろう。

3 点目は、本研究で得られた FPP 表現形のバリエーションが先行研究で示された範囲を大きく超えたことである。先行研究の中で村上(1999)は、11 種と、相対的に多くの FPP の語形を示していた。しかし、今回の調査結果と照らし合わせると、以下の 7 語は村上の調査に含まれていなかった。

《ワレラ》, 《ワシラ》, 《ウチラ》, 《オイラたち》, 《ワガハイたち》, 《ヨたち》, 《オノたち》

なお、上記の大半は比較的低頻度なものであったが、《ワレラ》についてはコーパス調査で全体順位が 9 位となっており、極めて高頻度なものの 1 つである。今回の調査によって先行研究が見落としていた重要な FPP 表現形を抽出することができたと言える。

上記より、先行研究で示されたものに比べ、圧倒的に多数の FPP 表現形が存在することが明らかになったが、これらのすべてが同等の重要性を持っているわけではない。というのも頻度が極めて偏っているためである。最後に、4 点目として、FPP は全体として 60 種類を超えるバリエーションがあるが、高頻度で使用される一部の表現形とほとんど使われない表現形に二分されているということである。61 種のうち、どこまでを重要な表現形とみなすかは難しい判断となるが、累計構成比に

注目し、仮に 80%を基準とすれば、9 語が、90%を基準とすれば、16 語が、95%を基準とすれば、25 語が抽出される。学習者のレベルと目指す段階に応じて、学ぶべき FPP の範囲を調整していくことが必要であろう。

5.2.4.2 RQ2 フォーマル度

RQ2 では、頻度が上位 10 位の FPP が持つフォーマル度を計量化してみた。なお、国会会議録において、文字種の違いが意味を持たないため、フォーマル度の調査は表記の違いを考慮せず、語形の単位で調査を行う。以下表 9 はその結果である。

表 9 主要な FPP のフォーマル度

FPP	ブログ	国会会議録	フォーマル度
《ワレワレ》	4.80	30.51	6.36
《ワタシたち・ワタクシたち》	10.22	13.35	1.31
《ボクたち》	1.80	0.24	0.13
《オレたち》	1.41	0.16	0.11
《ワレラ》	0.96	0.06	0.06
《オレラ》	0.49	0.02	0.04
《ボクラ》	2.09	0.06	0.03

ここで注目すべきことは 4 点ある。

1 点目は、国会会議録は、一般に最も硬い日本語を代表するジャンルとみなされているが、実際には、《ワレワレ》のみならず、くだけた《オレたち》、《ボクラ》、《ボクたち》などの語も使用されているということである。以下はその例である。

(3) 団塊のジュニアの問題というのは大変重要な問題でございまして、我々の予想をかなり裏切りました。(国会会議録, 2005)

(4) 国有林であります、おれたちのクロマツ林だ、こういう極めて強い感情が残っている(国会会議録, 1984)

(5) これから野党の方々に加わっていただきたいというのが僕らの希望であります。(国会会議録,

1998)

(6) こういう問題も僕たちは耳にするんですが、今日皆さんのお話を聞いておまして、本当に日本人に生まれてよかったなあ。 (国会会議録, 1987)

くだけた印象を持つ《オレたち》, 《ボクラ》, 《ボクたち》は, 例(4)のように, 引用部で使われることもあれば, 例(5)と例(6)のように, 叙述文で用いられることもある。硬い話し言葉を代表する国会会議録には幅広い FPP が使用されていることが明らかになった。

2 点目は, 《ワタシ・ワタクシ》と《ワレ》を含む表現形はほかの語形より高いフォーマル度を持つという仮説は支持されたことである。フォーマル度が 1 を超える場合, その語がフォーマルな文脈で使用されているとするならば, 7 語はフォーマルな文脈で好まれる《ワレワレ》, 《ワタシたち・ワタクシたち》とそれ以外の 5 語に二分されることが明らかになった。

3 点目は, 後部要素が同様な場合, FPP のフォーマル度は前部要素と強く関係していることである。後部要素が《たち》である場合, FPP のフォーマル度は《ワタシたち・ワタクシたち》>《ボクたち》>《オレたち》という順序性が見られた。この順序は 5.1.5.1 で述べた「FSP のフォーマル度」(《ワタシ・ワタクシ》>《ボク》>《オレ》)と一致していることから, 後部要素が同様な場合, FPP のフォーマル度は前部要素によって決定されると言えよう。

4 点目は, 後部要素《ら》のフォーマル度は《たち》より高いことである。前部要素が同様な場合, 《ボクたち》>《ボクラ》と, 《オレたち》>《オレら》というフォーマル度の順序性が確認されたため, 前部要素が《ボク》と《オレ》である場合に限っていうと, フォーマルな場面では, 《ら》が付随される FPP のほうが優先されやすいと言えるだろう。

5.2.4.3 RQ3 相手包含度

次に, 相手包含度の結果を見てみよう。表 3 の上位 10 語の用例を手作業で「相手包含形」と「相手排除形」を分け, 全用例数に対する相手包含形の比率を相手包含度と計算したところ, 以下表 10 の結果が得られた。

表 10 相手包含度

順位	表現形	相手包含度	順位	表現形	相手包含度
1	私たち	30.0%	6	われわれ	43.8%
2	我々	23.8%	7	俺たち	16.2%
3	私達	14.5%	8	わたしたち	49.3%
4	僕ら	2.3%	9	我ら	8.2%
5	僕たち	5.6%	10	俺ら	17.1%

表 5 から分かることとして以下の 4 点がある。1 点目は、相手包含度は 0%か 100%という択一的なものではなく、同じ語であっても、様々な使われ方がなされているということである。以下の例を見てみよう。

(7) 我々観光客は単純に「残して欲しい」と思ってしまいますが、当局にとっては保存維持は大変なことのようです。(ブログ・地域)

(8) 21 世紀の我々の生活を支えるジェネリックテクノロジーとしての発展を期待されている。(ブログ・科学)

この場合、同じ「我々」であっても、11 では相手は排除されるのに対し、12 では、相手は含まれている。この語のみならず、すべての FPP において、こうした二重性が観察された。ただし、「我ら」、「僕たち」、「僕ら」の 3 語については、相手包含度が 1 割未満であり、ほとんどが相手排除形であることも示された。

2 点目は、同じ《ワタシタチ》であっても、文字種が異なれば、表現形の相手包含度が大きく変わることである。具体的には、ひらがな(わたしたち:49.3%) > 漢字ひらがな混在(私たち:30.0%) > 漢字(私達:14.5%)の順序となる。以下の用例を見てみよう。

(9) すべて人間をとりまく事柄は神が支配しそんな中でわたしたちには確実な希望が与えられています。(ブログ・生活と文化)

(10) この太陽が地球の裏を回って、また私たちを照らしてくれます。(ブログ・芸術と人文)

(11) 私達だけで行くつもりだったんですが・・・義親も便乗！(ブログ・Yahoo！サービス)

コレスポネンシ分析では、第 1 アイテムのカテゴリ数マイナス 1 の次元が取り出せる。今回は、第 1 アイテムに 10 種のカテゴリが存在するため、全体で 9 次元が取り出される。また、第 1 次元の寄与率は 13.1%であり、第 2 次元の寄与率は 12.6%である。取り出された次元の数が多いため、寄与率は相対的に低いものとなっているが、今回はこれら 2 つの次元を第 1 軸と第 2 軸として解釈を行う。

コレスポネンシ分析では、通例第 1 軸によって左と右に、第 2 軸によって上と下に分けられる。つまり、全体は 4 つのグループに分割されることになる。また、原点に近い要素は特定の性質を持たない中立的な項目であると考えられる。そこで、本研究では、原点を中心に、±0.5 の範囲に入るものを「原点付近」と定義し、10 語を以下の 5 グループに分けて解釈を行う。

表 11 各象限に布置された表現形

象限	表現形	典型的な共起語	特徴
第一象限	俺たち、俺ら、 僕ら	全員、びっくり、必死、先生、ガキ、ビール、ネタ、オヤジ、素晴らしい、難しい、未来、守る、命	インフォーマルで私的
第二象限		会議、日本、生き方	
第三象限	われわれ、我ら、 わたしたち	経済、改善、現代、愛する、偉人、国、仲間、心、エース、王妃、野球、核弾頭	フォーマルで公的
第四象限	僕たち	期待、悲しい、困る、残念、勉強、ゼミ、バンド、休み、ツアー、プレー、先制	インフォーマルで公的
原点付近	我々、私たち、 私達	見る、思う、人類、環境、日本、人間、地球、世界、自然、国家、国民、生き方、考える	ニュートラル

以下、5 つのグループについて、順に用例を見ていくことにしよう。

第 1 象限では、「俺たち」、「俺ら」、「僕ら」の 3 語が含まれる。これらの 3 語は「高校」、「ビール」、「先生」、「力」など極めて個人的な内容について述べるときに使われやすい。また、「素晴らしい」、「難しい」、「必死」など個人の判断や感情を表す形容詞と結びつきやすい。

(12) 俺たちにも喰わせろっつうの！(ブログ・生活と文化)

(13) ん？俺らの飯の間にだけ降った？？奇跡。(ブログ・趣味とスポーツ)

(14) 未来は僕らの手の中！(ブログ・学校と教育)

上記のように、「俺たち」、「俺ら」は「喰う」、「～っうの」、「飯」など俗な言い方と共起しやすく、主として親しい者同士間のくだけた会話に使用される。「僕ら」は「夢」、「未来」など抽象的な言葉や、「素晴らしい」、「難しい」など個人の判断や評価を表す言葉と共起しやすく、くだけて親しみやすいイメージを連想させやすいものとなっている。

第2象限では、「会議」、「日本」、「生き方」といった共起語があるが、そこに含まれるFPP表現形は存在しなかった。

第3象限では、「われわれ」、「わたしたち」、「我ら」の3語が含まれる。これらの3語は「現代」、「偉人」、「神」、「国」、「愛する」といったフォーマルな語と共起しやすく、プライベートなことより、パブリックな内容について述べるときに用いられやすい。以下はその用例である。

(15) われわれは経済と自身の両方を変えることについて考えるべきだ。(ブログ・Yahoo! サービス)

(16) 神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内ですべて全うされているのです。
(ブログ・生活と文化)

(17) 準優勝投手になった前田幸長氏そして「我らの核弾頭」佐々木誠氏！！(ブログ・趣味とスポーツ)

「われわれ」は「事業」、「経済」、「選挙」などの漢語とともに出現することが多く、主に社会的問題について意見を述べる時に使われる。親しみやすいひらがなを選択することによって、相手への押し付けが弱められる効果が期待される。

「わたしたち」は聖書などに書かれた主の教えや、多数の人に向けて平和を呼びかけるような文章に使われやすい。読み手にわかりやすく、やわらかい印象を与える。

「我ら」は野球などスポーツ関連の内容を語る場面に使われやすい。ときに比喻や誇張などのレトリックを用いることによって、陳述される内容や言及される対象に対し、強い団結心、誇りや敬意を表している。

第 4 象限に布置された語は「僕たち」の 1 語のみである。以下はその用例である。

(18)「僕たちにはハードな日々が続くけど、冷静でいる必要がある。」(ブログ・趣味とスポーツ)

「僕たち」は学校のことや、自分の「期待」や「残念」に思うことを語るとき、または例 18 のように、スポーツ選手がインタビューを受ける場面に使われやすい。「僕ら」を比較すると、「僕ら」は第 2 軸の上部、「僕たち」は下部に分けられたことから、「たち」をつけることによって、「僕」が持つ個人的な意味合いが薄められ、パブリック性が増している可能性が示唆された。

最後に、原点付近に布置されているのは「我々」、「私たち」、「私達」の 3 語である。これらの 3 語は「思う」、「見る」、「行く」など一般動詞に伴って使われ、衣食住や家族などにプライベートのことを語る場面に用いられると同時に、「地球」、「人類」に関係する公的なことについて語るときも使用されている。したがって、これらの 3 語は特にはっきりした性質を持たない、幅広い内容を語るときに使える FPP であると考えられる。以下はその用例である。

(19) 私たち人間は生きていく上で暗黙のルールや常識といったものを共有しています。(ブログ・学校と教育)

(20)この地上の崩壊は我々人類の崩壊でもあるのです。(ブログ・Yahoo! サービス)

(21) 私達の生きている地球ではまだ戦争が続いている。(ブログ・Yahoo! サービス)

上記のように、この 3 語は地球や「世界」、「人間」、「国民」など広い概念を意味する語と結びつきやすく、公的な場面で、相手との連帯感を作り出し、他人を自分のカテゴリーに引き込むニュアンスが含まれると考えられる。

以上を踏まえ、第 1 軸上の位置に注目すると、前部要素が「僕」と「俺」である 4 語が第 1 軸のプラス方向に、「ワレ」や「ワタシ」を含む残りの 6 語がマイナス方向に布置されたことが明らかになった。このように、第一軸はフォーマル度を分ける軸となっていると言える。

第 2 軸上の位置に注目すると、プラス方向に布置された「俺たち」、「俺ら」、「僕ら」は「いい加減」、「素晴らしい」、「難しい」、「必死」などの個人の判断や感情を表す形容詞と結びつきやすい。一方、マイナス方向に布置された「僕たち」、「我々」、「わたしたち」、「われわれ」の 4 語は、多数の読み手を想定し、パブリックな内容についてコメントをしたり、主張を示したりする時に使われやすいという点で共通している。したがって、第 2 軸は伝達する情報のパブリック性を分ける軸となって

いると言える。

5.2.4.5 RQ5 辞書・教材の記述提案—「私たち」を例に—

RQ1～RQ3では、表現パターン、フォーマル度、相手包含度、共起語の4つの観点から、日本語におけるFPPについて議論してきた。RQ5では、RQ1～4のコーパス調査で得られた結果をふまえ、「私たち」について新たな辞書・教材記述を提案する。新しい記述では、コーパスの頻度調査の結果に基づき、(1)類義語内での頻度優先性、(2)表記、(3)フォーマル度、(4)相手包含度、の4つの情報を示す。なお、(1)については全一人称複数代名詞の頻度を100として、その中で当該語(語彙素)の占める割合を比率値で示す。(2)については、「私達」「私たち」「わたしたち」3語の頻度を100として、当該表記の占める割合を比率値で示す。(3)については、ブログ頻度に対する国会会議録頻度の比率値で示す。(4)については、100例の分析用サンプルのうち、相手包含形の頻度が全体に占める比率を示す。これらを用いて、類義語・関連表記間の関係性を示す。また、学習者が当該語の実際の用例に触れられるよう、(5)用例をあわせて示す。これはすべてコーパスから取り出したものであるが、とくに長いものについては筆者が短くするなど改編を加えている。用例記載にあたっては、当該語を含む代表的な文型を挙げ、当該語の用法を示すこととする。なお、新しく提案する記述の特徴を示すため、既存辞書(『広辞苑』第7版)の記載を参考として併記する。

表12 「私たち」の辞書記述提案

—既存辞書の記述—
たち：『接尾』①名詞・代名詞に接続して複数形を作り、または多くをまとめていう。古くは主に神または貴人だけに用いた。「私—」「子ども—」
—新しい辞書・教材の記述提案—
語義 ：「私」の複数形
【語法ノート】
a) 頻度優先性 ：類義語の中で最も広く使われる。【関連語頻度：私たち(28.8%)>我々(16.9%)>私達(11.6%)>僕ら(7.4%)>そのほか(35.2%)】
b) 表記 ：「私たち」が最も広く使われる。【表記別頻度：私たち(66.3%)>私達(26.8%)】

＞わたしたち (6.9%)】

c) **フォーマル度**：「我々」と比べ、「私たち」は改まった感じが少ないが、「われら」より高いフォーマル度を持つ。具体的に、フォーマルな場面（国会会議録）では、「私たち」の使用頻度は「我々」に次いで2番目に多い。くだけた場面（ブログ）では、「私たち」の使用頻度は最も多く、「我々」の2倍以上である。【フォーマル場面での頻度優先度：我々 (+536%) > 私たち+31%) > われら (-94%)。】

d) **相手包含度**：ひらがなは柔らかいイメージを持つため、話者の陳述における垣根が引き下げられ、読み手を巻き込むような機能が発生している。一方、漢字表記は語としてのまとまり度が高く、主張に明確な境界を与えるため、読み手が巻き込まれることは少なくなってくる。

【わたしたち (49.3%) > 私たち (30%) > 私達 (14.5%)】

e) **用例**

① 一の《名詞》：「一の心」；「一の生活」；「一のチーム」

② 一が…：(+着く)「一が着いたときにはカウンターの席がちょうど空いていた。」；
(+住む)「一が住んでいる町」；(+いる)「一がいる場所」

③ 一は…：(+形容詞)「一は幸せです。」；(+動詞+ている)「一はいつもあなたがたのために祈っている。」

既存の辞書では、「私たち」は接尾語「たち」の用例として記載されているだけで、独立した見出し語になっておらず、用法の説明は見当たらない。ゆえに、日本語学習者は辞書を通して、「私たち」の使い方を学ぶことが難しいだろう。そこで、日本語学習者向けの語釈として、「私たち」は頻度上最も典型的な一人称複数代名詞であることや、最も多く使用される表記が「私たち」であること、フォーマル度は「我々」と「われら」の間であること、ひらがなで表記されたときに相手包含度が最も高いことなど、コーパス調査で明らかになった「私たち」の用法特性を記載するようにした。これらの情報を学習者に明示することができれば、「私たち」の使用特性に対する理解がより深まるだろう。

5.2.5 まとめ

本節では、FPPの使用実態とスタンスを、表現形のバリエーション、フォーマル度、相手包含度、使用場面の4つの観点から検討を行った。以下、RQ5を除く4つのRQに即して、得られた結果をリサーチクエスチョン順に内容を簡潔にまとめる。

まず、RQ1（表現形のバリエーション）では、現代日本語において、語・異形・文字種を考慮した場合、FPP は最大に 60 種を超えるバリエーションが存在することが明らかになった。

次に、RQ2（フォーマル度）では、(1) 《ワタシ・ワタクシ》と《ワレ》を含む表現形はほかの語形より高いフォーマル度を持つこと、(2) 後部要素が同様な場合、FPP のフォーマル度は前部要素と強く関係していること、(3) 前部要素が《ボク》と《オレ》である場合、フォーマルな場面では、《タチ》が付随される FPP の使用が優先されやすいこと、の 3 つが確認された。

また、RQ3（相手包含度）では、相手包含度について、文字種が異なれば、表現形の相手包含度が大きく変わることや、前部要素によって相手包含度が変化する可能性が示された。

RQ4（共起語）では、(1) 「我々」、「私たち」、「私達」の 3 語は衣食住や家族などにプライベートのことを語る場面に用いられると同時に、「地球」、「人類」に関係する公的なことについて語るときも使用されており、幅広い内容を語るときに使える一人称複数代名詞であること、(2) 「俺たち」、「俺ら」、「僕ら」は個人的な内容について述べるときに使われやすく、個人の判断や感情を表す形容詞と結びつきやすいこと、(3) 「僕たち」は「たち」をつけることによって、「僕」が持つ個人的な意味合いが薄められ、パブリック性が増していること、(4) 「われわれ」、「わたしたち」、「我ら」の 3 語はフォーマルな語と共起しやすく、パブリックな内容について述べるときに用いられやすいこと、の 4 つが確認された。

第6章 現代日本語における文末詞使用

すでに述べたように、第Ⅱ部においては、(1) 一人称代名詞、(2) 文末詞、(3) 陳述スタイル、(4) ヘッジという4種類のスタンスマーカ―について、その使用実態や意味特性を調査するわけであるが、第5章での一人称代名詞の議論に続き、本章では(2) 文末詞に注目したい。

言語の性差が比較的顕著であることは日本語の特徴の1つと言われている。特に、終助詞をはじめとする文末詞は、多くの先行研究で盛んに議論されている。3.3.1で述べたように、先行研究は、若年層の会話では消滅傾向にある文末詞が、テレビドラマや小説の中では未だに使用されていることを示した。しかしながら、文末詞の使用実態について、先行研究は会話、ドラマ、小説を個別に調査しているものが多く、小説と会話における使用実態の違いを調査したものは不足しており、さらに研究する余地が残されていると思われる。

現代の日本語小説と会話における文末詞の使用状況に注目する際に、文末詞の頻度は近年どのように変化しているのか、また、より典型的であるものはどれか、各々の文末詞はどのような使用場面でどのような役割を担っているか、について調査する必要があると考えられる。そこで、本研究では、(1) 使用量の変化、(2) 多用する文末詞、(3) 使用場面の3点に注目し、小説と会話における文末詞の使用状況の相違点を調査する。

6.1 本章の目的とリサーチクエスチョン

本章では、小説と会話における文末詞の使用状況の違いを解明することを目指す。具体的には以下の4つのリサーチクエスチョン(RQ)を議論の対象とする。

RQ1 日本語小説・会話において、文末詞の経年変化はどのようになっているのか。

RQ2 日本語小説・会話において、多用される文末詞はどれか。

RQ3 日本語小説・会話において、それぞれの文末詞はどのような使用場面と結びつきやすいのか。

RQ4 コーパスから得られた知見をふまえることで、辞書や教材における文末詞「わ」の記述をどのように改善できるか。

なお、RQ4については、本来、すべての文末詞について、既存の辞書記述の改善を考えるべきであるが、ここでは、最も典型的な文末詞の1つである「わ」をサンプルとして取り

上げ、この問題を考えることとしたい。

分析に先立ち、RQ4を除く3つのRQに即して、先行研究から考えうる仮説を立てておこう。RQ1については、多くの先行研究の調査により、会話における文末詞の使用が衰退することが明らかになっており、小説における文末詞も減少傾向にあるのではないかと予想される。RQ2については、小説においては、ドラマと同様に「わ」が最も多く使用されるのではないかと予想される。RQ3については、7種類の文末詞はそれぞれ異なる意味特性を持つため、使用場面にはかなりばらつきが存在していると予想される。

6.2 データ

本研究では、現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)を使用する。BCCWJに含まれる13ジャンル(出版・雑誌, 図書館・書籍, 出版・書籍, 出版・新聞, ブログ, 国会会議録, 知恵袋, ベストセラー, 韻文, 教科書, 広報紙, 白書, 法律)のうち、出版・書籍, 図書館・書籍, ベストセラーを同じ書籍ジャンルとみなして1つにまとめる。さらに書籍については、日本十進分類法(NDC)によって、総記, 哲学, 歴史, 言語, 文学などに区分される。小説における文末詞の使用実態を調べるために、文学のデータのみを対象とする。以下は文学データの年代別の総語数である。

表1 BCCWJ (文学) 年代別の総語数

	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代
総語数	38万	225万	668万	1078万

6.3 調査項目

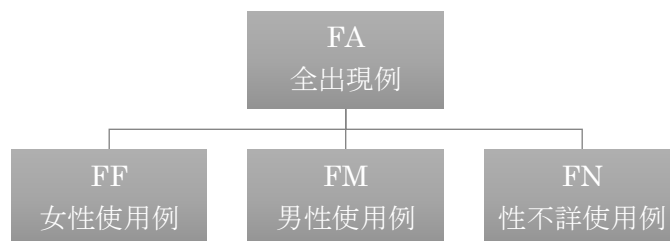
水本の文末詞に関する一連の研究を踏まえ、本研究でターゲットとする文末詞は「かしら・わ・わね・わよ・のよ・Nね・Nよ」の7種類に絞る。なお、字面から「わ」のイントネーション(上昇調か下降調か)を確認できないため、本章では、語形の調査に限定し、イントネーションの点は議論しない。また、「Nね」は「体言+ね」、「ナ型形容詞+ね」、「ナ型活用の助動詞の語幹+ね(そうね)」などに限定して議論する。「Nよ」も同様である。以下の表2はその例である。

表 2 研究対象とする文末詞

文末詞	例
かしら	誰かしら／本当かしら
わ	行くわ／いやだわ
わね	行くわね／無理だわね
わよ	行くわよ／素敵だわよ
のよ	行くのよ／おかしいのよ／いやなのよ／あいつなのよ
Nね	嘘ね／失礼ね
Nよ	嘘よ／だめよ／何よ

文末詞の用例には、はっきりと話者の性別がわかる（男性か女性）例と、文脈から使用者の性別が不明である使用例が混在しており、過去の計量研究には、これらをきちんと区別していないものが多かった。文末詞の計量妥当性を確保するため、本研究はこれらを区別して扱う。文末詞使用量を以下の図 1 で示されたように、FA 数、FF 数、FF 率（FF/FA）の 3 観点で捉える。

図 1 FA 数, FF 数, FF 率 (FF 数/FA 数)



6.4 分析手順

RQ1 では、小説における文末詞使用量の経年変化を調査する。BCCWJ の書籍（文学）データに対して、年号を各年代（1970, 1980, 1990, 2000 年代）に固定したうえで、「かしら」、「わ」、「わね」、「わよ」、「のよ」、「Nね」、「Nよ」を検索語として指定し検索する。今回の分析では、文末詞の使用状況について、全出現例（FA 数）、女性使用例（FF 数）、女性使用率率（FF 率：FF/FA）の 3 観点で捉えることになるが、まず、以上の処理で得られた

データをそれぞれの FA 数とし、Excel に複写する。次に、文末詞ごとに 100 例に満たない場合は全例を手作業で検証し、100 例を超えるものは、ランダムで 130-150 例を取り出し、文脈によって用例を女性用例 (FF)、男性用例 (FM)、性別不祥用例 (FN) に分ける (分析目標件数は 100 例であるが、FN の混在を予測して、130-150 例を抽出する)。最後に、年代別に 7 種類の文末詞の FA 数、FF 数の合計、FF 率の平均値を算出したあと、エクセルで横軸に年代、縦軸に FA 数、FF 数、FF 率の折れ線グラフを作成する。作成したグラフにデータの傾向を表示できるように、線形近似曲線を追加する。得られた数式 ($y=ax+b$) と「 R^2 」について、 $R^2=49\%$ 以上の場合には、データに対するこの近似曲線の信頼性が高いと判断する。

RQ2 では、FA 数、FF 数、FF 率の 3 観点から、それぞれ多用される文末詞を特定する。まず、RQ1 で得られたデータに基づき、文末詞ごとに、FA 数、FF 数、FF 率の平均値を出す。次に、FA 数、FF 数、FF 率ごとに、文末詞の並べ替えを行い、それぞれの観点から多用される文末詞の違いを比較する。

RQ3 では、小説における文末詞がどのような使用場面と結びつきやすいかを調査する。まず、1970、1980、1990、2000 年代のデータから、100 例ずつの分析用サンプルをランダム抽出する。次に、水本ほか (2008) の基準 (表 3) に従い、それぞれの用例の使用場面を手作業で、「ソフト」場面、「高主張」場面、「皮肉・嫌味」場面に分類する。分類作業は非母語話者である筆者が行っている。ただし、判断に困る場合は日本語母語話者と相談をし、その都度相談により判断を確定させることとした。最後に、文末詞ごとに各使用場面の比率の平均値を出し、グラフで示す。

表 3 文末詞の使用場面 (水本ほか, 2008) から引用

使用場面	例
ソフト場面	(1) A : とにかく明日、相手の弁護士に会ってみます。 B : ご苦労様です。 A : どうなるかわからないけど、ダイヤの件もぶつけてみるわ。 (2) 「取締役にするとはねー、またとんでもない手を思いついたものね。でもこのまま従順な部下になるかしら。」
高主張場面	(3) (会社の生意気な後輩に反論する場面)

	<p>A: 怒ってるじゃないですか。この間からずっと。</p> <p>B: 怒ってない<u>わよ</u>。怒ってないって。</p> <p>(4) (突然かかってきた不審電話に反論する場面)</p> <p>A: あの若い男性は A さんの恋人なんですか。お付き合いしていらっしやるんですか。</p> <p>B: 付き合ってるんかい<u>わよ</u>。なんでこんな質問に答えなきゃならないんですか。</p>
嫌み・皮肉の場面	<p>(5) (自分に連絡をしてこなかった友人に)</p> <p>A: お見合いのほう、うまくいってますか。</p> <p>B: あ、うん、もちろん。</p> <p>A: じゃあ、デートでお忙しいの<u>かしら</u>。</p> <p>(6) (自分の見合い相手に)</p> <p>「女いるくせにバックれてお見合いに来て誠実ぶっちゃって、いい気なもんだ<u>わねえ</u>。」</p>

6.5 結果と考察

6.5.1 RQ1 文末詞の使用量変化

RQ1 では、1970 年代から 2000 年にかけての 30 年間、小説における文末詞の使用量 (FA 数, FF 数) および FF 率はどのように変化したかを調査した結果、以下の図 2~4 が得られた。

図 2 FA 数の経年変化

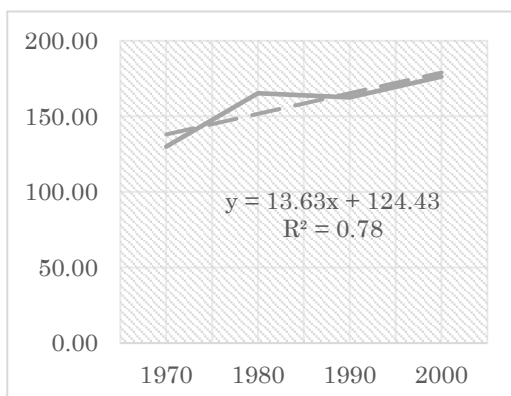


図 3 FF 数の経年変化

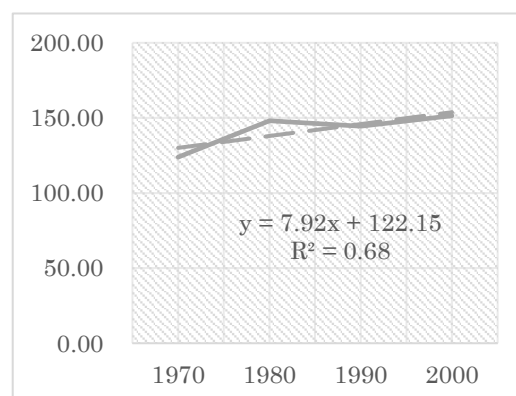
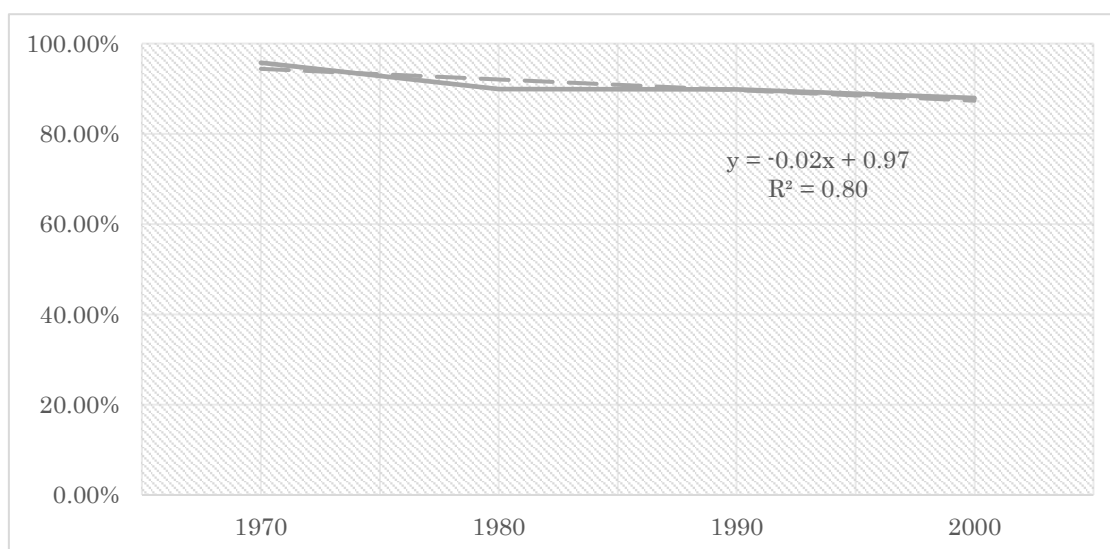


図 4 FF 率の経年変化



R^2 に注目すると、3つの数式の R^2 はいずれも0.6以上であるため、この近似曲線はFA数、FF数、FF率の変化傾向を予測できる信頼性が高いと判断できる。つまり、1970年代から2000年代まで、現代日本語小説において、(1)文末詞の形式の使用数(FA)は増えるとともに、女性が使用する文末詞の用例(FF)も増加する傾向にあること、(2)文末詞の形式の使用者が女性だけに限らなくなっていることが示唆された。

まず、(1)についてであるが、この原因としては2つの可能性が考えられる。1点目は、文末詞は日本語の男女差を示す「役割語」(金水, 2003)として、キャラクターが女性であること、ないしは女性的な性質を持つことを「瞬間的に受け手に伝える」(金水, 2003)ことができるためである。以下の例を見てみよう。

(1)「今みんなあら、知らないの？今、みんなが騒いでいるわ、飛行機が襲われるのよ。

とくに日本の飛行機は狙われるらしいわよ」「襲われるって空の上でかい？」(佳村昌季, 1988, 『第11幕への序曲「浮輪をしたハチ公」)

従来、文末詞はキャラクターの性別を明示する役割を果たし、ドラマや小説や漫画などにも積極的に使用されてきた。とくに小説の場合、(1)のように、字面情報だけではキャラクターの性別を推定しにくい可能性があるため、文末詞は依然として重要な役割を果たしていると考えられる。

2点目は、小説には、幅広い年齢層のキャラクターが存在するという点である。以下の例を見てみよう。

(2)「誰も離婚するなんて言ってないわよ」母は笑いながら言った。栗子はぼかんとして両親を見比べた。(乃南アサ, 2003, 『パラダイス・サーティ』)

近年、言語の性差が次第に縮み、文末詞が若い世代の発話から消滅してきたとされているが、高年齢層の会話では、文末詞の使用がいまだに散見される(水本ほか, 2008)。小説では、キャラクターの年齢層が幅広く、いまだに文末詞を使用している高年齢層の者が登場する機会も少なくない。また、歴史の人物を題材とした小説では、時代によって女性登場人物は女性らしいことばづかいをすることが規範となることもある。ゆえに、会話調査の結果とは反対に、小説における文末詞の使用量は増加しているのであろう。

次に、(2) 文末詞の形式の使用者が女性だけに限らなくなっていることについてであるが、以下の例を検討したい。(3) と (4) は女性、(5) と (6) は男性が「かしら・わ」を使用する例である。

(3)「ほんとに関心だわ」姉妹はうなずきあう。(津本陽, 1994, 『椿と花水木』, 女性)

(4) いま、何時かかしら」女優が、時計をしていないことに、その時、初めて気づいた。
(服部真澄, 2001, 『龍の契り』, 女性)

(5)「しまったわ」と、時高はたれかれなしに言った。(司馬遼太郎, 1984, 『箱根の坂』, 男性)

(6)「どこかのモデルクラブにギャラの支払い忘れがあつて、とりたてに来たのかしら」
とは、まず僕の頭に浮かんだ考え。(大沢在昌, 1997, 『銀座探偵局』, 男性)

職場での談話を収集・分析した現代日本語研究会(1992/2002)と、BTSJ日本語自然会話コーパスを分析した石川(2019)では、「かしら」が女性のみが使用していることが示唆されたが、今回の調査ではそれが支持されなかった。例(10)の場合、「かしら」は男性話者の心の言葉で使用され、相手の目的に対して自問している。

6.5.2 RQ2 多用される文末詞

BCCWJにおいて、7種類の文末詞のうち、多用されるのはどれかについて調査した結果、表4が得られた。

表4 BCCWJにおけるFA数, FF数, FF率

FA数		FF数		FF率	
わ	55.69	わ	49.10	わよ	97.11%
のよ	34.89	のよ	32.79	わね	94.90%
Nよ	27.06	Nよ	22.89	のよ	94.02%
かしら	12.00	かしら	10.38	Nね	89.03%
Nね	11.67	Nね	10.32	わ	88.56%
わよ	8.95	わよ	8.66	かしら	87.74%
わね	8.23	わね	7.81	Nよ	84.71%

表4から以下の2点が見える。

1点目はFA数, FF数は「わ」>「のよ」>「Nよ」>「かしら」>「Nね」>「わよ」>「わね」の順で頻度が低くなることである。最上位の「わ」の使用量は最下位の「わね」の6倍にも及ぶところである。先行研究のドラマデータを調査した水本（2006）の結果と同様に、「わ系」（「わ」「わよ」「わね」）が小説においても多用されていることが確認された。

2点目について、FF率は「わよ」>「わね」>「のよ」>「Nね」>「わ」>「かしら」>「よ」の順で低くなることである。最上位の「わよ」のFF率は最下位の「Nよ」より10%ぐらい高い。「わよ」、「わね」の使用者はほとんど女性に限られるのに対し、比較的FF率が低い「わ」「かしら」「Nよ」の使用は女性に固定されなくなっている。

6.5.3 RQ3 文末詞の使用場面

RQ3では、小説における文末詞がどのような使用場面と結びつきやすいかを調査するため、水本ほか（2008）の基準に従い、文末詞の使用場面を「ソフト場面」、「高主張場面」、「嫌み・皮肉」の3分類に分けた。その結果は以下の図5である。

図 5 BCCWJ における文末詞の使用場面

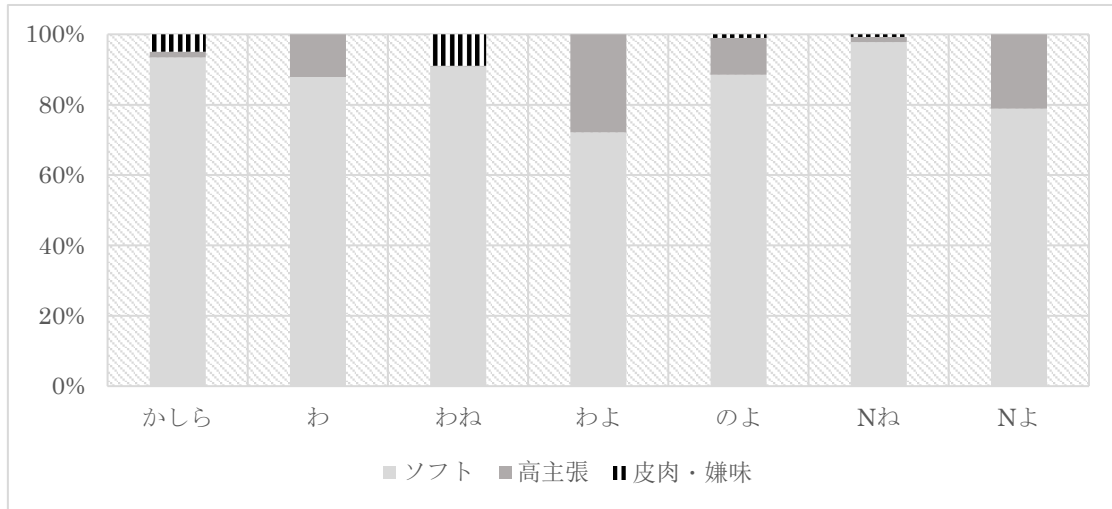


図 5 からわかることは 3 点である。

1 点目は、小説で使用される文末詞は、人物のイメージや言葉を和らげる「ソフト機能」(例 7 と 8) が主に作用しているほか、対立関係にある場面において、強い主張 (例 9 と 10) や皮肉・嫌味 (例 11 と 12) を際立たせる役割も担っていることである。ここで使用場面ごとに 2 例をあげる。

A. ソフトの場面

- (7) 「明月さんのこと、この間兄に尋ねてみたら、仕事熱心で将来性のある青年らしいって、ほめてたわ。」(夏樹静子, 2001, 『国境の女』)
- (8) 「じゃ、わたしは失礼するわね。明日、朝食のときにまたお会いしましょう」(パトリシア・マクドナルド (著), 中井京子 (訳), 2002, 『ベビーシッター殺人事件』)

B. 高主張の場面

- (9) 「私は騙すつもりも隠すつもりもないわよ！」(響野夏菜, 2005, 『振り返れば先生がいる』)
- (10) 「本気よ！殺すわよ、それ以上、一言でもしゃべったら」少女の声は、殺気を帯びていた。(赤川次郎, 1986, 『三毛猫ホームズの歌劇場』)

C. 嫌み・皮肉の場面

- (11) 「媒酌人夫人が大きなお腹をしてるなんて恥ずかしいわね」, 景子はそう言って恥じらった。(豊田行二, 2002, 『野望候補者』)

(12) 「あら、こんなのじゃ気に入らないかしら。」(小林光恵, 1998, 『ぼけナース』)

2点目は、小説において、7語のうち、「わ」、「わよ」、「Nよ」、「のよ」は話者の立場を強く主張する場面と結びつきやすいことである。この結果は、ドラマを調査した水本ほか(2008)の結果と一致しており、高主張場面では、「わ」、「わよ」、「Nよ」、「のよ」が多用されることが確認された。今回の調査では、小説において、高主張場面での「のよ」、「わよ」、「Nよ」、「わ」の用例がそれぞれ30%、28%、21%、12%を占め、7種類の文末詞でトップ4位を占めている。また、「かしら」と「わね」は、皮肉や嫌味を表す場面に使えるという結果もドラマの調査結果と一致している。

3点目として、小説における「のよ」、「わよ」、「Nよ」、「わ」は、女性らしさを表出し、言葉をやわらげるための用例が主張度の強い場面での用例を大きく上回ることが確認された。ドラマを調査した水本ほか(2008)は、ドラマで使われる文末詞は、本来の柔らかいイメージと一線を画し、主張度を強くするという「タフな機能」を持つと述べている。今回の調査では、小説における文末詞はドラマの中の使用状況と異なり、主に女性らしさを示す文末形式として、話し手の性別を浮き彫りにするために使われることが明らかにされた。

6.5.4 RQ4 辞書・教材の記述提案—文末詞「わ」を例に一

RQ4では、RQ1～3のコーパス調査で得られた知見をふまえ、「わ」について新たな辞書記述を提案する。新しい記述では、コーパスの頻度調査の結果に基づき、(1)類義語内での頻度優先性、(2)使用者の性別、(3)経年変化、(4)使用場面の4つの情報を示す。なお、(1)については7種の文末詞の頻度を100として、その中で当該語の占める割合を比率値で示す。(2)については、100例の分析用サンプルのうち、当該性別による使用頻度が全体に占める割合を比率値で示す。(3)については、1970年代から2000年代にかけて、文学データにおける文末詞使用量の変化傾向を示す。(4)については、100例の分析用サンプルのうち、当該場面の使用頻度が全体に占める割合を比率値で示す。これらを用いて、類義語・関連表記間の関係性を示す。

また、学習者が当該語の実際の用例に触れられるよう、(5)用例をあわせて示す。これはすべてコーパスから取り出したものであるが、とくに長いものについては筆者が短くするなど改編を加えている。用例記載にあたっては、当該語を含む代表的な文型を挙げ、当該語の用法を示すこととする。なお、既存の辞書において、「わ」の記述には文末詞以外の用法

も書いてあるが、以下では、『広辞苑』（第7版）における文末詞としての「わ」の記述のみを抜粋する。

表6 「わ」の辞書・教材記述提案

—既存辞書の記述—
<p>〔助詞〕（係助詞への転。習慣で「は」と書かれることが多い）活用語の終止形を受ける。</p> <p>㊦ 詠嘆・感動を表す。「よく言う—」；㊧（女性語）軽い主張・決意・詠嘆を表す。「もう帰ります—」；「あらすてきだ—」</p>
—新しい辞書・教材の記述提案—
<p>語義：男女ともに使い，詠嘆・断定・決意を表す。</p> <p>【語法ノート】</p> <p>a) 頻度優先性：女性がよく使う文末詞の中で最も広く使われる。【関連語頻度：わ（34.6%）>のよ（23.1%）>Nよ（16.1%）>かしら（7.3%）>そのほか（18.9%）】</p> <p>b) 使用者の性別：女性による使用が圧倒的に多いが，時に男性による使用もある。「わよ」「わね」となると女性的な言い方になる（女性による使用が全体の95%以上）。 【使用者性別：女性（89%）>男性（11%）】</p> <p>c) 経年変化：近年，若い世代の女性の日常会話においては，文末詞がだんだん使われなくなっていることが先行研究で報告されているが，1970年代から2000年代にかけて，文学作品においては，「わ」が依然として重要な役割を果たしており，その使用頻度が増加してきている。</p> <p>d) 使用場面：主に女性らしさを示す文末形式として，話し手の性別を浮き彫りにするために使われる。【フィクションで役割語として話者の性別を明示する場面（88%）>高主張の場面（12%）>皮肉・嫌味の場面（0%）】</p> <p>e) 用例：「ほんとに関心だ—」；「将来性のある青年ってほめてた—」</p>

既存の辞書の問題点として、「わ」の語義が2つに分けて記載されているが、2つの語義の違いがはっきりしていないことや、片方の語義(㊧)のみ「女性語」と示されているため、「わ」が女性しか使用できないという誤解を招きやすいこと、「わ」の使用場面、使用量の経年変化についてふれていなかったこと、という3点があげられる。そこで、改善案として、「わ」が男女ともに使い、使用者の性別の割合を数値ではっきり示し、文学作品におけ

る「わ」の全体使用数が増加することや、主に役割語として機能することなど、コーパス調査で明らかになった「わ」の用法特性を多面的に記載するようにした。このような情報を学習者に提供することで、「わ」の使用実態の変化や、使用環境や文脈に一定の制約があることを正しく認識できるだろう。

6.6 まとめ

以上のように、本章では、大規模な日本語コーパスを使用し、先行研究では手薄な小説における文末詞の使用量や経年変化、使用場面の3つの観点から考察した。以下、RQ4を除き、RQ1～RQ3で得られた結果をリサーチクエスチョン順に内容を簡潔にまとめる。

RQ1では、1970年代から2000年代にかけて、小説において、文末詞その形式の使用数は増えるとともに、女性が使用する文末詞の用例も増加する傾向にあることが確認された。一方、文末詞の形式の使用者が女性だけに限らなくなっており、男性による「わ」「かしら」など女性専用とされてきた文末詞の使用も確認された。

RQ2では、「わ系」（「わ」「わよ」「わね」）が小説において多用されていることが確認された。また、「わ」「かしら」「Nよ」のFF率が90%以下であり、それらの使用は女性に固定されない可能性があることが明らかにされた。

RQ3では、現代日本語小説において、7種類の文末詞は、主張度の強い場面と比較し、上品さや女性らしさを表出し、言葉を柔らかくするソフトな場面に使用されやすいことが確認された。小説における文末詞は主として話し手の性別を浮き彫りにし、女性らしさを強調する機能を果たすことが示唆された。

第7章 現代日本語における陳述スタイル選択

すでに述べたように、第Ⅱ部においては、(1) 一人称代名詞、(2) 文末詞、(3) 陳述スタイル、(4) ヘッジという4種類のスタンスマーカーについて、その使用実態と意味特性を調査するわけであるが、第6章での文末詞の議論に続き、本章では(3) 陳述スタイルに注目したい。

日本語の文体は、大きく常体と敬体という2つに分けられる。従来、常体と敬体について、多くの研究がなされているが、その大部分は主観・内省に基づく理論的な研究であって、大規模な言語データを踏まえた計量的な研究は必ずしも十分ではない。日本語母語話者の書き言葉における常体と敬体の選択を考える場合、2つの観点に注目する必要がある。1点目はジャンル差である(なお、「ジャンル」の概念は必ずしも明確なものではなく、「レジスター」、「メディア」、「テキストタイプ」などの用語が使用されることもある。本研究では、これらを総称する観点で、「ジャンル」という語を統一して使用する)。2点目は年代差である。すでに述べたように、先行研究においては、日本語における常体と敬体の使い分けは盛んに議論されてきたが、日本語の多様なジャンルにおける文体差を比較した研究は少ない。また、ジャンル比較に年代比較を組み合わせたものも少ない。そこで本研究は、多様な言語変種のデータを収録したBCCWJを用い、ジャンル差と年代差という2つの観点を組み合わせて、日本語における常体・敬体の使用状況を新たな視点から調査することを目指す。

7.1 本章の目的とリサーチクエスチョン

ジャンル差と年代差の視点から、現代日本語における敬体・常体の使用実態を解明することを目指す。具体的には以下の4つのリサーチクエスチョン(RQ)を議論の対象とする。

RQ1 現代日本語において、常体・敬体の使用状況はジャンル別にどのように変化しているのか。

RQ2 現代日本語において、常体・敬体の使用状況は年代別にどのように変化しているのか。

RQ3 ジャンル差と年代差のどちらがより常体・敬体の使用状況に大きく影響を及ぼしているか。

RQ4 コーパスから得られた知見をふまえることで、辞書や教材における常体標識「だ」の記述をどのように改善できるか。

なお、RQ4 については、本来、「だ」「です」など、陳述スタイルの表出に関わるすべての助動詞について、既存の辞書や教材における記述の改善を考えるべきであるが、ここでは、最も典型的なスタイル標識助動詞である「だ」をサンプルとして取り上げ、この問題を考えることとしたい。

分析に先立ち、RQ4 を除く 3 つの RQ に即して、先行研究から考えうる仮説を立てておこう。RQ1 については、法律や白書は客観的かつ明示的な記述が求められることから、常体が圧倒的に優位を占めると思われる。また、字数を節約し、簡潔に情報を伝える新聞でも常体が多用されると考えられる。一方、相手に回答を依頼する知恵袋では、相手を立てる必要があることから、ポライトネスの要素が影響し、敬体が多く使われるのではないかと予測される。また、ほかのジャンルでは明確差がないのではないかと思われる。

RQ2 については、インターネットが普及し、IT などを利用したコミュニケーションが広がる中で、シンプルで簡潔な表現が好まれるようになってきたことから、年代が進むにつれて、どのジャンルにおいても、敬体よりも常体が増えているのではないかと推測される。

RQ3 については、様々なジャンルの中で、最も読者層が幅広く、内容も多岐に富む書籍においては、他のジャンルと比較した場合のジャンル差や年代差が顕著に現れないのではないかと予測される。また、日本語はジャンルによって本質的に異なる性質を持つため、年代差よりもジャンル差の方が強く影響するのではないかと予測される。

7.2 データ

2011 年に一般公開された現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)では、日本語を構成する多様なジャンルのテキストが収録されている。その上、BCCWJ は一定の時間幅を持ったサンプルの収録がなされている。この 2 点を踏まえ、BCCWJ は敬体・常体の多様な実態を調査するには適切なコーパスであると判断した。「中納言」インタフェースを介して BCCWJ の調査を実施する。

7.3 分析手順

本研究では、BCCWJ の 13 ジャンル(出版・雑誌, 図書館・書籍, 出版・書籍, 出版・新聞, ブログ, 国会会議録, 知恵袋, ベストセラー, 韻文, 教科書, 広報紙, 白書, 法律)の中で、「出版・書籍」, 「図書館・書籍」, 「ベストセラー」を同じ「書籍」ジャンルとみなして一つにまとめる。話し言葉を元とする「国会会議録」と日本語として特殊性の高い「韻文」は除き、残りの 9 ジャンルを調査対象とする。以下は、それぞれの収録資料の刊行年代情報である。

表 1 BCCWJ における収録資料の刊行年代情報

ジャンル	刊行年代	ジャンル	刊行年代
書籍	1971-2005	広報紙	2008
雑誌	2001-2005	法律	1976-2005
新聞	2001-2005	ブログ	2008
白書	1976-2005	知恵袋	2005
教科書	2005-2007		

年代別の調査は以下の 2 つの観点で行う。1 つ目は、マクロ的な時間の観点である。30 年間のデータが揃っている「法律」「白書」「書籍」の 3 ジャンルを対象に、1976～1980 年、1981～1985 年というように、5 年単位で調査を行う。なお、白書や法律のデータには 1976 年以降のものしかないため、書籍の 1971～1975 のデータは調査対象から除外した。2 つ目は、ミクロ的な時間の観点である。2001 年以降のデータが収録された「雑誌」「新聞」「教科書」の 3 ジャンルを取り上げ、1 年ごとに調査を行う。

日本語の常体と敬体は一般に、文末表現によって区分される。文末表現の分類方法については、山崎(2011)で示された 4 分類・12 種の表現パターンを基準とする。これら各々について、筆者が検索条件式を設定した。今回の調査では、文末に終助詞がつかないものだけを調査対象とする。以下はその一覧である。

表 2 文末表現の類別と検索条件式

	分類	検索条件式	例
常体 「た」系 列	①動詞+た	キー：活用型="助動詞-タ"	～した。
	②形容詞，形容 動詞+た	AND 前方共起：(品詞 LIKE "動詞%" OR 品詞 LIKE "形容詞%" OR 語彙素="だ")	～なかった。 ～だった。
	③～だった，であ った	ON 1 WORDS FROM キー AND 後方共起：書字形出現形="。" ON 1	～であった。 ～ていた。
	④～ていた	WORDS FROM キー	
	⑤一般動詞+た		
常体	⑥動詞(終止形)	キー：((品詞 LIKE "動詞%" OR 品詞	する。

「非た」 系列	⑦形容詞・形容 動詞	LIKE "形容詞%" OR 語彙素="だ")AND (活用形 LIKE "終止形%" OR 活用形 LIKE "意志推量形%")	ている。 ～であろう。 である。
	⑧～だ・～である	LIKE "意志推量形%")	である。
	⑨ている	AND 後方共起: 書字形出現形="." ON 1	ない。
	⑩一般動詞	WORDS FROM キー	だ・だろう。
敬体 「た」系 列	⑪です・ます	キー: (語彙素="です" OR 語彙素="ます") AND 後方共起:書字形出現形="." ON 1 WORDS FROM キー	～です。 ～でしょう。 ～ます。 ～ましょう。
敬体 「非た」 系列	⑫でした・ました	キー: (語彙素="です" OR 語彙素="ます") AND 後方共起: 活用型="助動詞・タ" ON 1 WORDS FROM キーAND 後方共起:書字 形出現形="." ON 2 WORDS FROM キー	～でした。 ～ました。

なお、調査にあたっては、「IN (registerName="出版・新聞" AND (core="true" OR core="false"))PUBLISHED IN 2001」のように、年号とジャンルを含めて検索を行った。

RQ1 では、ジャンル別の常体・敬体の使用状況を調査する。まず、BCCWJ で年号を 2000 年代に固定した上で、9 ジャンルごとに、常体「た」系列、常体「非た」系列、敬体「た」系列、敬体「非た」系列の頻度を調べる。次に、粗頻度を1万語あたりの調整頻度に変換し、ジャンルごとの常体率(常体/常体+敬体)を計算する。

次に、RQ2 は敬体・常体の使用状況の経年変化を調査する。まず、ジャンルを「書籍」、「白書」、「法律」のいずれかに固定したうえで、5 年単位で常体率の変化を調べる。また、ジャンルを「雑誌」、「新聞」、「教科書」のいずれかに固定したうえで、1 年ごとに常体率を調べる。その後、調査期間において、常体と敬体の使用状況がどのように変化しているかを要約するため、常体率を目的変数、年代を説明変数として、単回帰分析を行い、回帰式を得る。

RQ3 では、ジャンル差と年代差のどちらがより常体・敬体の使用状況に大きく影響を及ぼしているかを明らかにするため、年代別ジャンルを第 1 アイテム、陳述スタイルを第 2 アイテムとする頻度表を作成し、コレスポンデンス分析を行う。なお、第 1 アイテムには 34 カテゴリー(「書籍 1976-1980」、「書籍 1981-1985」など)、第 2 アイテムには 4 カテゴリー(文末表現の 4 分類)が存在する。

7.4 結果と考察

7.4.1 RQ1 ジャンル影響による常体率の変化

年代要因の影響を抑止するため、年代を固定したうえで、常体率をジャンル別に比較したところ、図1の結果を得た。

図1 ジャンル別の常体率

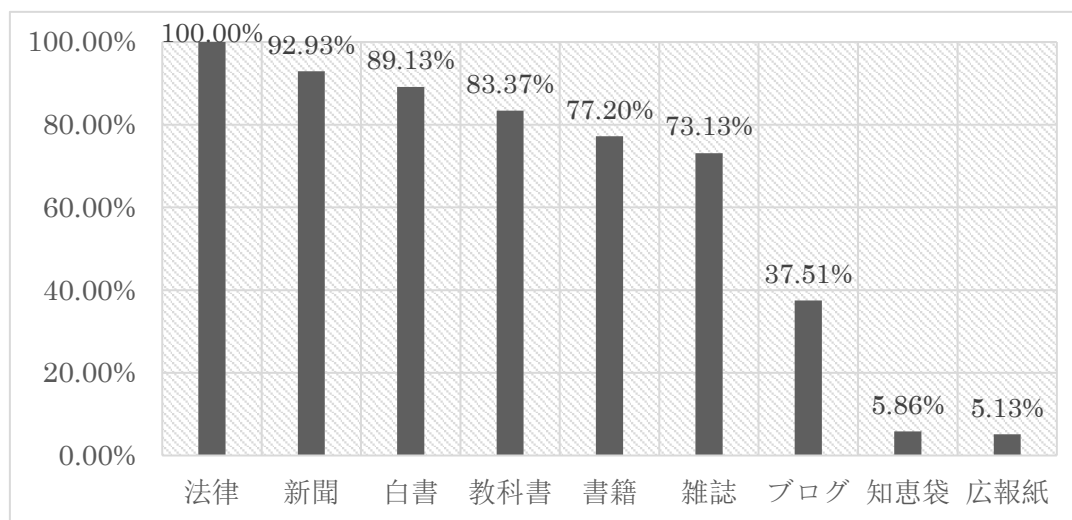


図1からわかることは3点ある。1点目は、法律を除けば、すべてのジャンルにおいて、常体と敬体が併存しているということである。このことは、ジャンルごとに、常体または敬体のいずれかが選択されるというよりも、両者の間で、何らかの使い分けを行っている可能性を示している。

2点目は、ジャンルにより、常体率が100%から5.13%まで、20倍近くずれているということである。従来日本語における常体と敬体の議論において、ジャンルを考慮したことは決して多くなかったが、今回のデータ分析の結果は、ジャンルが常体と敬体の選択に大きな影響を及ぼしている可能性を示すものである。

3点目は、全9ジャンルは常体率の点で3つのグループに分けられることである。法律、新聞、白書、教科書、書籍、雑誌の6ジャンルにおいては、常体率が7割を超えており、これらはほぼ「常体基調」のジャンルであると言える。一方、広報紙と知恵袋においては、常体率は10%未満であり、逆にこれらは敬体基調のジャンルであると言える。以上に対し、ブログは常体率が37%であり、約6対4の比率で常体と敬体が混ざって使われていることになる。この点に関して、仁田(2009)は「典型的な書き言葉では、通常、文末は普通体が

用いられるものであるため、丁寧体と普通体の対立ということは問題にならない」と指摘している。法律をはじめとする 6 ジャンルについては、仁田の指摘はそのとおり当てはまるが、今回のデータ分析により、知恵袋や広報紙のようにむしろ「通常、文末は丁寧体が用いられる」書き言葉ジャンルも存在する。

では、なぜこれらのジャンルにおいて、異なる常体率が見られるのであろうか。1つの考え方は、ポライトネス、つまり読み手に対する書き手の配慮のレベルがジャンルによって異なることが影響しているのではないかと考えられる。

まず、「常体基調」グループについて言うと、例(1)～(4)で示されているように、いずれも読み手に過度な配慮を行う必要性は低いと考えられる。例えば、書籍や雑誌(73.13%～77.2%)においては、読者の関心は内容面にあり、丁寧な表現で読者を持ち上げる必要性は強くない。また、教科書(88.37%)については、児童や生徒に対して一定の丁寧な言葉遣いを行う必要はあるものの、読み手は教科書を使って学習することが前提とされており、必要以上に読み手を持ち上げるニーズはやはり低い。さらに、白書や新聞(89.13%～92.13%)においては、読み手の関心は、書籍や雑誌の場合以上に内容面に集中しており、書き手として読者に過剰な配慮を行わない。また法律(100%)については、伝統的に常体で書くという慣習があることに加え、政府や国家など書き手側がより強い位置にあり、読み手に持ち上げる必要性はほとんど存在しない。

- (1) 中央農業総合研究センターでは、「フィールドサーバ」を開発している。農場をモニターするシステムである。(書籍, 2005)
- (2) すべての物体は、慣性をもっている。(教科書, 2005)
- (3) 政府は訴追問題で米側との本格的な協議は家族の来日が決まってからとしている。(新聞, 2004)
- (4) 特許業務法人の社員は、すべて業務を執行する権利を有し、義務を負う。(法律, 2000)

次に、「敬体基調」グループについて考えてみたい。知恵袋の場合、質問を投稿する者は、何らかの回答を必要としている。この時、仮に言葉遣いの丁寧さが不足し、読み手が不快な印象を持てば、回答は得られない。つまり、知恵袋の書き手は、普段以上に丁寧な言葉遣いを行い、回答者となりうる可能性のある読者を最大限に持ちあげることが要求されるので

あろう。広報紙については、地方公共団体が、住民サービスの一環として、納税者である地域住民に直接的に向けて刊行された読み物であることに注意する必要がある。中央政府と比較し、地方公共団体の主な業務は住民サービスの提供である。したがって、国が刊行し、関心ある読者に対して情報を伝達することが主たる目的となる白書とは異なり、広報紙においては、住民である読者に対してより一層の敬意を払う必要があると考えられる。仮に敬意が十分でなければ、住民の離反を招き、行政に対する協力が失われる危険性もある。

(5) これって病気なんですか・・・？何科に行けばいいのかわかりません。(知恵袋, 2005)

(6) 対象となる方へは、4月中旬ごろに「特定健診受診券」をお送りします。(広報紙, 2008)

最後に、「丁寧体と普通体の対立」が顕著に見られるブログについて考える。ブログにおいて、2つの異なる表現モードがほぼ拮抗して存在しているのは、ブログの書き手に、2つの異なる動機が存在するためであると考えられる。1つ目はより多くの読者に読まれ、読者に好感を持たれたいという気持ちである(例7)。もう1つは、読者の反応とは無縁に、書き手が自分の書きたいことを自分の望む形で記録したいという気持ちである(例8)。前者の気持ちが強ければ、敬体が増え、後者の気持ちが強ければ、常体が増えるのではないかと予測される。ブログという媒体において、常体と敬体が他のジャンルに比べるとほぼ拮抗しているのは、ブログの中にこうした二面性が存在するためであると考えられる。

(7) 今日は青空でもものすごく暑かったのですが・・・また雨が降りまた雷です。みなさんのところは大丈夫でしょうか。(ブログ, 2008)

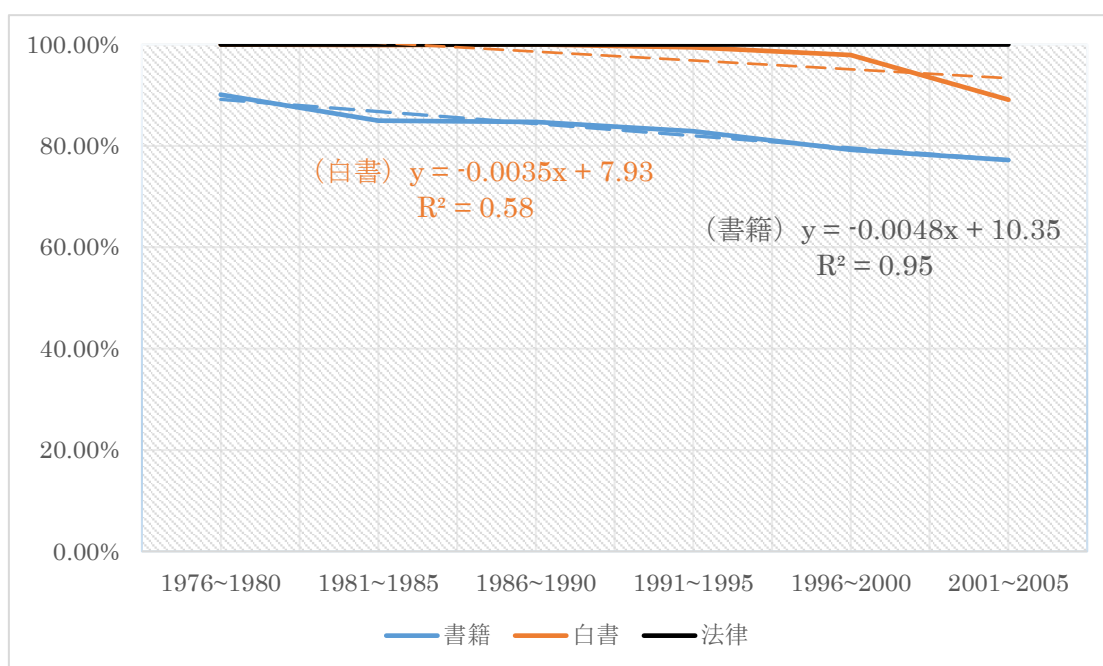
(8) もう仕事が忙しくて忙しくて、これが精一杯だ。(ブログ, 2008)

以上のように、同じ日本語ではあっても、ジャンルが異なれば、読者に敬意を払い、読者を持ち上げるニーズの程度が変化する。このため、結果として常体と敬体の使用比率に差が生じているのではないかと考えられる。

7.4.2 RQ2 年代影響による常体率の変化

「書籍」、「白書」、「法律」の3つのジャンルそれぞれについて常体率を年代別に調査したところ、図2の結果を得た。それぞれの破線は、「書籍」、「白書」の変化パターンを要約した単回帰式を示す。いずれの場合も回帰式の係数はマイナスとなり、わずかではあるが、30年の間に常体率が低下していることが確認される。

図2 年代別の常体率（1976～2005）



すでに述べたように、法律文書はその性質として常体で記述することが伝統である。ゆえに、1970年代から2000年代までの30年間、法律は常体率が100%で安定している。一方、白書は年代が進むにつれ、常体率が低下してきている傾向が見て取れた。以下の例を見てみよう。

- (9) このうち、船舶あるいは陸上からの油・廃棄物の排出等海洋汚染に直接結びつく実質犯は1649件で、全体の85%を占めている。（環境白書，1979）
- (10) 陸上からのものが69件と約7割を占めており、そのほとんどが故意による廃棄物の排出でした。（環境白書，2005）

上記の2つの例はいずれも環境保全の内容を示したものであるが、1970年代は常体で書かれているのに対し、2000年代になると敬体で書かれている。この背景には、いくつかの原因が考えられるが、1つは、白書の位置づけが変わってきたという可能性である。かつては、白書は、政府の側が行政のあり様を報告する文書と見なされており、読み手への配慮はあまりなされていなかった。しかし、現代に近づくにつれ、白書の刊行も、税金で行われている業務であることが広く意識されるようになり、結果として、よりわかりやすく丁寧に記載し、多くの読者に読んでもらうことが重視されるようになったのではないかとと思われる。すでに述べたように、住民と行政の距離が近い地方公共団体が刊行する広報紙については、読者への配慮が要求され、全般的に常体率は低い。白書についても、年の間に、次第に読者への配慮が求められてきたのではないかと推測する。要するに、納税者に対する意識が高まり、納税者である国民と政府との関係がより重視されるようになるにつれ、白書も敬体で書くことが増えてきたのではないかと考えられる。書籍もまた年代が進むにつれて、次第に敬体が増えてきている。ここで、書籍の用例を見てみよう。

(11) ……アメリカ流の、良く言えば理想、悪く言えばたて前という偽善の文化と、日本流の本音の文化の対立である。裁きの文化と甘えの文化の対立とも言えよう。(書籍/社会科学, 1977)

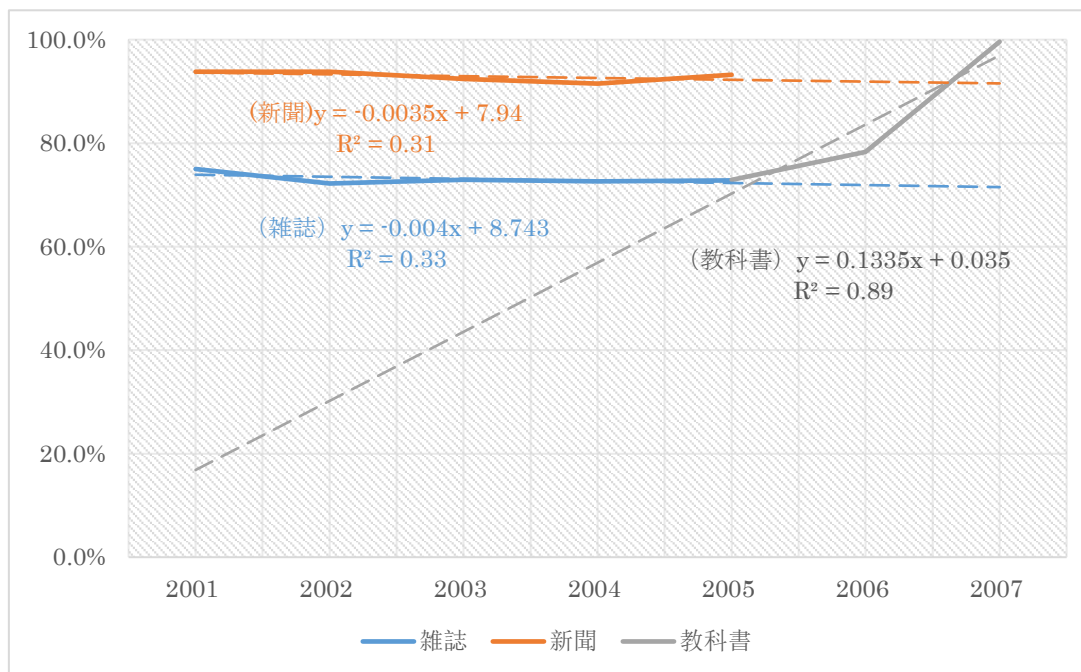
(12) 明確な言葉を使って表現する、それが英語の特徴です。これは、日本と欧米の文化のちがいが如実にあらわれる、よい例ではないでしょうか。(書籍/社会科学, 2005)

上記の2つはいずれも文化の違いについて書かれた社会科学分野の文章の一部であるが、1970年代の用例は常体で書かれているのに対し、2000年代の用例は敬体で書かれている。この背景には、読者層の大衆化が進んできていることが考えられる。かつては、書籍の中に、専門書や学術書など、書き手中心で、難解な言葉で書かれたものが多かったが、時代の流れの中で、書き手が読み手を一層意識し、より幅広い読者層を獲得するため、わかりやすい言葉で書くようになってきている。したがって、読者層の大衆化に影響され、社会科学のような難しい内容であっても、より丁寧な言葉遣いが求められるようになってきたのではないかと推測される。

以上で、30年間というマクロ的な時間の観点から常体率の変化を調査した。そして、書籍と白書については常体率が低下し、敬体による叙述が少しずつ増えていることを明らか

にした。では、現代を対象を絞り、より狭いミクロ的な時間の観点からあらためて観察した場合、どのような傾向が認められるのであろうか。「雑誌」、「新聞」、「教科書」の3つのジャンルそれぞれについて常体率を年代別に調査したところ、図3の結果を得た。

図3 年代別の常体率（2001～2007）



それぞれの破線は、「雑誌」、「新聞」、「教科書」の変化パターンを要約した単回帰式を示す。新聞についても雑誌についても、回帰式の係数はマイナスであり、変化の幅は極めて小さいものの、2001～2005年の5年間に於いて、常体率が若干低下している可能性が示唆された。すでに述べたように、雑誌と新聞はすでに購買済みの読者に対して情報を提供することから、他のジャンルに比べると、読者を立てる必要性は薄い。にもかかわらず、若干ではあるが敬体が増えてきていることは、日本語全体において、読み手に敬意を払うことがより強く求められてきていることの反映ではないかと考えられる。

最後に、教科書についてであるが、コーパスに含まれる3年分のデータに限っていうと、常体率が上昇している。しかし、出典を確認したところ、2005年と2006年のデータには様々な教科の教科書が含まれているのに対し、2007年のデータは現代文と音楽の教科書しか含まれていない。年代ごとにデータの内部構成がそろっていないため、今回の結果は教科書の3年間の変化を示していると断言することができないが、1つの傾向として考えると、

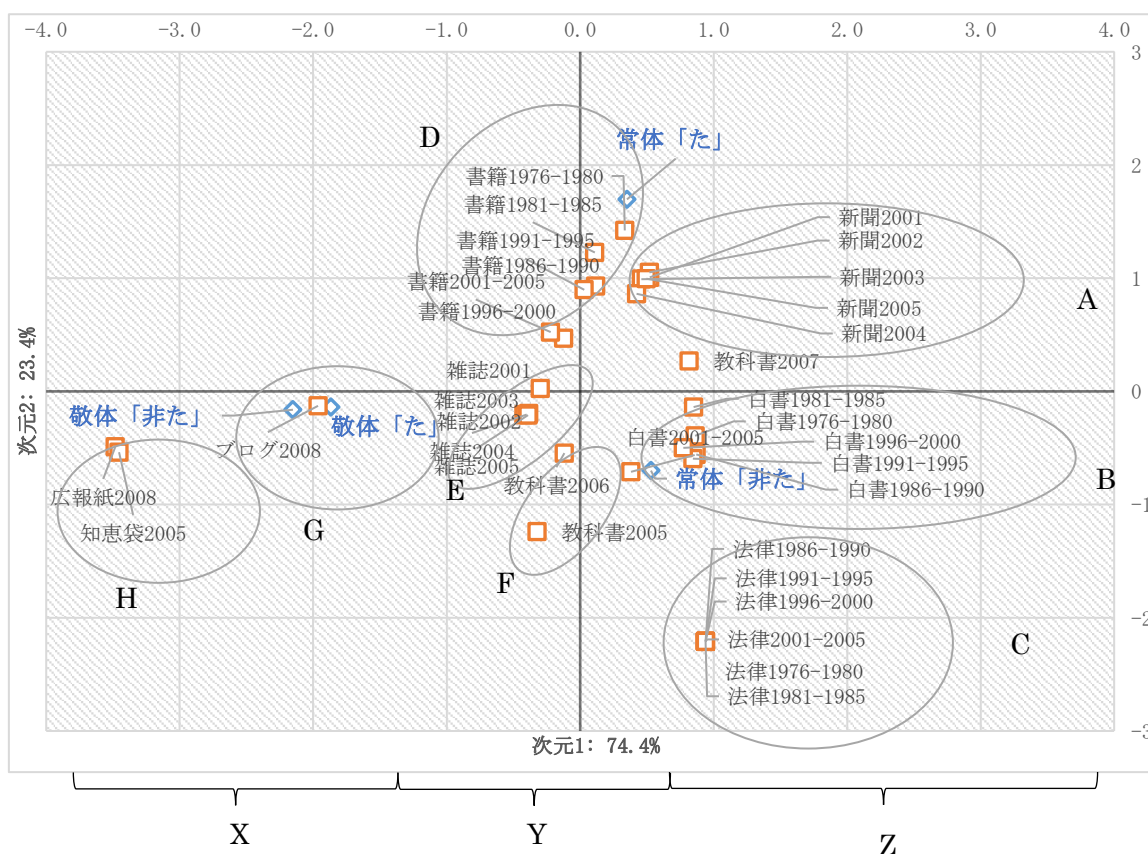
教科書において常体が増える傾向にあることが読み取れた。

そこで、教科書を除いて考えると、書籍、白書、雑誌、新聞のいずれにおいても、年代の変化の中で、徐々にではあるが、常体が減り、敬体が増えてきているという変化の傾向が確認されるのである。

7.4.3 RQ3 ジャンル影響と年代影響の関係

RQ1 と RQ2 において、ジャンル差と年代差がともに常体率に影響していることが確認された。では、どちらがより大きな影響要因になっているのであろうか。以上の点を確認するため、コレスポンデンス分析を実行したところ、以下の散布図を得た。

図4 コレスポンデンス分析の結果



コレスポンデンス分析では、性質の似たデータが近傍位置に布置される。仮に、ジャンルは異なるが年代の近いデータが固まっていれば、ジャンルよりも年代が重要な影響要因であることになる。一方、年代は異なるが類似したジャンルのものが固まっていれば、年代よ

りもジャンルが重要な影響要因となる。この点を確認するため、コレスポンデンス分析を実施したところ、1次元の寄与率は74.4%、2次元の寄与率は23.4%となり、2つの次元で元のデータの分散の約97.7%が説明されることがわかった。

散布図で示されたように、全体のデータはA~Hの8つのグループに分かれて布置された(すでに述べたように、2007年の教科書データは特殊であるため、RQ3の分析から除外している)。それぞれの内容を見てみると、年代を異にする同じジャンルのデータがまとまって布置されている。このことは上で示した2つの可能性のうち、年代よりもジャンルが常体率に強く影響を及ぼしていることを証明するものである。注目すべき点は、8つのグループの第1軸上の位置を見た場合、それらが大きく3つの領域に区分されていることである。ここでは、それをX~Zで示す。X領域には、ブログ(G)、知恵袋・広報紙(H)が布置されている。これはすでに述べたように、相手に敬意を払い、相手を持ち上げる必要が存在するジャンルであると考えられる。

次に、原点付近にあるYの領域には、書籍(D)、雑誌(E)、教科書(F)の3つが布置された。これらは、すでに読者が確定していたり、読者がそれを読むことが前提視されたりするなどの理由で、読者に対する敬意の表出が必ずしも絶対的ではないグループである。最後に、第1軸上でプラスの位置に存在するZの領域に、新聞(A)、白書(B)、法律(C)の3つが布置された。これらは、Yの領域に布置された3つのジャンルと比べ、より中立的な観点で事実を述べるジャンルであると考えられる。

なお、第2軸(縦軸)について言うと、上部には新聞と書籍、真ん中には雑誌、白書、教科書、下部には法律が分類されている。この点を踏まえると、縦軸は事実と説明のバランスを示しているのではないかと考えられる。上部の新聞や書籍においては、中立的な立場から事実を提示することに重きが置かれる。一方、下部の法律においては、事実というより国が決めたルールについて説明を行うことが中心となっている。さらに、中央のゾーンに存在する雑誌、白書、教科書においては、事実の提示とその背景の説明の両方に等しく重きが置かれる。

以上の結果は、読者に敬意を払う必然性と陳述する情報の性質によってそれぞれのジャンルの特性が決まり、それに応じて、適切な常体と敬体のバランスが決定されていることを示しているのではないかと考えられる。

7.4.4 RQ4 辞書・教材の記述提案—助動詞「だ」を例に—

RQ1～RQ3では、ジャンル影響、年代影響、ジャンル影響と年代影響の関係の3つの観点から、日本語における常体と敬体について議論してきた。得られた知見は言語学的に有益なものであるが、このままの形では、日本語教育にすぐ応用できるものと言いがたい。そこで、ここではコーパス調査から得られた知見をふまえて、以下の改善案の試みを行った。

新しい記述では、コーパスの頻度調査の結果に基づき、(1)ジャンル影響、(2)年代影響、(3)使い分けヒント、の3つの情報を示す。なお、(1)についてはBCCWJの9ジャンルごとに、常体率(常体頻度が全体に占める割合)を示す。(2)については、まず、1970年代から2000年代にかけて、書籍・白書の常体使用量の変化傾向を示す。次に2001年から2005年にかけて、雑誌・新聞における常体使用量の変化傾向を示す。(3)については、コーパス調査から得られた知見をふまえて、敬体と常体の使い分けヒントをまとめる。

また、学習者が当該語の実際の用例に触れられるよう、(4)用例をあわせて示す。これはすべてコーパスから取り出したものであるが、とくに長いものについては筆者が短くするなど改編を加えている。なお、新しく提案する記述の特徴を示すため、既存辞書(『広辞苑』第7版)の記載を参考として併記する。

表3 常体と敬体の使い分けヒント

—既存辞書の記述—
<p>「だ」【助動】</p> <p>ニテアルからデアル、デア、ダと転じて室町時代に成った語で、関西の「じゃ」に対して関東で盛んとなった。断定を表す。丁寧には「です」を用いる。主に体言に接続する。活用語に付く場合には間に「の」を挟むことが多いが、未然形・仮定形ではじかに付くことも多い。「でも」「だが」「だから」「だって」「なら」などの接続詞を派生する。未然形は「う」に続く用法のみで、その「だろう」を一助動詞として別に扱う説もある。</p>
—新しい辞書・教材の記述提案—
<p>語義：断定・判断を表す。</p> <p>【語法ノート】</p> <p>a) 使用実態：ジャンル影響</p> <p>日本語では、常体の「だ・である」を使用すべき場面と、「だ」ではなく敬体の「で</p>

す」を使用すべき場面がある。常体を7割以上使用するものは、法律（100%）＞新聞（93%）＞白書（90%）＞教科書（83%）＞書籍（77%）＞雑誌（73%）などである。常体の使用が3割未満となるのは、知恵袋（6%）＞広報誌（5%）などである。常体と敬体がほぼ拮抗して存在しているのは、ブログ（37.51%）である。

b) 使用実態：年代影響

日本語では、常体の「だ」の使用が減少傾向にある。1970年代から2000年代にかけて、書籍と白書の常体率が低下してきている。2001年から2005年にかけて、雑誌と新聞の常体も徐々に減少していることから、全体的に日本語の言葉づかいが丁寧になってきている。

c) 「だ」と「です」の使い分けヒント

- ① 読者に敬意を払う必然性が高いときに敬体を、低いときに常体を使用すべきである。
- ② 読者に共感や好感を持たれたいことが目的であるときに敬体を、主として書きたいことを記録するときに常体を優先して使用する。
- ③ 読み手に事実を提示することが中心であるときに常体を、丁寧に内容を説明したいときに敬体を選択する。

d) 用例

- ① すべての物体は、慣性をもっている。
- ② 政府は訴追問題で米側との本格的な協議は家族の来日が決まってからとしている。
- ③ これって病気なんですか・・・？何科に行けばいいのかわかりません。
- ④ 対象となる方へは、4月中旬ごろに「特定健診受診券」をお送りします。

既存の辞書では、常体（「だ」）について、「断定を表す。丁寧には『です』を用いる。」と記述され、それが一枚岩と見なされている。しかしながら、書き言葉には様々なジャンルのテキストが含まれているため、本章の調査で明らかにされたように、それぞれの使用環境において、常体が多様なふるまいをとっているのが現状である。常体の新しい辞書・教材記述を考える際に、ジャンル差、年代差による常体・敬体の使用変化を示したうえで、「読者に敬意を払う必然性」、「作文の目的」、「陳述する情報」の3つの観点から、それぞれの文脈で文体の選好性を提示するようにした。常体率のジャンル差を認識することで、学習者は一括りにされやすい書き言葉における常体の使用状況をより詳細に把握することができるだけでなく、常体（敬体）のジャンル選好性から自ら両者の使い分けポイントをまとめることも

できるだろう。

7.5 まとめ

本章では、現代日本語書き言葉均衡コーパスを使用し、現代日本語における 2 つの文体を、(1) 常体・敬体の使用状況はジャンル別にどのように変化しているのか、(2) 常体・敬体の使用状況は年代別にどのように変化しているのか、(3) ジャンル差と年代差のどちらがより常体・敬体の使用状況に大きく影響を及ぼしているか、という 3 つの観点から調べた。以下、以下では、RQ4 を除き、RQ1～RQ3 で得られた知見をまとめる。

RQ1 (ジャンル影響) については、(1) 法律を除いたすべてのジャンルにおいて、常体と敬体が併存していること、(2) ジャンルによって、常体率は 100% から 5.13% まで 20 倍近くのズレが存在すること、(3) 全 9 ジャンルは常体率の点で「常体基調」、「敬体優先」、「敬体基調」という 3 つのグループに分かれること、などが明らかになった。同じ日本語ではあっても、ジャンルにより、読者に敬意を払い、読者を持ち上げるニーズの程度が異なるため、結果として文体選好性に違いが生じることが示唆された。

RQ2 (年代影響) については、マクロ的な時間の観点から常体率の変化を調査した結果、書籍と白書の常体率が低下してきており、敬体による叙述が少しずつ増えていることが確認された。また、現代に時間を絞り、ミクロ的な時間の観点から観察した場合、雑誌と新聞においても、徐々にではあるが、常体が減り、敬体が増えてきていることが明らかにされた。敬体の増加は、読者層の大衆化に影響を受け、書き手が読み手を一層意識し、より幅広い読者層を獲得するため、より丁寧でわかりやすい言葉で書くようになってきている可能性が示唆された。

RQ3 (ジャンル影響と年代影響の関係) に関しては、ジャンル差の方がより常体・敬体の使用状況に大きく影響を及ぼしていることが確認された。読者に敬意を払う必然性と陳述する内容の性質によってそれぞれのジャンルの特性が決まり、それに応じて、適切な常体と敬体のバランスが決定されていることが明らかになった。常体と敬体に関する指導をする際に、学習者が伝達内容や読み手を持ち上げるニーズに応じた文体で書けるように、教師はコーパスから取り出した実例をリストアップしながら、異なる文体の表現効果を学習者に提示するのが望ましいだろう。

第8章 現代日本語におけるヘッジ使用

これまで、第Ⅱ部において、(1) 一人称代名詞、(2) 文末詞、(3) 陳述スタイルの3つの観点を取り上げ、現代日本語における使用実態を概観してきた。第Ⅱ部の最後として、本章では、新たに、(4) ヘッジを取り上げたい。ヘッジは、その形態や機能が多彩であり、現代日本語のスタンス表出において特に重要な役割を果たす。この点をふまえ、ヘッジについては、語形・語義・話者影響・辞書記述の改善という4つの小観点を立て、詳しく議論を行っていききたい。

なお、辞書や教材でヘッジとして扱われる語形の中にも、文脈により、実際にはヘッジとしての意味緩和機能を有していないものがある。この点をふまえ、本章では、「ヘッジ語形」と「ヘッジ(としての意味)機能」を区別して議論する。

さて、現代日本語におけるヘッジの研究に関しては、大きく分けて4つの課題がある。1点目は、ヘッジ語形の使用実態を考える際に、言語環境、つまりは、産出モード(話し言葉・書き言葉)や内容ジャンルの影響が考慮されておらず、結果として、様々な言語環境で共通して多用される典型的なヘッジ語形が何かはっきりしていないことである。

2点目は、個々のヘッジ語形が有する複数の語義について、頻度的な優先性が調査されておらず、ヘッジ語形ごとの典型的な語義が不明なことである。

3点目は、個々のヘッジ語形の意味緩和機能が、属性(性別・年齢・職業)を異にする多様な母語話者によってどのように受け止められているのかが不明なことである。

そして4点目は、日本語学習者がヘッジ習得の際に手助けとする辞書において、ヘッジに関する記述が必ずしも十分ではないということである。これらの4つの課題は、日本語研究・言語研究における課題であると同時に、外国人を対象とした日本語教育の課題でもある。

そこで、本章では8.1においてヘッジ研究の意義を整理した後、まず、8.2において1点目の問題を扱い、「言語環境別に見たヘッジ語形の使用実態の解明と典型的ヘッジ語形の特定」を行う。ここでは、各種の先行研究で触れられたヘッジ語形を網羅的に収集して83種を選び、話し言葉・書き言葉別、また、内容ジャンル別に横断的な頻度調査を実施する。その後、(1)言語環境別のヘッジ語形使用量(総使用頻度)の調査、(2)言語環境別の高頻度ヘッジ語形の抽出、(3)言語環境を手掛かりとしたヘッジ語形のグルーピング、(4)多様な言語環境で総合的に多用される典型的ヘッジ語形の抽出、の4点を議論する。

次に、8.3において2点目の問題を扱い、「主要ヘッジ語形の典型的語義の特定」を行う。ここでは、話し言葉・書き言葉で多用される9種のヘッジ語形をサンプルとして取り上げ、既存辞書や先

行研究を参考にして、個々の語形が有すると思われる語義を網羅的に書きだし、重複を除き、整理する。その後、各ヘッジ語形について、コーパスから 200 例の実例を取り出し、語義別の頻度調査を行い、ヘッジ語形ごとに典型的に使用される語義を特定する。

続いて、8.4 において 3 点目の問題を扱い、「母語話者属性がヘッジ語形の意味緩和機能の認識に与える影響の解明と強い意味緩和機能を有するヘッジ語形の特定」を行う。ここでは 8.3 で扱った 9 種のヘッジ語形をサンプルとし、それらが有する語義ごとにコーパスから用例を抽出し、7 名の母語話者に当該語形の有する意味緩和機能の強弱を判断させる。その後、(1) 性別影響、(2) 職業影響、(3) ヘッジ語形ごとの意味緩和機能の強弱、(4) 母語話者属性別に見た強い意味緩和機能を有するヘッジ語形の特定、の 4 点を議論する。

最後に、8.5 において 4 点目の問題を扱い、「コーパス調査を踏まえたヘッジ語形の辞書記述の改善」を試みる。ここでは、主要ヘッジ語形の中から「ね」、「ちょっと」、「頃」を例に取り上げ、コーパス調査と母語話者内省調査で得られた知見を踏まえ、外国人学習者向けの発信型辞書の記述を考案する。

8.1 日本語におけるヘッジの重要性

日本語においては、各種のヘッジ語形を用い、話者の陳述の度合いを緩和することがしばしば行われる。以下の例を見てみよう。これらは筆者の作例である。

- (1) 夜更かししたせいもあって、ちょっと眠たいかも。
- (2) あの学生は、よく勉強しているほうだ。

(1) については、「眠たい」は話者自身の感覚であるため、話者は断定しようと思えば、「かも」を使わず「ちょっと眠たい」と文を終わらせることもできる。しかし、仮にそうした場合、相手に自分の私的感情を一方向的に押し付ける形となる。加えて、相手との会話の継続を不愉快に感じているという含意が（期せずして）生じるかもしれない。この場合、推量を表す「かも」を入れることで、「眠たくない」可能性も生じ、断定を緩和し、過度の自己主張となるのを回避する効果が生じる。

(2) については、ある学生を評価する際に、「ほう」を使うことによって、「勉強している」と「勉強していない」という 2 つのカテゴリーにあえて分けるとすると、「勉強している」側のカテゴリーに入ることを表している。「ほう」を加えることで、評価の前提を限定

し、「勉強している」と言い切ることで生じる責任が回避されている。また、仮にこの学生が教師にとって満足のいく学習態度でなかったとしても、「ほう」を加えることで、それをあからさまに指摘せずにはすんでいるとも言えよう。この場合、「ほう」は、話者自身と、話者が言及する学生の体面を二重に守る機能を持つ。

このように、日本語において、意味の陳述を緩和する機能は極めて重要である。一般にこれをヘッジと呼ぶわけだが、ヘッジの習得は外国人学習者、特に中国語を母語とする日本語学習者にとって容易ではない。以下の例を見てみよう。

(3) 少子化は先進国で必ず起こる問題なのです。

(4) 台湾だけではなくて、世界のあらゆる所に少子化の問題があります。

(5) 一人一人がちょっとした努力をしたら、ゴミを減らすことができるかもしれないと思う。

(3) と (4) は少子化について書かれた作文から取り出された例である。「必ず」といった断定表現、「あらゆる」・「全」などの全称を表す表現が好んで使われる。これらの断定や強調を表す表現を使ってしまうと、言い切るニュアンスを読者に与えてしまう恐れがあると考えられる。この場合、少子化の程度が小さい国も存在するため、このような文脈では、「少子化は多くの先進国で起こる問題です」と言ったほうが妥当であると思われる。

(5) は、文章の最後で読者に対する呼びかけをするときに、ヘッジを使った例である。読者に共感してもらうために、より強く主張すべき文脈にもかかわらず、ヘッジを使ってしまうと、自信がなく、主張が弱すぎる印象を与えてしまう恐れがある。

こうした現状をふまえると、日本語教育においても、ヘッジの指導を行っていく必要があると思われるが、その際、ヘッジ語形とその意味機能を区別して扱うことが重要である。以下の例を見てみよう。

(6) つまらない物ですけれども、お受け取りください。

(7) 登りは苦しいけれども、山頂は素晴らしい。

(6) と (7) は同じく「けれども」が使用された例であるが、どちらがヘッジの機能を果たしているのかを問えば、多数が (6) と答えるだろう。ヘッジ語形と、実際の文脈の中で

当該語形が実現している意味緩和機能（ヘッジ機能）は分けて議論する必要がある。

筆者の見るところ、現在の日本語教育においては、日本語学習者に対し、ヘッジを正しく使用するための指導が十分与えられているとは言えない。このことは、日本語学においてヘッジの定義が曖昧であり、その諸相の解明が必ずしも十分ではないことに起因すると考えられる。そこで、本章においては、以下、言語環境をふまえた典型ヘッジ語形の特定 (8.2)、主要ヘッジ語形の典型語義の特定 (8.3)、母語話者属性の違いをふまえたヘッジ語形の意味緩和機能の認識 (8.4)、コーパス調査と母語話者内省調査をふまえた辞書記述の改善 (8.5) の 4 点を議論していく。

8.2 ヘッジ語形の使用実態

意味機能の議論に先立ち、優先されるべきことは、現代日本語で典型的に使用されるヘッジ語形の特定である。そうした語形が特定できれば、ヘッジ研究の際のサンプルとして使用できるのみならず、学習者のヘッジ学習の指針が提供できることにもなり、日本語学的にも日本語教育学的にも利点が多い。

ただし、ヘッジの使用を考える場合、言語環境、つまり、産出モード（話し言葉・書き言葉）や内容ジャンルの影響を考慮する必要がある。そこで本節では、10 ジャンルのコーパスデータの分析を行うことで、言語環境がヘッジ使用に及ぼす影響を調査し、幅広い言語環境で共通して多用される典型的ヘッジ語形の特定を目指す。

8.2.1 研究目的とリサーチクエスチョン

本節では、言語環境（産出モード・内容ジャンル）がヘッジ使用に及ぼす影響を考慮しつつ、現代日本語における典型的ヘッジ語形の特定を目指す。その際、(1)言語環境別のヘッジ語形使用量（総使用頻度）の調査、(2)言語環境別の高頻度ヘッジ語形の抽出、(3)言語環境を手掛かりとしたヘッジ語形のグルーピング、(4)多様な言語環境で総合的に多用される典型的ヘッジ語形の抽出、の 4 点を行う。

こうした目的に沿い、以下の 4 つのリサーチクエスチョン（RQ）を設定した。

RQ1 言語環境が変わればヘッジ語形の使用量も変わるか。（使用量）

RQ2 言語環境ごとに多用されるヘッジ語形にはどのようなものがあるか。（高頻度語形）

RQ3 言語環境に着目すると各種のヘッジ語形はどのようにグルーピングできるか。（グル

ーピング)

RQ4 多様な言語環境で総合的に多用されるヘッジ語形にはどのようなものがあるか。(頻度合成)

8.2.2 データ

本節では、話し言葉・書き言葉の両面を調査するため、(1) 多言語母語の日本語学習者横断コーパス(International Corpus of Japanese as a Second Language:以下 I-JAS), (2) 日本語日常会話コーパスモニター公開版(Corpus of Everyday Japanese Conversation:以下 CEJC), および(3) 現代日本語書き言葉均衡コーパス(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese:以下 BCCWJ)の 3 種のコーパスを利用する。詳細はすでに 3.1.2.1 と 3.1.2.2 で述べたとおりである。

このうち、(1) の I-JAS (母語話者発話データ) については、ストーリーテリング (ST), 絵描写 (D), 対話 (I), ロールプレイ (RP) の 4 種類のタスクのデータを使用する。

また、(2) については、CEJC と I-JAS の対話 (I) はともに自然な会話であるが、CEJC は多様な場面の日常会話を収録しているのに対し、I-JAS の対話 (I) の内容はある程度統一された話題 (15 項目) に限られている。ゆえに、本研究は CEJC のデータと I-JAS の対話 (I) を区別し、それぞれ話し言葉の 1 つのジャンルとみなす。なお、CEJC では、会話の形式によってさらに雑談・用談相談・会議会合に分かれているが、用談相談と会議会合の会話数はそれぞれ 23 と 9 となり、件数が限られているため、本研究では内部構成を区別せず、CEJC 全体を 1 つのジャンルとみなす。

(3) の BCCWJ には、3.1.2.1 で述べたように、13 ジャンル(出版・雑誌, 図書館・書籍, 出版・書籍, 出版・新聞, ブログ, 国会会議録, 知恵袋, ベストセラー, 韻文, 教科書, 広報紙, 白書, 法律)が含まれる。本分析では、このうち、「出版・書籍」「図書館・書籍」「ベストセラー」を同じ「書籍」ジャンルとみなして一つにまとめる。また、書籍については、話し言葉的な要素がより多く含まれる小説類をほかと区別するために、サンプル ID に表示された図書館資料の日本十進分類法(NDC)の第1次区分の情報を利用して、「文学以外」(書籍 1) と「文学」(書籍 2) を分けて扱う。上記の 12 変種のテキストのうち、書き言葉の特徴が強い新聞(PN), 雑誌(PM), 書籍 1 (B1), 書籍 2 (B2), 教科書(OT) の 5 ジャンルを今回の調査対象とする。

以上より、本研究は、話し言葉の 5 ジャンル(ST, D, I, RP, CEJC), 書き言葉 5 ジャンル(PN, PM, B1, B2, OT), 合計 10 種の言語環境別にヘッジ語形の頻度調査を行うことになる。

表 1 使用するコーパス

	コーパス	ジャンル	語数
話し言葉	I-JAS 母語話者 データ	ロールプレイ (RP)	2.2 万語
		ストーリーテリング (ST)	1.2 万語
		絵描写 (D)	1.8 万語
		対話 (I)	20 万語
	CEJC	日常会話	61 万語
書き言葉	BCCWJ	新聞 (PN)	140 万語
		雑誌 (PM)	440 万語
		書籍 1 (B1)	4160 万語
		書籍 2 (B2)	2100 万語
		教科書 (OT)	90 万語

8.2.3 調査項目

すでに述べたように、研究により調査対象とされた言語形式がまちまちであるため、ヘッジの全体像は明確につかめていないものとなっている。

そこで、本研究では、ヘッジを取り上げた 12 種の先行研究 (表 2) を調査し、1 種以上でヘッジとされた語や表現を取り出した。

表 2 ヘッジを取り上げた先行研究

1	Lauwereyns(2002)	2	Tatiana (2003)	3	入 戸 野 (2004)	4	山川 (2011)
5	堀江・堀田(2012)	6	Lee・楊(2013)	7	堀田 (2013)	8	小森 (2016a)
9	小森 (2016b)	10	袁(2018)	11	李 (2008)	12	東泉・高橋 (2020)

ただし、調査対象の詳細を紹介していない研究もあるため、論文で提示された用例などを参考し、論文に言及されたすべての言語形式を集めた。12 種の先行研究から 1 種以上でヘッジとされた語はすべて 89 語あるが、他のヘッジを包含する「よね」、「かね」、「というか」

や、他のヘッジに包含される「な」は対象外とした。また、「わけ」は山川（2011）ではヘッジと認定されるが、小森（2016b）では表現を強める強意詞の範疇に入れられているため、対象外とした。「よ」は「わけ」と同様な理由で除外した。以上により、コーパス頻度調査に用いたのは83種となる（表3）。

表3 調査対象とするヘッジ

品詞別	種類	例
副詞	29	少し、ちょっと、しばらく、なんとか、けっこう、たぶん、おそらく、ただ、とりあえず、やや、必ずしも、少々、なんとなく、概ね、もしかしたら、万一、あいにく、やっぱり、あまり、なかなか、せっかく、まあ、一応、大抵、大体、ほとんど、たしか、だいたい、もちろん
助詞	10	ね、かな、とか、が、なんか、なんて、たり、けれど、だけ、くらい
名詞	10	ほう、頃、感じ、可能性、関係、感覚、方向、あたり、ほど、ふう(に)
動詞類	10	と思う、気がする、恐れがある、と思われる、と考えられる、ように思われる、ように考えられる、とは限らない、～得る、場合もある
連語	8	という、のではないか、んじゃないの、かも、っていう、ある程度、んです、多くの
接尾辞	7	～的、～げ、～っぽい、風、系、～めく、～にくい
助動詞	6	ようだ、みたいだ、らしい、だろう、でしょう、しそうだ
形容詞	1	少なくない
感動詞	1	あの(う)
連体詞	1	単なる
総計	83	

8.2.4 分析手順

RQ1 および RQ2 では、中納言アプリケーションを用い、ジャンル別に83種のヘッジの頻度を調査し、10万語あたり調整頻度に変換する。使用量（総頻度）については、話し言葉と書き言葉におけるヘッジ語形の総頻度を比較する。また、差があるかどうかを検証するため、カイ二乗検定を行う。

つづいて、高頻度ヘッジ語形上位 10 語については、高頻度に使用されるヘッジ語形が話し言葉と書き言葉の間でどの程度重なっているかを調査する。そのため、書き言葉と話し言葉で出現頻度の最も高いヘッジ語形上位 10 語を抽出し、その一致度を観察する。

次に、RQ3 では、それぞれのジャンルにおいて、どのようなヘッジ語形が特徴的に使われるかを調査する。第一アイテムを 10 ジャンル、第二アイテムを 83 個のヘッジ語形とするコレスポネンス分析を行い、特徴的に使用される言語環境に基づくヘッジ語形のグルーピングを試みる。

最後に、RQ4 では、10 ジャンルにおける頻度をバランスよく合成するため、83 種のヘッジ語形をケースとするクロス表に対して主成分分析を実施し、第 1 主成分得点を手掛かりに 83 語を並べ替え、得点の高い語を「典型的ヘッジ語形」として抽出する。

8.2.5 結果と考察

8.2.5.1 RQ1 ヘッジ語形の使用量

はじめに、ヘッジの使用量に注目する。話し言葉と書き言葉におけるヘッジ語形の出現頻度は以下のようになった。

図 1 話し言葉・書き言葉におけるヘッジの使用量（10 万語あたり）

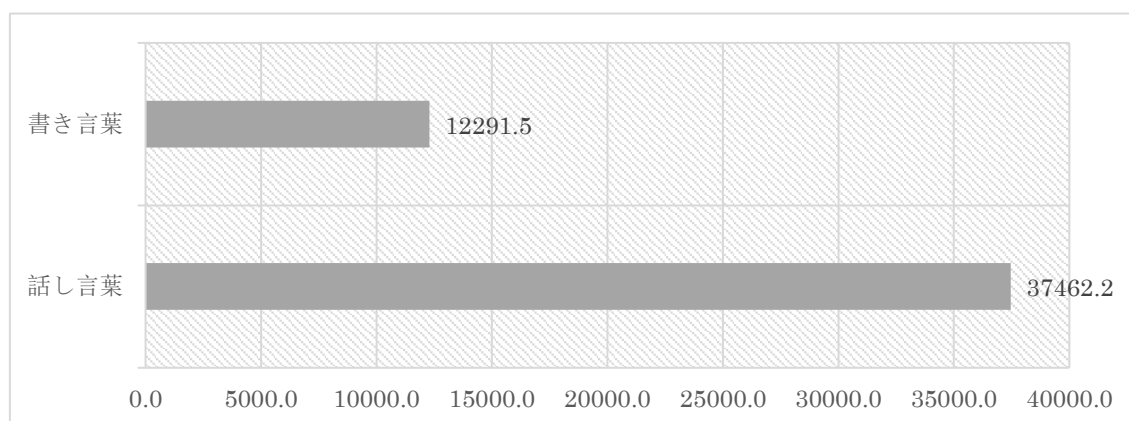
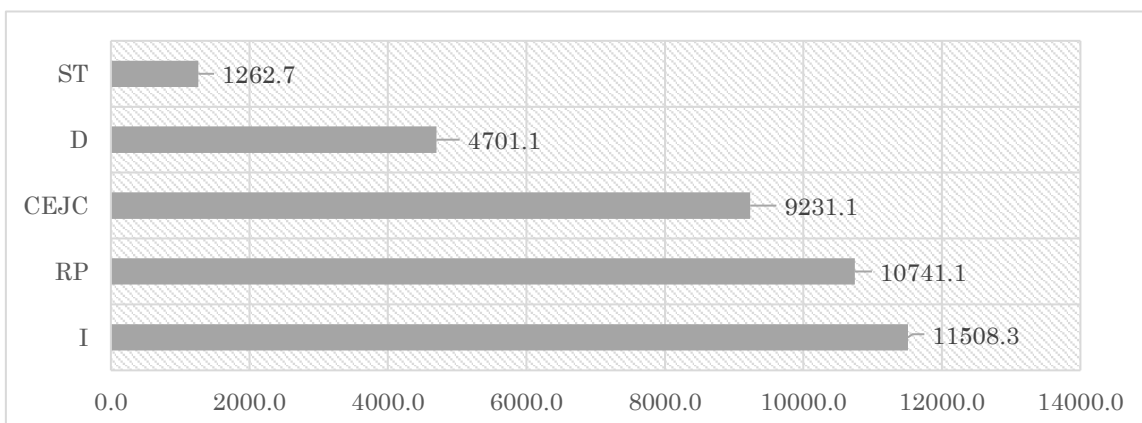


図 1 で示されているように、話し言葉におけるヘッジ語形の出現頻度が書き言葉を大きく上回っており、その差が 3 倍以上であることが確認された。カイ二乗検定を行ったところ、その差は統計学的にも有意であった ($\chi^2=33.84, df=1, p<.001$)。この結果から、「もちろん」のヘッジ用法を調査した東泉・高橋 (2020) が示す「話し言葉 > 書き言葉」というヘッ

ジ使用量の特徴はサポートされ、しかもその差は3倍以上であることが明らかになった。

続いて、話し言葉の5ジャンルそれぞれにおけるヘッジ使用量を調査したところ、以下の結果を得た。

図2 話し言葉の5ジャンルにおけるヘッジの使用量（10万語あたり）

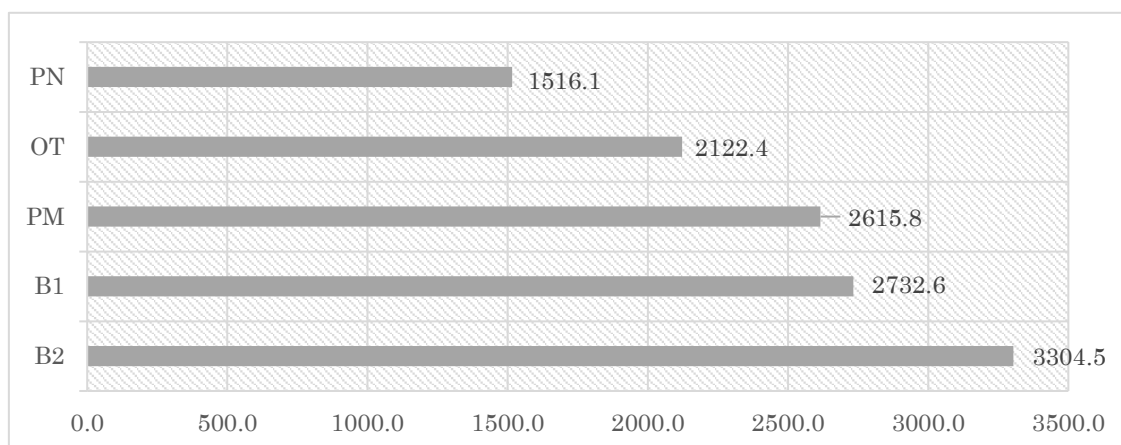


上図より、話し言葉におけるヘッジ語形の使用量について、隣接する2項目間の差の有意性をカイ二乗検定で確認した。なお、ここでは検定を4回繰り返すため、ボンフェローニ補正を行い、有意水準 $\alpha = 5\%$ を4で割り、 $\alpha_B = 1.25\%$ を有意判断の上限とした。この基準で判定を行ったところ、すべてのジャンル間の差があることがそれぞれ確認された（I・RP間： $\chi^2 = 11.46, p < .001$ 、RP・CEJC間： $\chi^2 = 55.76, p < .001$ 、CEJC・D間： $\chi^2 = 447.69, p < .001$ 、D・ST間： $\chi^2 = 268.06, p < .001$ ）。

以上より、I・RP・CEJCなどの対話系テキストではヘッジ語形が多用されるのに対し、D・STなど独話系テキストではヘッジ語形があまり使用されないことが確認された。この結果は、「対話より独話でより多用される」という個別のヘッジの使用実態を調査した東泉・高橋（2020）の指摘を支持しないものとなった。対話系テキストにおけるヘッジ語形の頻度の高さは、双方向的な談話では、相手の反応を踏まえて次の行動をするため、意見の衝突や相手の気分を害するような場面では、話し手ないし書き手の側があらかじめ相手の反応を想定し、よりやわらかい表現を使うことによって、発話態度を緩和する必要があるためではないかと考えられる。

次に、書き言葉の5ジャンルにおけるヘッジ使用量について見てみよう。

図3 書き言葉の5ジャンルにおけるヘッジの使用量（10万語あたり）



上図より、書き言葉におけるヘッジ語形の総頻度について、隣接する2項目間の差の有意性をカイ二乗検定で確認した。その結果、すべてのジャンル間の差があることがそれぞれ確認された（B2・B1間： $\chi^2=15027.79, p<.001$ ，B1・PM間： $\chi^2=271.23, p<.001$ ，PM・OT間： $\chi^2=736.95, p<.001$ ，OT・PN間： $\chi^2=1169.33, p<.001$ ）。

以上より、B2、B1などの筆者のスタンスが自由に表出される小説系・創作系テキストではヘッジ語形が多用されるのに対し、PM・OT・PNなど情報提供を主たる目的とするテキスト、特に公的な性質を持つOTやPNなどではヘッジ語形があまり使用されないことが確認された。

8.2.5.2 RQ2 高頻度ヘッジ語形

RQ1の調査により、ヘッジ語形の使用は日本語の言語環境の影響を強く受けることがわかった。このことは、高頻度ヘッジ語形についても、言語環境ごとに異なっている可能性を示唆する。

そこで、話し言葉・書き言葉別、また、各内容ジャンル別に、高頻度ヘッジを調査した。まず、話し言葉・書き言葉の高頻度ヘッジ語形上位10語は以下の通りであった。

表 4 S/W 別高頻度ヘッジ語形上位 10 語

頻度順	話し言葉	書き言葉
1	ね	ようだ
2	んです	という
3	けれど	が
4	ちょっと	～的
5	とか	だけ
6	ほう	だろう
7	が	ね
8	たり	たり
9	と思う	けれど
10	なんか	んです

注目すべきは、頻度順は大きく異なっているだけでなく、上位 10 語中 5 語しか一致していないことである。「ようだ・という・的・だけ・だろう」は書き言葉のみの上位 10 語に出現しており、「ちょっと・とか・ほう・と思う・なんか」は話し言葉のみの上位 10 語に入っている。ヘッジ語形の全体頻度を調査したときと同様、高頻度ヘッジ語形に限ってみても、話し言葉・書き言葉間に大きな差異が存在し、特に、上位 6 語までのヘッジ語形においては、一致している語が 1 語もなく、これによってヘッジ語形の振る舞いは話し言葉と書き言葉間で大きな差異があることが示唆された。

つづいて、話し言葉の 5 ジャンルごとに高頻度ヘッジ語形を調べたところ、上位 10 語は以下の通りであった。

表 5 ジャンル別高頻度ヘッジ語形上位 10 語 (話し言葉)

	ST	I	RP	D	CEJC
1	が	ね	んです	ね	ね
2	という	んです	ちょっと	たり	なんか
3	んです	けれど	けれど	んです	あの (う)
4	ね	とか	ね	ようだ	けれど

5	ようだ	ちょっと	ほう	けれど	とか
6	けれど	まあ	とか	が	ちょっと
7	しそうだ	やはり	と思う	ほう	まあ
8	ほう	たり	が	とか	みたいだ
9	かな	みたいだ	やはり	かな	かな
10	せっかく	と思う	かな	ちょっと	んです

まず、上位 3 語に限ってみても、すべて一致しているジャンルが見られないことが確認された。また、特定のジャンルにのみ高頻度で出現しているヘッジ語形も存在する。例えば、接続助詞の「が」I, CEJC では、上位 10 語に含まれていないが、ST, RP, D では上位 8 語に含まれている。かわりに I, CEJC では「が」と似たような意味を持つ「けれど」が上位 4 位に入っている。したがって、「が」と比べ、「けれど」のほうが自然に行われる双方向的な談話と結びつきやすいと考えられる。また、「しそうだ」と「せっかく」の 2 つのヘッジ語形は ST のみ高頻度で使用されることがわかった。以下はその例である。

(8) 犬が、せっかく作った料理を食べてしまってるの気づいて、二人はとても残念そうでした。

(9) マリは二階の窓からそれを不思議そうに見ています。

(10) マリは起きそうにありません。

ST は提示されたイラストのストーリーを話すというタスクであり、例で明らかなように、特定のヘッジ語形が多用されるのはタスクの内容に関わると考えられる。様態の「しそうだ」が頻繁に使われるのは、話者はイラストに描かれている人物の表情や動きを確認し、外観から受けた印象（残念そう）や事態が起こる可能性（起きそうにありません）を表す場合が多いためであると考えられる。

つづいて、書き言葉の 5 ジャンル別に高頻度ヘッジ語形を調べたところ、上位 10 語は以下の通りであった。

表 6 ジャンル別高頻度ヘッジ語形上位 10 語（書き言葉）

	PN	B1	B2	OT	PM
1	が	という	ようだ	ようだ	という
2	という	～的	が	～的	が
3	～的	ようだ	という	という	ようだ
4	ようだ	が	だろう	が	～的
5	だけ	だけ	ね	たり	ね
6	たり	たり	だけ	だけ	だけ
7	だろう	だろう	けれど	だろう	んです
8	頃	ね	～的	かな	けれど
9	しそうだ	ほう	ほう	ね	たり
10	可能性	でしょう	んです	でしょう	だろう

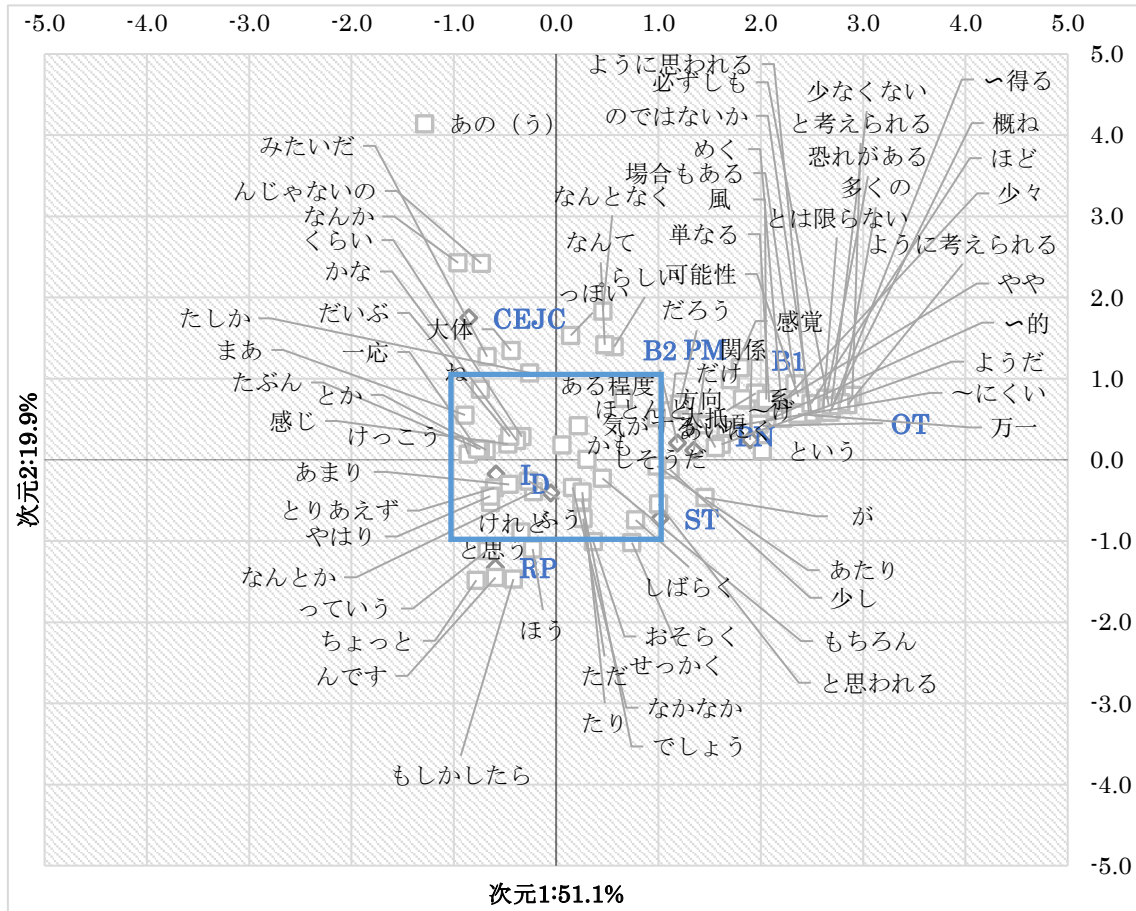
まず、順序は上下しているものの、B1 と OT, B2 と PM は上位 3 語が一致していることが確認された。また、特定のジャンルにのみ高頻度で出現しているヘッジ語形も存在する。例えば、「頃」と「可能性」の 2 つのヘッジ語形は PN, 「かな」は OT でのみ高頻度で使用されることがわかった。

以上より、RQ1 で話し言葉と書き言葉それぞれ高頻度ヘッジ語形上位 10 語中一致する語が少ないことから、ヘッジ語形の振る舞いは SW 差だけでなく、ジャンル差にも強く影響されると考えられる。

8.2.5.3 RQ3 ヘッジ語形のグルーピング

RQ3 では、言語環境を手掛かりとしてヘッジ語形をグルーピングする。以下は 10 ジャンルと 83 種のヘッジ語形の関係を視覚化したコレスポネンス分析の結果である。

図4 コレスポネンス分析の結果



コレスポネンス分析の結果，一次元の寄与率は 51.1%，二次元の寄与率が 19.9%であり，これら 2 つの次元で 70%以上が説明されることが確認された。

プロット図は横軸と縦軸により，第一象限（右上），第二象限（左上），第三象限（左下），第四象限（右下）の 4 つの象限に分けられる。さらに，プロット図の解釈では，原点付近は特定の特徴を持たない領域であるとされる。このため，原点を中心に±1 の範囲をコア領域とし，全体のデータは 4 つの象限とコア領域に区分される。

では，それぞれの区分にどのようなヘッジ語形が入っているのでしょうか。以下は，それぞれの領域に布置されたジャンルと特徴ヘッジ語形を表 7 で示す。

表 7 各象限に布置されたジャンルとヘッジ語形

区分	ジャンル	特徴ヘッジ語形
第一象限 (X:+ / Y:+) (単方向・不特定場面)	B2, B1, PM, PN, OT	と考えられる, ように考えられる, ように思われる, 概ね, 可能性, 恐れがある, という, 方向, ようだ, ~的, だけ, だろう, 頃, らしい, のではないか, ~げ, やや, 必ずしも, つぼい, 少々, なんとなく, 単なる, 場合もある, とは限らない, めく, ~系, 感覚, ほとんど, 関係, 多くの, 少ない, ~にくい, 風, あいにく, ほど, なんて
第二象限 (X:- / Y:+) (双方向・不特定場面)	CEJC	たしか, んじゃないの, みたいだ, あの(う), 大体
第三象限 (X:- / Y:-) (双方向・特定場面)	RP	けれど, なんとか, ちょっと, んです, もしかしたら, っていう, ほう
コア領域 (原点±1) (中核的)	I, D, ST	ね, でしょう, かな, あまり, かも, 大抵, ~ふうに, 気がする, 感じ, 多分, 一応, と思う, とか, くらい, ある程度, ただ, しばらく, やはり, しそうだ, けっこう, とりあえず, なかなか, もちろん, たり, まあ, あたり, とか, だいぶ
第四象限 (X:+ / Y:-) (単方向・特定)		少し, が, と思われる, おそらく, せっかく, なんか

まず, 第 1 軸 (横軸) に注目する。図 4 で示されたように, 横軸のプラス方向に書き言葉の 5 ジャンルが固まって布置されている。これに対し, ST を除く話し言葉の 4 ジャンルが横軸のマイナス方向に布置されており, 離れた位置に点在していることが確認された。コーレスポネンダンス分析では, 性質の近いデータが近傍位置に布置されるため, このことから, 書き言葉より, 話し言葉のほうがジャンル差に影響されやすいということが統計的データから証明されたと言えよう。

また、10 ジャンルの横軸上の位置を見ると、それらが大きく3つの領域に区分されている。左領域には、個人間の対話を収録した CEJC, I, RP, 中間領域には、独話系の D, ST, 右領域には、公的に発行される B2, PM, B1, OT, PN が布置されている。ヘッジ語形に注目すると、横軸のプラス方向において、原点から最も離れた位置に教科書 (OT) や新聞 (PN) が布置されている。この2つのジャンルを特徴づけるヘッジ語形として、「ように考えられる」、「恐れがある」、「とは限らない」など公的な立場から、事実を中立的かつ客観的に論じるためのヘッジ語形が多くみられる。横軸のマイナス方向において、「んじゃないの」、「っていう」、「みたい」など個人間の対話に多用されるくだけたヘッジ語形が布置されている。したがって、右に近ければ近いほど、伝達する情報の単方向性、パブリック性が強くなるとみられ、横軸は伝達する情報のパブリック性・方向性を分ける軸となっていると言える。

次に、第2軸に注目する。第2軸で、上下に大きく二分される。上部領域には、多様な場面の自然会話を収録した CEJC と BCCWJ の5ジャンルが含まれている。下部領域には、特定の場面で行われる会話を収録した I-JAS の4ジャンルが含まれる。ヘッジ語形に注目すると、上部には「頃」、「だろう」、「らしい」など汎用性の高いヘッジ語形が含まれている。一方、下部領域には「なんとか」、「もしかしたら」、「んです」など、依頼や事情説明などの特定の場面に使われるヘッジ語形が布置されている。つまり、第2軸は特定場面と不特定多数場面を分ける軸となっているのではないかと考えられる。

以上より、各種のヘッジ語形が、情報伝達の方向性と場面の特定性によって大きく5カテゴリーに分類できることが確認された。

8.2.5.4 RQ4 典型ヘッジ語形の特定

これまでの調査で、話し言葉・書き言葉を含む10種のジャンル別の頻度データが得られた。10種すべてで共通して多用されるヘッジ語形を決定する場合、通例は平均値が算出されるが、平均は各ジャンルの分散の差を考慮しないので、必ずしもバランスのよい代表値にならない可能性がある。そこで、主成分分析を行ったところ、10種の変数ごとの第1主成分の負荷量は以下の通りとなった。

表 8 主成分負荷量

ジャンル	第 1 主成分	ジャンル	第 1 主成分
PM	.963	ST	.764
B2	.924	D	.700
B1	.867	I	.513
PN	.854	CEJC	.385
OT	.780	RP	.466

表 8 に明らかなように、第 1 主成分に対し、すべてのジャンルの負荷量がプラスとなったため、この第 1 主成分は全ジャンルの頻度情報を統合した指標になっていると言える。そこで、この第 1 主成分得点を手がかりとして、83 種のヘッジ語形を並び替えたところ、以下の表 9 が得られた。また、上位 10 語から 80 語までそれぞれの頻度累計構成比を調べたところ、図 5 の結果を得た。

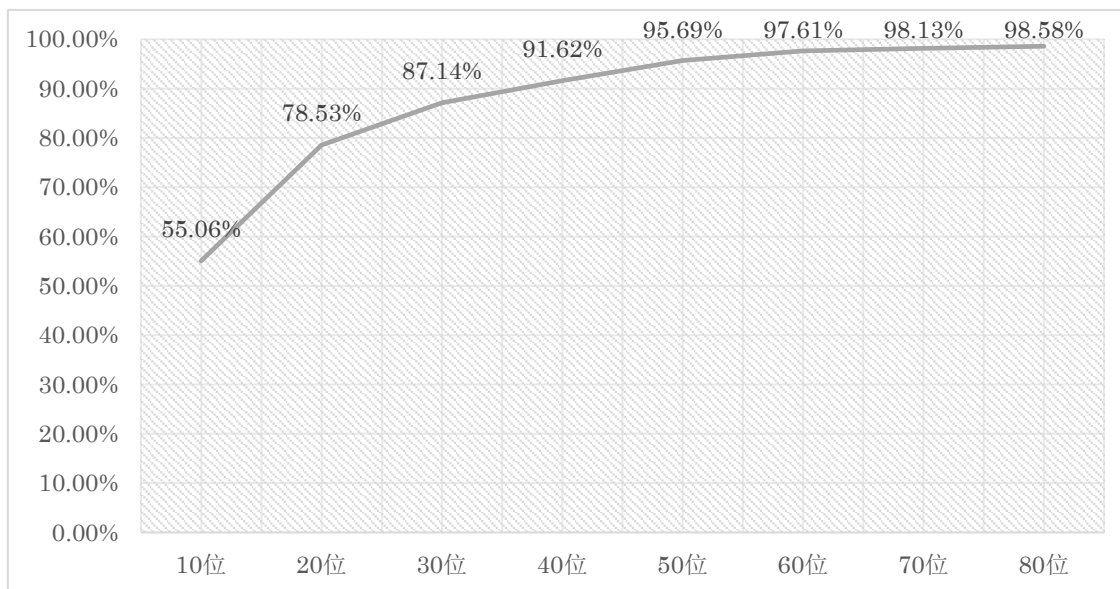
表 9 ヘッジ語形の主成分得点と頻度率

順位	ヘッジ	主成分 得点	頻度率	順位	ヘッジ	主成分 得点	頻度率
1	ようだ	326.5	5.37%	43	～にくい	6.8	0.13%
2	が	306.0	5.29%	44	のではないか	6.3	0.09%
3	という	240.8	3.86%	45	せっかく	6.3	0.14%
4	ね	182.0	15.10%	46	と考えられる	5.9	0.08%
5	～的	168.1	2.91%	47	ふう	5.9	0.32%
6	たり	129.4	2.97%	48	しばらく	5.9	0.15%
7	んです	112.3	8.50%	49	っていう	5.5	0.85%
8	けれど	90.8	7.64%	50	気がする	5.5	0.20%
9	だけ	83.4	1.84%	51	感覚	5.5	0.10%
10	だろう	79.9	1.59%	52	けっこう	5.2	0.94%
11	ほう	75.7	3.11%	53	もしかしたら	4.6	0.15%
12	とか	57.8	4.84%	54	風	4.5	0.07%

13	でしょう	53.7	1.47%	55	～げ	4.4	0.07%
14	しそうだ	48.0	1.31%	56	なんとか	4.1	0.24%
15	と思う	47.4	2.50%	57	やや	3.5	0.05%
16	かな	45.7	1.96%	58	大体	3.0	0.19%
17	ちょっと	38.0	5.18%	59	少々	2.4	0.03%
18	かも	36.6	1.18%	60	っぽい	2.2	0.08%
19	感じ	31.4	1.35%	61	～得る	2.1	0.03%
20	頃	28.1	0.58%	62	必ずしも	1.8	0.03%
21	くらい	27.1	1.59%	63	単なる	1.8	0.03%
22	少し	26.8	0.51%	64	ある程度	1.8	0.05%
23	ただ	26.0	0.77%	65	大抵	1.7	0.04%
24	みたいだ	21.5	1.49%	66	少ない	1.6	0.02%
25	なんか	18.3	2.20%	67	場合もある	1.6	0.03%
26	系	15.7	0.29%	68	とりあえず	1.6	0.18%
27	ほとんど	14.7	0.29%	69	なんとなく	1.6	0.05%
28	多くの	14.3	0.20%	70	だいたい	1.6	0.08%
29	たぶん	14.0	1.00%	71	一応	1.4	0.25%
30	関係	13.7	0.26%	72	恐れがある	1.1	0.02%
31	なんて	13.0	0.36%	73	ほど	1.1	0.02%
32	やはり	12.9	1.79%	74	とは限らない	0.9	0.01%
33	可能性	10.7	0.16%	75	たしか	0.9	0.05%
34	おそらく	10.3	0.22%	76	ように思われる	0.8	0.01%
35	と思われる	10.1	0.14%	77	んじゃないの	0.8	0.07%
36	あたり	10.1	0.20%	78	めく	0.7	0.01%
37	もちろん	10.0	0.30%	79	概ね	0.6	0.01%
38	あまり	9.4	0.88%	80	万一	0.5	0.01%
39	らしい	9.1	0.25%	81	あいにく	0.3	0.00%
40	方向	8.9	0.17%	82	あの(う)	0.2	1.41%
41	まあ	8.5	1.82%	83	ように考えられる	0.1	0.00%

42	なかなか	7.6	0.29%				
----	------	-----	-------	--	--	--	--

図 5 上位ヘッジ語形の累計構成比



上図で明らかなように、上位 20 語まではカバー率が一気に上がっており、40 語を超えると、その傾きが非常に緩やかになる。頻度率に注目すると、上位 20 語までで 78.53%、上位 30 位までで 87.14%となる。四捨五入すると上位の 30 種のヘッジ語形で全体の頻度のおよそ 9 割を占めていることが確認された。これら 30 種のヘッジ語形はヘッジ研究の際のサンプルとして使用できるのみならず、学習者のヘッジ学習の指針が提供できることにもなり、日本語学的にも日本語教育学的にも利点が多いと考えられる。

8.2.6 まとめ

以上、8.2 では、話し言葉・書き言葉差とジャンル差の違いによって、ヘッジ語形の使用頻度がどう異なるか調査し、また、これらの影響をあまり受けずに安定して出現する高頻度ヘッジ語形の抽出を試みた。分析の結果、以下の 4 つのことが言える。

まず、言語環境とヘッジ語形使用量の関係については、話し言葉におけるヘッジ語形の出現頻度が書き言葉の 3 倍以上であることが明らかになった。また、ジャンル差におけるヘッジ語形使用状況の違いについて、話し言葉では I>RP>CEJC>D>ST、書き言葉では B2>B1>PM>OT>PN の順に、ヘッジ語形の出現頻度が低くなっていることが確認された。

特に、情報提供を主たる目的とするテキストより、筆者のスタンスが自由に表出される小説系・創作系テキストのほうが、独話系テキストより、対話系テキストのほうが、ヘッジ語形が多用されることが明らかになった。

つづいて、高頻度ヘッジ語形については、話し言葉と書き言葉それぞれにおいて高頻度に出現するヘッジ語形に関して、上位 10 語中半分しか一致しておらず、ヘッジ語形の振る舞いは話し言葉と書き言葉間で大きな差異があることが示唆された。また、ジャンル間の高頻度ヘッジ語形の一致度が低く、ヘッジ語形の振る舞いはジャンル差にも強く影響されることが示唆された。

3 点目として、ジャンルとヘッジ語形の関係を見るコレスポネンス分析を通して、書き言葉より、話し言葉のほうがジャンル差に影響されやすいことや、各種のヘッジ語形が、情報伝達の方向性と場面の特定性の 2 観点によって 5 カテゴリーに分類できることが確認された。

4 点目は、異なるジャンルにおいて安定的かつ高頻度で使用されるヘッジ語形を 30 語に絞られたことである。それらの 30 種のヘッジ語形の使用割合は全体の 9 割近くを占めているため、これからのヘッジ研究を行ううえで、あるいはヘッジ語形を学習するうえで重要な語が特定されたといえる。

8.3 ヘッジ語形の典型的語義

8.2 では、言語環境がヘッジ使用に及ぼす影響を概観したうえで、言語環境ごとの頻度を主成分分析で合成し、典型的ヘッジ語形の抽出を行った。しかし、これらのヘッジ語形が持つ複数の語義の頻度的な優先性については調査しておらず、ヘッジ語形とその意味機能との関係は明確ではない。実際、語形と意味機能は別であり、コーパスにおける高頻度語形であっても、ヘッジ以外の語義で多く使用されているという可能性もある。そこで、主要なヘッジ語形を取り上げ、それらが持つ語義を整理し、コーパス調査によって、典型的語義を特定することを試みたい。

さて、主要なヘッジ語形について、語義別の頻度調査を行うためには、信頼できる語義区分の情報が必要となる。こうした目的に関しては辞書や先行研究が使われることが多いが、それらの記載はしばしば大きくずれている。ここでは、典型的ヘッジ語形の 1 つである「ちょっと」を取り上げ、『スーパー大辞林 3.0』、『広辞苑』(第 6 版)、『新明解国語辞典』(第 6 版)の 3 つの辞書と、岡本・斎藤 (2004) で紹介されている語義 (意味機能) を見てみよう。

表 10 国語辞書における「ちょっと」

『新明典』	『広辞苑』	『大辞林』	岡本・斎藤 (2004)
①数量・程度がわずかであって、問題にするほどでもない様子	①わずか, 少し	①数量・程度などがわずかなさま。時間が短いさま。	①依頼や, 希求, 指示行為の負担をやわらげる
	②ほんのついでに。		②否定的内容の前置き
②たいしたことではないとばかりに無視するわけにもいかない程度である様子	③(逆説的に)存外。かなり。	②軽い気持ちで行うさま。特に何という考えもなく行うさま。	③断りを受けやすくする
			④呼びかけ
③否定表現と呼応して, その可能性はほとんどないと判断する様子	④(否定の語を伴って) 少々のことでは。そう簡単には。	③大層というほどではないが, かなりの程度・分量であるさま。	⑤とがめ
④同等以下の相手に呼びかける語	⑤しばらく。呼びかけにも使う	④(下に打ち消しの語を伴って) 簡単には(…できない)。	⑥間つなぎ

上表を見ればわかるように, 各辞書や先行研究が示す「ちょっと」の語義の数や内容はまちまちであり, このままでは, 語義別頻度調査を行うことができない。

そこで, 本節では, まず, 9種の主要ヘッジ語形を取り上げ, 既存辞書や先行研究に掲載された語義を網羅的に書きだしたうえでそれらを整理する。その後, コーパスから 200例の実例を取り出し, 語義別に分類を行い, 語義別頻度の特定と, ヘッジ語形ごとの典型的語義の特定を目指す。

8.3.1 研究目的とリサーチクエスチョン

本節では, 主要ヘッジ語形について, 既存辞書や先行研究で示された語義を網羅的に書きだしたうえで重複を除いて整理し, 語義別の頻度調査を行うことで, ヘッジ語形ごとの典型的語義の特定を目指す。この目的に沿い, 以下の2つのリサーチクエスチョン (RQ) を設定した。

RQ1 主要ヘッジ語形について、辞書および先行研究で認められた語義はそれぞれいくつあるか。また、それらはどのように整理されるか。(辞書・先行研究の記載語義)

RQ2 主要ヘッジ語形の持つ各語義のうち、典型的なものはどれか。また、意味緩和機能が筆頭語義となる語形とそうでない語形にはどのようなものがあるか。(典型的語義)

8.3.2 調査項目

8.2.3 で述べたように、12種の先行研究中、1種以上でヘッジと認定された語は83種ある。ただし、83語のヘッジ語形のすべてに対して、辞書や先行研究に記載された語義の網羅的調査と整理を行い、コーパス頻度を調査するには膨大な時間がかかる。そこで、本節では、話し言葉・書き言葉両方において高頻度で使用されるヘッジ語形を分析サンプルとして抽出し、それらの典型的語義の特定を行うこととする。

83種のヘッジ語形を品詞別に分類した場合、10種以上の語形が含まれる品詞としては、副詞(29種)、助詞(13種)、動詞(10種)、名詞(10種)の4つがある。ここでは、全体頻度が上位となる助詞、副詞、名詞の3品詞に絞り、それぞれの上位5語を調べる。その後、話し言葉・書き言葉の両方で共通して上位5語に含まれるヘッジ語形を調べる。

表 11 3品詞別の高頻度ヘッジ語形(話し言葉・書き言葉別)

順位	助詞		副詞		名詞	
	話し言葉	書き言葉	話し言葉	書き言葉	話し言葉	書き言葉
1	<u>ね</u>	<u>が</u>	<u>ちょっと</u>	少し	<u>ほう</u>	<u>ほう</u>
2	<u>けれど</u>	だけ	まあ	ほとんど	<u>感じ</u>	<u>頃</u>
3	とか	<u>ね</u>	<u>やはり</u>	<u>やはり</u>	ふう	関係
4	<u>が</u>	<u>たり</u>	たぶん	<u>ちょっと</u>	<u>頃</u>	可能性
5	<u>たり</u>	<u>けれど</u>	けっこう	あまり	あたり	<u>感じ</u>

3品詞の上位5語に注目すると、重複するヘッジ語形は助詞の「が」、「たり」、「けれど」、「ね」、副詞の「ちょっと」、「やはり」、名詞の「ほう」、「頃」、「感じ」、合わせて9種であった。そこでこれらの9種のヘッジ語形を分析の対象とする。

8.3.3 使用するデータ

8.2.2 で用いた3種のコーパスのうち、話し言葉コーパスから100例(I-JASから50例

／CEJC から 50 例), 書き言葉コーパス (BCCWJ の一部) から 100 例, 合計 200 例の分析用サンプルをランダム抽出で収集し, それらを語義別に分類する。

8.3.4 分析手順

RQ1 では, まず, 『スーパー大辞林 3.0』, 『広辞苑』 (第 6 版), 『新明解国語辞典』 (第 6 版) の 3 つの辞書における 9 種のヘッジ語形の語義を全て書き出し, 辞書間で重複する語義をまとめて整理する。ただし, 辞書の語義だけでは不十分であると判断した場合に限って, 先行研究から補足を加える。

RQ2 では, 9 種のヘッジ語形について, コーパスから各 200 例 (書き言葉・話し言葉 100 例ずつ) の用例をランダム抽出し, どの語義がどの程度使用されているかを確認するため, 個々の用例を, 上記で定められた語義別に分類する。分類は筆者が単独で行い, 判断に困る場合は言語学の知見を有する日本語母語話者の助言を得ることとした。その後, 各語義の使用割合を算出し, 閾値 10%以上の語義を当該ヘッジ語形の典型的語義とみなす。

以下は, 「ちょっと」の用例のうち, 冒頭の 10 例を分類したものである。なお, 語義コードについては後述する。

表 12 語義区分のコーディングの例 (「ちょっと」)

「ね」	コーパス用例	語義判定 (コード)
用例 1	「いくらでもにらんで下さい」と, 久井は言った。「そういう目で見られるのは慣れてます」。妹尾は, <u>ちょっと</u> 口調を変えた。	量・程度がわずかである (CH1)
用例 2	声をかけると, 「本当ですね」と, <u>ちょっと</u> はにかんで応じてくれました。	量・程度がわずかである (CH1)
用例 3	まったく人生を楽しむということにかけて, 彼女たちほど有能な人種も他に <u>ちょっと</u> 見当たらない。	否定表現と呼応して, その可能性はほとんどないと判断する様子 (CH2)
用例 4	すると彼は, 自分の戦術など, 歴史書を読み, その教を学ぶことで身につけたのだと答えました。 <u>ちょっと</u> 信じられない気がしました。	否定表現と呼応して, その可能性はほとんどないと判断する様子 (CH2)

用例 5	A: 5歳はこうみたいな, わかってるこっちゃんない。 B: ま, <u>ちょっと</u> ね, だってちっちゃい子には注意向けるだろうしね。	間つなぎ (CH6)
用例 6	私たちは頑張ってやるけれども, 治すのは <u>ちょっと</u> 難しいかもしれない。	否定的な内容の前置き (CH4)
用例 7	あそこは <u>ちょっと</u> 加減してほしいと思うよね。ケチだあとと思わせる内容だから。	依頼や希求の負担をやわらげる (CH5)
用例 8	心配するな。それより, お前, <u>ちょっと</u> 聞いて回ってくれないか。	依頼や希求の負担をやわらげる (CH5)
用例 9	A: なんか旅行まで行って時間に縛られるのは <u>ちょっと</u> … B: わかります。	言いにくい後件を省略し, 話し手の心理的負担を弱める (CH7)
用例 10	<u>ちょっと</u> , 和也くん, デザートのプリンがないんじゃない。	呼びかけ (CH3)

この中には, 判定が困難であったものもある。たとえば, 用例 8 の語義は CH1 とも CH5 とも考えられる。今回は後接する述部が「てほしい」, 「てくれないか」など依頼や希求という点を重視して「CH5」という判定を行った。このほか, 用例 6 の語義は CH1 とも CH4 とも考えられる。今回は修飾される語が否定的な内容かどうかを重視して, 「難しい」, 「困る」, 「厳しい」などの語が後接する場合, 「CH4」という判定を行った。

こうした判断を 9 語形×200 用例=全 1,800 用例について行った後, 最後に, 語形別に, 典型語義が意味を緩和するヘッジ機能を有しているかどうかを調査する。

8.3.5 結果と考察

8.3.5.1 RQ1 辞書・先行研究の記載語彙

辞書および先行研究において示された主要ヘッジ語形の語義をすべて書き出し, 重複をまとめて整理した結果, 各語形の語義数に関して, 以下の表が得られた。

表 13 辞書および先行研究で認められた語義の数

ヘッジ語形	大辞林	広辞苑	新明解	先行研究	単純和	重複削除後語義数
ね	5	2	4	5	16	6
が	8	5	6	(0)	19	7
けれど	7	2	4	(0)	13	6
たり	3	3	3	(0)	9	3
ちょっと	5	5	4	6	20	8
やはり	3	2	3	(0)	8	2
頃	3	4	1	(0)	8	4
感じ	3	3	4	(0)	10	3
ほう	6	5	5	(0)	16	6
合計	41	31	33	13	119	45

注：(0)は、当該語形に関しては、先行研究を参照していない（または該当する先行研究が存在しない）ことを意味する。

上表よりわかることは、前述のように、辞書・先行研究間の食い違いが予想以上に大きいという事実である。たとえば、前述の「ちょっと」について言えば、語義の数は4～6の幅があり、「ね」に至っては2～5と幅はさらに大きくなっている。9種の語形について、調査した3つの辞書および先行研究で言及される語義の数は延べで119種となるが、筆者が重複を整理した結果、それらは45種に整理することができた（詳細は本論文末尾にある付表2～10を参照）。

以下は、9種のヘッジ語形（ね：NE，が：GA，けれど：KE，たり：TA，ちょっと：CH，やはり：YA，頃：KO，感じ：KA，ほう：HO）ごとの語義の一覧である。便宜上，NE1，NE2のように順番を付しているが，これらは暫定的に付したもので，この段階では頻度的な優先性は考慮していない。

表 14 9 つのヘッジ語形の語義

	コード	語義
1	NE1	同意・共感を表す
2	NE2	発話内容の確認
3	NE3	念を押したり，相手を納得させようとしたりする時に，聞き手の感情や心理に配慮して使用される
4	NE4	親しみをこめて呼びかけ，または注意を喚起したり，念を押したりするのに用いる
5	NE5	聞き手を自分の話題に引き込むため，語勢を添えたり，言いよどみを埋めたりするのに用いる
6	NE6	質問・疑念・反問を表す
7	GA1	前置きを後に結びつける
8	GA2	関連の有る二つの事柄を結びつける
9	GA3	対比的な関係にある二つの事柄を結びつける
10	GA4	前件のいかにかわらず，それと無関係に後件が行われることを表わす
11	GA5	事実と反対の事柄や実現しにくい事柄が実現するのを望む気持ちを表す
12	GA6	あとを言いさしにしたような形で，婉曲に述べる気持を表わす
13	GA7	ののしる気持ちを表す（名詞を受ける）
14	KE1	前置きを後に結びつける
15	KE2	二つの事柄を単に結びつける
16	KE3	対比される二つの事柄を結びつける
17	KE4	事実と反対の事柄や実現しにくい事柄が実現するのを望む気持ちを表す
18	KE5	あとを言いさしにしたような形で，えんきょくに述べる気持を表す
19	KE6	軽蔑し，軽んじる気持ちを添える
20	TA1	動作の並行・継起することを表す
21	TA2	一つの動作や状態を例示的にあげ，他に同様のことがあることを暗示する
22	TA3	命令・勧誘の意を表す
23	CH1	数量・程度がわずかである

24	CH2	(打ち消し語を伴って), 簡単には (できない)
25	CH3	間つなぎ
26	CH4	否定的な内容を断定することを避ける
27	CH5	依頼や希求, 指示行為の負担をやわらげる
28	CH6	断りや負の評価など言いにくい後件を省略し, 話し手の心理的負担を弱める
29	CH7	呼びかけ
30	CH8	とがめ
31	YA1	予想通りに, いろいろ考えてみても結局は。一般的な常識・うわさなどに違わない
32	YA2	過去, または他と同様であることを示す
33	KO1	時を, その前後を含めて漠然と指す
34	KO2	時節。時期。文語的な言い方
35	KO3	適当な時期。頃合い。
36	KO4	ある期間。日数。文語的な言い方
37	KA1	感覚器官に受ける刺激によって生じる反応, 感覚
38	KA2	物事に接して感じたこと。印象や感想
39	KA3	そのものらしい味わいや雰囲気
40	HO1	方角。方向。方位
41	HO2	話題のものをぼかして, その部面であることをいう
42	HO3	並べていくつか考えられるものの, 1つ
43	HO4	どちらかという, そういう性質のあるもの
44	H05	方がいい。相手にそうするよう勧める (しないよう忠告する) 意を表す
45	HO6	方法, 手段

以下, これらの語義別で頻度調査を行う。

8.3.5.2 RQ2 典型的語義

話し言葉・書き言葉データから選ばれた 200 例を語義別に区分したところ, 各語義の数

と占有比 (%) は以下のようになった。

表 15 語義の使用割合 (ね) 表 16 語義の使用割合 (が) 表 17 語義の使用割合 (けれど)

語義	頻度	%
NE1	102	51
NE2	7	3.5
NE3	51	25.5
NE4	3	1.5
NE5	28	14
NE6	9	4.5
合計	200	100

語義	頻度	%
GA1	16	8.6
GA2	101	54.6
GA3	39	21.1
GA4	13	7
GA5	5	2.7
GA6	11	5.9
GA7	0	0
合計	185	100

語義	頻度	%
KE1	12	6
KE2	75	37.5
KE3	70	35
KE4	2	1
KE5	41	20.5
KE6	0	0
合計	200	100

表 18 語義の使用割合 (頃) 表 19 語義の使用割合 (感じ) 表 20 語義の使用割合 (ほう)

語義	頻度	%
KO1	200	100
KO2	0	0
KO3	0	0
KO4	0	0
合計	200	100.0

語義	頻度	%
KA1	5	2.5
KA2	193	96.5
KA3	2	1.0
合計	200	100.0

語義	頻度	%
HO1	37	18.5
HO2	6	3.0
HO3	112	56.0
HO4	6	3.0
HO5	39	19.5
HO6	0	0.0
合計	200	100.0

表 21 語義の使用割合
(やはり)

語義	頻度	%
YA1	190	95
YA2	10	5
合計	200	100

表 21 語義の使用割合
(たり)

語義	頻度	%
TA1	108	54
TA2	92	46
TA3	0	0
合計	200	100

表 23 語義の使用割合
(ちょっと)

語義	頻度	%
CH1	110	55.0
CH2	4	2.0
CH3	25	12.5
CH4	34	17.0
CH5	11	5.5
CH6	3	1.5
CH7	13	6.5
CH8	0	0
合計	200	100

下記は、9種のヘッジ語形ごとに10%以上の構成比を有する典型的語義のリストである。なお、語義ごとのヘッジ性の有無は、「陳述された意味の緩和」という機能が当該語義にはつきり含まれているか否かという点で筆者が行った主観的判断に基づく。

表 24 典型的語義のヘッジ性

語形	コード	占有比	語義	ヘッジ性	コーパス用例
ね	NE1	51.0	同意・共感を表す	弱	わたしたちにとってのい かにも時計らしい時計の ありかたです <u>ね</u> 。
	NE3	25.5	念を押したり、相手を 納得させようとした りする時に、聞き手の 感情や心理に <u>配慮し</u> て使用される。	強	僕が何ゆってもそうゆう ふうに言われるんだっ たらもう続けられない <u>ね</u> 。
	NE5	14.0	聞き手を自分の話題 に引き込むため、語勢	強	これ <u>ね</u> 、千葉の九十九里 は <u>ね</u> 、すごい甘いんです

			を添えたり、 <u>言いよど</u> <u>み</u> を埋めたりするた めに、文節にさしま れる		よ。
が	GA2	54.6	関連の有る二つの事 柄を結びつける	弱	駅からは少し歩いた記憶 がありますが、近くにス ーパーがある。
	GA3	21.1	対比的な関係にある 二つの事柄を結びつ ける	弱	葉がザワッと鳴る。おお きな木なら、暗がりや木 蔭をつくる。根がある が、根は見えない。
けれど	KE2	37.5	二つの事柄を単に結 びつける	弱	まだ決定はしてないけ ど、すごく面白い空間に なると思うよ。
	KE3	35.0	対比される二つの事 柄を結びつける	弱	なんか人がたくさん集ま ると、いいこともある <u>け</u> <u>れども</u> 、良くないことも おきるじゃないですか
	KE5	20.5	あとを言いさしにし たような形で、 <u>婉曲に</u> 述べる気持を表わす。	強	てっきり仲間みたいな話 しに行くかと思ったんで すけど…
たり	TA1	54.0	動作の並行・継起する ことを表す	弱	悲しくなったり、怒りが こみ上げてきたり、感情 は揺れ動いた。
	TA2	46.0	一つの動作や状態を 例示的にあげ、他に同 様のことがあること を <u>暗示する</u>	強	普段お買い物の際は一人 で自転車でなんか遠くま で行ったりしてるみたい で。
ちよっ	CH1	55.0	数量・程度がわずかで	弱	声をかけると、「本当です

と			ある		ね」と、ちょっとはにかんで応じてくれました。
	CH4	17.0	否定的な内容を断定することを <u>避ける</u>	強	私たちは頑張ってやるけれども、治すのはちょっと難しいかもしれない。
	CH3	12.5	間つなぎ	弱	しかもちょっと今年さ、めっちゃ繰越金あるんだ。多分来年使ってくれ。
やはり	YA1	95.0	予想通りに、いろいろ考えてみても結局は。一般的な常識・うわさなどに違わないさま。	弱	やはり駅というものは一つの社会の顔であるわけで、ましてや首都北京の中央駅であるから。
頃	KO1	100.0	時を、その前後を含めて <u>漠然と指す</u> 語。	強	A: 学校の、学校はどうでした、学校は好きでしたか？ B: あー、好きでしたね。小学校の頃も、中学校も高校も好きでしたね。
感じ	KA2	96.5	物事に接して感じたこと。 <u>印象や感想</u>	強	男谷は眼光の鋭い鍛えあげた鋼鉄のような感じで、身長は五尺五、六寸で、そう小さい方ではないが…
ほう	HO3	56.0	並べていくつか考えられるものの、1つ	弱	若い人たちは古いものを知らないのに、決まって近代的かつ進歩的なもののほうを好みます。
	HO5	19.5	方がいい。相手にそうするよう勧める(しな	強	初恋の人には会わないほうがいいよね。

			いよう忠告する) 意を表す		
	HO1	18.5	方角。方向。方位	弱	橋の、先のほうに、と言いますか、橋の横の川では、子供が二人遊んでます。

以上より、まず、9種のヘッジ語形の典型的語義はそれぞれ1~3種に絞り込めること、また、9種のヘッジ語形のうち、典型語義中の筆頭項目(単独の場合はその項目)がはっきりしたヘッジ性を持つものは「頃」と「感じ」の2種に限られること、さらに、筆頭以外を含めて典型語義の中にはっきりしたヘッジ性が含まれるのは、前出の2語に加え、「ね」、「けれど」、「ちょっと」、「たり」、「ほう」の7種であること、一方、「が」と「やはり」の2語は典型語義の中にヘッジ的な語義が含まれないことが明らかになった。

今回の調査結果は、すでに述べたように、実際の言語使用においては、語形とその意味機能は必ずしも一致せず、いわゆる高頻度ヘッジ語形であっても、実際にはヘッジとして機能していない場合が少なくないことを証明する結果となった。この点をより深く考察するには、母語話者による内省調査が必要になってくるだろう。

8.3.6 まとめ

本節では、主要ヘッジ語形9種を選び、それらの語義を整理したうえで、コーパス用例を質的に分類することで、個々の典型語義の解明を行った。

まず、RQ1(主要ヘッジ語形について、辞書および先行研究で認められた語義はそれぞれいくつあるか?また、それらはどのように整理されるか?)については、(1)同じ語であっても辞書・先行研究によって認定される語義の数にかなりのずれがあること、(2)重複を整理した場合、9種の語形が有する語義の数は2~8となることなどがわかった。

次に、RQ2(主要ヘッジ語形の持つ各語義のうち、典型的なものはどれか?また、意味緩和機能が上位を占める語形とそうでない語形にはどのようなものがあるか?)については、(1)9種のヘッジ語形が有する45の語義のうち、使用割合が10%以上である典型的語義が19種となること、(2)9種のヘッジ語形のうち、典型語義中の筆頭(単独)項目がヘッジ性を持つものは、「頃」と「感じ」の2種のみであること、一方、「が」と「やはり」の2

種は典型語義の中にヘッジ的な語義が含まれないことが明らかになった。

8.2 節で典型的なヘッジ語形を特定し、さらに、8.3 節で主要ヘッジ語形に関して典型的な語義を特定したことで、今後のヘッジ研究の前提を作ることができたと言えるだろう。また、ヘッジ語形とヘッジ的な意味機能が分離している場合が少なくないことが確認されたので、この点については母語話者による内省調査・直観調査の必要性があると思われる。

8.4 ヘッジ機能に対する母語話者意識

8.1 ではすでに述べたように、日本語において、意味の陳述を緩和する機能は極めて重要である。それを実現させる「ヘッジ」について研究が盛んに行われてきた。8.2 では典型的ヘッジ語形の選定をしたわけであるが、ヘッジ語形が文脈によって意味緩和機能を持ちたり持たなかったりすることもありうる。いわゆるヘッジは、どのような文脈において常に同等のヘッジ機能（意味緩和機能）を実現するわけではない。例えば、以下はヘッジとなりうる「けれども」の作例である。

(11) つまらない物ですけれども、お受け取りください。

(12) 登りは苦しいけれども、山頂は素晴らしい。

(13) そろそろお時間ですけれども…

この 3 つの例は同じく「けれども」が使用された例であるが、どちらがヘッジの機能を果たしているのかを問えば、多数の人が(11)と(13)と答えるだろう。さらに、陳述の意味を緩和する度合いがより強いのはどちらかを問えば、(11)と答える人が多いと思われる。このように、「ヘッジ」というものが表層レベルと深層レベルで異なる振る舞いをしており、この多層性の問題はヘッジの研究をするにあたって留意すべき点である。

そこで、以下では、ヘッジの多層性を整理してみる。まず、ヘッジ機能を有するかどうかという観点から、本研究では、いわゆるヘッジを意味緩和機能を持つことがありうる語形（Theoretical Hedge : TH）と、ヘッジ機能が実現する語形（Actual Hedge : AH）に区分して議論を行う。さらに、実現態ヘッジの中でも、意味用法の違いにより意味緩和の度合いに軽重が存在しうる。そこで、緩和効果の度合いによって実現態ヘッジを、緩和効果がほぼなしのもの、緩和効果が強いものおよび弱いものの 3 つに分けて議論する。

表 25 ヘッジ語形の区分

ヘッジ（の語義も有する）語形		
可能態ヘッジ (Theoretical Hedge: TH)	実現態ヘッジ (Actual Hedge: AH)	
緩和効果はなし	緩和効果（弱）	緩和効果（強）
①登りは苦しい <u>けれども</u> 、山頂は素晴らしい。	②そろそろお時間です <u>けれど</u> も…	③つまらない物です <u>けれども</u> 、お受け取りください。

これらの点を厳密に判断するには、すべての用例を分析者が読み込み、文脈をふまえ、それらの「ヘッジ度」を個別的に決定していくほかないが、数百万語を超える大規模コーパスデータに対して、こうしたコーディング作業を実施することは現実的ではない。そこで本研究では、8.3 で扱った 9 種のヘッジ語形をサンプルとし、それらが有する語義ごとにコーパスから用例を抽出し、7 名の母語話者に当該語形の有する意味緩和機能の強弱を判断させる。得られたデータに基づき、ヘッジ語形の意味緩和強度の計量化を試みる。

ヘッジ語形の意味緩和強度に注目する場合、いくつかの点について調査を行う必要がある。

まず、1 点目は、母語話者による意味緩和度の判定に、話者属性がどう影響するかということである。断り場面のヘッジ使用状況を調査した Lauwereyns (2002) では、女性は男性よりも、若者は年配者よりも多くのヘッジを使用したことが報告されている。Lauwereyns が指摘したように、性別や年代がヘッジの使用に影響を与えうることを考えれば、母語話者のヘッジに対する意味緩和強度の認識も、話者属性に関係していると考えられる。このため、母語話者内省調査を行う際に、協力者の性別や年代、職業などの話者属性を考慮に入れながら、バランスよくデータをとり、ヘッジ強度に対する母語話者の認識は話者属性に関係しているかどうかを明らかにする必要があると考えられる。

2 点目はヘッジ語形が持つ多様な意味用法のうち、意味緩和度が強いと感じられるヘッジ語形・語義はどれかという点である。従来の研究では、ヘッジは一枚岩と見なされている。しかしながら、すでに述べられたように、ヘッジ語形は多層性を持つ概念であり、ヘッジ機能を有するかどうかにより、ヘッジ語形が可能態ヘッジ、実現態ヘッジに分けられる。さらに、実現態ヘッジが表す意味緩和度には強弱が存在する。この点について、本研究では、意味緩和度を語形レベルと語義レベルでそれぞれ比較し、意味緩和度が強いと感じられるへ

ッジ語形・語義はどれかを特定する。

3点目は、判定者の個体差がヘッジ強度の判定結果にどう関係しているかという点である。男女差の影響を議論するとき、2つの性別をそれぞれ群とみなして平均頻度を比較するのが一般的であるが、平均を比較するデメリットとして、群内の個体差影響がほとんど考慮されていないことが指摘されている。この点については、本節では、群単位で比較するだけでなく、個々の判定者のつけたスコアを生かし、多変量解析手法等を用いることで、判定者、ヘッジ語形、ヘッジ語形の有する語義が、それぞれ、どのような関係になっているかを考察する。

8.4.1 研究目的とリサーチクエスチョン

以上を踏まえ、本節では、母語話者属性がヘッジ語形の意味緩和機能の認識に与える影響を解明し、強い意味緩和機能を有するヘッジ語形・語義の特定に加え、母語話者属性別に見た強い意味緩和機能を有するヘッジ語形の特定を目的とする。具体的に検討するRQは以下の通りである。

RQ1 母語話者による意味緩和度の判定に、話者の性別はどの程度影響しているか。

RQ2 母語話者による意味緩和度の判定に、話者の職業はどの程度影響しているか。

RQ3 母語話者にとって、意味緩和度が強いと感じられるヘッジ語形・語義にはどのようなものがあるか。

RQ4 9種のヘッジ語形が持つ全37種の語義は、どのようにグルーピングできるか。

8.4.2 手法

8.4.2.1 内省調査の質問項目

すでに述べられたように、ヘッジ語形は複数の意味で用いられることがある。それぞれの意味用法について、ヘッジ語形が意味緩和機能を持つかどうか、または、意味緩和強度がどの程度かは、文脈によって決定される。なお、母語話者内省調査を実施するにあたって重要となるのは、語の持つ個々の語義について、文脈付きの用例を調査協力者に提示するということである。そこで、本研究では、5.3で得られた結果を踏まえ、9ヘッジ語形の有する45種の語義から、使用割合が閾値1%以上の37語義を調査対象とし、コーパスから4例ずつ用例を抽出し、母語話者調査用のサンプル問題(計148項目)を作成した。(詳細は本論文末尾にある付表11を参照)

8.4.2.2 内省調査の実施方法

ヘッジ語形の意味緩和強度を計量化するため、5段階法によるアンケート調査を実施する。図6は実際のアンケート調査の1例である。調査票の配布と回収はネットで行われ、7名の有効回答が得られた。協力者の性別や年代、職種などに関する情報を取得するために、調査の最初に属性設問が設けられている。表26は協力者の属性情報を示している。

図6 母語話者内省調査の例

下線部の語があることで、意味がどのぐらい弱められていると感じますか。

例：
その一、えっと一、大学の方の色々課題とかがちょっと多くなってきておりまして、ちょっと、今の段階でもうかなり、ちょっと厳しいですね。

全く弱められていない 1 2 3 4 5 かなり弱められている

表26 母語話者内省調査の協力者情報

協力者	性別	年齢	職種
A	女	20～39才	日本語教師
B	男	40～59才	日本語教師
C	女	20～39才	学生
D	男	20～39才	会社員
E	女	20～39才	会社員
F	男	20～39才	学生
G	女	20～39才	ほか

得られた7つの回答を見ると、協力者の性別の内訳は男3名、女4名となり、職種は日本語教師・学生・会社員それぞれ2名、ほかを選んだ人が1名である。年齢については、7人のうち、6人の年代が20～39才に属する。協力者の属性から見れば、このデータを用いて、意味緩和度判定に男女差と職業差がどう影響を及ぼすかについて分析を行うことができるが、年代差分析は割愛する。

8.4.2.3 研究手順

RQ1 と RQ2 では、母語話者による意味緩和度の判定に、話者の性別・職業はどの程度影響しているかを明らかにする。まず、得られたアンケート調査結果に基づき、選択肢の 1～5 に 1 点から 5 点のスコアをつける（詳細は本論文末尾にある付表 12 を参照）。点が高くなればなるほどヘッジ語形の意味緩和度が強くなることを意味する。次に、2 つの性別（男と女）と 3 つの職業（日本語教師・会社員・学生）ごとに、148 項目のスコアの平均値を算出する。2 つのグループ（男と女）の差が統計学的に有意かどうかを確認するために、t 検定を行う。3 つのグループ（日本語教師・会社員・学生）の差の優位性に関しては一元配置分散分析を行う。

RQ3 では、9 つのヘッジ語形と 37 の語義タイプについて、それぞれ意味緩和度のスコアの平均値に基づき、スコアの高い順に意味緩和度が強いと感じられるヘッジ語形・語義を抽出する。

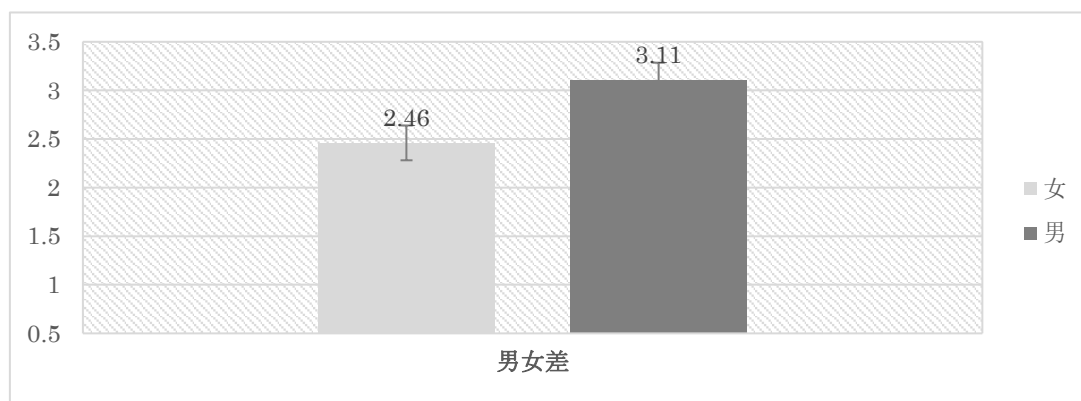
RQ4 では、9 種のヘッジ語形が持つ全 37 種の語義はどのようにグルーピングできるかを確認するため、第 1 アイテムを 37 種の語義とし、第 2 アイテムを 7 人の母語話者の判定スコアとするクロス表を作成し、コレスポンデンス分析を行う。

8.4.3 結果と考察

8.4.3.1 RQ1 男女差

RQ1 では、意味緩和度判定における男女差と職業差に注目する。以下の図は男女差を比較した結果である。

図 7 意味緩和度判定における男女差

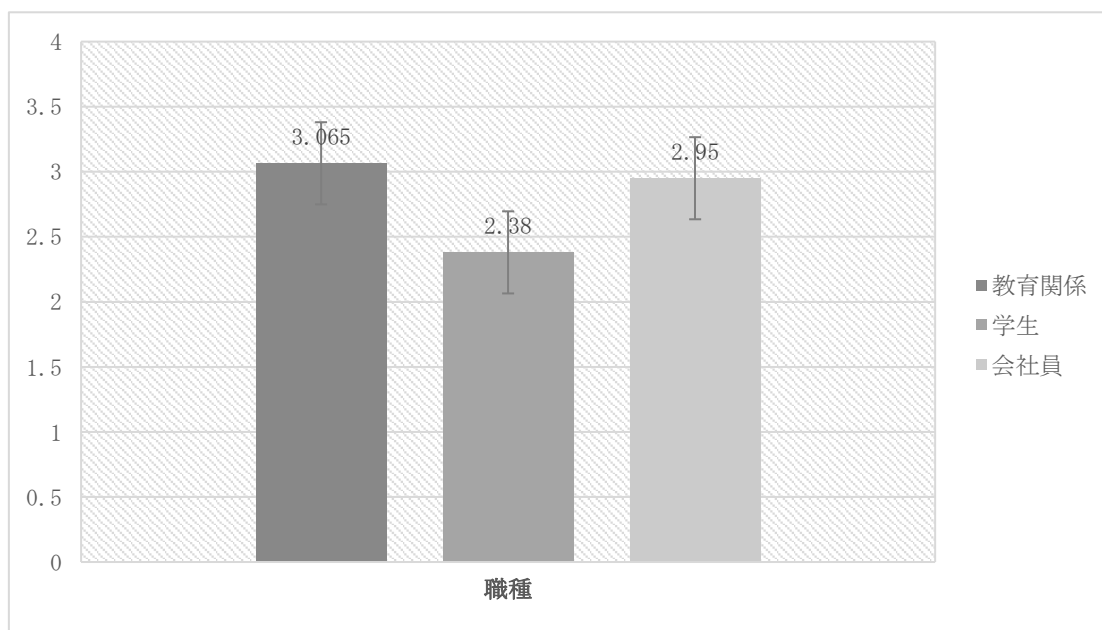


上図に示されるように、意味緩和度の判定をする際に、平均スコアは男性>女性であったが、 t 検定を行ったところ、その差は有意でなかった ($t(5)=-2.494, p=.055$)。「女性は男性よりも、多くのヘッジを使用する」という Lauwereyns (2002) の指摘と合わせて考えると、実際の使用場面において、女性は男性よりヘッジを好んで使用する傾向があるが、ヘッジ語形の意味緩和強度を低く判定する理由として、普段からヘッジ語形を使用する場面が多いため、それらの持つ意味緩和機能をそれほど強く感じ取らないのではないかと考えられる。それに対し、ヘッジ語形をあまり使用しない男性にとって、ヘッジ語形が使用される文を見たり聞いたりするたび、それらの存在が意味緩和機能を際立たせる象徴となる可能性がある。

8.4.3.2 RQ2 職業差

次に、職業差を比較した結果を見てみよう。

図 8 意味緩和度判定における職業差



一元配置分散分析を行ったところ、職業差がスコアに及ぼす主効果は有意ではなかった ($F(2,5)=1.351, p=.382$)。人数が少ないため、統計的に有意差が出ていないものの、データから得られた結果を解釈する限り、上図に示されるように、意味緩和度の判定をする際に、平均スコアは日本語教師>会社員>学生という結果が出ている。ほかの職種と比べ日本語

教師のほうは言語学的な知識に詳しいに加え、日本語の特徴的な意味用法に対して敏感であると推定される。こうした資質を持つグループは、一般にヘッジ語形の意味緩和度をより強く感じ取れるのであろう。また、社会人は上下関係が厳しい職場で良質な人間関係を築くために、言葉の表現に常に注意を払う必要があると思われる。特に目上の人との会話において、表現の強さを避けるには、主張をやわらげる機能を有するヘッジ語形が重要な役割を果たす。ゆえに、人間関係が比較的単調である学生と比べ、会社員のほうがヘッジ語形に対する意識が高く、ヘッジ語形の意味緩和度を高く判定するであろう。

8.4.3.3 RQ3 強い意味緩和機能を有するヘッジ語形・語義

RQ1 と RQ2 では、ヘッジ語形からヘッジの意味緩和度を感じとるときに、日本人母語話者の中でも違いがあることが明らかにされた。RQ3 では、母語話者内省調査の結果に基づき、意味緩和度が強いヘッジ語形と語義の特定を行う。まず、9 語形の意味緩和度スコアを高い順に並べ替えた結果、以下のようになった。

図 9 ヘッジ語形の意味緩和度

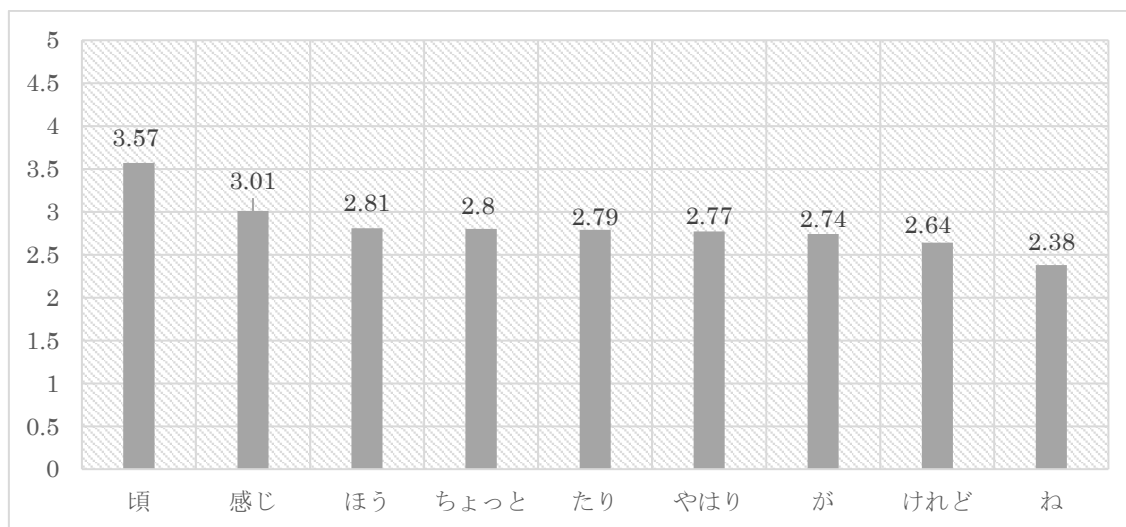


図 9 を見ればわかるように、9 語形の意味緩和度について、得点が最も高い「頃」にしても、5 点満点の 7 割強程度にとどまり、最も低い「ね」は 5 点の半分を下回っている。最上位と最下位を除けば、7 語のヘッジ緩和度は 2.6 から 3.0 までの区間に入り、変化の起伏がかなり緩やかである。一元配置分散分析を行った結果、 $F(8, 147) = 1.32, p = .24$ となり、9 語形の意味緩和度の結果に統計的な差がないことが確認された。

8.2.5 のヘッジ語形頻度の調査結果と合わせてみれば、助詞「ね・けれど・が」の3語は語形としての使用頻度が高いものの、命題の意味を弱める度合いが低いことが確認された。その理由として、付属語として使用される助詞の機能は主に文法上ほかの語との関係を示すことであり、文の全体の意味に影響を与える程度が比較的に低いためではないかと考えられる。

つづいて、37語義の意味緩和強度を高い順に並べ替え、上位10語義を以下の表27で示している。

表 27 意味緩和度が上位10位である語義

順位	コード	語義	平均スコア
1	頃_1	時を、その前後を含めて漠然と指す	3.57
2	ちょっと_2	否定表現と呼応して、その可能性はほとんどないと判断する様子	3.54
3	が_6	あとを言いさしにしたような形で、婉曲に述べる気持を表わす。	3.50
4	ちょっと_1	数量・程度を修飾する	3.21
5	ちょっと_3	間つなぎ	3.21
6	けれど_1	前置きを後に結びつける	3.18
7	ほう_5	方がいい。相手にそうするよう勧める（しないよう忠告する）	3.11
8	感じ-3	そのものらしい味わいや雰囲気	3.11
9	感じ_1	感覚器官に受ける刺激によって生じる反応。感覚	3.07
10	ほう_1	方角。方向。方位	3.00

37語義のスコアは3.57から1.61までの区間に入り、上位10位に入る語義は意味緩和度スコアが3以上のものであった。語形に注目すると、9種のヘッジ語形のうち、「やはり」、「ね」、「たり」を除いた6種のヘッジ語形の語義が上位10位に入り、「ちょっと」に関しては3つ、「ほう」と「感じ」に関してはそれぞれ2つの語義が含まれている。

品詞に注目すると、上位10語義のうち、助詞に関するものが「けれど_1」と「が_6」の

2つしかないことがわかる。もともと 37 種の語義中、助詞（けれど・が・たり・ね）の語義が 19 種と半分以上を占めるものの、意味緩和機能が強いと判定された語義が限られている。ヘッジ語形の平均意味緩和度の結果と合わせて考えると、ほかの品詞と比べ、母語話者の認識では、助詞のヘッジ語形は陳述意味を緩和する力が弱いことが特徴になっていると考えられる。

以下では、上位 3 位の語義に絞り、用例を見ながら分析していく。

(14) A：学校の、学校はどうでした、学校は好きでしたか？

B：あー、好きでしたね。小学校の頃も、中学校も高校も好きでしたね。

(15) 幕末のころの一両は五万円という専門家の推算があり、江戸時代初期なら十倍とみておかしくない。

「頃」については、「小学校の頃」や「幕末の頃」などのように、「頃」を使用することによって、前接する時間区分を表す名詞の範囲を広くし、物事が行われる時点を正確に特定する必要がなくなる。辞書において、辞書において、「頃」の語義には、「時を、その前後を含めて漠然と指す」のほかに、「時節、時期」、「適当な時期、頃合い、潮時」などが記載されているが、コーパスにおける使用割合を確認したところ、現在日本語において、「時を、その前後を含めて漠然と指す」の意味で使用される例が 99%以上であり、この語義は「頃」の典型的な使い方であると言える。多義性を持つほかヘッジ語形と比べ、典型的かつ頻繁に使用される語義が 1 つの中核語義に集中される「頃」のほうは、意味緩和度がより強く感じ取られることが確認された。

(16) まったく人生を楽しむということにかけて、彼女たちほど有能な人種も他にちょっと見当たらない。

(17) すると彼は、自分の戦術など、歴史書を読み、その教えを学ぶことで身につけたのだと答えました。ちょっと信じられない気がしました。

「ちょっと」が有する 7 種の語義のうち、「否定表現と呼応して、その可能性はほとんどないと判断する様子」が最も意味緩和度が強いことが確認された。「ちょっと」を用いなければ、文が「見当たらない」、「信じられない」で終わり、読み手に断定的な印象を与えてし

もう恐れがあるため、母語話者の認識では、「ちょっと」を使用することによって、否定の意味の度合いが下げられ、表現の強さをやわらげる度合いが強いと考えられる。

(18) ちょっと習い事を始めてしまって、子供のこともあって、三日から二日に変えていた
だきたいんですが…

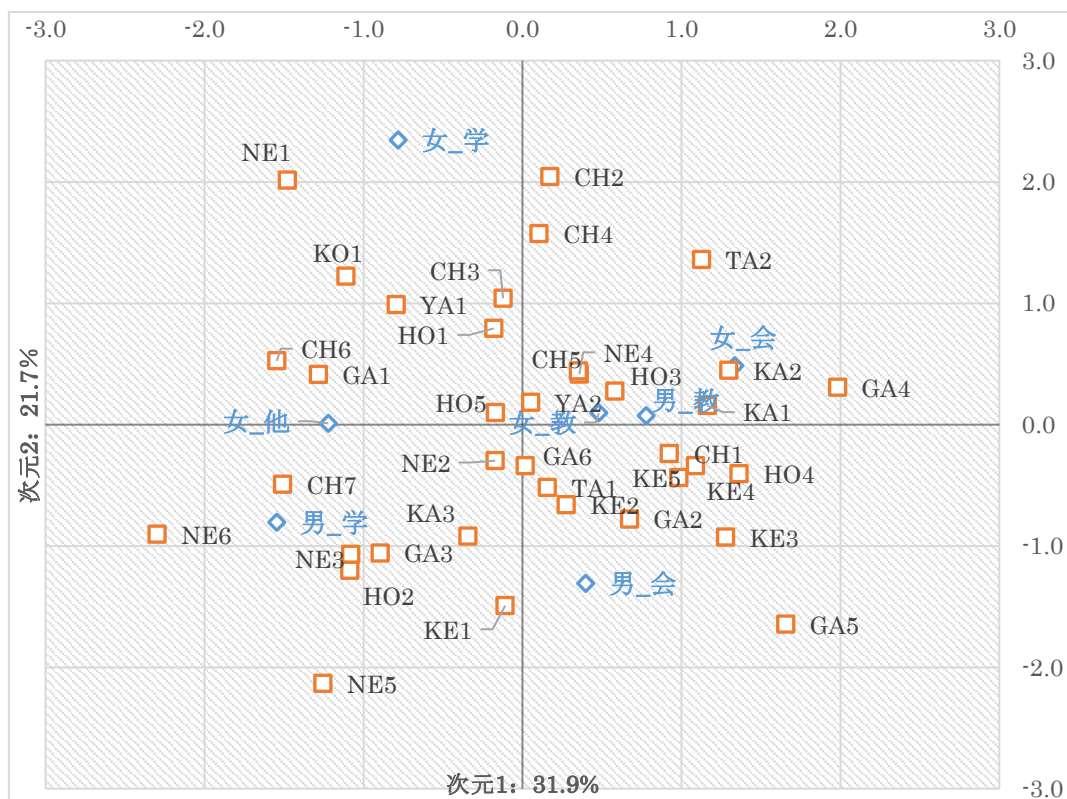
(19) 二十四以外なら、二十か二十三だとありがたいんですが…

「が」については、この2つの例の場合、自分の要望を伝えたあとに、相手の意向を聞く内容を言いさしにしている。母語話者の認識では、相手に意向や許可などを求める際に、直接に「いかがでしょうか」と聞くより、文を途中で止めることによって、聞き手を間接的に会話に参加させること、また、自分の要望を相手に察してもらうほうが、やわらかい印象を与えることができると推測される。

8.4.3.4 RQ4 コレスポネンス分析

RQ4 では、9種のヘッジ語形が持つ全37種の語義は、どのようにグルーピングできるかを議論する。以下は7名の判定者と37種の語義の関係を視覚化したコレスポネンス分析の結果である。

図 10 コレスポネンス分析の結果



コレスポネンス分析の結果，第 1 軸（横軸）の寄与率は 31.9%，第 2 軸（縦軸）の寄与率が 21.7%であり，これら 2 つの次元で全体の分散の 53.6%が説明されることが確認された。判定者およびヘッジ語形は，まず，第 1 軸上，左右に分かれる。左側領域には，学生の判定者 2 人と職種がほかである判定者 1 人が布置されている。語義に注目すると，左側領域には，話し言葉で多用される「ね」の 1, 2, 3, 5, 6 番語義と「ちょっと」の 3, 6, 7 番語義が布置されている。一方，右側領域には日本語教師と会社員それぞれ 2 人が含まれる。語義に注目すると，話し言葉・書き言葉両方で使いうる語義（「ちょっと」の 1, 2, 4, 5 番語義と「感じ」の 1, 2 番語義）が多く布置されている。このことから，第 1 軸は話し言葉で多用される語義と，話し言葉・書き言葉両方で使いうる語義を区分する軸になっていると言える。

次に，第 2 軸に注目する。上部に女性判定者 4 名（女_会，女_教，女_学，女_他）と男性判定者 1 名（男_教）が附置されており，下部に 2 名の男性判定者（男_学，男_会）が含まれている。語義に注目すると，上部領域には「ちょっと_2-6」，「やはり 1-2」，「頃」，「感じ_1-2」など，副詞と名詞が，下部領域には主に，「が_2-6」，「けれど_1-5」，「ね_2, 3, 5, 6」など，助詞が布置されている。つまり，第 2 軸は助詞と，助詞以外のヘッジ語形を分け

る軸になっているのではないかと考えられる。それにくわえ、男性判定者は助詞のヘッジ語形、女性判定者は副詞や名詞のヘッジ語形と結びつきやすい傾向が確認された。

以上を整理すると、各種の文末詞と7名の判定者は、2軸で区切られた4つの象限に区分されることになる。

表 28 ヘッジ語形の4区分

象限	語義	判定者
第1象限 (X:+ / Y:+) (話・書, 助詞以外)	ちょっと_2, 4, 5; 感じ_1, 2; やはり_2; ほう_3	女_会, 女_教, 男_教
第2象限 (X:- / Y:+) (話, 助詞以外)	頃; ほう_1, 5; やはり_1, ちょっと_3, 6, やはり_1	女_学, 女_他
第3象限 (X:- / Y:-) (話, 助詞)	ね_2, 3, 5, 6; けれど_1, が_3	男_学
第4象限 (X:+ / Y:-) (話・書, 助詞)	けれど_2-5, が_2, 5, 6	男_会

8.4.4 まとめ

本節では、母語話者属性(性別・職種)がヘッジ語形の意味緩和機能の認識に与える影響を解明し、強い意味緩和機能を有するヘッジ語形・語義の特定に加え、母語話者属性別に見た強い意味緩和機能を有するヘッジ語形の特定を行ってきた。本節で得られた知見は以下の4点にまとめられる。

1点目として、ヘッジ語形の意味緩和度を判定する際に、女性より男性のほうはヘッジ語形の陳述緩和度を高く判定する傾向があることが確認された。この理由として、女性は普段からヘッジ語形を使用する機会が多く、それらの持つ意味緩和機能をそれほど強く感じ取らないのではないかと考えられる。

つづいて、ヘッジ語形の意味緩和度判定に対する職種の影響について、日本語教師>会社員>学生という結果が確認された。人間関係が比較的単調である学生群と比べ、上下関係が厳しい職場で良質な人間関係を築く必要がある会社員群や、日本語の特徴的な意味用法に対して敏感である日本語教師群のほうが、ヘッジ語形の意味緩和度をより強く感じ取れると推測される。

3 点目として、母語話者内省調査の結果に基づき、強い意味緩和機能を有するヘッジ語形・語義を特定できたことである。語形レベルでは、「頃」、「感じ」、「ほう」、語義レベルでは、「頃_1」、「ちょっと_2」、「が_6」の意味緩和機能の強度が上位 3 位となることが明らかになった。

4 点目として、各種のヘッジ語形と判定者は、言語環境・品詞属性により、2 軸で区切られた 4 つの象限に分類できる可能性が確認された。また、男性判定者は助詞のヘッジ語形、女性判定者は副詞や名詞のヘッジ語形と結びつきやすい傾向が確認された。

8.5 辞書・教材の記述提案—「ね」「ちょっと」「頃」を例に一

コーパス調査に基づくこれまでの本章の分析で、典型的なヘッジ語形 (8.2)、また、主要語形については典型的語義 (8.3) を抽出することができた。さらに、母語話者の内省調査によって主要語形の各々が持つヘッジ度 (意味緩和強度) のデータを取得することもできた (8.4)。

これらの知見は、言語学的に重要なものであるが、このままの形では、日本語教育への応用性は限定的である。そこで、ここではこれらの知見をふまえ、既存の辞書記述を改善する試みを行いたい。本節で提案する手法は、辞書に限らず、各種の日本語教材の改善にも役立つものになると期待される。

なお、一般に辞書記述というのは、母語話者を想定読者として書かれているわけだが、ここでは、学習者が発信目的 (日本語で話したり、書いたりする) で利用する日本語辞書という在り方を想定し、語形と語義の両方のレベルにおいて、コーパスから得られる 4 つの情報を提供することを基本としたい。

- (1) 全般的な頻度レベル (全体としてどの程度多く使用するか)
- (2) 話し言葉・書き言葉別使用特性 (いずれにおいて多く使用するか)
- (3) 母語話者調査に基づくヘッジ強度 (意味緩和機能の強度)
- (4) 上記の(1)頻度と(3)ヘッジ強度を合成した指標 (ヘッジ重要度指標)

以下、これらについて説明する。

(1) について、語形レベルでは 8.2 で得られた 10 ジャンルの平均頻度を、語義レベルでは 200 例中の語義別用例数を、それぞれ標準得点 (偏差値) に変換した値を提供する。この場合、ヘッジ語形全体の中での中央位置は 50 となる。値が 50 より高いか低いかを見るこ

とで、ヘッジ語形として当該語・当該語義がどの程度使用されるのかが感覚的にわかる。

(2) について、語形レベルでは話し言葉 (5 ジャンル)・書き言葉 (5 ジャンル) における 10 万語あたりの調整頻度の比率を、語義レベルでは 200 例中に含まれる話し言葉・書き言葉それぞれにおける各語義の比率をそれぞれ示す。これにより、当該語・当該語義が主として話し言葉で利用するのか書き言葉で利用されるのか、あるいは両者の区別なく使用できるのかが明らかになる。

(3) については、すでに述べたように、それぞれのヘッジ語形には多くの語義があり、すべてが同じようにヘッジとして意味緩和の機能を果たしているわけではない。そこで、母語話者内省調査の結果をふまえ、ヘッジ語形および各語義別に、母語話者判断に基づく意味緩和機能の強度 (ヘッジ強度: **Strength of Hedge Meaning**) を求める。(1)と同様、これも、標準得点 (偏差値) に変換して示す。

以上により、個々のヘッジ語形及び語義について基本的な情報が提示できると思われるが、学習者の観点から言うと、これらをまとめたわかりやすい単一指標も必要となるであろう。そこで、(4) として、語形と語義の両方のレベルで、(1) と (3) の平均値を示す。なお、この値は頻度 (F) とヘッジとしての意味緩和強度 (S) を合成したものであることから、これを仮に FS 値と称することとする。

また、掲載する語義の数については、本研究のこれまでの分析においては、典型語義としては占有比 10%以上、内省調査のサンプルづくりの際には占有比 1%以上という閾値をそれぞれ設定したわけであるが、辞書の教育的機能をふまえれば、10%では少なすぎるものの、1%では実際にほとんど使用しない語義まで記載してしまうことになる。そこで、便宜的な判断として、占有比 5%以上のものに絞ってそれらを頻度順で記載することとしたい。

8.5.1 研究目的とリサーチクエスチョン

本節の目的は、主要ヘッジ語形について、コーパス調査と母語話者内省調査で得られた知見を踏まえ、外国人学習者向けの発信型辞書や教材の記述を考案することである。この目的に沿い、以下の 3 つのリサーチクエスチョン (RQ) を設定した。

RQ1 コーパスから得られた知見をふまえることで、辞書や教材における「ね」の記述をどのように改善できるか。

RQ2 コーパスから得られた知見をふまえることで、辞書や教材における「ちょっと」の

記述をどのように改善できるか。

RQ3 コーパスから得られた知見をふまえることで、辞書や教材における「頃」の記述をどのように改善できるか。

なお、以上の **RQ** については、本来、すべてのヘッジ語形について、既存の辞書や教材における記述の改善を考えるべきであるが、ここでは、最も典型的なヘッジ語形である「ね」「ちょっと」「頃」の 3 語をサンプルとして取り上げ、この問題を考えることとしたい。

8.5.2 対象項目

これまでの節では、話し言葉・書き言葉の両方で共通して高頻度で使用される「が」、「たり」、「けれども」、「ね」、「ちょっと」、「やはり」、「ほう」、「頃」、「感じ」の 9 種のヘッジ語形について多角的に分析してきた。本来は、これらすべてに対して辞書記述の考案を行う必要があるが、ここでは、頻度と意味緩和強度（の内省判断）を組み合わせた、前述のヘッジ重要度指標（FS 値）に基づき、3 種の品詞別（名詞・助詞・副詞）に最上位になる語を分析の対象としたい。以下は 9 語の指標値のリストである。

表 29 9 種のヘッジ語形の FS 値

品詞	ヘッジ語形	F	S	FS 値
名詞	頃	41	73	57
助詞	ね	73	36	54
助詞	けれど	56	44	50
副詞	ちょっと	51	49	50
助詞	が	51	47	49
名詞	感じ	42	55	49
名詞	ほう	46	49	48
助詞	たり	46	49	47
助詞	やはり	43	48	46

以上より、名詞については「頃」、助詞については「ね」、副詞については「ちょっと」、

の3種のヘッジ語形を本節における辞書記述考案のサンプル語とする。

8.5.3 分析手順

RQ1-3 ともに同様の手順を進める。

まず、サンプル語形について、語形と語義両方のレベルにおいて、(1)全般的な頻度レベル (F)、(2)話し言葉・書き言葉別使用特性、(3)母語話者の内省調査に基づくヘッジとして意味緩和機能の強度 (S)、(4)ヘッジ重要度指標 (FS 値) の4種の情報を取得し、新たな辞書記述を提案する。なお、偏差値については、標準得点*10+50の計算式で求める。

なお、新しく提案する記述の特徴を示すため、既存辞書(『大辞林』)の記載を参考として併記する。ただし、既存辞書は母語話者向けに書かれたものであるため、本稿は既存辞書の記述を批判する意図を持たない。

8.5.4 結果と考察

8.5.4.1 RQ1 辞書・教材の記述提案—「ね」—

「ね」について、構成比5%の語義に絞ったうえで、(1)全般的な頻度レベル (F)、(2)話し言葉・書き言葉別使用特性、(3)母語話者内省調査に基づくヘッジとしての意味緩和強度 (S)、(4)ヘッジ重要度指標 (FS 値) の4つの情報を組み合わせたところ、「ね」の語釈の一例として、以下の表のような結果となった。なお、用例はBCCWJ, I-JAS, CEJCのいずれかからの引用である。

表 30 「ね」の辞書記述提案

既存辞書の記述
(終助)
(1) 軽い詠嘆を表す。「あら、素敵な洋服ね」
(2) 軽く念を押す気持ちを表す。「僕の気持ちとは違うようだね」
(3) 相手の同意を求める気持ちを表す。「遅刻しちゃってごめんなさいね」
(4) (多く疑問を表す語と共に用いて) 問いかける気持ちを表す。「それはいったい何かね」
(間投助)

①文節の末尾に付いて用いられる。語勢を添えたり、声のつながりとしたりするために、適宜文節にさしはさまれる。「私ね、その秘密を知っているの」②（「あのね」、「そうだね（そうですね）」などの形で）感動詞的に用いられる。「あのね、お願いがあるの」

学習者向け発信型辞書用の記述提案

●ヘッジ重要度 (FS) : 54

○全体頻度 : 73

○頻度比 : 話 > 書

○意味緩和強度 : 36

.....

語義 1 : 同意・共感を表す

用例 : わたしたちにとってのいかにも時計らしい時計のありかたですね。

●ヘッジ重要度 (FS) : 56

○全体頻度 : 59

○頻度比 : 話 < 書

○意味緩和強度 : 53

語義 2 : 念を押ししたり、相手を納得させようとしたりする時に、聞き手の感情や心理に配慮して使用される。

用例 : そういったことを全部抜きにしてやるというのはいいと思いますね。

●ヘッジ重要度 (FS) : 52

○全体頻度 : 50

○頻度比 : 話 < 書

○意味緩和強度 : 54

語義 3 : 文や文節の末尾について用いられる。聞き手を自分の話題に引き込むため、語勢を添えたり、言いよどみを埋めたりするのに用いる。

用例 : 年賀状ってね、どんどん減るのかなって思ったら、使用する人が逆に増えてきた。

●ヘッジ重要度 (FS) : 48

○全体頻度 : 46

○頻度比 : 話 > 書

○意味緩和強度 : 49

語形レベルに関して、F 値 (73) と S 値 (36) に注目すると、「ね」は「語形としては高頻度だが、ヘッジとしての意味緩和機能はきわめて弱い語」であることがわかる。

次に、語義レベルに関して、「ね」が持つ 6 つの語義のうち、閾値が 5%以上であるものは 3 つのみで、典型語義の中では S 値が 50 を超えるものは 1 と 2 に限る。

8.5.4.2 RQ2 辞書・教材の記述提案—「ちょっと」—

「ちょっと」について、コーパス知見を整理したところ、以下のような結果となった。

表 31 「ちょっと」の辞書記述提案

既存辞書の記述
(1) 数量・程度などがわずかなさま。時間が短いさま。「ちょっと目を離した隙に」
(2) 軽い気持ちで行うさま。特に何という考えもなく行うさま。「ちょっと行って見てくる」
(3) 大層というほどではないが、かなりの程度・分量であるさま。「その道ではちょっと名の通った人」
(4) (下に打ち消しの語を伴って) 簡単には (…できない)。「彼は犯人とはちょっと考えられない」
(5) 軽く相手に呼び掛ける語・もしもし。「ちょっと、きみ、待ちたまえ」
学習者向け発信型辞書用の記述提案
●ヘッジ重要度 (FS) : 50
○全体頻度 : 51
○頻度比 : 話 > 書
○意味緩和強度 : 49
.....
語義 1 : 数量・程度がわずかである
用例 : どこを歩いていても遺跡だらけで、 <u>ちょっと</u> 感動した。
●ヘッジ重要度 (FS) : 61
○全体頻度 : 61
○頻度比 : 話 < 書

○意味緩和強度：61

語義 2：否定的な内容に前接し，断定を避けたり，マイナス度を和らげたりする。

用例：私たちは頑張ってやるけれども，治すのはちょっと難しいかもしれない。

●ヘッジ重要度 (FS)：43

○全体頻度：47

○頻度比：話＝書

○意味緩和強度：39

語義 3：言いよどみを埋める間つなぎ

用例：ま，ちょっとね，小さい子にはそれは注意向けるだろう。

●ヘッジ重要度 (FS)：54

○全体頻度：46

○頻度比：話＞書

○意味緩和強度：61

語義 4：相手に呼びかける語

用例：ちょっと君，待ってくれ。

●ヘッジ重要度 (FS)：29

○全体頻度：13

○頻度比：話＜書

○意味緩和強度：45

語義 5：依頼や希求，指示行為の負担をやわらげる。

用例：買い物をする前に，ちょっと考えてほしいことがある。

●ヘッジ重要度 (FS)：41

○全体頻度：43

○頻度比：話＜書

○意味緩和強度：39

語形レベルに関して，F 値 (51) と S 値 (49) に注目すると，「ちょっと」は「語形としての使用頻度，ヘッジとしての意味緩和機能ともに，類語の中で中程度」であることがわかる。

次に，語義レベルで見れば，「ちょっと」が持つ 7 つの語義のうち，閾値が 5% 以上であ

るものは5つとなり、典型語義の中に1と3はS値が50を超える。5つの語義のうち、「数量・程度がわずかである」さまを表す第1語義は、頻度が著しく高く、ヘッジ強度もかなり強い。この結果は、「数量や程度の少ないさまを表す機能が『ちょっと』の根幹の機能」であるとする岡本・斎藤（2004）の指摘を支持したものとなっている。

8.5.4.3 RQ3 辞書・教材の記述提案—「頃」—

「頃」について、コーパス知見を整理したところ、以下のような結果となった。今回は、語義の占有比の閾値を満たすものは1つのみであり、結果として、語釈も語義は1つのみとなっている。

表 32 「頃」の辞書記述提案

<p>既存辞書の記述</p> <p>(1) 時間・時期を限定する語に付いて、だいたいその時であることを示す。その時あたり。時分。「幼い頃の思い出」</p> <p>(2) 時節。時期。文語的な言い方。「頃は六月、雨の降る日」</p> <p>(3) 適当な時期。潮時。頃合い。「頃を見計らう」</p>
<p>学習者向け発信型辞書用の記述提案</p> <p>●ヘッジ重要度 (FS) : 57</p> <p>○全体頻度 : 41</p> <p>○頻度比 : 話<書</p> <p>○意味緩和強度 : 73</p> <p>.....</p> <p>語義 : 時間・時期を、その前後を含めて漠然と指す。</p> <p>用例 : 小学校の<u>頃</u>も、中学校も高校も学校が好きでした。</p> <p>●ヘッジ重要度 (FS) : 73</p> <p>○全体頻度 : 77</p> <p>○頻度比 : 話 (1) = 書 (1)</p> <p>○意味緩和強度 : 69</p>

語形レベルに関して、F 値 (41) と S 値 (73) に注目すると、「頃」は「語形としての使用頻度は低程度だが、ヘッジとしての意味緩和機能がとくに強い語」であることがわかる。また、語義に関して言うと、各種の値が 50 をかなり超えており、他の語義と比べると、頻度・意味緩和機能の強度ともに高程度である。

8.5.5 まとめ

本節では、「ね」、「頃」、「ちょっと」の 3 つの語形について、コーパス調査と母語話者内省調査で得られた知見を踏まえ、外国人学習者向けの発信型辞書の記述を考案した。本節で得られた知見は以下の 2 点にまとめられる。

1 点目として、今回の 3 つの語形を重要ヘッジ指標 (FS 値) で見ると、頃 (57) > ね (54) > ちょっと (50) の順となることである。仮にヘッジに特化した授業を設計する場合は、この値が高いものを優先するといった対応が考えられる。

2 点目として、また、語義の重要ヘッジ指標 (FS 値) で見ると、頃_1 (73) > ちょっと_1 (61) > ね_1 (56) > ちょっと_3 (54) > ね_2(52)> ね_3 (48) > ちょっと_2 (43) > ちょっと_5 (41) ちょっと_4 (29) となる。ヘッジ授業で扱う語形を決めれば、語義についても、こうした情報が参考になれると考えられる。

第Ⅲ部 中国人日本語学習者のスタンス表出

第Ⅱ部では、「現代日本語におけるスタンス表出」の問題について、(1) 一人称代名詞、(2) 文末詞、(3) 陳述スタイル、(4) ヘッジという4種類の主要なスタンスマーカの使用実態や意味特性を計量的な観点から分析した。第Ⅲ部では、新たに日本語教育の視点を加え、「日本語学習者のスタンス表出」の問題を扱う。

第Ⅲ部は4つの章から構成される。まず、第9章から第12章では、学習者コーパスを調査し、(1) 一人称代名詞、(2) 文末詞、(3) 陳述スタイル、(4) ヘッジという4種類の主要なスタンスマーカについて、中国語を母語とする日本語学習者によるそれぞれの使用状況と使用上の問題点を解明する。

第9章 中国人日本語学習者の一人称代名詞使用

第Ⅲ部では、学習者の日本語使用における(1) 一人称代名詞、(2) 文末詞、(3) 陳述スタイル、(4) ヘッジの問題を概観する。このうち、第Ⅲ部の冒頭となる本章では、(1) 一人称代名詞の問題を取り上げる。この問題については、すでに第Ⅱ部の5章において母語話者の使用実態を分析済みである。5章では、BCCWJのブログを分析し、一人称代名詞に関して、(1) 語・異形・文字種を考慮した場合、一人称単数代名詞(FSP)は最大で60種を超えるバリエーションが存在し、(2) フォーマル度は私>僕>俺>あたし、の順に下がり、(3) 語・異形・文字種が異なれば、共起しやすい語も異なり、FSPの選択は書き手が表出しようとするスタンスと深く関わっている、といった知見が得られている。

では、学習者はこうした多様なFSPをどのように習得していくのであろうか。本章では、学習者の発話データ(対話)を用い、(1) 使用量、(2) 共起語の2つの観点に注目しつつ、習熟度が上がるにつれ、学習者が適切な量のFSPを適切な形で使用できるようになっているかどうかを検討する。

なお、FSPについては、「僕」や「俺」のように原則として男性のみが使用するものや、「あたし」のように主として女性が使用するものが存在することから、調査は男女別に行う。

9.1 本章の目的とリサーチクエスション

本章の目的は、日本語学習者の習熟度の違いが、発話(対話)中のFSPの使用量と共起パターンにどのような影響を及ぼしているかを解明することである。

こうした目的に沿い、以下の3つのリサーチクエスション(RQ)を設定した。なお、FSP

については、今回のデータで1度以上使用されていた「私」「僕」「俺」「あたし」の4種に分析対象を限定する。

RQ1 学習者・母語話者間で FSP の使用量に差はあるか。

RQ2 異なる習熟度間で、学習者の FSP の使用量に差はあるか。

RQ3 学習者・母語話者間で、使用される FSP の共起語に差はあるか。

ここで、上記の RQ について事前仮説を考えたい。まず、RQ1 についてであるが、中国語では、自分自身に言及するときに FSP を省略できる場合が少ない。中国人日本語学習者は母語の影響で、FSP を母語話者以上に使用すると予想される。次に、RQ2 については、習熟度の向上につれ、語彙知識の蓄積に伴い、学習者による不自然な使用が次第に減少すると予想される。最後に、RQ3 については、FSP は基本的な語彙であるため、学習者と母語話者が使用する共起語パターンが類似すると予想される。

9.2 データ

本章では、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」(I-JAS)を使用する。詳細はすでに 3.1.2.2 で述べたとおりである。

一人称代名詞には、(主として)女性のみ・男性のみが使うものもあるため、学習者による一人称代名詞の使用実態を調査する際には、話者の性別に関する情報が重要になる。また、一人称代名詞の使い方は学習者の習熟度の上昇によって何らかの形で変化していくことが予想されるため、習熟度の情報も必要である。

I-JAS は、これら 2 種のデータを含んでおり、かつ、中国人日本語学習者と日本語母語話者のデータをともに含むという点で、今回の調査の目的に適合したデータと言えよう。

I-JAS には、ストーリーテリング (ST)、絵描写 (D)、対話 (I)、ロールプレイ (RP)、ストーリーテリングと同じイラストを見て作文をするタスクストーリーライティング (SW) などのタスクがある。このうち、一人称代名詞は、参加者が自分自身の経験や意見について話す対話 (I) において多く出現すると推測される。したがって、本調査では、タスクタイプの影響を統制するため、対話 (I) のデータに限って分析を行う。

9.3 対象者

すでに述べたように、本研究は、学習者による FSP 使用を、母語話者による FSP 使用と

比較しながら検討する。母語話者と学習者の性別・年代別の人数分布（表 1）を見ると、学習者の年齢分布は、10代と20代に集中している。男女で一人称代名詞の選択が変わるだけでなく、異なる年齢層の間で一人称代名詞の使用実態が異なると推測されるため、本研究では調査対象を20代（母語話者19名、学習者172名）のみに限定する。

表 1 I-JAS の性別・年代別の人数

	母語話者		中国語を母語とする日本語学習者	
	男	女	男	女
不明	0	0	1	0
10代	0	0	5	19
20代	9	10	31	141
30代	6	8	0	0
40代	6	7	0	0
50代	2	2	0	0
合計	23	27	37	160

すでに述べたように、I-JAS では、学習者には J-CAT と SPOT の 2 種類の日本語能力テストを実施し、レベル判定を行っている。本研究では、J-CAT のスコアを日本語習熟度の目安とする。習熟度が日本語学習者の FSP 使用にどのような影響を及ぼしているかを見るため、本研究は J-CAT のスコアを手がかりに、172 名の学習者を初級（100～）、中級（200～）、上級（300～）に群化し分析することとする。以下はレベル別の人数を示した表である。これにより、母語話者 1 群、学習者 3 群、合計 4 群が本研究の分析対象となる。

表 2 レベル別の人数

レベル	J-CAT スコア	人数（女性）	人数（男性）
初級	100～	21	5
中級	200～	106	24
上級	300～	14	2

9.4 分析手順

RQ1 (FSP 使用量) については、FSP 全体、個別 FSP の各々について、男女別に、学習者と母語話者の使用量を比較する。

はじめに、中納言で検索対象を日本語母語話者と中国語を母語とする学習者による対話 (I) に限定し、キーの条件を「品詞」の「中分類」が「代名詞」となるよう設定して検索を行う。検索結果をダウンロードし、キーの「語彙素」を手がかりに、手作業で FSP と思われるものを抽出する。その際、FSP に「たち (達を含む)」、「ら」が後接するものは複数形であるため、データから除外する。次に、エクセルのフィルター機能を使い、20 代のデータのみを抽出する。母語話者と学習者が一度以上使用した FSP (書字形) には、「私」、「あたし」、「僕」、「俺」、「吾輩」の 5 種類あるが、「吾輩」は小説のタイトル「吾輩は猫である」の引用であるため、実際に使用された FSP は前述のように 4 種となる。

以上の準備作業をふまえ、男女別に、4 群ごとに使用された FSP の全体頻度と個別頻度を調べ、1 人あたりの調整頻度に換算する。1 人あたりの使用量について、習熟度別の学習者 3 群の平均値と母語話者の値を比較する。

RQ2 (習熟度間の比較) については、母語話者の FSP 使用量を 100 とし、学習者の FSP 使用量を比率に変換し、男女別に初中上級の学習者間の変化をグラフとして示す。

RQ3 (共起語) については、出現頻度が最も多い「私」のみを調査対象とする。「中級学習者 (男性)」「中級学習者 (女性)」、「母語話者 (男性)」「母語話者 (女性)」の 4 群について、群ごとに「私」の直前・直後 20 文字分の文脈を切り出し、日本語形態素解析ソフトウェアである KH coder で分析する。次に、KH coder の「抽出語リスト」機能を使い、品詞別の高頻度語リストをエクセルに出力する。高頻度共起語について、品詞を「名詞」、「サ変名詞」、「形容動詞」、「形容詞」、「動詞」、「副詞」の 6 種類に限定し、1 人あたりの調整頻度が 0.2 以上のものを抽出する

最後に共起語を第 1 アイテム、参加者群を第 2 アイテムとする頻度表を作成し、コレスポンデンス分析を行う。なお、第 1 アイテムには 74 カテゴリー (重複するものを除いた共起語)、第 2 アイテムには 4 カテゴリーが存在する。得られた散布図を手掛かりに、学習者と母語話者がどのように分類されるか、また、それぞれを特徴付ける共起語にはどのような違いがあるかを検討する。

9.5 結果と考察

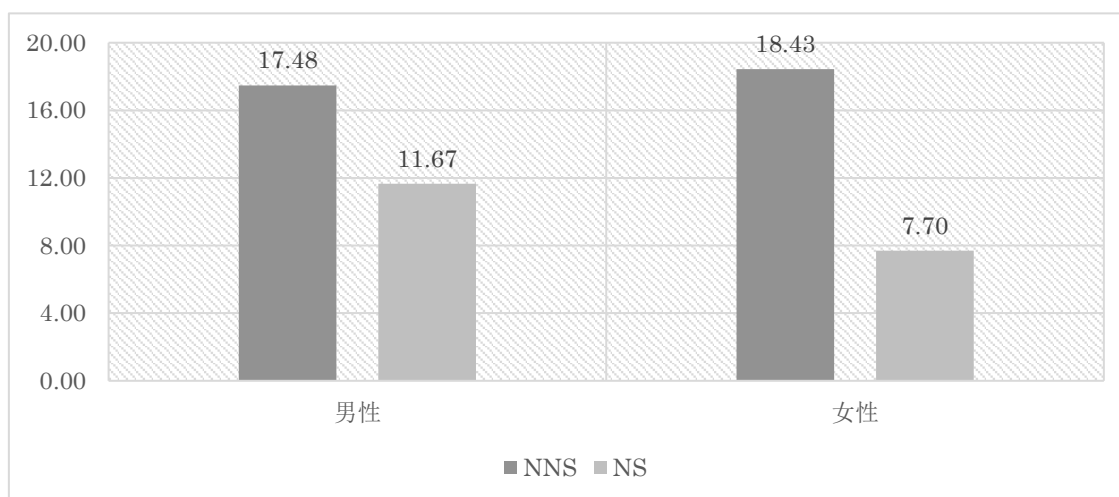
9.5.1 RQ 1 学習者・母語話者別の FSP 使用量

本節では、FSP 全体と、個々の FSP という 2 つの観点から、使用量の調査を行う。

9.5.1.1 FSP 全体の使用量

まず、全体使用量に関して、学習者（習熟度別の 3 群の平均値）と母語話者を男女別に比較したところ、以下の結果を得た。図中、NNS と NS は学習者と母語話者を示す。

図 1 母語話者と学習者の FSP 使用量（全体）



FSP 全体の使用量については、男女ともに $NS < NNS$ という順位関係が示唆された。カイ二乗検定を実施ところ、その差は統計的にも有意であった（男性 NS・NNS 間： $\chi^2=4.75, df=1, p<.05$ ，女性 NS・NNS 間： $\chi^2=8.34, df=1, p<.01$ ）。つまり、(a) 学習者は男女ともに、母語話者より FSP を過剰使用することが確認された。あわせて、(b) 母語話者に対する過剰使用度は男性が 50%程度であるのに対し、女性は 2 倍以上に達しており、女性がとくに顕著に FSP を過剰使用することが示唆された。

まず、(a) 男女問わず学習者が母語話者よりも FSP を過剰使用することについてであるが、この原因としては 2 つの可能性が考えられる。1 点目は、学習者は母語話者よりも言い淀みが多く、その際に一人称が多く出現するという点である。以下の例を見てみよう。

- (1) 私、えー、私のふるさとの料理はとってもあーあー辛いです。(CCM18, L190)

(2) 私は一、私の家は、上海、上海に、上海ではありません。(CCM36, L190)

初級の学習者は語彙知識が不足するため、ポーズを頻繁にはさんだり、フィラーを多用したりするなど、発話が非流暢になりがちである。例(1)と(2)のように、話の流れについて思考している際、間を埋めるために一人称代名詞を繰り返し挿入する例がデータから多く観察された。

2点目は、学習者が、省略可能な場合にまで、本来は不要な FSP を言語化しがちだという点である。以下の例を見てみよう。

(3) 1年生の先生は私に、鉛筆買ってくれました。(CCH02, L230)

(4) 私の小学校の時、私の中国語の先生は大好きです。(CCM45, L190)

例(3)の場合、「買ってくれる」という授受表現を使用することで、「買う」という行為の受け手が発話者であることがわかり、あえて発話者が「私」を明示する必要はない。しかし、学習者はこうした場合にも「私」を付け加えて使用している。これは、学習者が規範的な言い方を好むということに加え、中国語からの影響の可能性もある。以下の中国語の用例を見てみよう。

(5) 一年级的老师给(Φ)买了铅笔。(1年生の先生は鉛筆を買いました。)

(6) 一年级的老师给他买了铅笔。(1年生の先生は彼に鉛筆を買ってあげました。)

(7) 一年级的老师给我买了铅笔。(1年生の先生は私に鉛筆を買ってくれました)

例(5)のように、授受動詞(「给」)の後ろに人称代名詞がついていない場合、中国語では、誰のために買ったのか曖昧である。中国語では、人称代名詞が恩恵の方向性を示す役割を果たしているため、ふつう例(6)と例(7)のように、「给」の後ろに第一人称の「我(私)」か、第三人称の「他(彼)」などをつける必要がある。こうした中国語と日本語の相違が学習者の FSP 使用に干渉している可能性がある。

例(4)の場合、2回目の「私」はふつう省略される。日本語では、一人称が第1文から第2文に引き継がれるとき、第2文ではそれを省略することができるからである(久野, 1978)。しかし、学習者はこれを省略せずに言語化する傾向がある。特に初級の学習者にと

って、前後の文脈を考慮し、一人称が省略できるかどうか、その都度、適切な判断をすることは難しく、このことが一人称代名詞の過剰使用の原因になっている可能性がある。

今回の分析により、自由対話においては、男女問わず、学習者は一人称代名詞を過剰使用する傾向が確認されたわけだが、この点については、中国語を母語とする日本語学習者が作文においても一人称代名詞を過剰使用するという曾（2010）の指摘を合わせて考える必要がある。2つの分析結果を総合的に考えれば、中国人学習者の一人称代名詞の過剰使用は書き言葉・話し言葉という産出モードと関係なく、日本語の産出全般に見られる傾向と言えるかもしれない。

次に、(b) 女性学習者が FSP をとくに過剰使用することについてであるが、以下の例を検討したい。これらは対話中の同じ質問（どんな仕事に就きたいですか？）に対する男女の回答例である。

(8) (ありますよ。なんか、立派な経営者になりたいです。観光業の経営者になりたい。

(CCT29, L230, 男性)

(9) 私は会社行きたい、公務員もしたいなんです、試験が難しいですが、私は心細いです。(CCM31, L210, 女性)

両名の日本語の習熟度は同等程度であるが、この例に限って言えば、女性は男性より全体に丁寧に答えようとしており、そのことが FSP の過剰使用につながっている可能性がある。また、この例では、男性は自分に自信を持っているように見え、女性はむしろ不安を感じている。話者の不安感が本来は不要な FSP の過剰使用を説明するという可能性もある。

9.5.1.2 個別 FSP の使用量

次に、個別 FSP ごとに母語話者と学習者の使用量を観察したところ、以下の結果を得た。

表 3 語別にみる母語話者と学習者の FSP 使用量

	母語話者			学習者		
	男性	女性	平均	男性	女性	平均
私	0.22	6.60	3.41	16.94	18.12	17.53
僕	11.11	0	5.56	0.50	0.00	0.25
俺	0.33	0	0.17	0.03	0.00	0.01
あたし	0.00	1.10	0.55	0.01	0.30	0.16

表 3 より、いくつかの例外的出現を除くと、(a) 男性が使う FSP は、母語話者では「僕」>「俺」>「私」となるが、学習者では「私」>「僕」>「俺」となること、(b) 女性が使う代名詞は、母語話者・学習者ともに「私」>「あたし」となることが示された。ただし、誤差の可能性を考慮し、3 つのグループ（男性学習者による「私」「僕」「俺」）の差が統計学的に有意かどうかを確認するために、一元配置分散分析を行う。2 つのグループ（女性学習者による「私」と「あたし」）の差が統計学的に有意かどうかを確認するために、t 検定を行う。その結果、男性学習者については、FSP の間には 1%水準で差があることが確認された ($F(2,6)=15.5, p<.01$)。また、ボンフェローニ下位検定を行った結果、「私」と「僕」、「私」と「俺」との間には 1%水準で差があることが確認されたが、「僕」と「俺」との間には差が見られなかった。女性学習者については、「私」と「あたし」の間には 5%水準で差があることが確認された ($t(4)=4.3, p<.05$)。

まず、(a) の点について、男性話者について言うと、母語話者が「僕」を、学習者が「私」をそれぞれほぼ排他的に使用するというのは注目すべき学習者・母語話者差であると言える。男性学習者が「僕」や「俺」を使わない理由としては、先行研究において、教科書の影響が指摘されている。ある場面を提示し、その場面でどういう表現を使うかを直接に問う記述式タスクシートを用いて、男性学習者の FSP 使用を調査した小玉 (2016) は、学習者は母語話者と比べて「僕」や「俺」の使用が少ないこと、また、『みんなの日本語』(初級・中級本冊) において「僕」や「俺」の頻度が「私」に比べて圧倒的に少ないことなどを指摘し、学習者が「僕」や「俺」をほぼ使用しないのは、「テキストによる『僕』『俺』のインプットが少ないことも理由の 1 つ」であると結論している。

この点を本研究でも再検証するため、中国で編纂された『新編日語』(第 1~4 冊の本文) における「僕」「俺」「私」の出現状況を見ておこう。なお、表の数値は、男性と女性が使用

した FSP の頻度を合算した結果であり、カッコ内は複数形の頻度である。

表 4 『新編日語』における「私」「僕」「俺」

	第 1 冊	第 2 冊	第 3 冊	第 4 冊
私	55(10)	68(16)	66(12)	75(7)
僕	4	5	27(1)	15
俺	0	0	1(1)	9

表 4 より、多くの中国人日本語学習者が使用している『新編日語』においても、4 冊すべてで「僕」と「俺」の頻度は「私」に比べて圧倒的に低く、とくに「俺」は第 3 冊まで出現せず、頻度も 1~9 回のみであることが確認された。以下の例を見てみよう。

(10) レースに勝つためには、このまま走りぬけるほかありません。しかも、ハヤマ号の調子は、いつも以上にすばらしいのです。(事故を助けるのは、おれたちの役目じゃない。このまま、いっきに走りぬけよう。)(第 3 冊, 第 16 課「マスコミ」)

(11) リカ：カンチの夢でも見ようかな。

完治：じゃあ、俺も。(第 3 冊, 第 17 課「映画」)

(12) 八郎：みんなは何が怖い？おれは長くて細いものが怖いな。蛇とか、ウナギとか…

角次：おれは蛙が怖い。(第 4 冊, 第 3 課「日本人とユーモア」)

(13) 記者 私に言わせれば、五十嵐さんはまさに「日本の雷鋒」ですね。

五十嵐：何回も中国の人からそう言われましたよ。私はそんな人知らないんで、「雷」という字を見て、「エッ？なんでおれが雷おやじなんだ」と首をひねりましたが……(第 4 冊, 第 16 課「五十嵐勝さん」)

「俺」が初めて登場するのは、第 3 冊第 16 課の応用文である。選手の心理描写で「おれたち」が使用されており、文章の後の「単語」コーナーで語彙の 1 つとして「おれたち」が紹介されているのに止まっている。「俺」がどのような場合で使えるかについての解説が見られなかった。「俺」の使い方について学習者の理解が教師の説明により大きく左右されることが予想される。第 17 課で初めて会話文に「俺」が出現し、ドラマ「東京ラブストーリー」の主人公完治のセリフで使用される。ドラマのあらすじが紹介されているため、学習者は、

親しい相手とのくだけた会話で「俺」が使用可能だと理解する可能性がある。

第4冊になると、第3課の応用文で、古典落語「まんじゅう怖い」を現代風に改作した台本では、「おれ」が6回使用されている。ここでは、会話の前に、「五人の若い男たちが、お酒を飲みながら話している」と場面についての説明が書かれている。その後、第16課の会話文で、中日友好に大きく貢献した五十嵐勝がインタビューを受けている場面では、「おれ」が3回出現している。いずれも例(12)のように、話し手の心の眩きをカギカッコで括って表現している。なお、心理描写以外の場面では、話し手が自分自身に言及するときに「私」が使用されている。同一人物による発話では、「私」と「俺」が同時に使用されることは、学習者に混乱させる可能性が考えられる。教師から説明されていないならば、テキストから得られる情報のみでは、「俺」と「私」の使い分けを知ることが難しいと考えられる。

続いて、(b)の点について、女性話者の場合、「私」>「あたし」という順序は同等であったが、女性学習者による「あたし」の使用頻度は女性母語話者の28%にとどまっていた。この点については2つの理由が想定される。1点目は、学習者は「あたし」という言い方を知ってはいたものの、インタビュー役の母語話者教師を前にして、相手に失礼にならないよう、意図的にくだけた言い方である「あたし」を避けたという可能性である。

2点目は、男性学習者の「俺」「僕」の過小使用と同じく、教材の影響の可能性である。下記は、『新編日語』(第1~4冊)における2語の出現状況をまとめたものである。

表5 『新編日語』における「私」「あたし」

	第1冊	第2冊	第3冊	第4冊
私	55(10)	68(16)	66(12)	75(7)
あたし	0	0	0	1

表5で示されたように、『新編日語』においては、第4冊になってはじめて「あたし」の用例が出現し、しかも1例のみであることがわかった。

(14) 横山：それは違うわ。同じ部の人みんな出していれば、やっぱり、あたしもみんなと同じようにするわ。そのほうが、摩擦が起こらないから。(第4冊、第7課『本音と建前』)

「あたし」の初出が第4冊第7課の同僚との飲み会という設定の会話文である。会話文は非デスマス体で行われ、くだけた会話で女性が使用しやすい「わ」も使用されている。学習者は、「あたし」の使い方について、女性が使用するFSPで、くだけた場面で使用されやすいと理解する可能性がある。ただし、『新編日語』において、「あたし」の用例はこの1例のほかにはないため、学習者がテキストから得られ得る情報は極めて限定的であるといえよう。

以上をまとめると、「私」以外のFSPのインプットの少なさは、おそらく各種の日本語教科書に共通する問題と言えよう。このため、男性学習者については、「僕」や「俺」、女性学習者については、「あたし」の使い方を学ぶ機会がなく、結果的に、使用制限が少なく汎用性の高い「私」を選んだと考えられる。

9.5.2 RQ2 習熟度別のFSP使用量

次に、母語話者のFSP使用量を100として、習熟度別の学習者のFSP使用量を比率値に変換し、初・中・上級の学習者間の変化をグラフとして示したところ、図2と図3の結果を得た。

図2 習熟度間変化（男性学習者）

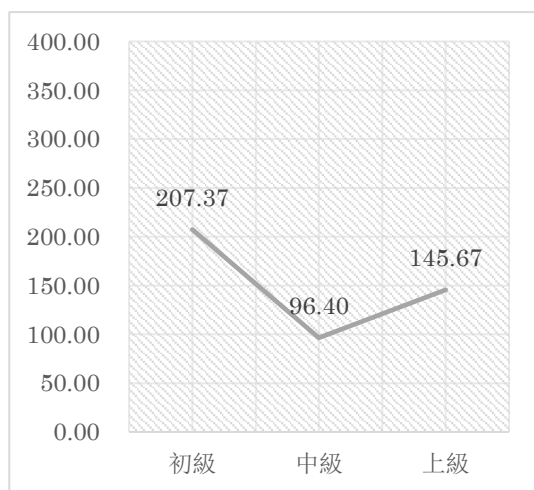
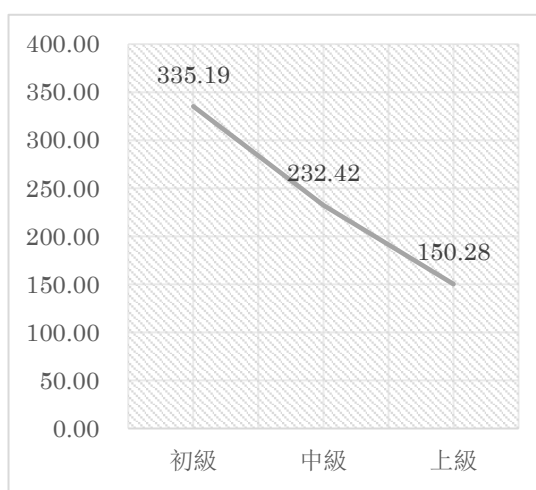


図3 習熟度間変化（女性学習者）



習熟度間のFSP使用量について、男性学習者については、初級から中級にかけて減少し、中級から上級にかけて再度増加するパターンが、女性学習者については、初級・中級・上級にかけて一貫して減少するパターンが観察された。ただし、誤差の可能性を考慮し、カイ二

乗検定を実施したところ、男性学習者については、初級>中級≒上級（初級・中級間： $\chi^2=35.74, df=1, p<.01$ ，初級・上級間： $\chi^2=42.98, df=1, p<.01$ ，中級・上級間： $\chi^2=0.02, df=1, p=.89$ ），女性学習者については、初級>中級>上級（初級・中級間： $\chi^2=45.11, df=1, p<.01$ ，初級・上級間： $\chi^2=134.05, df=1, p<.01$ ，中級・上級間： $\chi^2=24.74, df=1, p<.01$ ）という結果になった。つまり、初級から上級にかけて、男性・女性学習者ともに FSP の使用量は減少し、母語話者の使用量に近づいていく傾向性が証明された。また、前節において、女性のほうが FSP の過剰使用度が高い可能性を指摘したが、少なくとも上級者においては、男女差はほとんどなくなっている。

では、なぜ、初級者が FSP を過剰使用するのであろうか。この点については、すでに述べたように、初級の学習者は、授受表現文や、前の文から一人称が引き継がれる文など、省略できる場合にも FSP を言語化する傾向があり、また、それを一種のフィラーとして使用しているためであると考えられる。

以下は、対話の中で同じ質問（小さい時はどんな子どもだったか）を受けた際の初級・中級・上級学習者の回答例である。性別はすべて女性である。

(10)私のお母さんによって、私はいつも一人で、自分でしゃべっています。(CCM36, L190)

(11)私は、まあ、ちょっと内向的な子どもでした。(CCH11, L260)

(12)内気かな、大学では一年生二年生の時は部活のだから、みんなとよく話してるんですけど、今はたぶん、毎日一人で行動してるんですけど。(CCS04, L300)

初級の学習者の発話では、各文のはじめに「私」をつけて発話しているが、中級になると、連続した「私」の使用が少なくなっている。さらに、上級になると、FSP を使わないで発話をする例も見られる。このように、習熟度の上昇に従い、FSP の使用は次第に減少すると言える。

以上、本節で見てきたように、日本語学習者の FSP の過剰使用は、男女問わず、習熟度の上昇によってある程度改善すること、ただし、上級者であってもなお過剰使用の傾向が残ることが示された。上級学習者にとっても談話の状況を考えて一人称を適切な量で使用することは決して容易でないといえよう。

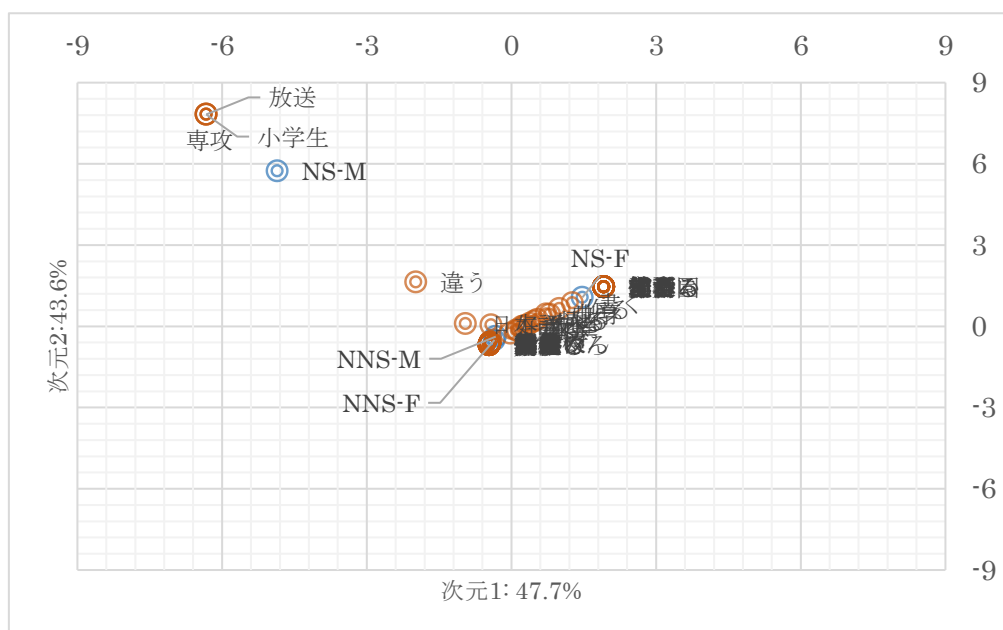
9.5.3 RQ3 FSP の共起語

RQ1 および RQ2 の調査で、学習者と母語話者間、また異なる習熟度の学習者間で、FSP の使用量には差異があることが確認された。RQ3 では、学習者が最も多く使用している「私」を対象に、共起語を第 1 アイテム、参加者群を第 2 アイテムとして対応分析を実施することで、学習者と母語話者がどのように分類されるか、また、それぞれ共起しやすい語にはどのようなものがあるかを検討する。

対応分析から得られるプロット図では、性質の近いデータが近くに布置される。もし男性群と女性群がそれぞれ別の場所で固まっていれば、母語話者と学習者の差より、男女差が「私」の共起パターンに影響を及ぼしていることになる。一方、母語話者同士、学習者同士がそれぞれ別の場所で固まっていれば、男女差より、母語話者と学習者の差が重要な影響要因であることになる。

この点を確認するため、対応分析を実施したところ、図 4 と 5 の結果が得られた。図 4 は対応分析で得られたプロット図の全体像である。今回のデータでは、男性の母語話者 (NS-M) による「私」の使用例が 2 例のみであるため、「NS-M」がほかの 3 群からかなり外れた位置に布置されている。図 4 ではほかの 3 群の布置状況が見にくいので、中心区域「±3」を拡大して得られたのが図 5 である。

図 4 対応分析の結果 (全体)



- (14) 私はやはりお金です。(CCS49, L270)
- (15) お金と時間だったら、お金ですね。(JJJ11)
- (16) 今はお金ですね。(JJJ13)

学習者は「私は」と明示しながら、自分の意見を述べているのに対し、母語話者は意見表明をする際に「私」を省略している。この場合は、母語話者のほうがやはり自然である。というのも、他の人と対比して自らの主張を強調する際には「私は」を使うが、ここでは、対比は行っておらず、あえて「私は」を言語化する必然性がないからである。むしろ、こうした状況で「私は」を過剰に使用すると、相手に自己中心的な印象を与えてしまうおそれもある。学習者はこうしたニュアンスの違いについて認識が不足している可能性がある。

次に、学習者群では、「私」と共起しやすい語には、「お母さん」「お父さん」などの語が入っていることに注目したい。以下の用例を見てみよう。

- (17) 毎日たぶん私のお母さんは怒っている。(CCM29, L220)
- (18) その日は、私のお母さん、いや、お父さんは残業がありました。(CCT15, L270)
- (19) 私のお父さんがギターを弾くことができるので、ギターを弾きながら、ハッピーバースデーの歌を歌いながら、ケーキを食べます。(CCS38, L210)

学習者は家族のことについて話すときに、「私のお母さん／お父さん」のように、一人称を連体修飾語として使用している。しかし、日本語では、呼びかけの場合を除き、相手の母親には「お母さん」を、自分の母親には「母」を使う。ゆえに、例(17)の場合でも、「…母は怒っている」としたほうが自然だろう。中国人日本語学習者の発話にのみ「私のお父さん・お母さん」という表現が多く見られることも、母語影響の可能性もある。以下の例を見てみよう。

- (20) 我的妈妈是家庭主妇。(母は専業主婦です。)
- (21) 小李的妈妈是家庭主妇。(李さんのお母さんは専業主婦です。)

中国語では、日本語のように家族を指す言葉が「内」か「外」かによって区別することが少なく、相手の母親にも、自分の母親にも「妈妈」を使う。両者を区別して使用したい場合

は、常に「妈妈」の前に、人称代名詞をつける必要がある。例えば、自分の母親のことを他人に話す際に、例(20)のように、「妈妈」の前に「我的(私の)」をつけて使用することが多い。このように、学習者が自分の父親・母親を指すときにも「私の」を使う背景には、中国語の言語習慣が負の転移(石川, 2017)を起こしている可能性が考えられる。

以上、本節で見てきたように、「私」の共起パターンについて、母語話者・学習者間の違いとして、(1) 学習者は発話の中で、意見表明をする際に一人称代名詞を言語化する傾向が強いこと、(2) 家族を指すときに、「私のお母さん／お父さん」のような不自然な使い方が見られること、の2つが確認された。

9.6 まとめ

本章では、日本語学習者の習熟度の違いが、発話中の FSP 使用量と共起パターンにどのような影響を及ぼしているかを解明すべく、使用量、習熟度間の変化、共起パターンの3つの観点から調査を行った。以下、RQ に即して本研究で得られた知見をまとめる。

RQ1 (使用量) では、まず、FSP 全体使用量については、男女問わず学習者が母語話者よりも FSP を過剰使用することが確認された。この原因として、(1) 学習者は母語話者よりも言い淀みが多く、その際に一人称が多く出現すること、(2) 学習者が、省略可能な場合にまで、本来は不要な一人称代名詞を言語化しがちである、という2つの可能性が考えられる。次に、個別 FSP の使用量については、(1) 男性話者について言うと、母語話者が「僕」を、学習者が「私」をそれぞれほぼ排他的に使用すること、(2) 女性話者について言うと、母語話者・学習者ともに「私」 > 「あたし」となることが示された。

RQ2 (習熟度間の変化) では、日本語学習者の FSP の過剰使用は、習熟度の上昇によってある程度改善するものの、上級者であってもなお過剰使用の傾向が残ることが示された。

RQ3 (共起語) では、男女差より、母語話者・学習者間の差が FSP の共起パターンに影響を及ぼしていることが確認された。母語話者・学習者間の FSP 共起パターンの違いとして、(1) 学習者は意見表明をする際に、一人称代名詞を言語化する傾向が強いこと、(2) 学習者は、家族を指す言葉が「内」か「外」かによって区別することについて認識が不十分であるため、「私のお母さん／お父さん」のような不自然な使い方をすること、の2つが挙げられた。

今後 FSP についての指導を考える際に、FSP が省略できる用例を紹介したり、母語との違いについて意識させたりするなど、学習者が FSP を適切な量で使用できるように、明示的な指導が必要になるだろう。また、教科書では「僕」「俺」の出現頻度が比較的少なく、

説明も不足しているという現状を踏まえ、新しい教科書を編纂したり、あるいは、現存の教科書を改訂したり、補助教材を作成したりする際に、個々の FSP のバランスを考え、使い分けについてより詳細な説明を補足することが望ましいだろう。

第10章 中国人日本語学習者の文末詞使用

第Ⅲ部では、学習者の日本語使用における(1)一人称代名詞、(2)文末詞、(3)陳述スタイル、(4)ヘッジの問題を概観する。

このうち、本章では、(2)文末詞の問題を取り上げる。この問題については、すでに第Ⅱ部の6章において母語話者による文末詞使用実態を分析済みである。6章では、BCCWJの書籍(文学)を分析し、文末詞に関して、(1)1970年代から2000年代にかけて、小説において、文末詞語形の使用数が増えるとともに、男性による文末詞語形の使用数も増加しており、(2)「わ系」(「わ」「わよ」「わね」)が小説において多用されており、(3)7種類の文末詞は、主張度の強い場面より、上品さや女性らしさを表出し、やわらかい言葉遣いが好まれる場面で使用されやすい、といった知見が得られている。ただし、これらは母語話者に限った分析であり、学習者が発話の中でどのように文末詞を使用するかは明らかではない。

では、学習者の発話において、こうした文末詞はどのように使用され、また、習熟度の上昇につれ、文末詞の使われ方はどのように変化していくのであろうか。本章では、学習者の発話データ(対話)を用い、(1)使用量、(2)種類、(3)習熟度の影響の3つの観点に注目しつつ、学習者が文末詞を逸脱的に使用しているかどうかを検討する。

10.1 本章の目的とリサーチクエスチョン

すでに述べたように、本章の目的は、学習者の発話における文末詞の使用実態を解明することである。

こうした目的に沿い、以下の3つのリサーチクエスチョン(RQ)を設定した。

RQ1 学習者・母語話者間で文末詞の使用量に差はあるか。(使用量)

RQ2 学習者・母語話者によって使用される文末詞に違いはあるか。(使用状況)

RQ3 異なる習熟度間で、学習者の文末詞の使用量に差はあるか。(習熟度の影響)

ここで、上記のRQについて事前仮説を考えたい。まず、RQ1について、文末詞の用法が複雑であるため、学習者はそれらの使用を避け、母語話者より使用量が少ないことが予測される。RQ2について、母語話者と比べ、学習者のほうが使用する文末詞の種類が限られることが予想される。RQ3について、上級になると、常体で話す機会が増えるため、習熟度があがるにつれ、学習者の文末詞の使用量が増えるのではないかと予想される。

10.2 データ

本章では、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」(I-JAS)を使用する。詳細はすでに3.1.2.2で述べたとおりである。

文末詞には、女性が主に使用するものと、男性が主に使用するものがあるため、文末詞の使用実態を調査する際には、話者の性別に関する情報が重要になる。また、文末詞の使い方は学習者の習熟度にどのように影響されているかを調査するために、習熟度の情報も必要である。

I-JASでは、この2つの情報を直接的に調べられ、かつ、中国人日本語学習者と日本語母語話者が同じタスクを行うため、タスクタイプの影響を統制できる点で、今回の調査の目的に適合したデータと言えよう。

I-JASには、ストーリーテリング(ST)、絵描写(D)、対話(I)、ロールプレイ(RP)、ストーリーライティング(SW)などのタスクがある。このうち、文末詞は、参加者が自分自身のことを語ったり、自分の見解を述べたりする対話(I)において多く出現すると推測される。したがって、本調査では、対話(I)のデータに限り分析を行う。

10.3 対象者

すでに述べたように、本研究は、学習者による文末詞使用を、母語話者による文末詞使用と比較しながら検討する。本来なら、学習者と母語話者の年代をそろえるほうがロジックが通るが、性別・年代別の人数分布(表1)を見ると、学習者の年齢分布は、10代と20代に集中している。一方、母語話者データには10代のデータが含まれていない。20代の母語話者による文末詞使用が少ないと推測されるので、母語話者用例を広く示すために、母語話者対象者の年代を20~30代に指定する。従って、本研究では調査対象を20~30代の母語話者(男15,女18名)、10~20代の学習者(男36名,女160名)に限定する。

表1 I-JASの性別・年代別の人数

	母語話者		中国語を母語とする日本語学習者	
	男	女	男	女
不明	0	0	1	0
10代	0	0	5	19

20代	9	10	31	141
30代	6	8	0	0
40代	6	7	0	0
50代	2	2	0	0
合計	23	27	37	160

すでに述べたように、I-JAS では、学習者には J-CAT と SPOT の 2 種類の日本語能力テストを実施し、レベル判定を行っている。本研究では、J-CAT のスコアを日本語習熟度の目安とする。日本語学習者は習熟度の上昇に伴い、文末詞使用がどのように変化していくかを見るため、本研究は J-CAT のスコアを手がかりに、196 名の学習者を初級（100～）、中級（200～）、上級（300～）に群化し分析することとする。以下はレベル別の人数を示した表である。これにより、母語話者 1 群、学習者 3 群、合計 4 群が本研究の分析対象となる。

表 2 レベル別の人数

レベル	J-CAT スコア	人数（男性）	人数（女性）
初級	100～	7	25
中級	200～	28	121
上級	300～	2	14

10.4 調査項目

水本の文末詞に関する一連の研究を踏まえ、本研究では「かしら・わ・わね・わよ・のよ・Nね・Nよ」の 7 種類の文末詞を調査対象とする。「Nね」は「名詞+ね」、「形状詞+ね」、「形状詞型活用の助動詞の語幹（そう・みたいなど）+ね」、「名詞型の非活用語（だけ）+ね」などに限定して議論する。「Nよ」も同様である。

表 1 調査対象とする文末詞

文末詞	例
かしら	誰かしら／本当かしら
わ	行くわ／いやだわ

わね	行くわね／無理だわね
わよ	行くわよ／素敵だわよ
のよ	行くのよ／おかしいのよ／いやなのよ／あいつなのよ
Nね	嘘ね／失礼ね／そうね／これだけね
Nよ	嘘よ／だめよ／そうよ／これだけよ

なお、「ね」の直前に名詞がつく場合、「ね」の機能が必ずしも一様ではない。以下の例を見てみよう。

- (1) A：印象に残っている、そうゆうプレゼントってありますか。
 B：えーっと、それは、お誕生日？
 A：そうですね。
 B：お誕生日ね。…なんかもらった記憶があんましなくて (JJJ33)
- (2) 今ね、派遣でやったり契約社員とかいろいろありますけれども…… (JJJ37)
- (3) サプライズで、おめでとうって感じじゃなくて、買いに行って、じゃあこれがプレゼントねって感じだったと思います。 (JJJ06)

(1) と (2) は「お誕生日はね」「今はね」と言えるため、「ね」が文節を区切る機能を果たしている。本研究では、水本 (2006) の判断基準を踏襲し、こうした文節を区切る「ね」を「Nね」と見なさない。(3) のように「だ」がついたほうが自然なのに、それが省略されて、名詞の直後に「ね」がつく例のみを「Nね」とみなす。

10.5 分析手順

RQ1 (使用量) については、男女別に、学習者と母語話者の文末詞使用量を比較する。まず、中納言で検索対象を日本語母語話者と中国語を母語とする学習者による対話 (I) に限定し、7種の文末詞の用例を抽出する。次に、母語話者、初級学習者、中級学習者、上級学習者4群ごとに使用された文末詞のトークンとタイプを調べる。各群の人数が異なるため、トークン数については1人あたりの調整頻度に換算する。一方、タイプ数については、人数が多くなるとタイプ数も無限に増加するわけではないので、そのまま分析対象とする。なお、

「わ」の用例には、感動や驚きの気持ちを表すときに使用される「わ」のような慣用表現も含まれている。使用量の調査では、このような用法の「わ」を区別せずに数えるが、RQ2で用例を質的に観察するときに、それを個別に取り上げて議論する。

RQ2（使用状況）については、7種の文末詞を個別に取り上げ、それらが母語話者および学習者に使用されているかどうかを調査する。特定の個人が特定の文末詞を反復使用している可能性もあるため、頻度ではなく、当該文末詞を使用している話者の人数に注目して調査する。

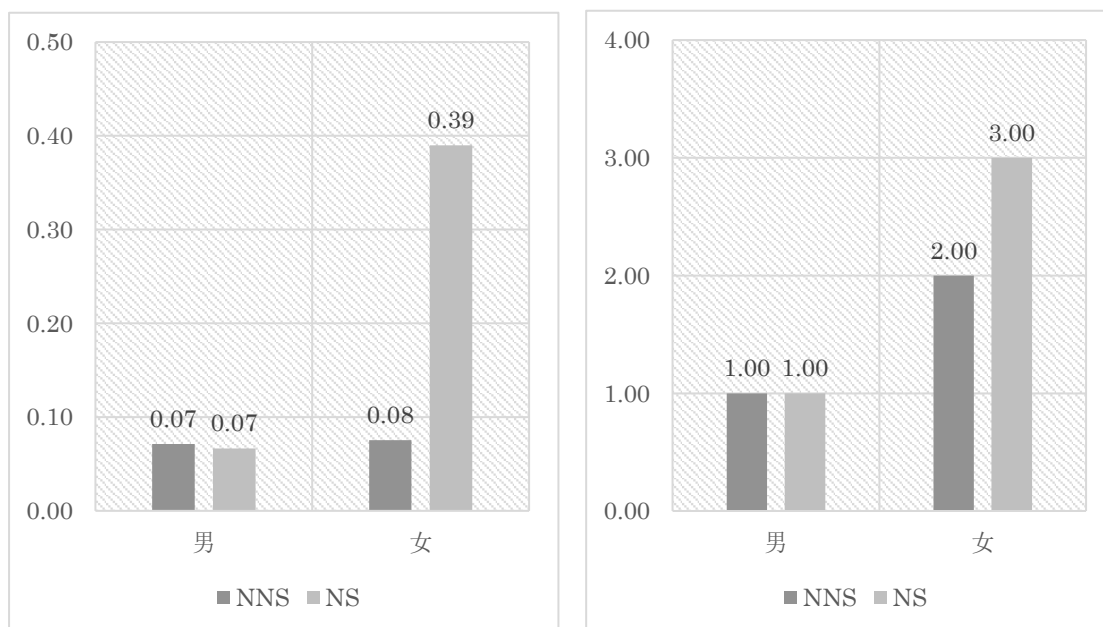
RQ3（習熟度の影響）について、母語話者の文末詞使用量を100とし、学習者の文末詞使用量を比率に変換し、男女別に初中上級の学習者間の変化をグラフとして示す。

10.6 結果と考察

10.6.1 RQ1 学習者・母語話者別の文末詞使用量

1人あたりのトークン数と、タイプ数について、学習者3群の平均値と母語話者の値を比較したところ、図1と図2の結果が得られた。

図1 NNSとNSの文末詞使用量(トークン) 図2 NNSとNSの文末詞使用量(タイプ)



男性話者については、母語話者と学習者は使用した文末詞のトークン数・タイプ数がほぼ等しい。一方、女性話者については、学習者が使用した文末詞のトークン数は母語話者の1/5

以下であり、タイプ数も母語話者より少ないことが観察された。そもそも男性母語話者による文末詞の使用はごく稀なので、文末詞使用数が母語話者・学習者そろって低い数値にとどまっていることは自然と言えよう。

一方、母語話者と比べ、女性学習者が文末詞をあまり使用しない理由としては、(a) 母語による影響、(b) 教科書における解説の分量の少なさ、の2点が考えられる。

まず、(a) の母語影響については、日本語に比べると、中国語は一般的に性別の差が少なく、片方の性別のみが使用する語彙がほとんど存在しない。ここでは、日本の小説『幽霊人命救助隊』(高野和明, 2004) から男女によるセリフを1例ずつ取り出し、中国語翻訳版『幽霊救命急先鋒』(高野和明(著), 張智淵(訳), 2007) においてそれらがどのように訳されているかを見てみる。

(4a) 「それでいいのよ。怯えてしまっているの。怖がりながらも、頭の片隅で考えることができれば、何かが変わってくるはずよ。」

(4b) “这样就好。害怕也无所谓。如果你在害怕的同时，脑袋中能够思考的话就好。”

(5a) 「母さんや結衣だって、そう思ってるよ。ただ一緒にいてくれればいい、そう思ってるはずだよ。」

(5b) “妈妈和结衣也希望你这么。她们应该认为只要你待在他们身边就好。”

(4) の話者は女性、(5) の話者は男性である。(4a)、(5a) では、男女の話し方に違いが出やすく、「Nよ」「Nだよ」などの文末詞が役割語として機能し、セリフの話し手の性別の違いをはっきり示している。一方、(4b) と (5b) のように、中国語に訳されると、性別を含意する文末詞は言語化されず、性別による話し方の違いは打ち消されている。結果的に、セリフの部分だけを見ると、話し手の性別は特定できない。こうした中国語の母語特性に影響され、中国人日本語学習者は、日本語で発話するときにも、文末詞の使用を無意識に避けているのではないかと考えられる。

次に、(b) の教科書影響について、野田(2005)は、従来の日本語教育では、『を』『に』のような文の構造に関わる格助詞を重視し、『ね』『よ』のような聞き手との関係に関わる終助詞を軽視する傾向にあると述べている。中国人学習者の学習環境におけるこうした文末詞の扱われ方を検証するため、中国で編纂された『新編日本語』(第1~4冊)の本文と解説を

調査したところ、第3冊と第4冊の本文と応用文において、7種の文末詞の用例はすべて出現しているものの、解説がなされているのは「かしら」「わ」「わね」「わよ」「かしら」の4種のみであることがわかった。以下の用例を見てみよう。

(4) (夫婦の会話。デパートで。)

夫：ぼく、もうお金持ってないよ。さっき君のクツを買ったもの。

妻：いいのよ。わたし、カード持っているから。

...

夫：あのさら、高そうだよ。

妻：大丈夫よ。お金まだ残っているわ。

(『新編日語』第3冊，第12課)

例のように、夫婦間の会話では、夫と妻に異なる文末詞を使用させることによって、男女の話し方の違いを区別しながら提示している。ここでは、典型的な文末詞「のよ」、「Nよ」、「わ」が使用されているが、このうち、「のよ」と「Nよ」については、解説が一切ない。一方、「わ」については、以下のような解説がある。

表2 教科書における「わ」の解説（和訳は筆者による）

項目	記載内容
終助詞 「わ・わ ね」	「わ」：女性用語，文末で使用されるとき，言葉が柔らかくなる。「わ」は「よ・ね」と合わせて使用できる。「わよ」は自分の意見を強調するとき，「わね」は他人の同意を求めるときに使用される。 用例：きょう，おかげで，本当に楽しかったわ。 最近また物価が上がって困ってしまいますわね。 そんなにしつこく言わなくてよかったわよ。

教科書では、「わ」の機能について、言葉を柔らかくして女性らしさを表出することは示されているが、水本（2006）も言うように、とくに20代・30代の女性の意識の中では、文末詞は、人間関係の円滑化、気取り、年配や目上への敬意の表れ、冗談など、様々なニュアンスを含意しうる。こうした「わ」の機能と重要性は、教科書には記載されていない。以上

で見たように、日本語教科書において、文末詞の解説は量的・質的に不足しており、そのため、学習者は、文末詞の使用域を実際よりも限定的にとらえ、結果として、母語話者ほど使用していないという可能性が考えられるだろう。

10.6.2 RQ2 使用される文末詞

RQ1 では、学習者・母語話者による文末詞の全体使用量について見てきたが、一部の文末詞の使用が全体に影響している可能性もある。そこで、RQ2 では、7種の文末詞を個別に取り上げ、それらが母語話者および学習者に使用されているかどうかを確認した。

特定の個人が特定の文末詞を反復使用している可能性もあるため、ここでは頻度ではなく、当該文末詞を使用している話者の人数に注目して調査したところ、以下の結果を得た。

表3 学習者・母語話者が使用する文末詞

文末詞	NNS 男	NS 男	NNS 女	NS 女
かしら	0	0	2	1
わ	0	1	0	2
わよ	0	0	0	0
わね	0	0	0	0
Nね	2	0	4	4
Nよ	0	0	2	0
のよ	1	0	0	0

まず、男性話者における母語話者と学習者の共通点と相違点について、以下の3点を指摘したい。

1点目は、7語中、「かしら」「わよ」「わね」「Nよ」の4種については母語話者・学習者ともに使用していなかったということである。

2点目は、「わ」について、母語話者の使用はあるが、学習者の使用が確認されないことである。以下は母語話者の使用例である。

- (5) 今じゃ全くないんですけども、その時は、ああすごいなあというか、それに慣れてしまったってゆうのが、なんかもう非常ベルは鳴るわ(↓)。毎日とゆうか、ほとんど

鳴ってた記憶ですね。(JJJ35, 男性, 30代)

文末詞を概説するマグローイン・花岡(1993)は、「わ」について、男性話者は下降調イントネーションで、女性話者は上昇調イントネーションで使うことが多いと述べている。この点をふまえ、I-JASの録音資料を確認したところ、(5)の「わ」は、マグローイン・花岡(1993)の指摘どおり、下降調であることがわかった。この「わ」は「(多く男性が)感動したり、驚き、あきれたりする気持ちを表す」用法だと考えられる(『新明解国語辞典』第6版)。(5)は、中学校の頃の怖い体験談について語るときに「わ」を使うことで、驚きの気持ちを表しているものと考えられる。一方、男性学習者は、「わ」の使用例が皆無である。この原因として、教科書の影響が考えられる。RQ1で述べたように、『新編日語』の解説では、「わ」は女性用語と定義され、男性の使用について一切触れられていない。こうした教科書の記載により、男性学習者は「わ」を女性専用と理解しているのではないかと考えられる。

3点目は、学習者のみが「のよ」「Nね」を使用していることである。学習者と母語話者は同じ内容についてインタビューされるわけであるが、母語話者は「のよ」「Nね」を全く使用していない。以下は学習者による使用例である。

(6) C: 電気製品が好きですか。

K: そうそうそう。好き好き大好き。ファン、ファンなのよ。パソコンとか、エアコンもとか、その全部、あの一日本製。(CCM12, 男性, 20代, 中級)

(7) C: あなたが数学が好きだったから、その数学の先生を好きだし。

K: あーその、そうね。(CCH31, 男性, 20代, 初級)

文脈を確認すると、(6)の話者は相手の質問に回答しており、(7)の話者は相手の発言に同意を示している。いずれも日常的な話題についての自然な会話の一部であり、話者が故意におどけて、女性的なニュアンスを含意する「のよ」や「Nね」を使用したわけではない。つまり、2名の話者は、これらの文末詞が持つ女性性に気づかず、使用してしまったものと推測される。実際の日本語での会話においてこうしたことが起こると、相手に一定の違和感が生じる可能性が高い。

次に、女性話者における母語話者と学習者の共通点と相違点について、以下の4点を指

摘したい。

1点目は、「わよ」「わね」「のよ」の3語は母語話者・学習者ともに使用しておらず、「かしら」「わ」「Nね」の3語はともに使用しているということである。使用の有無という点では、7語中6語において母語話者・学習者の差はなかった。

2点目は、上記のうち、学習者・母語話者ともに2人以上が使用するのは「Nね」だけであったことである。「Nね」は両者に定着した文末詞であると考えられるが、それぞれ同じ意味機能で使用されているかどうかはわからない。そこで、「Nね」の用例を質的に観察したところ、「そうね」という決まり文句の使用が母語話者・学習者共に観察された。なお、学習者用例は同一話者（CCM06）によるものである。

(8) うーん、休みの日とかもそんなに、まあ、遊ぶ、遊ぶかー、遊ぶは遊ぶなー、うん、
そうね、なんか大人になってからの友達とまあ、ちよ違いますよね。(JJJ43, 女性,
30代)

(9) C: なんか緻密な作業かなと思って、結構疲れちゃわないかなーと思うんですけど。

K: そうね、たぶんそれが好きな人と嫌いな人いると思うんですけど、私はすごい好きなので。(JJJ46, 女性, 30代)

(10) C: 今日はとても寒いですね。

K: そうね。(CCM06, 女性, 20代, 初級)

(11) C: だから、人生のことが話せるのかもしれませんがね。

K: そうね。(CCM06, 女性, 20代, 初級)

いずれも相手の発言に対して同感を示すために「そうね」が使用されており、「ね」によって何らかの特殊な意図を含意した用例ではないと考えられる。「そうね」は「そう+ね」というより、相手に同感を示す際の定型的なあいづちとして、母語話者・学習者ともに、一般的に使用されることが確認された。

このほか、母語話者・学習者ともに、引用節内で「ね」を使用している。

(12) サプライズで、おめでとうって感じじゃなくて、買いに行って、じゃあこれがプレゼントねって感じだったと思います。(JJJ06, 女性, 20代)

(13) 遠目でなんかそうゆうの見てくれてて、なんか、友達思いね、みたいなことを、言っ

ていただいて、そうゆう細かい所まで、見てくれてるんだなってゆうのを、子供ながらに感じて。(JJJ07, 女性, 20代)

(14) コナンが外にうろうろして、蘭さんに見つけちゃった。そして、蘭さんは「あー、かわいい子ね、お名前は」(CCS60, 女性, 20代, 中級)

(12) と (13) は母語話者用例で、前者は家族の自分に対するセリフの中で、後者は先生の自分に対するセリフの中で、それぞれ「ね」が使用されている。前者については、引用されたセリフの話者が女性であることを示している可能性が考えられる。一方、後者で言及された先生は話者からみれば目上の立場の人なので、ここでの「Nね」は「当該人物の目上性を示すためにある種の役割標識」(石川, 2020)として使用されている可能性がある。(14) は、学習者用例で、アニメの女性キャラクターの発言内で「ね」が使用されている。先行研究では、文末詞はキャラクターの性別を明示する役割を果たし、ドラマや小説、漫画などにも積極的に使用されてきたと述べられている(金水, 2003)。(14) では、学習者がアニメのキャラクターのセリフをそのまま覚え、引用したものと考えられる。こうした「ね」は、いずれも話者の属性を示すための役割語として使用されており、この用法は母語話者・学習者に共通したものと言える。

では、「そうね」と引用節内での使用以外に、どのような形で「ね」が使用されているのであろうか。以下の例を見てみよう。

(15) 人生は一回だけね、やり直すこともできないし、だからできるだけ、今の時間、今の自分の、なんか、把握できる時間を無駄にしないように、工夫します。(CCM35, 女性, 20代, 上級)

(15) は学習者用例で、時間とお金の二択のうち、どちらがより大切なのかについて述べる中で、自分の意見に付加して「ね」を使用している。(15) では、学習者が普通の文脈で文末詞を使用している。似たような文脈での母語話者用例は皆無である。若い世代の会話から、「特殊な使用(冗談・気取りなど)を除いては、文末詞がほぼ消滅しつつある」という水本(2006)の結論を合わせて考えると、ここでは、「…一回だけね」という方が自然かもしれない。この点については、中国人日本語学習者は文末詞の使用上の特殊性についての認識が不足している可能性が考えられる。

3点目は学習者のみが「Nよ」を使用していることである。母語話者は1回も「Nよ」を使用していない。以下の学習者用例を見てみよう。

(16) でも先生は「大丈夫よ、あなたはずっと信じていますよ、きっといい点数を取って、
高級な大学に入れますよ」と、言ってくれました。(CCH19, 女性, 10代, 中級)

(17) C: : ちょっと体も動かさせていいですよ?

K: そうよね。でも、一年生と比べると、やっぱり年齢の差があるから、「ちょっと、
いいな、若者って」。(CCS30, 女性, 20代, 中級)

(18) C: 今年は楽しい誕生日になるといいですね。

K: そうよね。(CCS30, 女性, 20代, 中級)

学習者の使用した「Nよ」は、「そう+よ」が2例、「形状詞+よ」が1例である。このうち、(16)の「Nよ」は印象に残った先生の言葉の引用部に出現しているので、引用部の発話者が女性であることを強調したいのならば、これは必ずしも不自然な用例ではない。

一方、(17)と(18)は同一話者による使用例であり、話者は相手の発言を受け、同意を示している。インフォーマルな会話で非デスマス体を使用するときには、「そうだよね」、などと言うほうがふつうであると思われる。「だ」が脱落すると、非常に女性的な言い方になる。母語話者が「Nよ」を使用する例が存在しなかったことを合わせて考えると、(17)と(18)はやや不自然な使い方であると言えるかもしれない。

4点目は、「わ」の使用に関して、コーパスの録音資料を確認したところ、母語話者が上昇調の「わ」を使用しているのに対し、学習者が下降調の「わ」を使用していることである。以下の例を見てみよう。(19)と(20)は母語話者、(21)は学習者による用例である。

(19) ニッキーってゆう先生が可愛い先生が、なんかすごのおめでとうみたいな、ことをゆ
われて、「私もなんか海外で、誕生日を何回か迎えたことがあってすごく特別な時間
だったわ (↑)」って言われて、なんかすごく特別な嬉しい気持ちになりましたね。

(JJJ19, 女性, 30代)

(20) K: どういう所が上海がいいですか? 広州と比べて。

C: 習慣ですわ (↓)。例えば、上海は、どちらでも便利です、何でも買えます。(CCM03
女性, 20代, 中級)

(19) の説明を聞いただけでは、ニッキー先生が男性であるか、女性であるかはわからない。話者は、ニッキー先生の発話を引用する中で、文末詞「わ」を使用し、かつそれを上昇調で発音することで、ニッキー先生が女性であることを合わせて表出しているのである。

(20) は学習者用例で、上海と広州の住みやすさの違いについて述べている。コーパスの録音資料を確認したところ、学習者は下降調の「わ」を使用していた。通例、こうした言い方は、中高年の男性話者がぞんざいでくれた文脈で用いることが多い。母語話者であれば、押し出しの強い商売人的な男性キャラクターをイメージするかもしれない。ではなぜ、ここで、女性学習者は、男性的と捉えられやすい下降調の「わ」を使用しているのでしょうか。以下の 2 つの可能性が考えられる。

1 つ目は、学習者が意図的に、あえてぞんざいな言い方をして、自分の男っぽい性格を表したかったという可能性である。前後文脈を確認したところ、対話で「小さい時は、どんな子どもだったのか」と質問されたときに、CCM03 の学習者は「女の子だけど、男の子みたいだった」と答えている。因 (2003) によると、小説における女性による男性語使用は、「他人格モード」を実現する手段だという。(21) の下降調の「わ」は、話者が自身から距離感を置き、男性的なキャラクターを仮定的に設定する役割を果たしているかもしれない。

2 つ目は日本人との接触が日本語学習に影響している可能性である。先行研究では、若年層には下降調の「わ」を使用している女性がいると報告されている (尾崎, 1997)。話者 CCM03 のフェイスシートでは、親しい友人に日本語母語話者がいるほかに、授業以外で翻訳のアルバイトをするときに日本語を使用しているといった情報が載せられている。こうした情報を合わせて考えると、CCM03 は教室外で多様な生の日本語に接触することができるため、下降調の「わ」を見聞きして、まねしているのではないかと考えられる。

10.6.3 RQ3 習熟度別の文末詞使用量

RQ3 では、母語話者の文末詞使用量を 100 として、習熟度別の学習者の文末詞使用量を比率値に変換し、初・中・上級の学習者間の変化をグラフとして示したところ、図 2 と図 3 の結果を得た。

図 2 習熟度間変化（男性）

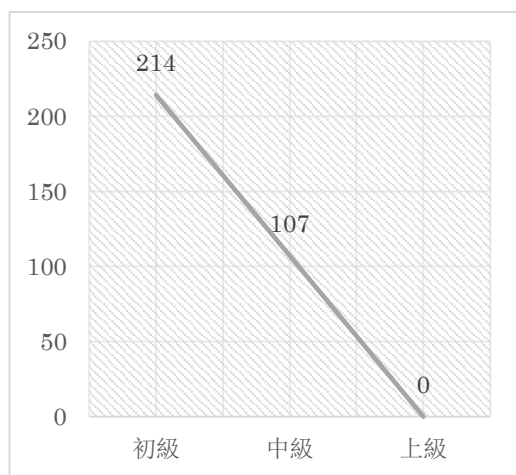
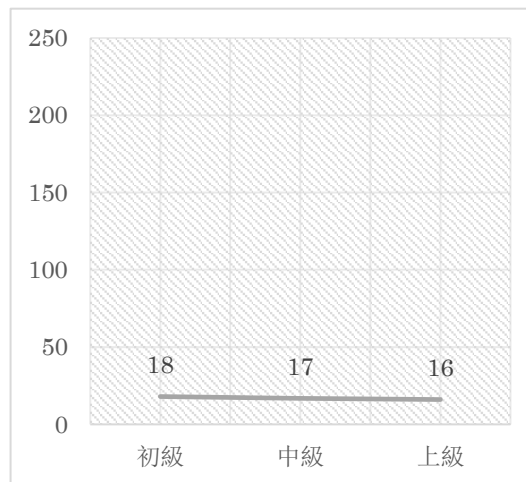


図 3 習熟度間変化（女性）



男性学習者については、文末詞を使用したサンプル数が 3 名のみであり、個人言語の影響が強く出ている可能性はあるものの、今回のデータに限って言えば、習熟度の上昇に伴い、文末詞の使用数は激減し、最終的には使用しなくなるというパターンが示唆された。初級者は、母語話者の 2 倍以上という著しく高い頻度で文末詞を使用していたが、こうした不自然な文末詞使用は上級者になるとなくなっていくと考えてよいだろう。

一方、女性学習者については、初級～上級の間で 2% しか減っておらず、はっきりした習熟度の差は見られなかった。習熟度を問わず、女性学習者は、母語話者の 2 割弱程度、文末詞を使っていることになる。男性学習者の場合と異なり、初級者であっても、女性学習者が文末詞を過少使用することの背景としては、文末詞の意味機能が複雑であることが考えられる。母語話者であっても、若い世代の発話から文末詞が消滅しつつある中で、学習者として、文末詞を使用するかどうか、もし使用するとしたら、どのような場合でどのような形式を使用するかについて適切な判断をするのは決して容易ではないだろう。一貫して、過少使用が続くことは、こうした学習者の迷いの意識の反映であると考えられる。

なお、母語話者・学習者比較で検出された差については、通例、教育の現場において、矯正のための措置が講じられるわけだが、実際の母語話者による発話では、こうした文末詞が衰退しつつあり、男女による話し方の違いが縮まっているという事実を踏まえ、若い世代の学習者が女性性を強調する文末詞を産出する必要がなくなるのではないかと考えられる。一方、場面に応じて文末詞を使用する母語話者がいるため、学習者にとって文末詞を理解するための知識は依然として重要であろう。従って、文末詞の学習目標について考える際に、

産出と理解を区別したうえで、総合的に判断すべきではないかと考えられる。

10.7 まとめ

本章では、学習者の発話における文末詞の使用実態を解明すべく、使用量、使用状況、習熟度間の変化、の3つの観点から調査を行った。以下、RQに即して本研究で得られた知見をまとめる。

RQ1（使用量）では、男性話者については、母語話者と学習者は使用した文末詞のトークン数・タイプ数がほぼ等しいこと、女性話者については、学習者が使用した文末詞のトークン数は母語話者の1/5以下であり、タイプ数も母語話者より少ないことが確認された。

RQ2（使用状況）では、男性話者については、母語話者のみが「わ」を使用すること、学習者は「のよ」「Nね」が持つ女性性に気づかず使用していることが確認された。女性話者については、学習者・母語話者ともに引用節内で「Nね」を使用し、「そうね」を同感を示す際の定型的なあいづちとして使用すること、学習者のみが「Nよ」や下降調の「わ」を使用すること、などが明らかにされた。

RQ3（習熟度間の変化）では、習熟度の上昇に伴い、男性学習者については、文末詞の使用数は激減し、最終的には使用しなくなるというパターンが示唆された。女性学習者については、初級～上級の間で2%しか減っておらず、はっきりした習熟度の差は見られなかった。

以上を踏まえ、今後教育現場で文末詞を指導する際には、実社会における文末詞の使用実態を踏まえ、学習者の視点から文末詞の指導を考えるべきである。まず、文末詞に対する理解を深めるために、コーパスから実際の用例を取り出して紹介し、意味機能の違いについて意識させるなどの指導が必要となるのではないかと考えられる。

また、教科書を編纂・改訂したり、補助教材を作成したりする際に、個々の文末詞の解説について、分量のバランスを考えたい、使い方についてより詳細な説明を補足することが重要になるだろう。

第 11 章 中国人日本語学習者の陳述スタイル選択

第Ⅲ部では、学習者の日本語使用における (1) 一人称代名詞、(2) 文末詞、(3) 陳述スタイル、(4) ヘッジの問題を概観する。

このうち、本章では、(3) 陳述スタイルの問題を取り上げる。この問題については、すでに第Ⅱ部の 7 章において母語話者の使用実態を分析済みである。7 章では、現代日本語書き言葉均衡コーパスを用い、現代日本語における 2 つの陳述スタイル (敬体と常体) の使用実態を、ジャンル影響、年代影響、ジャンル影響と年代影響の関係、の 3 つの観点から調査した。結果として、ジャンルによって、常体率は 100% から 5.13% まで 20 倍近くのズレが存在すること、全 9 ジャンルは常体率の点で「常体基調」、「敬体優先」、「敬体基調」という 3 つのグループに分かれること、マクロ的な時間の観点においても、ミクロ的な時間の観点においても、敬体による叙述が少しずつ増えていること、ジャンル差の方がより常体・敬体の使用状況に大きく影響を及ぼしていること、などが確認された。

母語話者分析では、BCCWJ の 9 種のジャンルを比較することで陳述スタイルの変化を観察することができたが、I-JAS は、ロールプレイや対話データが含まれてはいるものの、基本的には同一のインタビュワーとの連続した会話であり、対人関係が固定されているため、陳述スタイルの変化は明確な形で起こらないことがわかった。そこで、陳述スタイルを論じる 11 章に限って、I-JAS に代え、様々なトピックに関する台湾人学習者の作文を縦断的に収集した「LARP at SCU コーパス」を使用する。

「常体シフト」に注目する場合、いくつかの点について調査を行う必要がある。1 点目は、日本語学習のどの段階において常体シフトが発生するのかということである。すでに述べたように、多くの初級の教科書が全て敬体で書かれていることを考えると、常体シフトの発生時期は教科書外から受けるインプット量が一定の段階に達するタイミングに関係していると考えられる。2 点目は、常体シフトが全ての学習者に同じように起こるのか、あるいは、学習者によって常体シフトの発生パターンに違いがあるのかという点である。仮に、後者であるとするならば、常体シフトの発生時期において、学習者はどのようなグループに分けられるかを観察する必要があるだろう。この点が明らかになれば、学習者のタイプ別に適切な教育的支援を行うことが可能になる。最後に 3 点目は、学習者の常体シフトが、学習期間に加え、他のどのような要因によって影響されているのかということである。学習者の言語産出に影響を及ぼす要因としては、例えば、大学入学前の日本語との接触歴、日本語学習の動機づけ、全般的な日本語能力や授業外の日本語使用時間など、様々な要因が想定されるが、

これらのうち、何が常体シフトを引き起こすのかが解明できれば、学習者が自然な言語産出を行えるよう適切な支援を与えることができると考えられる。

11.1 本章の目的とリサーチクエスチョン

すでに述べたように、学習者の文体使用に注目した研究はいくつか存在するが、その変化を縦断的に調査するものはまだ少ない。そこで、本研究では、時系列的にデータを収集した日本語学習者コーパス LARP を使用し、常体シフトがどのように発生するか、学習者にとって常体シフトの現れ方にどのような違いがあるか、また、時間要因以外に常体シフトに影響を及ぼす要因は何かを解明し、日本語教育におけるより良い文体指導のヒントを得ることを目指す。具体的には、以下の 3 つのリサーチクエスチョン (RQ) を議論の対象とする。

RQ1 敬体から常体への文体シフトはどの段階で発生するか。

RQ2 常体シフトの点で、学習者はどのように分類されるか。

RQ3 時間要因以外に学習者の常体シフトを助長する要因にはどのようなものがあるか。

ここで、上記の RQ について事前仮説を考えたい。まず、RQ1 について、学習者は敬体と常体の使い分けについて十分に指導されていないため、敬体から常体への文体シフトは上級者になってから発生するのではないかと予想される。次に、RQ2 について、常体シフトが発生する時期によって、学習者は常体シフトが早い段階で発生するグループと、遅い段階で発生するグループに二分されると予想される。最後に、RQ3 について、時間要因以外に、授業外の日本語の使用の有無や日本語のレベルなどが常体シフトの発生時期に影響するのではないかと予想される。

11.2 データ

本研究では、LARP を使用する。詳細はすでに 3.1.2 で述べたとおりである。

LARP には、33 種の作文データが含まれているわけであるが、分析にあたっては、(1) 作文の回数と正確な学習月数が必ずしも一致していない、(2) 作文の回数により参加した人数が異なる、(3) インタビュー前に書いた作文とインタビュー後に書いた作文を同時に分析すると、教師からのフィードバックの影響が含まれてしまう可能性があるという 3 つの問題が存在する。この点について、同じく LARP を使用し、日本語学習者の語彙習得過程を

研究した石川（2018）は、（1'）作文回数を学習月数に変換し、（2'）32回（最終回の33回は複数のテーマが混在しているため、除く）の作文全てに参加した17名（No. 5, 6, 8, 9, 10, 14, 20, 21, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 34, 35）のみを分析対象とする、（3'）インタビュー前の作文（作文1）のみを分析対象とする、という方針を取っている。本研究では、この石川（2018）の指針に倣い、同様に、17名の学習者による32回分の作文を分析対象とすることにした（あわせて544本の作文であり、総語数は約13万語に及ぶ）。表1は、データ収集回数と入学からの経過月数（M）、各回の作文テーマをまとめたものである。

表1 LARPの作文テーマ

期	回数-月数	作文テーマ	期	回数-月数	作文テーマ
1 年 1 学 期			3 年 1 学 期	16-M25	夏休み
				17-M26	私の愛用品
				18-M27	旅する
				19-M28	選挙
				20-M29	2006年を迎えて
1 年 2 学 期	1-M07	私の一日	3 年 2 学 期	21-M31	最近の出来事
	2-M08	春休み		22-M31.5	スポーツ
	3-M09	私の部屋		23-M32	町（街）
	4-M10	私の夢		24-M33	私の愛読書
	5-M10.5	高校生活		25-M34	最後の夏休み
2 年 1 学 期	6-M13	忘れられない出来事	4 年 1 学 期	26-M37	台湾のデモについて
	7-M14	十年後の私		27-M38	ゴミ問題
	8-M15	もし一千万円があたら		28-M39	台湾の外食文化
	9-M16	大学生活に期待すること		29-M40	コーヒー文化
	10-M17	私と日本語の出会い		30-M41	野良犬の問題
2 年 2 学 期	11-M19	お正月	4 年 2 学 期	31-M43	少子化
	12-M20	携帯電話		32-M44	大学生の恋愛観
	13-M21	母の日		33-M45	LARPに参加した感

学 期			学 期		想	
	14-M21.5	友情				
	15-M22	流行				

11.3 分析手順

まず、RQ1 は常体シフトの発生時期を調査することになるが、本研究では、総文数に占める常体で終わる文の比率を「常体率」と定義し、常体率が 50%を超える時点をもって、シフトが発生すると見なす。具体的には、1 回から 32 回まで回数ごとに、17 名の学習者による 17 本の作文における平均常体率を求める。その後、毎回の平均常体率を目的変数、学習月数を説明変数として、単回帰分析を行い、常体率の時系列変化モデルを検討する。

次に、RQ2 では、常体シフト発生時期を手掛かりに、17 名の学習者がどのように分類されるかを確認する。17 名の学習者をケースに、32 回分の作文の常体率を変数として、頻度表を作成したうえで、ケースクラスター分析を行う。個体間距離は平方ユークリッドとし、クラスター間距離はウォード法で計算する。

RQ3 は、時間要因以外に、どのような要因が常体シフトに影響を及ぼすかを概観する。ここでは、以下の 4 区分 8 要因を分析対象とする。

表 2 常体シフトに影響を及ぼす可能性がある要因

項目	要因	データ	スコア
A 環境	日本語のできる身内の有無 (A1)	LARPの学習者背景資料を参照し、日本語のできる身内がいる人を「1」に、いない人を「0」に変換	0 or 1
	授業外での日本語発話機会の有無 (A2)	LARPの学習者背景情報を参照し、授業外での日本語発話機会がある人を「1」に、ない人を「0」に変換	0 or 1
B 作文 テーマ	公的性 (B1)	後述	1~10
	距離性 (B2)	後述	1~6
C 学習 時間	入学後学習月数 (C)	作文執筆時点における入学から経つ月数	7~44

D 日本語能力	SPOT 1 (D1)	第1回目のSPOTテストの成績	21～55
	SPOT 2 (D2)	第2回目のSPOTテストの成績	38～58
	SPOTの伸び幅 (D3)	SPOT成績の伸び (SPOT2-SPOT 1)	n～n

このうち、C 作文テーマに関しては、作文テーマの公的性（書き手個人に限定されない公的なテーマであるかどうか）および距離性（書き手の「イマ・ココ」から距離を持ったテーマであるかどうか）という 2 つの観点が生体を選択に影響を及ぼすという仮説を立てる。LARP では 32 回の作文それぞれについてテーマが決められているので、その各々について、公的性スコアと距離性スコアを付与する。

まず、公的性については、筆者の判断により、32 のテーマの中から、最も私的であると思われるもの（私の一日）と最も公的であると思われるもの（台湾のデモ）を選び、それぞれに前者に 1 点、後者に 10 点のスコアを与える。この基準を示したうえで、以上の 2 つのテーマを除く 30 種のテーマがどの程度公的であるかを上級日本語学習者 5 名（北京外国語大学の日本語専攻修士課程 2 年生、全員が半年から 1 年の日本留学歴あり）に判断させ、スコアをつけてもらった。5 人の平均点をもって 30 種の作文テーマの公的性スコアとする。日本語母語話者ではなく、あえて日本語学習者を調べるのは、LARP の書き手が学習者であるためである。以下は 5 名の学習者のアンケート結果に基づく公的性スコアの一覧である。

表 3 公的性スコア

回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
スコア	1	1.6	1.1	1.6	2.8	2.3	2.3	3	4.1	4	3	5.9	4.7	5.3	6.2	1.5
回数	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
スコア	1.7	3.7	8.8	4.9	3.1	5.6	5.3	3.8	3.4	10	8.2	8	8.3	8.2	8.9	6.5

次に、距離性についてであるが、テーマと自分自身の間どの程度の距離が存在するかということについては、物理的距離、心理的距離、対人的距離など、様々な要因が関わる。ここではその一部として時間的な距離性と内容的な距離性に注目したい。時間的な距離性については現在が最も近く、自分自身の経験が存在する過去が次に遠い、そして自分自身の経験を有しない未来が最も距離が大きいと考えられる。次に内容的距離性についてであるが、様々なテーマは具体的なもの（私の部屋）と抽象的なもの（少子化）に区分されるが、当然

ながら具体的なものは距離が近く、抽象的なものは距離が遠いと言えるであろう。もっとも、これら 2 つの要因は直接的に関係したものではないため、本研究では以下のような概念図（図 1）を用意し、3 つの時間と 2 つの内容レベルの組み合わせに対して、以下のスコアを付与することとした（表 4）。なお、以上のスコア化の結果は日本語母語話者の確認を通している。

図 1 距離性モデル

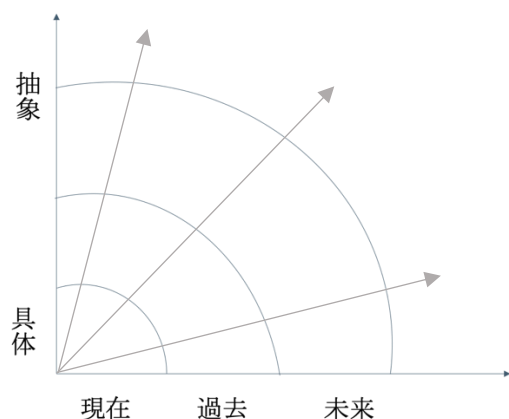


表 4 距離性によるスコア

	現在	過去	未来
抽象	4	5	6
具体	1	2	3

これに基づき、筆者個人の判断で、32 のテーマ全てに距離性スコアを付与することとした。例えば、第 3 回のテーマ「私の部屋」について、時間的距離は現在で、内容的距離は具体であるため、距離性スコアは 1 点となる。第 32 回のテーマ「少子化」について、時間的距離は現在で、内容的距離は抽象であるため、距離性スコアは 4 点となる。以下は筆者の判断に基づく距離性スコアの一覧である（表 5）。

表 5 距離性スコア

回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
スコア	1	2	1	3	2	2	3	3	3	2	2	1	3	4	4	2
回数	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
スコア	1	4	4	1	2	1	1	1	3	4	4	4	4	4	4	4

なお、以上のうち、A1, A2 の 2 つは順序尺度の変数であるのに対し、B, C, D の値はそれぞれ間隔尺度の変数である。これらと常体率の関係を見る場合に、一般的に相関分析が

行われるが、順序尺度の変数に対しては通常のピアソン相関分析を行うことができない。そこで、今回の研究では、すべての要因変数を順位情報に変換したうえで、スペアマンの順位相関分析を行うこととした。

11.4 結果と考察

11.4.1 RQ1 常体シフトの発生時期

学習者作文の常体率を時系列的に調査したところ、図2の結果を得た。図中、実線は17名の学習者の常体率の平均値を示す。細い破線はその単回帰曲線を示す。また、得られた回帰式と説明力 (R^2) は図中に表示している。太い破線は仮に学習開始後1年(12ヶ月)の時点で、「作文は常体で書くべきだ」という趣旨の指導を受け、それによって常体率が変化すると仮定した場合の常体率の変化を表している。

図2 時系列的に変化する常体率

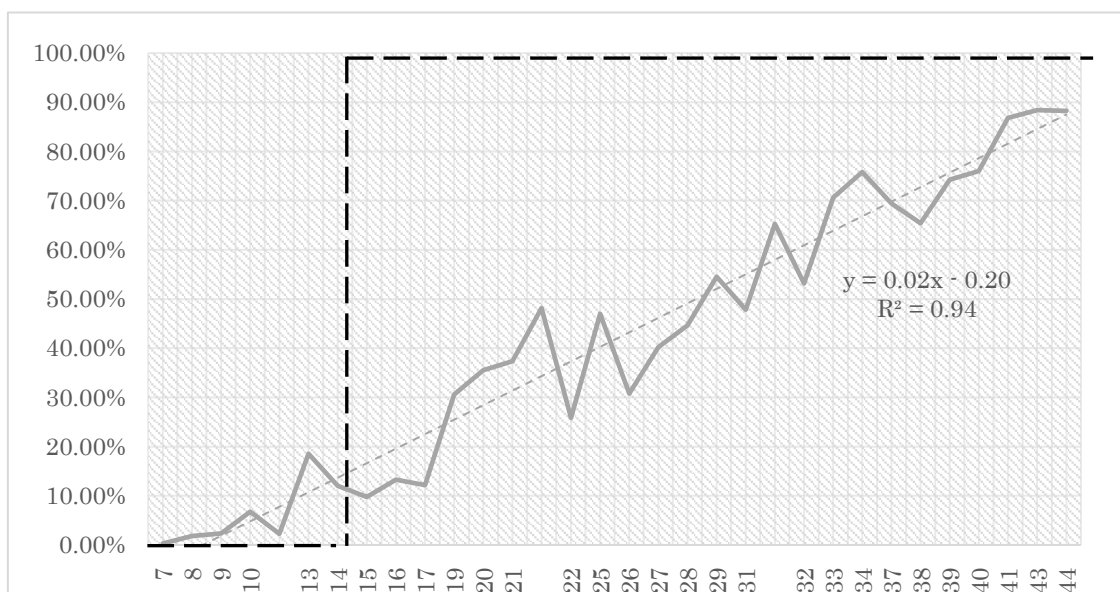


図2からわかることは3点ある。1点目は、平均常体率が学習月数とほぼ正比例で上昇していることである。このことは、単回帰式の説明力が94%という極めて高い値になっていることから確認される。つまり、日本語学習者は、学習期間が伸びるにつれて、次第に常体で作文を書くことが増えていくと結論できる(例1と2)。すでに述べたように、日本語作文指導において、一般的に常体と敬体の区別はあまり教えられない。仮に台湾においても

同様の教育環境であったとするならば、学習者は様々なテーマについての作文を何度も書くという体験を通じて、常体の重要性を自然な形で段階的に理解していくと言えそうである。

- (1) 春休みの時に、私は友達の上さんと一緒に野球の試合を見に行きました。(L30, M08, 「春休み」)
- (2) 虫が鳴っている。夏はもうすぐと言っている……いよいよ大学三年目の夏休みを迎える。(L30, M34, 「最後の夏休み」)

2点目は、本研究が常体シフトの発生時期と定義する平均常体率 50%を超えるのがおよそ学習開始 29 ヶ月後だということである。一般に、学習開始後 2 年半という時期は、文法レベルとしては中級の上とされ、日本語能力試験 N2 に合格する者もいづらか出てくる段階である。そういう段階まで学習が進むと、学習者は日本語の作文における常体の重要性をある程度認識していると言えそうである。

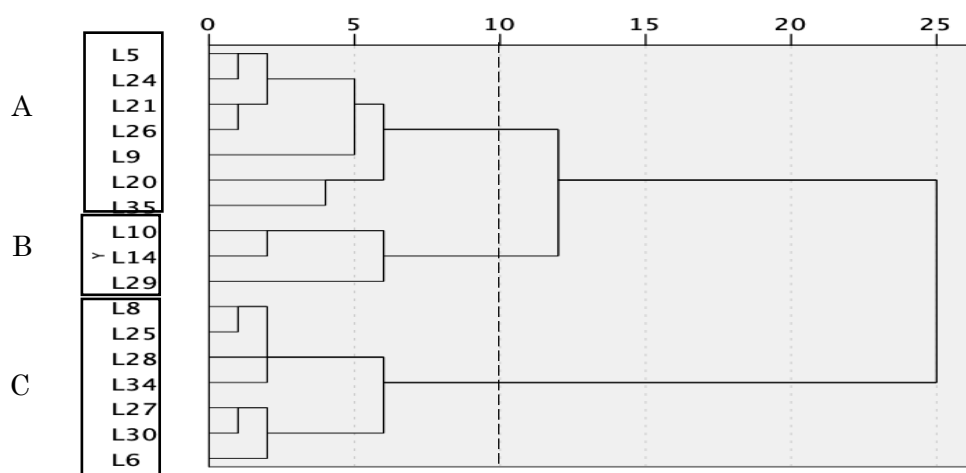
3点目は、太い破線で示したような常体率の変化が実際には観測されなかったことである。この原因としては 2 つ考えられる。1 つ目はそもそも台湾において、「作文は常体で書くべき」といった指導が一切行われていなかった可能性である。2 つ目はそうした指導が行われていたが、その指導が実際の学習者の常体率に具体的な影響を及ぼしていないという可能性である。このデータが取られた時点における東呉大学の日本語教育の詳細な内容は明らかではないが、東呉大学日本語学科の出身者に筆者がインタビュー調査を行った範囲では、「レポートは、『だ・である』体で書くべきだ」と教えられたが、作文全般における文体の使い分けに関する指導は受けていないと述べていた。したがって、今回のデータに関しては、指導の影響を考慮の外に置いてよいと言えるが、このことは常体指導が学習者の常体率に一切影響を及ぼさないということを証明するものではない。

11.4.2 RQ2 常体シフトの発生パターン

RQ1 では、学習者全体の傾向を調査してきたが、17 人全ての常体率の変化パターンが図 1 と一致しているかどうかは明らかではない。この点を詳しく解明するには、17 人それぞれについて常体率の変化パターンを見ていくことも可能であるが、教育的観点から言えば、個々の学習者のパターンを把握し、それぞれ異なる教育的支援を与えることは現実的では

ない。つまり、学習者を常体シフトという観点でいくつかのグループに分類し、グループごとに適切な指導を考えていくことが必要となる。そこで、17名の学習者についてクラスタ分析を実施したところ、図3の結果を得た。なお、学習者を3つのグループに分類する囲みは筆者が付与したものである。

図3 クラスタ分析の結果



一般に樹形図の解釈では、定常状態が最も長い場所にカットポイントを設定する。今回の例で言えば、距離が13~20の間にカットポイントを設定することになる。この場合、17名の学習者は大きく2つのグループに分かれることになるが、上部クラスターの中に、はっきりとした2つの下位区分が存在している。そこで、本研究では、教育実践の観点で可能な範囲において、学習者をより細かく分類するという観点から、カットポイントを10前後に置き、学習者は3つのグループに分類して解釈を行いたい。ここでは、上から順に便宜的にグループA, B, Cと呼ぶことにする。

以上の結果から、常体率の変化という点で、17名の学習者がすべて同じパターンを示しているのではなく、いくつかの異なるパターンが存在すること、また、その異なるパターンは大きく分けると2種類に区分され、さらに細かく見ると3種類に区分されることが明らかになった。

では、A, B, Cの3つのグループはどのように異なる常体率の変化パターンを示しているのだろうか。この点を確認するために、グループごとに常体率の変化を再調査したとこ

る、図4の結果が得られた。

図4 グループごとの平均常体率の変化

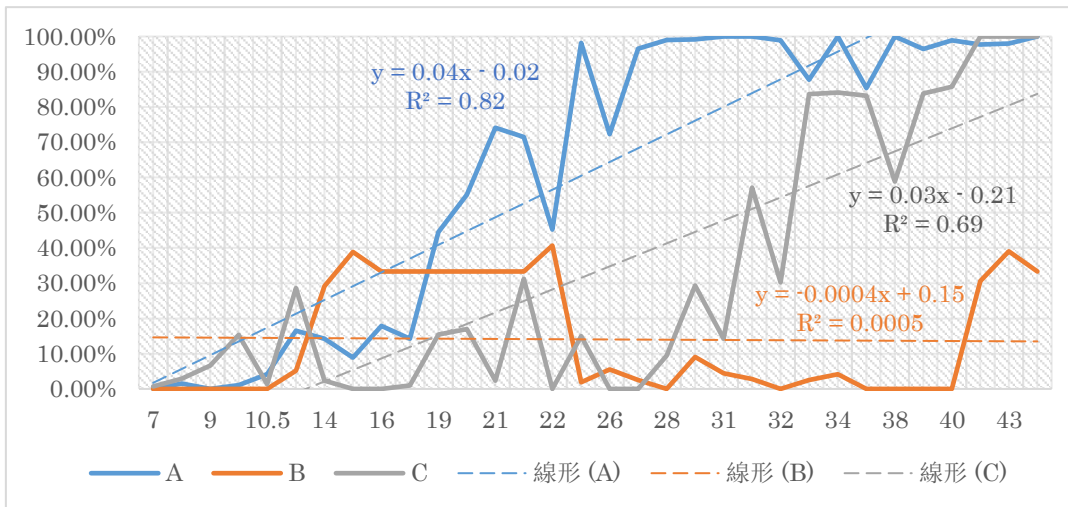


図4に示されるように、Aの学習者は22ヶ月目頃まで常体率が段階的に増加しているものの、22ヶ月目以降はほぼ100%でそろっている。また、Bの学習者は同じく22ヶ月目頃まで常体率を増加させているが、それ以降は(41, 43, 44ヶ月を除けば)ほぼ常体を使用していない。なお、AとBの学習者は22ヶ月目以降の常体率に大きな違いがあるものの、22ヶ月目まで常体率を変化させ、それ以後ほぼ一定の値で常体率が固定するという点では同じ傾向を示している。先に見た樹形図でAとBが1つの大きなクラスターにまとまっているのはこのためであると考えられる。一方、Cの学習者は、AとBとは異なり、7ヶ月目から43ヶ月目まで、ほぼ段階的に常体率を上昇させている。

すでに述べたように、本研究では、常体率が50%を超える時点をもって、常体シフトが発生すると見なす。では、3つのグループの常体シフトの発生時期は、どのように異なっているのだろうか。グループAは大学進学後20ヶ月目(2年2学期)に常体シフトが発生する(例3と4)。グループCは31ヶ月目(3年2学期)に遅れて常体シフトが発生した(例7と8)。一方、グループBは一度常体を使用するようになるものの、再び敬体モードに戻っており、LARP調査終了時点まで、はっきりした常体シフトが確認できない(例5と6)。このことは、常体シフトが早い学習者では学習開始2年目頃に、遅い学習者では3年目頃に発生することと、一部の学習者には、はっきりした常体シフトが発生しないことを示している。以下は実際の例である。

A グループ

(3) 私は今寮に住んでいます。(L9, M09, 「私の部屋」)

(4) 友情は人生の中でとても重要な一部份だと思う。(L9, M21.5, 「友情」)

B グループ

(5) 部屋の中にベッドや机や本棚などがあります。(L10, M09, 「私の部屋」)

(6) デモということは別に悪くない活動です。(L10, M37, 「台湾のデモについて」)

C グループ

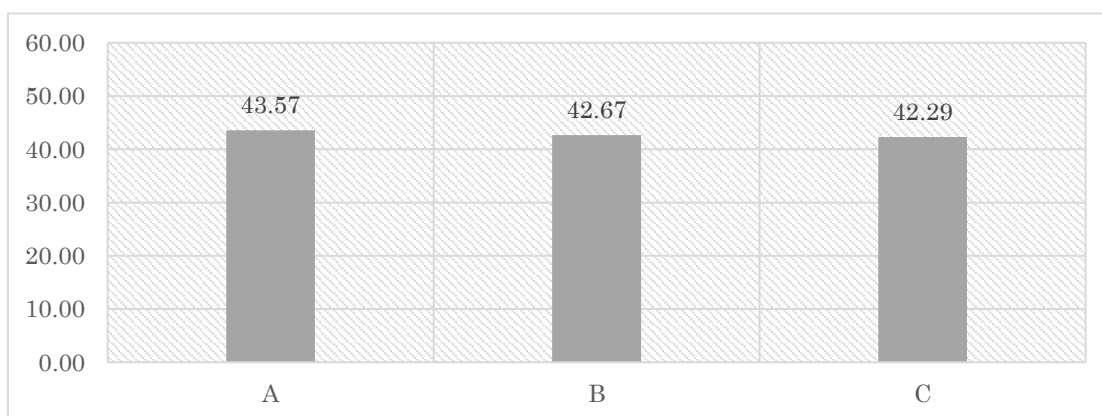
(7) 私の家は部屋がみつつあります。(L6, M09, 「私の部屋」)

(8) 私は一度も引越しをしたことがない。なぜかというと、内湖が一番いい町だと思う。
(L6, M32, 「町」)

以上で概観したように、常体シフトという点に限って言えば、グループ A の学習者が最も良好な状況を示し、グループ C はそれに次ぐ。一方、グループ B は好ましい成長を見せていない。では、この違いは何に起因しているのでしょうか。ここでは、(1) 学習開始時の日本語能力、(2) 学習中間時点での日本語能力、(3) 授業外での日本語発話機会の有無の 3 つの点が影響しているのではないかという仮説を立て、以下それぞれの検証を行う。

(1) 学習開始時点の日本語能力についてであるが、1 回目の作文執筆時期（学習開始後 7 ヶ月目）の SPOT テストの平均点をグループごとに見たところ、以下の結果を得た。

図 5 第 1 回目の SPOT テストの得点

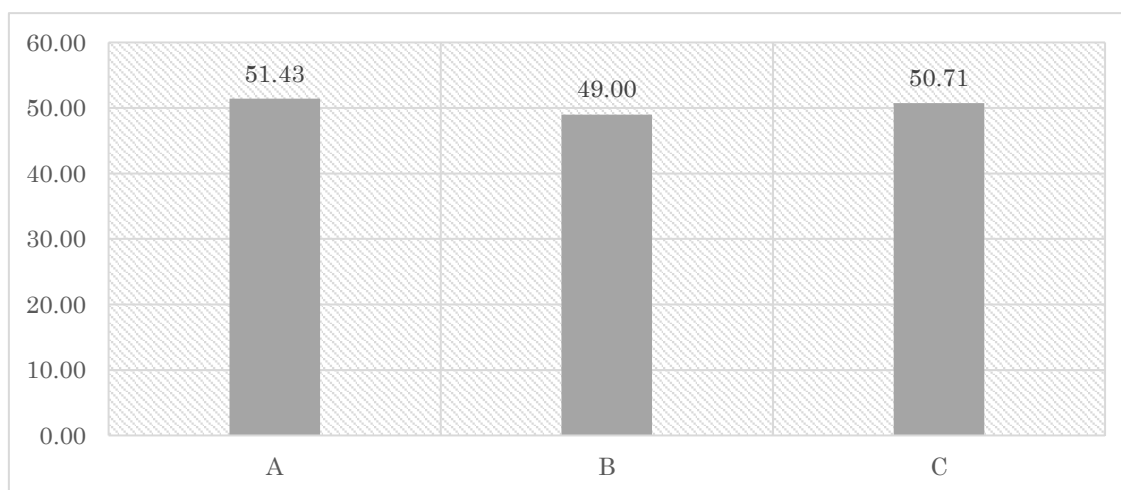


上記のグラフに示されるように、学習者の 7 ヶ月目の日本語能力は $A > B > C$ であったが、一元配置分散分析を行ったところ、グループ差が得点に及ぼす主効果は有意ではなかつ

た。学習開始時の日本語能力が 3 つのグループの常体シフト出現パターンの違いの原因となっているという仮説は否定される。

(2) 学習中間時点における日本語能力についてであるが、13 ヶ月目に実施した SPOT テストの平均点をグループごとに見たところ、以下の結果を得た。

図 6 第 2 回目の SPOT テストの得点

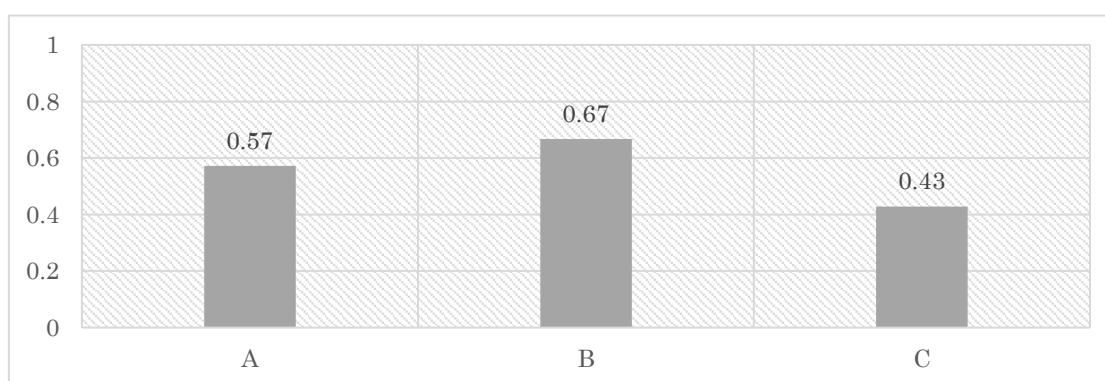


13 ヶ月目についてもグループ差が得点に及ぼす主効果は有意ではなかったが、今回は 7 ヶ月目とは異なり、 $A > C > B$ という結果が出ている。7 ヶ月目と 13 ヶ月目の結果を比較すると、C の学習者の相対的順位が 7 ヶ月目では 3 位であったのに対し、13 ヶ月目では 2 位に浮上していることが注目される。このことは、C の学習者は学習開始時の能力が必ずしも高くなかったが、その後、継続的に努力を重ね、日本語能力を着実に上昇させていることを示す。これに対し、B の学習者は開始時の日本語能力が相対的に高かったものの、その後学習を必ずしも集中的に行っておらず、日本語能力はむしろ抑制されている可能性を示す。この点を踏まえると、常体シフトの発生時期に見られる $A > C > B$ という順序は、学習開始時点または学習中間時点における日本語能力を直接的に反映したものというよりも、この間の学習に対する取り組みの度合いに関係しているのではないかと考えられる。すなわち、学習開始時の日本語能力も高く、かつ 13 ヶ月目においても最も高い能力を維持している A のグループは、最も早く常体シフトを起こしている。また、学習開始時の日本語能力は必ずしも高くなかったものの、その後学習に集中的に取り組む、順位を上昇させている C グループはそれに次ぐ段階で常体シフトが起こる。これに対し、学習開始時の能力は A に準じ

て高かったものの、その後学習に集中的に取り組まず、結果として13ヶ月目において順位を落としているBグループでは、常体シフトに近いものが22ヶ月目で起こりながらも、それを維持することができず、結果的に敬体に帰っていると解釈できる。

(3) 授業外での日本語発話機会の有無についてであるが、LARPの学習者背景情報を参照し、授業外で日本語を話す機会がある学習者に1点、ない学習者に0点をつけて、グループごとの平均値を見ると、図7の結果が得られた。

図7 授業外での日本語発話機会



一元配置分散分析を行ったところ、グループ差が得点に及ぼす主効果は有意ではなかった。人数が少ないため、統計的に有意差が出ていないものの、データから得られた結果を解釈する限り、上記のグラフに示されるように、授業外での日本語発話機会は、 $B > A > C$ という結果が出ている。授業外で日本語を話す場合、その相手はほとんど日本語母語話者であったと推定される。こうした会話においては、一般に丁寧な表現が好まれ、文体としては敬体が好まれるのであろう。つまり、グループBの学習者は授業外で丁寧な日本語を話す経験を多く持ったことによって、作文においても敬体を好むようになったのではないかと考えられる。

11.4.3 RQ3 常体シフトを助長する要因

RQ1 および RQ2 の解釈により、一般に学習期間が伸びれば常体率が高まることと、学習者は早い段階で常体シフトを達成する者、遅い段階で常体シフトを達成する者、はっきりした常体シフトが起こらない者の3つのグループに分類されることが明らかになった。また、RQ2 の分析では、日本語能力の伸び幅が常体シフトに関係している可能性も示された。し

かしながら、常体シフトはより多様な要因の影響を受けている可能性も否定できない。そこで、表 2 で示した 4 区分 8 要因について、常体率との相関係数を調査したところ、表 6 の結果を得た。

表 6 スペアマンの積率相関係数

4 区分	8 要因	相関係数	<i>p</i>
A 環境	日本語のできる身内の有無 (A1)	-.034	
	授業外の日本語使用 (A2)	-.154	**
B 作文テーマ	公的性 (B1)	.420	**
	距離性 (B2)	.226	**
C 学習時間	入学後学習月数 (C)	.547	**
D 日本語能力	SPOT1 (D1)	.003	
	SPOT2 (D2)	.064	
	SPOT の伸び幅 (D3)	.075	+

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

相関係数が絶対値で 0.2 以上 (四捨五入) になるものに限って言うと、常体率は、入学後学習月数、テーマの公的性と距離性の 3 要因との間に正の相関が出ている一方、授業外での日本語発話機会の有無という要因との間には負の相関が出ることがわかった。このうち、学習月数の長さやテーマの公的性・距離性が常体率に正の相関を示していることは一般的な予想の通りであるが、授業外での発話機会が負の相関を示していることは興味深い事実である。この点についてはすでに図 7 で見た関係性が確認されたと言える。つまり、学習経験が短い者よりも学習経験の長い学習者のほうが、また身近なテーマではなく、公的性が高く、自分から距離があるテーマについて作文を書く学習者のほうが、さらに、教室外で積極的に話し相手を見つけ、日本語で日本語発話を行っている学習者に比べ、教室で書き言葉中心の日本語学習を行っている学習者のほうが、それぞれ、常体を使いやすくなることを示している。

もっとも、LARP は毎回の作文テーマが異なっているため、データから観察された常体率の変化が、学習者の学習時間の長さや習熟度の上昇ではなく、その都度のテーマの違いを反

映しているだけであるという可能性も残る。そこで、以下では、1年2学期（入学後8ヶ月）に書いた「春休み」、3年1学期（入学後25ヶ月）に書いた「夏休み」、3年2学期（入学後34ヶ月）に書いた「最後の夏休み」、の3つに絞って常体率の変化を調査する。ほぼ同一のテーマに基づくこれらの作文に限定して調査する場合、もし、テーマの影響が学習時間の影響より大きいのであれば、3つの時期の常体率はほぼ等しくなるものと予測される。調査の結果、以下の図が得られた。

図8 3つの時期の常体率の変化

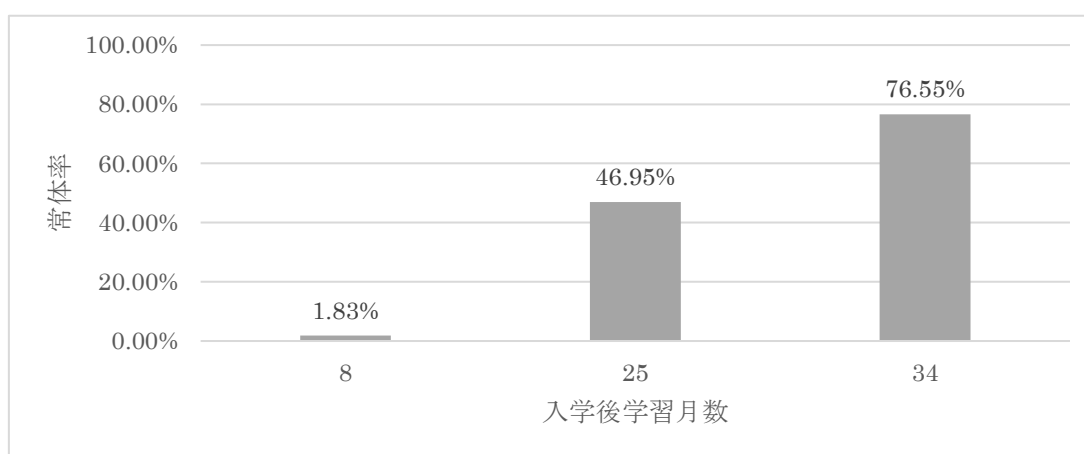


図8に示されるように、ほぼ同等のテーマについて書かれた作文であるにもかかわらず、入学後8ヶ月目の学習者はほぼ常体を使用できていないのに対し、学習開始後3年目頃(25ヶ月)になると、17名の平均常体率が50%弱まで上昇し、34ヶ月目になると、常体率が80%弱まで増加し、終始敬体で書く数名の学習者を除き、ほぼ全員が常体で作文を書くようになっていたことが確認された。誤差の可能性を考慮し、3つの時期の常体率の差が統計学的に有意かどうかを確認するために一元配置分散分析を行ったところ、3つの時期の常体率には1%水準で差があることが確認された ($F(2,6)=16,77, p<.01$)。つまり、テーマが学習時間より重要な役割を果たしているという仮説は棄却された。常体率の変化は学習期間の変化に起因すると結論できる。

11.5 まとめ

以上、本章では、LARPを用い、(1)常体シフトはどの段階で発生するか、(2)常体シフトの点で学習者はどのように分類されるか、(3)常体シフトを助長する要因は何かの3

つの観点から、学習者の作文における文体使用の変化を調べた。以下、RQに即して本研究で得られた知見をまとめる。

まず、RQ1（常体シフトの発生時期）に関しては、常体シフトはおおよそ学習開始後29ヶ月後頃に起こるという可能性が示された。学習者の作文執筆における常体率は学習開始時点でほぼ0%であるが、学習月数にほぼ正比例して上昇していくことが確認された。ある特定の時期を境として、その前後で著しい違いが認められなかったため、常体という作文モードの獲得は外的な教育によって起こるものではなく、日本語学習を続ける中で段階的になされているものであることが確認された。

次に、RQ2（常体シフトの発生パターン）について、クラスター分析により、17名の学習者は、最も早い時期（学習開始後20ヶ月目）に常体シフトが発生するグループ（A）、少し遅れた段階で（学習開始後2年半から3年にかけて）常体シフトが発生するグループ（C）、はっきりした常体シフトが確認できないグループ（B）の3つのグループに分けられることが明らかになった。常体の獲得という点で言えば、望ましい順に、 $A > C > B$ という関係になるが、3つのグループのこうした違いには、総合的な日本語力よりも、教室内で書き言葉中心の学習を好むか、教室外で積極的に母語話者と話し言葉でコミュニケーションをすることを好むかといった学習スタイルの違いが影響している可能性が示された。一般に、学習者が教室外で日本語を用いて会話体験を持つことは日本語習得上で好ましいこととされる。しかし、会話体験に過度に依存することは、作文の「話し言葉化」につながり、敬体と常体を使い分ける能力を獲得するうえでむしろ負の影響が存在する可能性もある。異なる学習者グループごとに、適切な常体指導を行っていく必要があるだろう。

最後に、RQ3（常体率との相関）について、入学後の学習月数が長く、公的で自分から距離のあるテーマについて書いている学習者のほうが、また、授業外で日本語を話す機会が少なく、教室中心で日本語を学んでいる学習者のほうが、常体を使いやすいことが明らかになった。日本語教育の中で、常体を使わせる指導をするためには、身近で私的なテーマだけでなく、自分と距離のある公的なテーマを多く取り上げて書かせることが有効であると言えるだろう。

第12章 中国人日本語学習者のヘッジ使用

第Ⅲ部では、学習者の日本語使用における(1)一人称代名詞、(2)文末詞、(3)陳述スタイル、(4)ヘッジの問題を概観する。

このうち、第Ⅲ部の末尾となる本章では、(4)ヘッジの問題を取り上げる。ヘッジは、各種のスタンスマーカの中でも語形や機能が多彩で、単純な定義が難しい。この問題については、すでに第Ⅱ部の8章において語形・語義・話者影響・辞書記述という小観点を立て、母語話者の使用実態を分析済みである。

ヘッジが表出するスタンスを正しく理解するには、使用される談話環境を知る必要がある。母語話者は、言語とともに、言語が使われる談話環境を同時に習得しているため、ヘッジの理解や使用は必ずしも困難なものではない。一方、言葉も文化も違う日本語学習者にとって、ヘッジに潜む話者のスタンスを浮き彫りにすることは決して容易ではない。ゆえに、場面や状況に応じてヘッジを適切に使用することはより一層困難になるだろう。

L2日本語学習者の動詞使用と習熟度の関係を分析した石川(2021)の分析手法を援用し、本研究では、(1)ヘッジ使用量、(2)マーカーヘッジ、(3)ヘッジの習得段階の3点に注目し、習熟度がヘッジの習得状況にどのような影響を及ぼしているかを調査する。

12.1 本章の目的とリサーチクエスチョン

本研究では、習熟度が日本語学習者のヘッジ使用に及ぼす影響を考慮しつつ、ヘッジの使用量の変化、習熟度別の典型的なマーカーヘッジの特定、および、ヘッジの習得段階のモデル化の3点を目指す。なお、後述するように、調査対象は、文中における具体的なヘッジとしての「機能」ではなく、先行研究でヘッジと認定された「語形」とする。

こうした目的に沿い、以下の3つのリサーチクエスチョン(RQ)を設定した。

RQ1 習熟度の上昇につれて、学習者によるヘッジの使用量は増えるか。また、どの程度母語話者に近接するか。(ヘッジ使用量)

RQ2 母語話者と学習者、また異なる習熟度の学習者が典型的に使用するヘッジにはどのようなものがあるか。(マーカーヘッジ)

RQ3 学習者のヘッジ習得の発達段階はどのように整理できるか。(ヘッジの習得段階モデル)

ここで、上記の RQ について事前仮説を考えたい。まず、(1) ヘッジ使用量についてであるが、習熟度の向上につれ、学習者が有する語彙知識の拡充に伴い、使用できるヘッジの量が増えることが予測される。しかし、最終的に学習者は母語話者と同等の量のヘッジを使用できるようになるかどうか、また、できるとするならば、それはどの段階なのかについて、調査する必要があると考えられる。

次に、マーカーヘッジについて、習熟度の向上に伴い、使用できるヘッジの量が増加するだけでなく、使用できるヘッジの項目も高度なものになっていくと推定される。ただし、どのヘッジが早く習得され、どのヘッジが後の段階で習得されるかは不明である。ゆえに、習熟度ごとにどのようなヘッジが特徴的に使用されるかについて調査することが重要であろう。

最後に、ヘッジの習得段階について、習熟度が上昇すれば、学習者のヘッジ使用は次第に母語話者に近づいていくと推定されるが、それが線形的な変化であるのか、あるいは段階的な変化であるのか、後者であるとすれば何段階の変化であるのか、といった点は不明である。

本研究では、統計的な手法を用い、ヘッジの習得段階の解明とモデル化を試みる。

12.2 データ

本研究では、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」(I-JAS)を使用する。詳細はすでに 3.1.2.2 で述べたとおりである。

I-JAS では、1 人の学習者に対して複数のタスクを行っているが、比較対象として日本語母語話者も参加しているものには、イラストのストーリーを話すストーリーテリング (ST)、イラストについて説明する絵描写 (D)、学習者と調査実施者が行う自然な対話 (I)、設定された場面に応じて、与えられた役を演じて会話するロールプレイ (RP)、ストーリーテリングと同じイラストを見て作文をするタスクストーリーライティング (SW)、の 5 種類がある。

母語話者のヘッジ使用を調査した肖 (2021) に基づき、双方向的なやりとりが行われる対話にはヘッジの使用が多いことから、本研究では、対話 (I) タスクのデータを利用する。これは、OPI (Oral Proficiency Interview) を参考にし、学習者と調査実施者が自然な会話を 30 分程度行うものである。話題は全 15 項目で、前半は学習者本人に関する過去、現在、未来についての話であり、後半には、意見陳述や反論ができるような話題が設定されている。対話 (I) タスクは、学習者と母語話者がある程度統制されている話題について産出を行っ

ているため、内容的な均質性が高く、学習者のヘッジ使用状況を調査するという目的に適したデータである。

12.3 対象者

本研究は、中国語を母語とする学習者 200 名を分析対象とし、50 名の日本語母語話者との比較を行う。

I-JAS では、学習者の日本語能力判定に J-CAT と SPOT の 2 種類のテストを使用している。本研究では、J-CAT のスコアを日本語習熟度の目安とする。200 人の学習者の J-CAT スコアは 100 点台から 350 点台まで分かれている。今回は L100（100 点台）から、L350（350 点台）まで、10 点ごとに学習者を群化して分析することとした。以下は習熟度別の人数を示した表である。

表 2 習熟度別の人数

レベル	人数	レベル	人数	レベル	人数	レベル	人数
L100	1	L170	7	L240	13	L310	4
L110	0	L180	7	L250	26	L320	3
L120	0	L190	12	L260	17	L330	3
L130	0	L200	11	L270	15	L340	1
L140	1	L210	19	L280	9	L350	1
L150	0	L220	15	L290	10		
L160	4	L230	17	L300	4	合計	200

このうち、L110~130、L150 に該当する学習者がいないので、分析対象から除外した。また、L100、L140、L240、L340、L350 に該当する学習者は 1 名のみであり、習熟度群というより個人を観察することになってしまうため、分析から除外することとした。これにより、L160~L330 の範囲の学習者 18 群、母語話者 1 群、合計 19 群が本研究の分析対象となる。

12.4 調査項目

本論文の 5.2.3 節において示したように、本研究では、12 種の先行研究を調査し、1 種以

上でヘッジとされた語や表現として 83 種を取り出している。ここでは、この 83 語を調査対象とする（表 3）。

表 3 調査対象とするヘッジ語形

品詞別	種類	対象ヘッジ
副詞	29	少し, ちょっと, しばらく, なんとか, けっこう, たぶん, おそらく, ただ, とりあえず, やや, 必ずしも, 少々, なんとなく, 概ね, もしかしたら, 万一, あいにく, やっぱり, あまり, なかなか, せっかく, まあ, 一応, 大抵, 大体, ほとんど, たしか, だいぶ, もちろん
助詞	10	ね, かな, とか, が, なんか, なんて, たり, けれど, だけ, くらい
名詞	10	ほう, 頃, 感じ, 可能性, 関係, 感覚, 方向, あたり, ほど, ふう (に), わけ
動詞類	10	と思う, 気がする, 恐れがある, と思われる, と考えられる, ように 思われる, ように考えられる, とは限らない, ~得る, 場合もある
連語	8	という, のではないか, んじゃないの (か), かも, っていう, ある 程度, んです, 多くの, というか
接尾辞	7	~的, ~げ, ~っぽい, 風, 系, ~めく, ~にくい
助動詞	6	ようだ, みたいだ, らしい, だろう, でしょう, しそうだ
形容詞	1	少なくない
感動詞	1	あのう
連体詞	1	単なる
総計	83	

なお、それぞれの語形は個別の文脈によってヘッジとして機能している場合とそうでない場合が想定されるが、本章では語形の調査に限定し、実質的な機能の点は議論しない。

また、学習者によるヘッジ語形の使用には誤用の例が含まれているが、ここでは、誤用を区別して議論しない。ここで注目したいのは、学習者がヘッジの語形を実際に産出できるかどうかという点であり、それが適切に使用されているかどうかについては、本稿では議論の対象外とする。

12.5 分析手順

RQ1（ヘッジ使用量）については、まず、群ごとに使用されたヘッジのトークン数（延べ語数）とタイプ数（異なり語数）を調べる。各群の人数が異なるため、トークン数については1人あたりの調整頻度に換算する。一方、タイプ数については、人数が多くなると使用するタイプ数も増加するわけではないので、そのまま分析対象とする。次に、1人あたりのトークン数と、タイプ数について、学習者18群の平均値、と母語話者の値を比較する。最後に、母語話者のヘッジ使用量を100として、学習者18群のヘッジ使用量を比率に変換し、L160～L330間の変化をグラフとして示す。グラフのデータに多項回帰式を当てはめ、ヘッジ使用量と習熟度の関係を数量的に確認する。

RQ2（マーカーヘッジ）については、まず、全83種のヘッジを対象に、学習者18群の全体と母語話者を比較し、母語話者のみが使用する母語話者マーカーヘッジと、学習者のみが使用する学習者マーカーヘッジを特定する。次に、母語話者および学習者を含む19群中のレンジが13以上になる基本ヘッジ36種（表4）を対象に、学習者群ごとに、個々のヘッジの使用頻度とJ-CATスコア（10点刻みの値）の相関値を求める。その後、相関（ $|r| \geq 0.7$ ）の語を抽出し、習熟度と負相関する（習熟度が上がると使用頻度が減少する）初級マーカーヘッジ、習熟度と正相関する（習熟度が上がると使用頻度も増加する）上級マーカーヘッジを特定する。

表4 分析に使用した基本ヘッジ（レンジが13以上）

分析対象とするヘッジ語形
が／という／ようだ／～的／ね／だけ／でしょう／けれど／ほう／と思う／とか／くらい／しそうだ／少し／頃／ちょっと／かな／みたいだ／感じ／なんか／可能性／多分／ただ／やはり／あまり／なかなか／あのう／かも／まあ／ほど／大体／ほとんど／ふう／たり／んです／もちろん（36種）

RQ3（ヘッジの習得段階モデル）については、前述の基本ヘッジ語形36種について、ヘッジ語形を第1アイテム、参加者群を第2アイテムとするクロス表を作成し、対応分析を実施した。第1アイテムは36カテゴリー、第2アイテムは19カテゴリーからなる。今回のデータで得られた散布図を手掛かりに、異なる習熟度の学習者（L160～L330）と母語話者がどのように分類されるか、また、それぞれを特徴付けるヘッジ語形にはどのようなもの

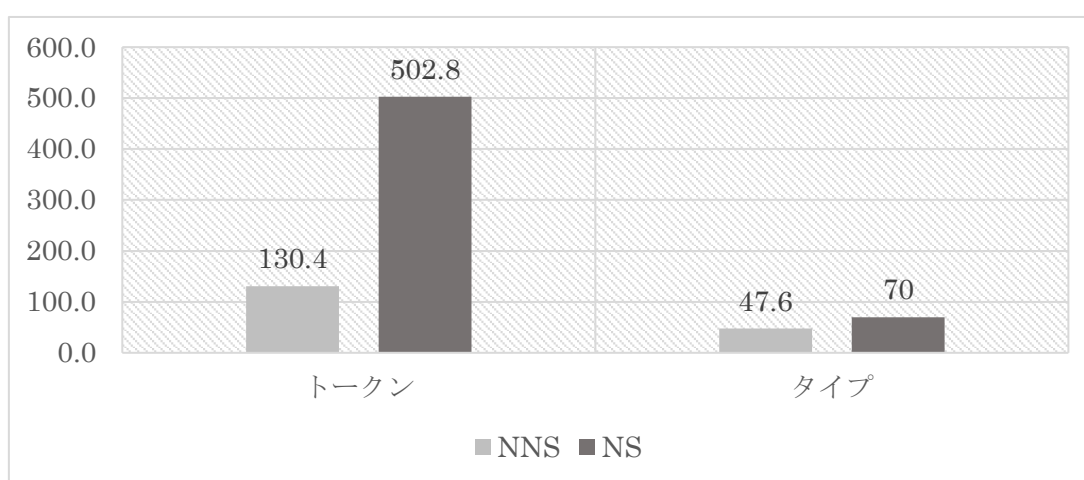
があるかを検討する。

12.6 結果と考察

12.6.1 RQ1 ヘッジ使用量

1人あたりのトークン数と、タイプ数について、学習者18群の平均値と母語話者の値を比較したところ、図1の結果が得られた。

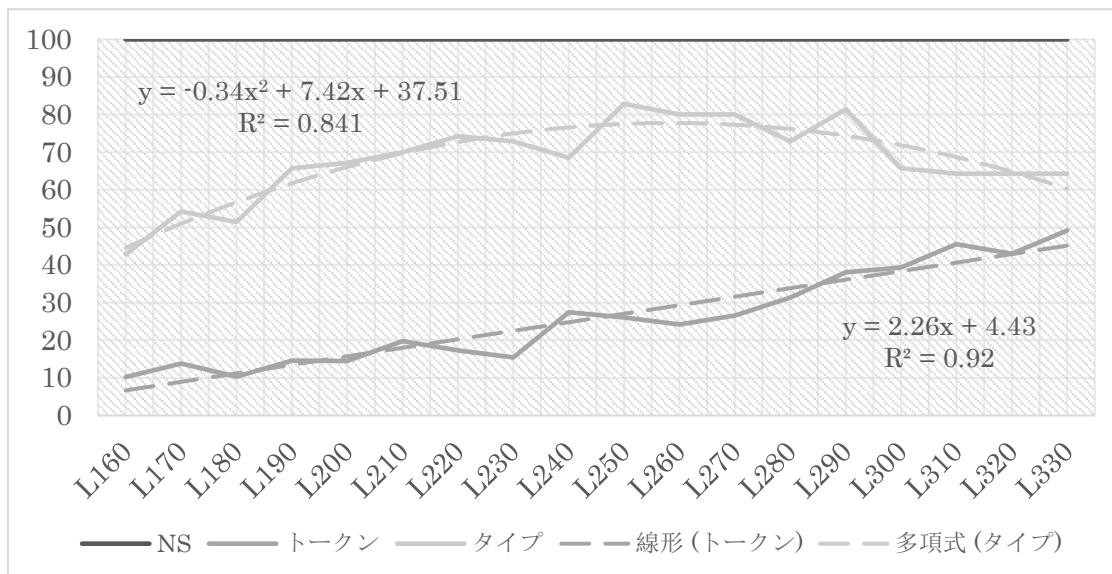
図1 学習者と母語話者のヘッジ使用量



中国語を母語とする日本語学習者が使用したヘッジのトークン数は母語話者の1/4程度にとどまり、タイプ数は母語話者と比べ32%（約23種）少ないことがわかった。ヘッジの使用量という点で、学習者と母語話者の間には大きな隔たりが存在することが確認された。

次に、母語話者のヘッジ使用量（調整トークン数・タイプ数）を100として、学習者18群のヘッジ使用量を比率値に変換し、L160～L330間の変化をグラフとして示したところ、図2の結果を得た。

図2 習熟度別のヘッジ使用量の変化



調整トークン数については、日本語レベルが上がるにつれ、産出するヘッジの量が徐々に増加していくパターンが見られた。そこで、線形回帰を行ったところ、 $R^2=92\%$ という高い説明力が得られ、線形的な増加傾向が確認された。ただし、L330であっても、母語話者と比べると50%程度にとどまっている。この背景としては、中国の学習者は、日本語母語話者との接触機会が限られており、場面や状況に応じてヘッジを適切に使用する意識が十分に育っていないためではないかと考えられる。

また、タイプ数については、トークンの場合ほど線形的な上昇が見られなかった。L250あたりまで上昇するが、それ以降はむしろ減少し、L330では母語話者の64%程度にとどまっている。トークン数の場合と同じように線形回帰を行ったところ、回帰式は $y = 0.92x + 59.17$ となったが、説明力は21%にとどまった。そこで、よりよくフィットするモデルを探すべく、多項近似を試みたところ、 $R^2=84\%$ という高い説明力が得られた。タイプ数については、L160からL250まで比率値が緩やかに上昇し、それ以降、減少する傾向にあると言えそうである。

トークンは線形的に増加するのに対し、タイプは一度増えた後むしろ減少している。これは、I-JASを用いて日本語学習者の習熟度別の動詞使用頻度の変化を概観した石川（2021）で観察された結果とほぼ同じものである。石川は、とくに上昇後下降に転じるタイプの変化について、これを「逆U字型の変化パターン」とし、以下のように述べている。

動詞使用量に関するこうした逆 U 字型の変化は、第 2 言語習得で広く見られる U 字型発達曲線 (U-shaped behavioral development) の裏返しとしてとらえることができるだろう。…初級者はそもそも知っている動詞が少ないため、また、発話量そのものが少ないため、動詞の使用量は少ない。…中級者は、覚えたての多種・多量の動詞を試行的に使用するため、動詞の使用量は場合によって母語話者を上回る。…上級者になると、文脈に応じた適切な動詞を適量使用できるようになり、結果的に、動詞の使用量はむしろ低下していくものと考えられる (石川, 2021)。

このように石川は、学習者による動詞の使用量が 3 つの段階からなるプロセスをたどると考えている。石川の動詞の分析では、タイプ数についても、トークン数についても逆 U 字型の変化が見られたのに対し、今回のヘッジの調査では、タイプ数については逆 U 字型の変化が見られたが、トークン数について見られないという石川 (2021) と矛盾する結果が得られた。これはなぜだろうか。考えられる解釈の 1 つとして、総じて数が少ないタイプ数については、全体の数が圧縮されているため、増えてやがて減っていくというプロセスが早く完了するということが考えられる。一方、トークンは数が膨大であるため、逆 U 字型のカーブが横に引きのばされる形になり、我々が見ている L330 までのものだと、その右半分が、まだ見えないため、L330 までの結果が逆 U の字の前半部分だけのものとなり、逆 U 字カーブの右半分までが見えなかったということである。そう考えると、タイプ数とトークン数は異なる傾向を示したということではなく、L330 に達しても、ヘッジ表現の語用能力の向上が十分ではなく、さらに長い学習期間ないし日本語使用年数が要求されるということを示していると言えるのではないか。つまり、動詞では逆 U 字の完了が早いですが、ヘッジでは、母語話者相当に習得するのに長い学習期間が必要であることを示すということになり、ヘッジ表現が学習者にとって習得困難であることがあらためて確認されたということになる。

しかしながら、ここで得られた結果が、石川 (2021) が動詞について調べた結果とほぼ同等であったことを踏まえると、逆 U 字型の変化パターンはヘッジに特化したものではなく、日本語語彙獲得の一般的なパターンを表しているという可能性もある。

12.6.2 RQ2 マーカーヘッジ

まず、83 種のヘッジの各々について、学習者 18 群による使用頻度と母語話者による使用頻度を比較することで、(a) 母語話者マーカーヘッジ (母語話者のみが使用して学習者は使

用しない) 4 種, (b) 学習者マーカーヘッジ (学習者のみが使用して母語話者は使用しない) 3 種が特定された。

その後, 母語話者を含む全 19 群中のレンジが 13 以上になる基本ヘッジ 36 種を対象に, 習熟度スコアとヘッジ頻度の相関を調べ, 強い相関 ($|r| > 0.7$) を示すヘッジを抽出した。これにより, (c) 習熟度と正相関となる上級マーカーヘッジ (初級者はあまり使わないが, 中上級者になると使用頻度が上がる) 14 種がそれぞれ特定された。一方, 初級マーカーに該当するヘッジは見られなかった。表 5 は, これらを一覧にしたものである。

表 5 タイプ別マーカーヘッジ

マーカー種別	該当ヘッジ
母語話者マーカー	恐らく, (の／ん／φ) ではないか, しばらく, ~げ (4 種)
学習者マーカー	必ずしも／少々／少なくない (3 種)
初級者マーカー	該当なし
上級者マーカー	が／けれど／とか／くらい／ちょっと／かな／感じ／なんか／やはり／あまり／あの (う) /ほとんど／たり／んです (14 種)

以下, 母語話者マーカーと, 学習者系のマーカーに分けて文脈を概観していく。

12.6.2.1 母語話者マーカー

196 名の学習者が一度も使用していない母語話者マーカーは 4 種ある。これらは, 性質上, 2 つのタイプに分類できる。

1 つ目のタイプは, 語としての難度が高いグループで, 「~げ」と「(の／ん／φ) ではないか」が該当する。以下はその用例である。

(1) 出汁が入ってるとか, 具材もいろいろお洒落げな物が入ったり (JJJ18)

(2) 人間側としてはその寄生虫ってのは, まあ, まあ, いわまあ害虫みたいなもので, まあ殺してしまえばいいんじゃないかという話, になるんですけど, その, 寄生虫側の意見としては, 人間が, 地球上にとっては一番のその害悪な存在ではないか, みたいな, (JJJ03)

「気(げ)」は接尾辞として、「体言・形容詞の語幹・動詞の連用形などに付いて、形容動詞の語幹または名詞をつくり、「様子・気配・感じなどの意を表す」というニュアンスを伝える(『スーパー大辞林 3.0』)という役割をしている。「(の／ん／φ)ではないか」は、「体言・形容動詞の語幹+(φ／なの／なん)ではないか、形容詞・動詞+(の／ん)ではないか」の形で用い、話し手が自らの推測や見解を表す(『日本語文型辞典』)。

これらの2語を中国人学習者がまったく使用できなかった背景としては、(a) 活用上の難度と、(b) 意味上の難度という2つの理由が想定される。まず、(a) に関して、これら2語は、前接する語に応じて語形を変化させることが必要である。加えて、「～げ」は、動詞や形容詞に後接する場合、元の品詞が変わることもあるが、それが、活用の上での難度を高めている。

次に、(b) に関して、「げ」は、「げ」が、意味の段階性を持たない語にも後接することで、使用時の意味が推測しにくい。たとえば、(1) の場合、「お洒落」であることは、ふつう段階性を意識させないが、ここでは「げ」がつくことで段階が弱められている。また、名詞に後接する「ではないか」は、そこで文が終始すると固い断言を含意するが、その後「と思う」などが続く場合、主張をやわらげるヘッジ機能が生じる。例(2) の場合も、「害悪な存在ではないか」という表現は断言のように聞こえるが、「みたいな」が付け加えられるため、全体としてはヘッジ的な機能が生じている。

以上で見たように、活用上の特殊性があり、加えて、意味上の曖昧性があるため、これらの2語は上級学習者であっても使用できなかったのではないかとと思われる。

さて、学習者が使用できなかったヘッジのもう1つのタイプは、語としてのフォーマリティがとくに高いタイプで、「恐らく」と「しばらく」がこれに該当する。コーパスにおける「恐らく／たぶん」の使用傾向を分析した前坊(2012)で指摘されたように、「多分」は私的な場で、日常的な話題についての主観的な推量に多く使用されるのに対し、「恐らく」は他者への改まりが必要な場で、考えを客観的に述べる際に用いられる。また、「しばらく」は古典日本語「しまらく」から由来された語であり、「平安時代、主として漢文訓読に用いられた語」である(『スーパー大辞林 3.0』)。「恐らく」と「しばらく」は、書き言葉的であり、フォーマリティの高い表現であるという点で共通している。

くだけたインタビューでこうしたフォーマリティの高いヘッジが出てくるのは、一見、不自然に思えるが、母語話者のこれらの語の選択には談話的な必然性がある。以下は母語話者による「恐らく」の用例である。

(3) C: あの、素人的にはですね、舞台は濡れてもいいのかってゆう、大丈夫なんですか

K: あの一、ま、恐らく特殊な加工がされてるんじゃないかなって思うんですけど、やっぱりこう一幕の最後にそのシーンがあって、で最後その幕間、に休憩時間にみんながモップ掛けをしてました、ただ、水をこう何てゆうんでしょう、ワイパーのような物で、グーってやって、落としていたので、たぶん何か穴とゆうかーこうなんか排水溝みたいな物が、途中、開くんじゃないかなって、なんか見ながら思っていました。

(JJJ19)

(3) において、話者は相手の「素人的にはですね」という言葉を受け、自分をプロの立場に置かざるを得なくなる。そのため、それまではくだけた会話をしていたにもかかわらず、専門家として答えることを要求される。この場合に選ばれた「恐らく」という表現は、話者の生の声というより、その場で、相手との関係上、担わざるを得なくなった専門家という役割を演出するためのものではないかと考えられる。「恐らく」を使用することで、聞き手に改まったイメージを与え、後述する内容の客観性が増すという効果が生み出されている。このように、母語話者は何らかの意図により、類似した表現の中から文脈に応じたヘッジを選択することがしばしば行われる。これらのニュアンスは相対的に微妙なもので、学習者には習得が難しく、そのため、上級を含めた学習者に使用されていないのではないかという可能性が示される。

以上をまとめると、母語話者のみが使用するヘッジは、(1) 語としての難度(活用・意味)が高いヘッジと、(2) フォーマリティの高いヘッジ、の2種である。これらのヘッジの使用は、上級になっても困難な課題である。

12.6.2.2 学習者系マーカの使用

学習者系マーカには、学習者マーカ・上級者マーカの2つがあるが、ここではまず、50名の母語話者が一度も使用していない学習者マーカ3種を概観する。

12.6.2.2.1 学習者マーカの使用

学習者のみが使用するヘッジは「必ずしも／少々／少なくない」の3種である。これらの3語は内容上、2つのタイプに区分される。

1つ目のタイプは、談話の要求する程度よりもフォーマリティが高すぎるヘッジである。

「必ずしも」と「少々」が該当する。学習者による「必ずしも」の例は以下の1例である。

- (5) インターネットで仕事ができますので、必ずしも都市にいない(住む必要がない)。
(CCM28, L190)

「必ずしも」は「必ず」に古典日本語で強調を表す副助詞「し」と「も」がついており、やや古語めいた表現である。日常的な会話をする際に「必ずしも」を使用すると、聞き手にかたいイメージを与え、くだけた会話で個人的な話をしているのに、途中であたかも新聞の社説のような感じになってしまう。このように、文脈と使用される言葉のフォーマリティのずれは聞き手に違和感を覚えさせやすいと考えられる。母語話者は類似した文脈で、フォーマルな「必ずしも」のかわりに、「って限らない」を使用する(例:「お金があっても幸せって限らない(JJJ05)」)。

次に、「少々」については、「少々」は「少し」の丁寧で改まった表現であり、「少々の塩を入れる／少々お待ちください／少々のことなら我慢する」のように、料理のレシピで使われる表現や、相手に丁寧に依頼する時に使う表現など、いずれも使用される場面が特殊なものに固定されている。学習者は、使用場面に関する知識が乏しいため、単に、「数量・程度がわずかである」という意味で、全体としてくだけた文脈の中で「少々」を使ってしまう。以下は学習者による「少々」の例である。

- (6) デインタイフォン(店名)ってゆうのが有名、日本も支店があると思ったんですけど、少々高いです。(CCS54, L240)
- (7) (ちよ, ちよ) 少々お待ちくださいね。あの一、その前には、『昼顔』という不倫をテーマ(とする)ドラマを見た。(CCH55, L280)

(6) において、学習者は小龍包の値段というごく日常的な話題について話をしている。ここで改まった「少々」を使うと、評論家のような発言に聞こえやすく、文脈から浮いている感じがする。

(7) については、相手に質問された時に、考える時間を稼ぐために、学習者は「少々お待ちください」というビジネスシーンでよく使用される慣用句を使用している。文法的には間違っていないが、雑談では若干違和感が生じる。母語話者は似たような文脈では、通例「ち

よっと待ってください (JJJ26)」を使用している。

学習者は、話のはじめに、くだけた表現の「ちょっと」を言いかけているものの、それを「少々お待ちください」という固い表現で言い換えている。これは学習者が慣用句をかたまりとして覚えて、場面の違いを考慮せずにそのまま使用しているためと考えられる。このように、中級後半の学習者であっても、個々の文脈でどのヘッジを使うかを即座に判断して、適切なものを選択することは決して容易ではないと思われる。

2つ目のタイプは、量や数をぼかすヘッジ（「少なくない」）である。あえてもったいぶって否定形で表現するため、日本語では、しばしば、「むしろ多い」という含意を持つ（英語の *not a few* などにも似た用法がある）。例（8）を見てみよう。

(8) C：どこにあるの、そのチュウメイ（店名）っての、この大学のそば？

K：台中は、チュウメイの店は、少なくないです。店は3軒かな… (CCT19, L250)

上記では、「少なくない」というもったいぶった言い方をすることで、聞き手は、店の数が相当多いと予想する。しかし、実際には3軒だけなので、聞き手には違和感が生じたはずである。ここには、前述のフォーマリティのずれという問題も関係している。

なお、ある程度数が多いことを伝えたい場合、母語話者は「少なくない」ではなく、以下のように言うのがふつうである。

(9)「八王子は特に、あのたまにスーパーに行くと、八王子産の野菜とか結構あるので、特にこれが有名っていうのはないですね。(JJJ01)

このように言うほうが、聞き手に違和感を与えることなく、文の意味もやわらかくなるといえよう。

以上をまとめると、学習者のみを使用するヘッジは、(1) 当該文脈の位相よりもフォーマリティが高すぎるヘッジ、(2) 意味のずれがあるヘッジ、の2種である。学習者にとって、文体や場面にあったヘッジの選択は誤りやすいところであり、文体のフォーマリティをうまく理解し、ヘッジを使いこなせていないのが現状である。

12.6.2.2.2 上級者マーカの使用

すでに述べたように、習熟度があがるにつれて頻度が下がる初級者マーカというもの存在し

なかった。これはヘッジが総じて難度が高く、初級者ではほとんど使用できないためである。一方、習熟度と頻度が正相関を示し、初級者はほとんど使わないが、中上級者になると広く使うようになる。上級者マーカーは14種であった。これらは用法と意味により、大きく4つのタイプに区分できる。

1つ目のタイプは文（文節）の後部に使用されるヘッジ（が／けれど／んです／かな／たり／感じ）である。日本語では、文の意味を決定づけるのが文の最後部であり、話し手の表現意図が文の後方に現れやすいと言われている。上級者になると、文の意味を全体的に調整し、文の終わりに適切なヘッジを使用できるようになる。

(10) 伝説があります。日本語では言いにくいですがけど、その湖に半分の橋があります。

(CCH11, L260)

(11) ずっと田舎で、住むなら、ちょっと、私の性格では、耐えられないかなってゆう感じ… (CCM35, L320)

2つ目のタイプは与える情報がおおよその数値であることを表す「くらい」や、分量や度合いの範囲を限定したり定めたりする「ちょっと／あまり／ほとんど」である。これらのヘッジを使用し、情報の確かさを曖昧にすることで、「万が一情報が不確かでなくても、その責任を問われることがないように自己防衛の働き」（入戸野，2004）が果たされている。上級者になると、出来るだけ正確にものを伝えることを意識しながら、これらのヘッジを使いこなせるようになっている。

3つ目のタイプは例を示し、他に同類のものがあることをほのめかす「なんか／とか」である。「なんか／とか」を使用することで、多くの事柄の中から、代表性のあるものを取り上げて、「例えば」の気持ちが込められている。あくまでも例示するだけで、断定を避けた表現として、相手に判断または理解を委ねる効果が実現される。

(12) 今は伝統的な祭りなんかはないかな。(CCH12, L280)

(13) 友たちと一緒に何か面白いこと、楽しいことをするとか。(CCH 07, L280)

4つ目のタイプは、フィラーとして使用する「あのう」である。フィラーがなくても文の意味は通じるが、「あのう」は次の言葉を発する際のつなぎとして、「話し手の発言権がまだ続いていることの合図であり、聞き手に意見を述べさせる時間を与え、聞き手を会話に引き

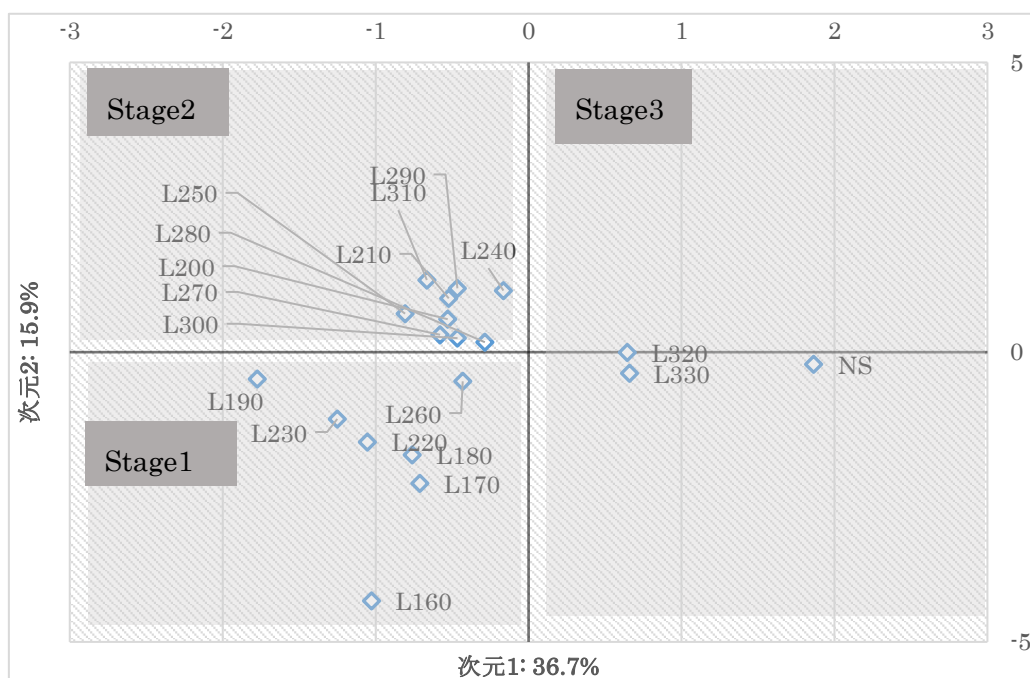
込む」機能を果たしている（入戸野，2004）。日本語の習熟度が上がるにつれ，談話をスムーズに進行させる意識が高まり，こういうフィラーを入れながら会話を進められるようになったと言えよう。

以上をまとめると，初級者はほとんど使わないが，中上級者になると広く使うようになる上級者マーカーとなるヘッジは，(1)文(文節)の後部で使用され，(2)おおよその数値を含意したり，分量や度合いの範囲を示したり，(3)他に同類のものがあることをほのめかしたり，(4)フィラーとして使用されるものと言える。

12.6.3 RQ3 ヘッジ習得段階モデル

RQ1 および RQ2 の調査で，学習者と母語話者間，また異なる習熟度の学習者間で，ヘッジの使用量にしても，使用されるヘッジの種類にしても，差異があることが確認された。RQ3 では，ヘッジ語形を第1アイテム，参加者群を第2アイテムとして対応分析を実施することで，異なる習熟度の学習者と母語話者がどのように分類されるか，また，それぞれ典型的に使用するヘッジ語形にはどのようなものがあるかを検討する。散布図では，性質の近いデータが近くに布置されるので，18の学習者群がいくつかのかたまりに区分されるかを見ることで，学習者のヘッジ習得段階モデルを解明することができるのであろう。以下は，学習者とヘッジ語形の関係を視覚化した対応分析の結果である（図3）。

図3 対応分析の結果



対応分析の結果、第1軸（横軸）の寄与率は36.7%、第2軸（縦軸）の寄与率は15.9%であり、2つの軸で全体の分散の半分以上を説明できることが確認された。散布図は第1軸で左右に分割され、次いで、第2軸で上下に分割されることになる。

ここで、学習者の布置状況に注目しながら、2つの軸の意味を考えてみたい。まず、第1軸に注目する。左領域には、L160～L310の学習者が、右領域にはL320、L330の学習者と母語話者が布置されている。よって、第1軸は、初級後半から上級前半までの学習者を左方に、それ以外の上級学習者と母語話者を右方に分割する軸となっているといえよう。

次に、第2軸に注目する。第1象限に布置された学習者がいないため、右側では上下の差がはっきりしないものの、左側を見ると、上部領域にはL200～L210、L240～L250、L270～L310の学習者が、下部領域にはL160～L190、L220～L230、L260の学習者が入っている。重なっている部分もあるが、第2軸は中級前半から上級前半までの学習者を上部に、初級後半と一部の中級前半の学習者を下部に分割する軸となっているといえよう。

以上を合わせて考えると、第1軸は、上級学習者、母語話者とそれ以外を、第2軸は、初級後半学習者とそれ以外を分割する軸となっている。学習者のヘッジ習得過程において、L260とL320が節目となる時期である可能性が示唆される。学習者のヘッジ習得段階は、第1軸の左下ゾーン（Stage 1）、その左上ゾーン（Stage 2）、右側ゾーン（Stage 3）の3つに区分でき、ヘッジ習得はステージ1～ステージ3の順に進んでいくものと考えられる。図4は各段階と関係の深いヘッジを合わせて示している。

図4 中国人日本語学習者の習熟度別ヘッジ習得モデル

160	260	310	320	NS
Stage 1		Stage 2		Stage 3
210				
可能性, と思う, 大体, 少し, 頃, ちょっと, くらい, 多分, とか, かも, だけ, ほど	あのう, が, もちろん, ただ, ほう, あまり	ね, かな, んです, けれど, でしょう, たり, 感じ, ふう (に), しそうだ, みたいだ, ようだ, やはり, なんか, 的, なかなか		

図に示されるように、ステージ 1 からステージ 2 への進行は学習者によって差が存在している。早い学習者の場合、中級前半 (L210) になるとヘッジの能力がステージ 2 に進み、遅い学習者の場合、中級後半 (L260) になってからステージ 2 に入る。中級後半になったら、ほぼ全ての学習者がステージ 2 に進むことが確認された。また、L320 になると、ほぼ全員がステージ 3 に移っていく。

次に、各々の段階で学習者群がそれぞれ典型的に使用するヘッジ語形を合わせてみると、第 1 段階の学習者は、分量や時期、度合いを推測したりぼかしたりする「ちょっと／くらい／少し／大体／だけ／頃」や、物事の真実性を推測する「かも／多分／と思う／可能性」などのヘッジの使用が特徴的である。これらのほとんどは「命題の不確かさ」(堀田・堀江, 2012) を示す機能を果たしている。

中級になる学習者は次第に第 2 段階に入り、聞き手を会話に引きこむための「あのう」や、「異論を受け入れる姿勢」(東泉・高橋, 2020) を示す「もちろん」、後を言いさしにして、物事を婉曲に述べる気持を表わす前置き表現「が」が使用できるようになった。この 3 語はいずれも談話の展開の中でヘッジ機能を果たしているため、より高度な語用能力が求められるヘッジであると言えよう。

そして、第 3 段階に入ると、ヘッジの習得は量的にも、質的にもより一層高度なものになっていく。文(文節)の後部に使用される「ね／かな／けれど／んです／でしょう／たり／感じ) や、様態を描写したり、推量を表したりする「ふう(に)／ようだ／みたいだ／しそうだ」などが使えるようになってくる。この段階において、類似した意味や用法を持つヘッジの使用は集中することが特徴的であり、それはヘッジ学習が単独の項目学習から体系学習に移り、類似した意味や用法を持つヘッジの使い分けを意識しながら使用できるようになるためと考えられる。

12.7 まとめ

以上、本章では、I-JAS の対話タスク (I) を用いて、(1) ヘッジ使用量、(2) マーカーヘッジ、(3) ヘッジの習得段階の 3 点に注目し、習熟度がヘッジの習得状況にどのような影響を及ぼしているかを調査した。以下、リサーチクエスチョン順に結論をまとめる。

まず、RQ1「ヘッジ使用量」については、トークンは線形的に増加するのに対し、タイプは一度増えた後むしろ減少に転じる「逆 U 字型の変化パターン」(石川, 2021) を示すことが確認された。タイプ数と比べ、トークンは数が圧倒的に多いため、逆 U 字の習得のプロセスが未だ

完成しておらず、上昇パターンのみが示された可能性が確認された。

次に、RQ2「マーカ―ヘッジ」については、母語話者マーカ―ヘッジ（母語話者のみが使用して学習者は使用しない）4種、学習者マーカ―ヘッジ（学習者のみが使用して母語話者は使用しない）3種、上級マーカ―ヘッジ初級者はあまり使わないが、中上級者になると使用頻度が上がる）14種、が特定された。ヘッジが総じて難度が高く、初級者ではほとんど使用できないため、習熟度があがるにつれて頻度が下がる初級マーカ―というものは存在しなかった。

母語話者マーカ―には、(1) 語としての難度（活用・意味）が高いヘッジと、(2) フォーマリティの高いヘッジ、の2種が入り、学習者マーカ―には、(1) フォーマリティが高すぎるヘッジ、(2) 意味のずれがあるヘッジ、の2種が含まれる。また、学習者の習熟度が上がるにつれ、使用できるヘッジの量だけでなく、質も高度なものへと変化していくことが確認された。

最後に、RQ3「ヘッジの習得段階」については、ヘッジ習得は3つの段階をたどっていくというプロセスが明らかにされた。第1段階（中級後半まで）の学習者は主として「命題の不確かさ」を示す機能のヘッジを使用し、第2段階（上級まで）になると、談話の展開の中でヘッジ機能を実現するヘッジが使用できるようになる。上級になると、ほぼ全員が第3段階に移り、類似した意味や用法を持つヘッジを使い分けながら使用できるようになる。

第IV部 まとめ

第13章 知見の教育的応用および制約と課題

終章となる13章では、まず13.1においては、本研究の結びとして各章のまとめを述べる。13.2においては、各章から得られた結果をもとに日本語教育への提言を行う。13.3においては、既存の教科書を利用しつつ、授業の中で追加的に利用できるタスクシートの在り方について検討する。最後に、13.4においては、本研究における制約と今後の課題を述べる。

13.1 本研究の知見のまとめ

本研究では、コミュニケーションを図るうえで重要な役割を果たすスタンスマーカーに焦点を当てた。日本語母語話者コーパスおよび日本語学習者コーパスを用い、一人称代名詞、文末詞、陳述スタイル、ヘッジという4種の主要なスタンスマーカーについて、現代日本語における使用実態と用法特性、また、中国人日本語学習者による使用状況と習得上の課題の調査・分析を行った。

以下、本研究で明らかになった知見についてまとめる。第II部では、母語話者コーパスを用い、現代日本語におけるスタンス表出を検討した。5章「現代日本語における一人称代名詞使用」においては、現代日本語書き言葉均衡コーパスのログデータをを用い、一人称代名詞の使用実態と用法特性を、表現形のバリエーション、フォーマル度、共起語などの観点から検討を行った。以下、一人称単数代名詞(FSP)と、一人称複数代名詞(FPP)にわけ、知見を整理する。

FSPについては、表現形のバリエーションが、日本語のブログにおいて、語のレベルで全18種、異形のレベルで全32種、文字種のレベルで全63種になり、高頻度FSPとして「私、僕、俺、わたし、あたし」などがあることがわかった。高頻度FSPのフォーマル度は《ワタシ・ワタクシ》>《ボク》>《オレ》>《アタシ》の順に下がること、国会会議録では、《ボク》と《オレ》の使用例が少数存在するが、《アタシ》の出現が確認されないこと、《オレ》は改まった場面で自分自身の意見を表出する目的では使用しにくいこと、がわかった。共起語については、語の選択の例として「私」、「僕」、「俺」を、異形の選択の例として「わたし」、「あたし」、「わたくし」を、文字種の選択の例として「僕」・「ぼく」・「ボク」をそれぞれ比較したところ、語・異形・文字種の選択は書き手が表出しようとするスタンスと深く関わっていることが確認された。まず、語の選択に関して、「私」は家族や生活、または哲

学など幾分改まった内容について語る場合に選ばれやすいこと、「僕」は極めて個人的な内容を個人的視点から語る場合に多く使われること、「俺」は男性らしさを強調し、男性としての強さや強い判断力を強調したい場合に多く用いられることが明らかになった。また、異形の選択に関して、(1)「わたし」は個人的で身近なことを語る場合に多く使われていること、(2)「あたし」は気弱い女の子を想定させやすいものとなっていること、(3)「わたくし」の使用はフォーマルな場面と結びつきやすく、へりくだった姿勢の現れであることが判明した。最後に、文字種の選択に関して、(1)「僕」はくだけた場面に用いられること、「ぼく」は創作物に多く用いられており、柔らかく優しい雰囲気醸し出すものとなっているのに加え、それを使用することによって、読者との心理的な隔たりを縮めることができること、「ボク」は新奇なイメージと結びつきやすく、読者に自分の個性をアピールしたい場合に選ばれやすいことが確認された。

一方、FPP について、表現形のバリエーションは、語・異形・文字種を考慮した場合、最大で 60 種を超えること、高頻度 FPP として「私たち、我々、私達、僕ら、僕たち」などがあることがわかった。フォーマル度については、《ワタシ・ワタクシ》と《ワレ》を含む表現形はほかの語形より高いフォーマル度を持つこと、後部要素が《タチ》である場合、FPP のフォーマル度は前部要素と強く関係していること、前部要素が《ボク》もしくは《オレ》である場合、《ラ》の付随される FPP はフォーマルな場面で選好されやすいことが確認された。相手包含度については、0%か 100%という択一的なものではなく、同じ語であっても、様々な使われ方がなされていること、同じ《ワタシタチ》であっても、文字種が異なれば、表現形の相手包含度が大きく変わることを、前部要素によって相手包含度が変化することが明らかになった。共起語については、「我々」、「私たち」、「私達」の 3 語は衣食住や家族などにプライベートのことを語る場面に用いられると同時に、「地球」、「人類」に関係する公的なことについて語るときも使用されており、幅広い内容を語るときに使える一人称複数代名詞であること、「俺たち」、「俺ら」、「僕ら」は個人的な内容について述べるときに使われやすく、個人の判断や感情を表す形容詞と結びつきやすいこと、「僕たち」は「たち」をつけることによって、「僕」が持つ個人的な意味合いが薄められ、パブリック性が増していること、「われわれ」、「わたしたち」、「我ら」の 3 語はフォーマルな語と共起しやすく、パブリックな内容について述べるときに用いられやすいことが確認された。

6 章「現代日本語における文末詞使用」においては、現代日本語書き言葉均衡コーパスの書籍（文学）データを用い、文末詞の使用実態を、経年変化や使用量、使用場面の 3 つの観点から考察した。その結果、経年変化として、1970 年代から 2000 年代にかけて、小説におい

て、文末詞その形式の使用数は増えるとともに、女性が使用する文末詞の用例も増加する傾向にあること、文末詞の形式の使用者が女性だけに限らなくなっており、男性による「わ」「かしら」などの文末詞の使用も存在することが確認された。また、使用量として、「わ系」（「わ」・「わよ」・「わね」）が小説において多用されており、「わ」「かしら」「Nよ」の使用は女性に固定されない可能性が示された。加えて、使用場面として、7種類の文末詞は、主張度の強い場面と比較し、上品さや女性らしさを表出し、言葉を柔らかくするソフトな場面に使用されやすく、小説における文末詞は主として話し手の性別を浮き彫りにし、女性らしさを強調する機能を果たすことが明らかにされた。

7章「現代日本語における陳述スタイル使用」においては、現代日本語書き言葉均衡コーパスを用い、現代日本語における2つの陳述スタイル（敬体と常体）の使用実態を、ジャンル影響、年代影響、ジャンル影響と年代影響の関係の3点について調査した。その結果、ジャンル影響については、法律を除いたすべてのジャンルにおいて、常体と敬体が併存していること、ジャンルによって、常体率は100%から5.13%まで20倍近くのズレが存在すること、全9ジャンルは常体率の点で「常体基調」、「敬体優先」、「敬体基調」という3つのグループに分かれること、などが明らかになった。年代影響については、マクロ的な時間の観点から常体率の変化を調査した結果、書籍と白書の常体率が低下してきており、敬体による叙述が少しずつ増えていることが確認された。また、現代に時間を絞り、ミクロ的な時間の観点から観察した場合、雑誌と新聞においても、徐々にではあるが、常体が減り、敬体が増えてきていることが明らかにされた。敬体の増加は、読者層の大衆化に影響を受け、書き手が読み手を一層意識し、より幅広い読者層を獲得するため、より丁寧でわかりやすい言葉で書くようになってきている可能性が示唆された。ジャンル影響と年代影響の関係に関しては、ジャンル差の方がより常体・敬体の使用状況に大きく影響を及ぼしていることが確認された。読者に敬意を払う必然性と陳述する内容の性質によってそれぞれのジャンルの特性が決まり、それに応じて、適切な常体と敬体のバランスが決定されていることが明らかになった。

8章「現代日本語におけるヘッジ使用」においては、形態や機能が多彩なヘッジについて、語形・語義・話者影響・辞書記述の改善という4つの観点から議論を行った。

語形については、言語環境（産出モード・内容ジャンル）がヘッジ使用に及ぼす影響を調査し、幅広い言語環境で共通して多用される典型的ヘッジ語形の特定を行った。その結果、話し言葉におけるヘッジ語形の出現頻度が書き言葉の3倍以上であること、話し言葉では

対話 (I) > ロールプレイ (RP) > 日常会話 (CEJC) > 絵描写 (D) > ストーリーテリング (ST), 書き言葉では書籍・非文学 (B1) > 書籍・文学 (B2) > 雑誌 (PM) > 教科書 (OT) > 新聞 (PN) の順に, ヘッジ語形の出現頻度が低くなっていること, 産出モード間, ジャンル間それぞれの高頻度ヘッジ語形の一致度が低いこと, 各種のヘッジ語形が, 情報伝達の方方向性と場面の特定性の 2 観点によって 5 カテゴリーに分類できること, 10 ジャンルで汎用的かつ高頻度に使用されるヘッジは 30 種に絞られること, などが確認された。

語義については, 主要ヘッジ語形について, 既存辞書や先行研究で示された語義を網羅的に書きだしたうえで重複を除いて整理し, 語義別の頻度調査を行うことで, ヘッジ語形ごとの典型的語義の特定を行った。その結果, とくに重要な 9 種の語形が有する語義の数は 2~8 となること, 9 種のヘッジ語形が有する 45 の語義のうち, 使用割合が 10%以上である典型的語義が 19 種に絞られること, 9 種のヘッジ語形のうち, 典型語義中の筆頭 (単独) 項目がヘッジ性を持つものは, 「頃」と「感じ」の 2 種のみであり, 「が」と「やはり」の 2 種は典型語義の中にヘッジ的な語義が含まれないことが確認された。

話者影響については, 母語話者属性がヘッジ語形の意味緩和機能の認識に与える影響を解明し, 強い意味緩和機能を有するヘッジ語形・語義の特定に加え, 母語話者属性別に見た強い意味緩和機能を有するヘッジ語形の特定を行った。調査方法は, 9 種のヘッジ語形をサンプルとし, それらが有する語義ごとにコーパスから用例を抽出し, 7 名の母語話者に当該語形の有する意味緩和機能の強弱を判断させた。その結果, まず, 女性より男性のほうはヘッジ語形の陳述緩和度を高く判定する傾向があること, ヘッジ語形の意味緩和度判定に対する職種の影響について, 日本語教師 > 会社員 > 学生という結果が確認された。また, 強い意味緩和機能を有するヘッジ語形・語義として, 語形レベルでは, 「頃」, 「感じ」, 「ほう」, 語義レベルでは, 「頃_1」 (時を, その前後を含めて漠然と指す), 「ちょっと_2」 (否定表現と呼応して, その可能性はほとんどないと判断する様子), 「が_6」 (あとを言いさしにしたような形で, 婉曲に述べる気持を表わす) の意味緩和機能の強度が上位 3 位となることが明らかになった。最後に, 各種のヘッジ語形と判定者は, 言語環境・品詞属性により, 2 軸で区切られた 4 つの象限に分類できる可能性が確認され, 男性判定者は助詞のヘッジ語形, 女性判定者は副詞や名詞のヘッジ語形と結びつきやすい傾向が確認された。

辞書記述については, 「ね」, 「頃」, 「ちょっと」の 3 つの語形について, コーパス調査と母語話者内省調査で得られた知見を踏まえ, 外国人学習者向けの発信型辞書の記述を考案した。提案した辞書の記述には, (1) 全般的な頻度レベル (F), (2) 話し言葉・書き言葉別

使用特性, (3) 母語話者の内省調査に基づくヘッジとして意味緩和機能の強度 (S), (4) ヘッジ重要度指標 (FS 値) の 4 種の情報が載せられるため, 仮にヘッジに特化した授業を設計する場合は, FS 値が高い語形・語義を優先するといった対応が考えられる。

続く第Ⅲ部では, 日本語学習者コーパスを主として用い, 中国人日本語学習者のスタンス表出について検討した。9 章「中国人日本語学習者の一人称単数代名詞使用」においては, 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」の対話タスク (I) を用い, 中国人日本語学習者の一人称単数 (FSP) 使用を用量, 習熟度間の変化, 共起パターンの 3 つの観点から調査を行った。その結果, FSP の全体用量については, 男女問わず学習者が母語話者よりも FSP を過剰使用すること, 男性話者について言うと, 母語話者が「僕」を, 学習者が「私」をそれぞれほぼ排他的に使用すること, 女性話者について言うと, 母語話者・学習者ともに「私」>「あたし」となることが明らかになった。次に, 習熟度間の変化については, 日本語学習者の FSP の過剰使用は, 習熟度の上昇によってある程度改善するものの, 上級者であってもなお過剰使用の傾向が残ることが示された。最後に, 共起語については, 男女差より, 母語話者・学習者間の差が FSP の共起パターンに影響を及ぼしていることがわかった。母語話者・学習者間の FSP 共起パターンの違いとして, 学習者は意見表明をする際に, 一人称代名詞を言語化する傾向が強いこと, 学習者は, 家族を指す言葉が「内」か「外」かによって区別することについて認識が不十分であるため, 「私のお母さん／お父さん」のような不自然な使い方をすること, の 2 つが確認された。

10 章「中国人日本語学習者の文末詞使用」においては, 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」の対話タスク (I) を用い, 中国人日本語学習者の文末詞使用を用量, 使用状況, 習熟度間の変化の 3 観点から調査を行った。その結果, 用量では, 男性話者については, 母語話者と学習者は使用した文末詞のトークン数・タイプ数がほぼ等しいこと, 女性話者については, 学習者が使用した文末詞のトークン数は母語話者の 1/5 以下であり, タイプ数も母語話者より少ないことが確認された。使用状況では, 男性話者については, 母語話者のみが「わ」を使用すること, 学習者は「のよ」「N ね」が持つ女性性に気づかず使用していることが確認された。女性話者については, 学習者・母語話者ともに引用節内で「N ね」を使用し, 「そうね」を同感を示す際の定型的なあいづちとして使用すること, 学習者のみが「N よ」や下降調の「わ」を使用すること, などが明らかにされた。最後に, 習熟度間の変化では, 習熟度の上昇に伴い, 男性学習者については, 文末詞の使用数は激減し, 最終的には使用しなくなるというパターンが示唆された。女性学習者については, 初級～上級の間

で2%しか減っておらず、はっきりした習熟度の差は見られなかった。

11章「中国人日本語学習者の陳述スタイル使用」では、他章と同様の口頭対話データを用いた分析ではスタイル変化の観察が困難であることから、発話コーパスに代え、縦断型の学習者作文コーパスである「LARP at SCU コーパス」を用い、中国人日本語学習者の陳述スタイル使用を常体シフトの発生時期、常体シフトの発生パターン、常体シフトを助長する要因の3観点から調査した。

その結果、常体シフトの発生時期については、学習者の作文執筆における常体率は学習開始時点でほぼ0%であるが、学習月数にはほぼ正比例して上昇していき、常体シフトはおよそ学習開始後29ヶ月後頃に起こることが確認された。次に、常体シフトの発生パターンについては、17名の学習者は、最も早い時期（学習開始後20ヶ月目）に常体シフトが発生するグループ、少し遅れた段階で（学習開始後2年半から3年にかけて）常体シフトが発生するグループ、はっきりした常体シフトが確認できないグループの3つのグループに分けられることが明らかになった。最後に、常体率との相関について、入学後の学習月数が長く、公的で自分から距離のあるテーマについて書いている学習者のほうが、また、授業外で日本語を話す機会が少なく、教室中心で日本語を学んでいる学習者のほうが、常体を使いやすことが明らかになった。

12章「中国人日本語学習者のヘッジ使用」においては、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」の対話タスク（I）を用い、中国人日本語学習者のヘッジ使用をヘッジ使用量、マーカーヘッジ、ヘッジの習得段階の3観点から調査を行った。

ヘッジ使用量については、トークンは線形的に増加するのに対し、タイプは一度増えた後むしろ減少に転じる「逆U字型の変化パターン」（石川，2021）を示すことが確認された。タイプ数と比べ、トークンは数が圧倒的に多いため、逆U字の習得のプロセスが未だ完成しておらず、上昇パターンのみが示された可能性が確認された。特定のレベルを特徴づけるマーカーヘッジについては、母語話者マーカーヘッジ（母語話者のみが使用して学習者は使用しない）4種、学習者マーカーヘッジ（学習者のみが使用して母語話者は使用しない）3種、上級マーカーヘッジ（初級者はあまり使わないが、中上級者になると使用頻度が上がる）14種、が特定された。ヘッジは総じて難度が高く、初級者ではほとんど使用できないため、習熟度があがるにつれて頻度が下がる初級マーカーは存在しなかった。母語話者マーカーには、語としての難度（活用・意味）が高いヘッジと、フォーマリティの高いヘッジ、の2種が入り、学習者マーカーには、フォーマリティが高すぎるヘッジ、意味のずれがあるヘッ

ジ、の2種が含まれることがわかった。ヘッジ習得段階については、ヘッジ習得は3つの段階をたどっていくというプロセスが明らかにされた。第1段階（中級後半まで）の学習者は主として「命題の不確かさ」を示す機能のヘッジを使用し、第2段階（上級まで）になると、談話の展開の中でヘッジ機能を実現するヘッジが使用できるようになる。上級になると、ほぼ全員が第3段階に移り、類似した意味や用法を持つヘッジを使い分けながら使用できるようになることが明らかになった。

以上より、一人称代名詞、文末詞、陳述スタイル、ヘッジという4種の主要なスタンスマーカ―について、母語話者および中国人日本語学習者による詳細な使用状況と、学習者にとっての習得上の課題の一端を解明することができたと考える。

13.2 日本語教育現場への提言

すでに述べたように、スタンスマーカ―は英語研究においてはすでに幅広く議論されているのに対し、日本語研究では、日本語学的にも、日本語教育学的にも研究は十分とは言えない。以下では、本論文の各章で得られた調査結果を踏まえ、日本語教育の現場でどのように生かすことができるかについて、4点に分けて述べたい。

1点目として、スタンスマーカ―の指導項目を決める際には、より典型的かつ重要であるものを優先して導入することが効果的であろう。すでに述べたように、スタンスマーカ―は数も種類も膨大であるが、現在の日本語教育において、それらを体系的に整理し、その意味特性を示すことは行われていない。すなわち、学習者はスタンスマーカ―を学習しようとしても、基礎資料となるリストが存在しないのが現状である。本研究では、5章、6章、8章において、それぞれ現代日本語における高頻度・汎用的一人称代名詞、文末詞、ヘッジの特定を行った。このような頻度上の典型性を示したリストは言語学にも、教育学にも有用なものとなりうる。日本語教育現場においては、限られた時間の中で学習効率を高めることが重視されるため、スタンスマーカ―を指導する際に、典型度の順に導入していくことが望ましいだろう。ただし、コーパスから得られた頻度は日本語教育における参考資料とすべきもので、学習者のレベルやニーズを熟知した現場の教師が、コーパスからの知見を取捨選択して教室指導に生かすことがより望ましい。

2点目として、現在の段階を少し超えたレベルのスタンスマーカ―を提示することで、学習者の習得が次の段階にスムーズに進むと期待できる。本研究では、第Ⅲ部「中国人日本語学習者によるスタンスマーカ―使用」において、学習者コーパスで観察されたスタンスマー

カーの共通使用傾向を手がかりに、スタンスマーカの習得段階のモデル化を試みた。例えば、12章「中国人日本語学習者によるヘッジ使用」においては、習熟度ごとに特徴的に使用されるヘッジを特定でき、ヘッジ習得は3つの段階をたどっていくというプロセスが明らかにされた。第二言語習得分野において、Krashen (1982) は、現時点で理解可能なレベルを少し上回る「i+1」レベルのインプットを与えることが効果的であり、言語習得は「現在の段階を少し超えた構造を含む言語を理解した時」(石川, 2017)に進むと述べた。スタンスマーカの指導項目を考える際にも、コーパスから得られた頻度・難度スケールを根拠として、次の段階に来るものを少しずつ先取りで取り入れていくことが、スタンスマーカの習得の助けになりうるだろう。

3点目として、本研究で明らかになった母語話者と学習者のスタンスマーカ使用上の差異点を手がかりに、学習者の問題の所在や問題解決への糸口を見出すことができるだろう。例えば、12章においては、学習者によるヘッジ使用を調査したところ、ヘッジの使用量の点で、学習者と母語話者の間には大きな隔たりが存在し、上級者であっても、母語話者と比べると50%程度にとどまっていることが確認された。このような違いの背後に、中国の学習者は、日本語母語話者との接触機会が限られており、場面や状況に応じてヘッジを適切に使用する意識が十分に育っていないことがうかがえる。日本語においては、ヘッジは断定を緩和し、言い切ることで生じる責任を回避したり、過度の自己主張となるのを避けたりするなどの効果が備わっており、スムーズにコミュニケーションを行ううえで不可欠な要素となっている。しかしながら、筆者の見るところ、現在の日本語教育においては、言葉の正確さの指導に比重が置かれ、伝え方の適切さは十分に重視されていないように思える。日本語教育現場においても、日本語学習者に対し、ヘッジを正しく使用するための指導が十分与えられているとは言えない。今後のヘッジ指導を考える際には、コーパスから実際の用例を取り出して紹介し、ヘッジの持つ様々な機能について意識させるなどの指導が必要となるのではないかと考えられる。

また、使用量だけでなく、逸脱使用のデータも教育的な応用価値が高い。10章「学習者による文末詞使用」においては、学習者による文末詞使用を母語話者と比較したところ、逸脱的な使用が確認された。それは男性学習者による「のよ」「Nね」を使用している例である。文脈を確認すると、いずれも日常的な話題についての自然な会話の一部であり、話者が故意におどけて、女性的なニュアンスを含意する文末詞を使用したわけではない。つまり、学習者は、これらの文末詞が持つ女性性に気づかず、使用してしまったものと推測される。

男性による「のよ」「Nね」などの文末詞の使用はめったに見られないが、実際の日本語での会話においてこうしたことが起こると、相手に一定の違和感が生じる可能性が高いので、教育現場でこのような逸脱的な使用を発見した場合、教師による訂正が望まれるだろう。

4点目として、学習者の視点から指導方法を考案することの重要性についてである。本研究では、6章「現代日本語における文末詞使用」において、現代日本語の小説（文学）における文末詞の使用量や経年変化を調査したところ、1970年代から2000年代にかけて、小説において、文末詞の使用数は増えることが明らかにされた。母語話者コーパスの調査結果だけを見ると、現代日本語において文末詞は依然として重要な位置を占めているため、日本語教科書では文末詞を積極的に取り入れるべきであると結論しがちであるが、10章「学習者による文末詞使用」では、中国人日本語学習者による文末詞使用を母語話者と比較しながら調査したところ、20～30代の日本人女性による会話では、文末詞の使用が若干見られるが、引用されたセリフの話者が女性であることを示したり、同感を示す際の定型的なあいづちとして使用したりする場合がほとんどで、何らかの特殊な意図を含意した用例ではないことが確認された。

以上をふまえると、今後教育現場で文末詞を指導する際には、実社会における文末詞の使用実態を踏まえ、学習者の視点から文末詞の指導を考えるべきであろう。具体的には、文末詞の使用は若い世代の女性の日常会話から衰退しつつあるため、学習者が文末詞を産出する必要性がほぼなくなっていると言える。文末詞の学習目標について言うと、「理解面」と「産出面」を分けて考えるべきではないかと考えられる。現実には男女による話し方の違いは縮まっているが、フィクション作品などでは役割語が今なお広く使用されており、かつ、独自の発達を遂げつつあるという2つの事実から考えれば、文末詞については、まずもって、現実とフィクション作品で異なる使われ方をしていることを学習者に教える必要があると考える。若い世代の学習者にとって文末詞を産出する必要性はないが、中高年の女性との会話、小説を読む、ドラマを見聞きするなどの場面では、文末詞の知識は依然として重要であり。特に、「役割語」としての機能を正しく教える必要があるのではないかと考えられる。

13.3 教科書を利用したスタンス指導の一例

本研究で得られた知見は、将来の日本語教材開発の基礎資料となりうるものであるが、現行の教科書を使う場合でも、本研究の知見をふまえたタスクシートを設計・使用することで、教科書の内容を補完することが可能である。以下では、中国で広く使用されている教科書『基礎日語教程』（高等教育出版社）を使いながら、学習者のスタンスマーカ理解を深め

るタスクシートの在り方について考える。

下記の引用は、同教科書の第3冊第1単元第1課で紹介されているエッセイ文の冒頭部である（下線は筆者が追加）。これは、初学者として大学で日本語を学び始めた後、週4～5回程度の授業を継続して受講してから3学期目、つまり2年生前期の段階で最初に学ぶ単元である。

—『基礎日本語教程』第3冊—

第1単元 第1課「いろいろな人物描写」

Step1 文章に描かれた人物の外見から人物像を知る

「御相席させていただいてもよろしいかしら^①？」

その言葉とともに私^②の前に座った女性は、美しく、いかにも有能^③なビジネスウーマンの容貌をしていた^④。

黒い髪は短く切り、前髪は斜めに流している。やや目尻の上がった切れ長の目に、意志の強そうな黒曜石の瞳。すっと通った鼻梁も薄い唇も、ダークカラーのビジネススーツによく似合っている。ただ、両方の耳に大きく垂れ下がるタイプのピアスをしているのがそぐわない感じではあったが、それはあくまでも一般的な女性社員という枠にはめたときであって、彼女を彼女として見た場合、それはとてもよく似合っていた。こんなおしゃれなレストランに無理なく溶け込んでいる。

当該の教科書では、このエッセイ文の後に、人物の外見描写をまとめる練習問題や文章理解に関する問題があるが、スタンスに関する解説やタスクは一切用意されていない。そこで、ここでは、このエッセイ文を素材として、中級の学習者に日本語スタンスの基本を学ばせる学習シートを考案したい。

シートは演習時間と教師による解説時間を含めておよそ1～2回の授業で完結することを念頭に置いている。実際、中国の日本語指導の現状では、教科書をスケジュール通りに進めていくことが優先されるため、こうした追加教材（投げ込み教材）にかけられる時間は限られているためである。

本研究で扱ったスタンスマーカの諸相は一人称代名詞・文末詞・陳述スタイル・ヘッジの4種類であるが、以下の学習シートでは、教科書本文に含まれるスタンスマーカに即

した入門的なタスク A と、スタンス表現に関連する知識を読むタスク B、さらに、学んだ知識を応用して答えるタスク C を設ける。これは、「気づき・理解・取り込み」(Schmidt, 1990) の 3 つの学習過程に対応するものである。

13.3.1 文末詞に関するタスクシート案

下線部 (1) では「かしら」という文末詞が使用されており、これが話者が女性であることを含意する仕組みになっている。そこで、「かしら」のこうした用法と、関連する文末詞である「わ・わよ・わね・のよ・Nね・Nよ」などの用法に習熟することを目的として、以下のようなタスクを考案した。

まず、タスク A では、全体を I と II に分け、I では学習者に文末詞の違いによって表出されるニュアンスが異なることに気づかせるために、3 つの文末詞がそれぞれどのような話者に使われやすいのか、または丁寧度の点でどのような違いがあるかについて考えさせ、自主的に文末詞の使い方を発見させる。次に、II では、I の問題の答えを提示したあと、学習者にグループでの話し合いをさせ、お互いの理解が足りないところについて助言しあうことに取り組みさせる。

【タスク A-I】以下の発話を読んで、話し手の性別・年齢、また、発話からけたイメージを想像してみよう。自分の回答をクラスメートの回答と比較し、それぞれなぜそのように感じたか意見を交換してみよう。

- (1) 「御相席させていただいてもよろしいかしら？」
- (2) 「御相席させていただいてもよろしいですか？」
- (3) 「御相席させていただいてもよろしいか？」

回答欄 (最も適切だと思うところに○をつけなさい)

	性別	年代	丁寧度
(1)	男・女・両方	若者・中年・高齢者・全年齢層	低・中・高
(2)	男・女・両方	若者・中年・高齢者・全年齢層	低・中・高
(3)	男・女・両方	若者・中年・高齢者・全年齢層	低・中・高

【タスク A-II】 答え合わせしよう。

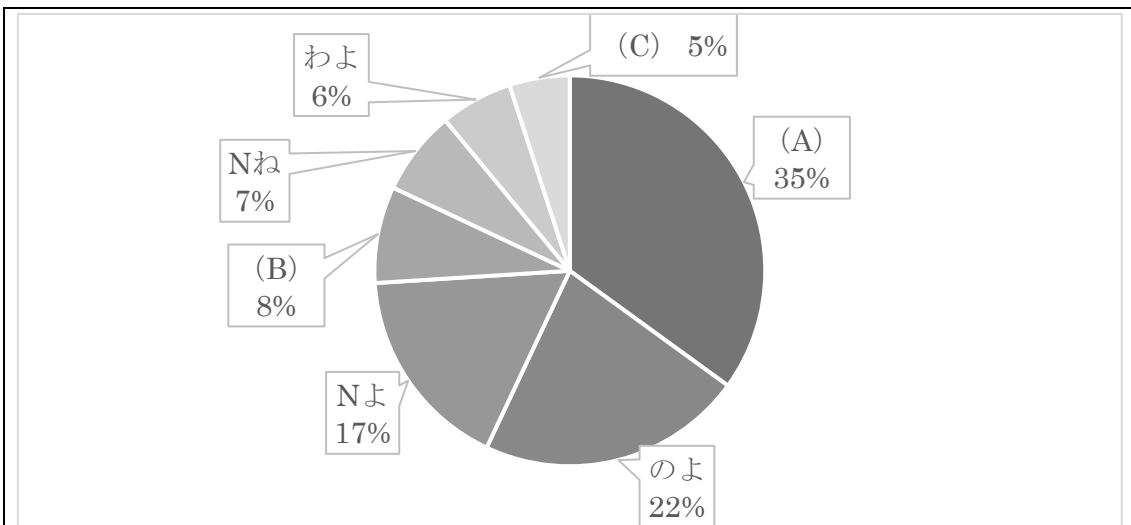
	性別	年代	丁寧度
(1)	女性	中年・高齢者	高
(2)	両方	全年齢層	中
(3)	男性	中年・高齢者	低

クラスメートと回答を比較し、どこが違ったか？なぜそのように選んだのかを聞きあい、その結果を以下にまとめよう。

上記のタスク A では、学習者は普段気付かなかった「かしら」という文末表現に注目して、それが性別や年代、イメージに関わることを理解したと思われる。ここで、日本語のいわゆる役割語についても解説しておくことが有用であろう。役割語とは、「ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができる」と、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができる」と、その言葉づかい」を指す概念である（金水，2003）。「かしら」などの文末詞は読み手・聞き手に特定の性別・年齢の人物像を想起させる点で一種の役割語の働きを持つ。ただ、日本語の文末詞は「かしら」だけではない。そこで、タスク B では、まず「かしら」について学習者の意識が高まった状態をふまえ、さらにほかの文末詞の使用実態への理解を深めるために、コーパス調査からわかった事実を提示しながら、以下のような問題に取り組ませる。

【タスク B-I】 コーパス分析では、下記の事実が明らかにされている。資料を読んで、以下の問題を完成させよう。

(1) 以下のグラフは現代日本語の文学ジャンルにおいて、主要な文末詞（かしら・わ・わよ・わね・のよ・Nね・Nよ）の頻度を表したものである。A-C には「かしら」「わ」「わね」のいずれかが入る。A-C に当てはまる文末詞を考えてみよう。



回答欄

(A) _____ (B) _____ (C) _____

(2) 次の表は7種類の文末詞について、使用者の性別およびそれぞれの果たす機能別の比率を表したものである。表の内容を読んで、次のまとめを完成させよう。

文末詞	話し手の性別		機能		
	女(%)	男(%)	言葉をやわらげ、話者が女性であることを示す (%)	高主張(%)	皮肉・嫌味(%)
わ	88.6	11.4	87.9	12.1	0
のよ	94.0	6.0	88.5	10.5	1
Nよ	84.7	15.3	78.9	21.1	0
かしら	87.7	12.3	93.4	1.6	5.0
Nね	89.0	11.0	97.8	1.5	0.7
わよ	97.1	2.9	72.1	27.8	0
わね	94.9	5.1	90.8	0.3	8.9

まとめ

- ① 「かしら」などの文末詞を使う話し手の性別のほとんどは_____である。
- ② 「かしら」などの文末詞がほとんどの場合、_____機能を果たしている。

【タスク B-II】 答え合わせをしよう。

(1) (A) 「わ」; (B) 「かしら」; (C) 「わね」;

(2) ①女性; ②言葉をやわらげ、話者が女性であることを示す

上記の問題の中、難しいと感じる問題がありましたか? (ある・なし)

あるならどちらですか (複数回答可) ? 問題番号: _____

上記のタスク B では、学習者は文末詞の使用実態に注目して、使用量や使用者の性別、果たす機能などについて理解が深まったと思われる。ただ、タスク A と B は、学習者に文末詞の機能に気づかせ、理解させることが目的であり、学習者は理解したことを応用できるかどうかはまだ確認していない。そこで、タスク C では、タスク A とタスク B で学んだことを実際に試せるように以下のような問題形式に取り組ませたい。

【タスク C-I】 (1) ~ (4) の文章の下線部に注目しながら、話し手の性別や使用場面を書いてみよう。

用例	性別	機能 (A: 言葉をやわらげ、話者が女性であることを示す; B: 高主張; C 嫌味/皮肉; D: ほか)
例: 「明月さんのこと、この間兄に尋ねてみたら、将来性のある青年ってほめてた <u>わ</u> 」。総子は、明月と奈緒子との縁談を、小磯に話したのだろう。	女	言葉をやわらげる
(1) 「あら、こんなのじゃ気に入らない <u>かしら</u> 。」	①	⑦
(2) 「本気よ! 殺す <u>わよ</u> , それ以上、一言でもしやべったら」少女の声は、殺気を帯びていた。	②	⑧
(3) 「もう心配ない <u>のよ</u> 。泣くのはおよしなさい」慶子は、泣きじゃくる牧子の涙をハンカチで拭ってやった。	③	⑨
(4) 自ら「俺、ほんまいつか怒られる <u>わ</u> 」と一	④	⑩

言		
(5) 美恵子窓に向かって体を乗り出すようにして、空を見上げた。「ああいうの、地震雲ってい うんじゃないかしら？」	⑤	⑪
(6) 「探してた <u>のよ</u> 。俺も。というのはこいつが どうしても紹介してくれって離れないからさ、し つこいんだよもう…」	⑥	⑫

【タスク C-II】 答え合わせをしよう。

①女；②女；③女；④男；⑤女；⑥男；⑦：C；⑧B；⑨A；⑩D；⑪A；⑫D

上記の問題の中、難しいと感じる問題がありましたか？（ある／なし）

あるならどちらですか（複数回答可）。 問題番号： _____

以上、本節では、教科書の本文に出現した「かしら」を手掛かりとして、「かしら」やそれに関連する文末詞についての学習者の理解を深めさせるタスクシートを考案した。次の節では、教科書の本文に現れた一人称単数代名詞の表記選択についてタスクシートを考案したい。

13.3.2 一人称代名詞の表記選択タスクシート案

下線部 (2) に関して、教科書では「私」という表記が選択されているが、日本語ではほかに「わたし」「ワタシ」といった表記も見られる。こうしたことは学習者がほとんど意識しないことであるが、実際の日本語では、表記の使い分けは大きな意味を持っている。そこで、この点への理解を深めるためのタスクを考案した。

まず、タスク A では、全体を I と II に分け、I では学習者に表記の違いによって表出されるニュアンスが異なることに気づかせるために、3つの表記形がそれぞれどのような話者に使われやすいのか、または文章媒体の点でどのような違いがあるかについて考えさせる。II では、I の問題の答えを提示したあと、学習者にグループでの話し合いをさせ、お互いの理解が足りないところについて助言しあうことに取り組みさせる。

【タスク A-I】 以下の文章の書き手の性別・年齢，また，文章の媒体を想像してみよう。自分の回答をクラスメートの回答と比較し，それぞれなぜそのように感じたか意見を交換してみよう。

(1) その言葉とともに私の前に座った女性は，美しく，いかにも有能そうなビジネスウーマンの容貌をしていた。

(2) その言葉とともにわたしの前に座った女性は，美しく，いかにも有能そうなビジネスウーマンの容貌をしていた。

(3) その言葉とともにワタシの前に座った女性は，美しく，いかにも有能そうなビジネスウーマンの容貌をしていた。

回答欄（最も適切だと思うところに○をつけなさい）

	性別	年齢	文章媒体
(1)	男・女・両方	若者・中年・高齢者・ 全年齢層	報告文や学術文・エッセイや小説・ ネット文書
(2)	男・女・両方	若者・中年・高齢者・ 全年齢層	報告文や学術文・エッセイや小説・ ネット文書
(3)	男・女・両方	若者・中年・高齢者・ 全年齢層	報告文や学術文・エッセイや小説・ ネット文書

【タスク A-II】 答え合わせをしよう。

	性別	年代	文章媒体
(1)	両方	全年齢層	報告文や学術文
(2)	両方	全年齢層	エッセイや小説
(3)	両方	若者	ネット文書

クラスメートと回答を比較し，どこが違ったか？なぜそのように選んだのかを聞きあい，その結果を以下にまとめよう。

上記のタスク A で，一人称単数代名詞「WATASHI」（ここでは，各種表記の総称を仮にロー

マ字の全大文字で記載する) について表記の違いが異なるニュアンスを持ちうることを学習者は理解したと思われる。ただ、タスク A だけでは、現代日本語においては、「私・わたし・ワタシ」のうちどれが最も多く使用されているのか、どのような文脈でその表記が使用されているのかについて学習者の理解はまだ十分ではないと思われる。そこで、タスク B では、一人称単数代名詞「WATASHI」の使用実態への理解を深めるために、コーパス調査からわかった事実を提示しながら、以下のような問題に取り組みさせる。

【タスク B-1】コーパス調査では、下記の事実が明らかにされている。資料を読んだあと、以下の問題とまとめを完成させよう。

以下の表は現代日本語のブログをデータとして、一人称単数代名詞の異なる表記（私・わたし・ワタシ）ごとに、頻度累計比や共起しやすい語、用例を表したものである。A と B には「私」か「わたし」のいずれかが入る。それぞれの特性や用例をよく読んで、(A) と (B) にふさわしい表記を考えてみよう。

表記タイプ	出現比率	共起しやすい語	用例
(A)	91.2%	考える, 人生, 生活, 女性, 車, 初めて, 苦手, 個人	(1) 被写体に対して愛情が無かったら, 人の心を打つ作品は撮れないし, その気持ちは絶対見ている人に伝わると～は考えています。 (2) これは, 欧米を中心に市場の拡大が続いたために, それらが併存できるだけ市場のキャパシティが広がったことが大きな要因と～は考えている。
(B)	6.7%	生きる, 非難, 神, 短歌, 解答, 感謝, 泣く, 元氣	(3) こころの奥より, ～を非難する人をゆるす事ができます。 (4) ～の短歌って愛情しかないのかもしれません。
ワタシ	2.1%	出勤, ダメ, 女, フレンド, モノ,	(5) ダンナの腰痛・肩痛などは, ～が見てるからいつもタダ。

		ダンナ、お客様	(6) お話を聞くと、専門は違っていたけれど、～のガッコの Kouhai だった。
--	--	---------	---

回答欄

(1) (A) _____ (B) _____

(2) まとめ (最も適切だと思うところに○をつけなさい)

表記タイプ	スタンス表出の特徴
「私」	① (一般の報告文・個人のエッセイ・くだけたネット文章) など、一定のフォーマリティを持った② (客観的・主観的) で③ (社会的・個人的) な文脈で使う
「わたし」	④ (報告文・個人のエッセイ・くだけたネット文章) など、一定のフォーマリティを持った⑤ (客観的・主観的) で⑥ (社会的・個人的) な文脈で使う
「ワタン」	⑦ (報告文・個人のエッセイ・くだけたネット文章) など、自分自身を客体化しながら、個人生活を⑧ (軽妙・丁重) に記述する文脈

【タスク B-II】 答え合わせをしよう。

(1) (A) 私 (B) わたし

(2) ①一般の報告文；②客観的；③社会的；④個人のエッセイ；⑤主観的；⑥個人的；
⑦くだけたネット文章；⑧軽妙

上記のタスク B では、学習者は一人称単数代名詞「WATASHI」に注目して、異なる表記の使用量や共起しやすい語、表出するスタンスなどについて理解が深まったと思われる。ただ、タスク A と B は、学習者に異なる表記の使い方に気づかせ、理解させることが目的であり、学習者は知識として理解したことを応用できるかどうかについては配慮されていない。そこで、タスク C では、タスク A とタスク B で学んだことを実際に試せるように、以下のような問題形式に取り組ませたい。

【タスク C-I】「私・わたし・ワタシ」のニュアンスの違いを考えながら、①～⑥の空欄について、文脈をふまえ、より適切であると思われる表記を選び、文を完成させよう。

- ・ いずれにしても本件は不起訴になる可能性が高いと①(私・ワタシ)は考えています。
- ・ 「おしゃれクリップ」は、ゲストの「私の中の、もうひとりの②(私・ワタシ)」にスポットを当てる番組。
- ・ この度は、いつも大変お世話になっております航空会社様、航空会社のスタッフ様に③(私・ワタシ)の身勝手な発言により、多大なるご迷惑をお掛けし、心よりお詫び申し上げます。
- ・ ④(私・ワタシ)よりいいダルマさんが撮れているようで・・・悔しいなあああ。。
- ・ この人がいなければ、⑤(私・わたし)の人生はどうなっていたか。想像もできない。愛しているし、尊敬している。
- ・ 中学校と高校からは、実はお父さんが、毎回、⑥(私・わたし)の制服をアイロンかけていました。ありがとうございます。甘えてました。

【タスク C-II】 答え合わせをしよう。

①	②	③	④	⑤	⑥
私	ワタシ	私	ワタシ	わたし	わたし

上記の問題の中、難しいと感じる問題がありましたか？ (ある・なし)

あるならどちらですか (複数回答可) ? 問題番号 : _____

以上、本節では、教科書の本文に出現した「私」を手掛かりとして、「私」や「わたし」、「ワタシ」についての学習者の理解を深めさせるタスクシートを考案した。次の節では、教科書の本文に現れたヘッジの用法についてタスクシートを考案したい。

13.3.3 ヘッジに関するタスクシート案

下線部 (3) に関して、教科書では女性の容貌についての見かけからの判断を述べるときに「有能そうな」という表現が使用されている。言語学では、様態を表す「そうな」といった話し手や書き手の態度、または産出する内容を緩和する機能を持つものをヘッジ (hedge) という。実際の日本語では、ヘッジはコミュニケーションを図るうえで重要な役割を果たしているが、学習者のヘッジに対する理解は決して十分とは言えない。そこで、ヘッジの使用

実態への理解を深めるためのタスクを考案した。

学習者にとってはヘッジが馴染みの薄い概念であるため、最初のタスク A では、全体を I と II に分け、I では、学習者に日本語では陳述を緩和することがよく行われることに気づかせるために、ヘッジの役割を果たす表現を文章の中から見つけることを行わせる。II では、I の問題の答えを提示したあと、学習者にグループで話し合いさせ、お互いの理解が足りないところについて助言しあうことに取り組ませる。

【タスク A-I】 言語学では、話し手や書き手の態度、または産出する内容を緩和する機能を持つものをヘッジという。次の文章を読んで、ヘッジだと思われる表現に下線を引いてみよう。

その言葉とともに私の前に座った女性は、美しく、いかにも有能そうなビジネスウーマンの容貌をしていた。

黒い髪は短く切り、前髪は斜めに流している。やや目尻の上がった切れ長の目に、意志の強そうな黒曜石の瞳。すっと通った鼻梁も薄い唇も、ダークカラーのビジネススーツによく似合っている。ただ、両方の耳に大きく垂れ下がるタイプのピアスをしているのがそぐわない感じではあったが、それはあくまでも一般的な女性社員という枠にはめたときであって、彼女を彼女として見た場合、それはとてもよく似合っていた。

【タスク A-II】 答え合わせしよう。

ヘッジ：有能そうな、やや、強そうな、ただ、感じ、あくまで
クラスメートと回答を比較し、どこが違ったか？なぜそのように選んだのかを聞きあい、その結果を以下にまとめよう。

上記のタスク A では、学習者は普段気付かなかったヘッジに注目して、それが話者の態度や文章の内容を緩和する機能をもつことについて理解したと思われる。ただ、実際の日本語ではヘッジの使用実態が言語環境に影響されており、産出モード・内容ジャンルの違いによってヘッジの使われ方が異なっている。この点について学習者の認識が薄いと思われるため、続くタスク B では、ヘッジの使用実態への理解を深めるために、コーパス調査からわかった事実を提示しながら、以下のような問題に取り組ませる。

【タスク B-I】コーパス調査では、下記の事実が明らかにされている。資料を読んで、以下の問題とまとめを完成させよう。

(1) 以下の表は現代日本語において、5種類のヘッジそれぞれの全体頻度（話し言葉5ジャンルと書き言葉5ジャンルの平均頻度）や、話し言葉における頻度（話し言葉5ジャンルの平均頻度）、書き言葉における頻度（書き言葉5ジャンルの平均頻度）、Sに対するWの比率を表したものである。(A)と(B)には「そう」か「あくまで」のいずれかが入る。(A)と(B)に当てはまるヘッジを考えてみよう。

ヘッジ	全体頻度	話し言葉における 頻度 (S)	書き言葉における 頻度 (W)	S/W
感じ	67.0	122.6	11.4	1072%
(A)	65.2	95.4	35.0	272%
ただ	36.9	269.7	114.5	236%
やや	2.7	0.5	4.9	9%
(B)	1.8	0.1	3.4	3%

回答欄

(A) _____ (B) _____

(2) 次の表は分量・程度がわずかであることを表す「やや」と、その類義語「少し・少々・ちょっと」の4語について、それぞれのコーパスにおける全体頻度や、話し言葉における頻度 (S)、書き言葉における頻度 (W)、Sに対するWの比率を表したものである。

(C)と(D)には「ちょっと」か「少々」のいずれかが入る。(C)と(D)に当てはまるヘッジを考えてみよう。

ヘッジ	全体頻度	話し言葉 (S) における 頻度	書き言葉 (W) における 頻度	S/W
(C)	257.6	498.3	16.9	2949%
少し	25.4	23.1	27.7	84%

やや	2.7	0.5	4.9	9%
(D)	1.7	0.2	3.3	5%

回答欄

(C) _____ (D) _____

【タスク B-II】 答え合わせをしよう。

(1) (A) そう ; (B) あくまで

(2) (C) ちょっと ; (D) 少々

上記の問題の中、難しいと感じる問題がありましたか？ (ある・なし)

あるならどちらですか (複数回答可) ? 問題番号 : _____

上記のタスク B では、学習者はヘッジの使用実態に注目して、表現によって、話し言葉・書き言葉別使用特性が異なることについて理解したと思われる。ただ、実際の日本語ではヘッジ語形には多くの語義があり、すべてが同じようにヘッジとして意味緩和の機能を果たしているわけではない。さらに、意味用法の違いにより意味緩和の度合いに軽重が存在しうる。そこで、この点への理解を深めるために、タスク C では「ちょっと」を手掛かりとして、各語義はどの程度使用されているか、また、意味緩和機能の強度がどの程度かは異なるかを考えさせる。

【タスク C-I】 ヘッジ「ちょっと」には以下の①～⑦の7種類の語義が存在する。次の表は「ちょっと」について、語義別の頻度構成比や、用例、緩和強度を表したものである。

(A) ～ (D) には①, ②, ⑤, ⑥のいずれかが入る。表の内容を理解したうえで、それぞれに当てはまる語義を考えてみよう。

- ① 数量・程度がわずかである
- ② 打ち消しの語と呼応して、その可能性はほとんどないと判断する様子
- ③ 間つなぎ
- ④ 否定的な内容を述べる前に使い、強い断定を避ける
- ⑤ 依頼や希求、指示行為の負担をやわらげる

- ⑥ 断り，負の評価など言いにくい後件を省略し，話し手の心理的負担を弱める
 ⑦ 呼びかけ

語義区分	頻度	用例	緩和度(1-5)
(A)	55%	A：一昔ってゆうか半期 <u>ちょっと</u> 前今年話題の『アナと、アナと雪の女王』。B：それだけは見ました。	3.21
④	17%	えっとー，大学の方の色々課題とかが多くなってきておまして，今の段階でもうかなり， <u>ちょっと</u> 厳しいんですね。	2.25
(B)	2%	まったく人生を楽しむということにかけて，彼女たちほど有能な人種も他に <u>ちょっと</u> 見当たらない。	3.54
③	13%	どうかな， <u>ちょっと</u> ね，ほんとお味分からないので	3.21
⑥	7%	<u>ちょっと</u> 待てよ。誰だ，この女。見たこともない女が玄関を通った。	2.50
(C)	6%	心配するな。それより，お前， <u>ちょっと</u> 聞いて回ってくれないか。	2.25
(D)	2%	A：まあ，もしまた，お金があれば，買いたいですけど…B：あー，そうですか。A：今は <u>ちょっと</u> …はい，ていう感じですね。	2.64

回答欄

(A) _____ (B) _____ (C) _____ (D) _____

【タスク C-II】 答え合わせをしよう。

(A) ① ; (B) ② ; (C) ⑤ ; (D) ⑥

上記の問題の中，難しいと感じる問題がありましたか？ (ある・なし)

あるならどちらですか (複数回答可) ? 問題番号 : _____

以上、本節では、教科書の本文に出現した「やや」などのヘッジを手掛かりとして、「やや」やそれに関連するヘッジについての学習者の理解を深めさせるタスクシートを考案した。次の節では、教科書の本文に現れた陳述スタイルの用法についてタスクシートを考案したい。

13.3.4 陳述スタイルの選択タスクシート案

下線部 (4) について、教科書では、「～していた」という常体で記載されているが、日本語には、常体（です・ます）と敬体（だ・である）という 2 つの陳述スタイルがある。媒体の特性によって常体と敬体の比率が異なっており、それぞれの陳述スタイルが表出するスタンスも異なるとされる。これらの点についての学習者の意識を高めることを狙いとして以下のタスクを考案した。

まず、タスク A では、全体を I と II に分け、I では学習者に陳述スタイルの違いによって表出されるニュアンスが異なることに気づかせるために、使われやすい文章の特徴や読み手に対する書き手の配慮という 2 つの点で、どのような違いがあるかについて考えさせる。II では、I の問題の答えを提示したあと、学習者にグループでの話し合いをさせ、お互いの理解が足りないところについて助言しあうことを行わせる。

【タスク A-I】以下の 2 つの用例を読み、それぞれの文章の特徴、また、読み手への配慮の程度について考えてみよう。より適切であると思うところに○をつけなさい。自分の回答をクラスメートの回答と比較し、それぞれなぜそのように感じたか意見を交換してみよう。

用例	文章の特徴	読み手に対する配慮
(1) …女性は、美しく、いかにも有能そうなビジネスウーマンの容貌をしていた。	①物事を(客観的かつ説明的に／主観的かつ物語的に描写	③(高／低)

(2)…女性は、美しく、いかにも有能そうなビジネスウーマンの容貌をしていました。	②物事を(客観的かつ説明的に/主観的かつ物語的に)描写	④(高/低)
--	-----------------------------	--------

【タスク A-II】 答え合わせしよう。

①客観的；②主観的かつ物語的；③低；④高

クラスメートと回答を比較し、どこが違ったか？なぜそのように選んだのかを聞きあい、その結果を以下にまとめよう。

上記のタスク A で、学習者は陳述スタイルの違いが異なるニュアンスを持ちうることを理解したと思われる。ただ、タスク A だけでは、日本語の多様な文章媒体（ジャンル）によって、それぞれどのような陳述スタイルが好まれるのかは学べない。そこで、タスク B では異なるジャンルにおける常体と敬体の使用実態への理解を深めるために、コーパス調査からわかった事実を提示しながら、次のような問題に取り組む。

【タスク B-I】 コーパス調査では、下記の事実が明らかにされている。資料を読んだ後、それぞれのグループの特徴のまとめを完成させよう。

以下の表は法律、書籍、新聞など書き言葉の 9 ジャンルを常体率（常体/敬体）の観点からグルーピングした結果である。A-C には「法律」「広報紙」「ブログ」のいずれかがが入る。それぞれに最もふさわしいジャンルを考えてみよう。

グループ	常体率	ジャンル（常体率%）	特徴
① 常体基調	70%以上	A (100), 新聞 (92.9), 白書 (89.1), 教科書 (83.3), 書籍 (77.2), 雑誌 (73.1)	客観的事実の描写が中心であり、読者に過度な配慮を行う必要性は低い
② 常体優先	50%~69%		
③ 敬体優先	30%~49%	B (37.5)	物事の客観的描写と主観的描写の割合がほぼ拮抗して

			おり、読者を持ち上げるニーズは中程度。
④ 敬体基調	30%未満	知恵袋 (5.8), C (5.1)	内容は物事の主観的描写が中心であり、読者に敬意を払い、読者を持ち上げるニーズは高い

回答欄

A: _____ ; B: _____ ; C: _____

【タスク B-II】 答え合わせをしよう。

A: 法律 ; B: ブログ ; C 広報紙

上記の問題の中、難しいと感じる問題がありましたか？ (ある・なし)

あるならどちらですか (複数回答可) ? 問題番号: _____

上記のタスク B では、学習者はジャンルの常体率に対する影響に注目して、ジャンルによって常体と敬体の比率が決定されることを理解したと思われる。ただ、タスク A と B は、学習者に常体と敬体の使われ方の違いに気づかせたうえで、それぞれの使用実態への理解を深めることが目的である。学習者は陳述スタイルを正しく使用できるかどうかはが配慮されていない。そこで、タスク C では、タスク A とタスク B で学んだことを実際に試せるように以下のような問題形式に取り組ませたい。

【タスク C-I】 以下の(1) ~ (10) は法律、書籍、新聞など書き言葉の 9 ジャンルから取った用例である (角かっこ内は筆者が追加)。用例を読んで、それぞれのジャンルの特性にあった陳述スタイルに○をつけてみよう。

番号	ジャンル	用例
(1)	雑誌	[このアイシャドーを]まぶた全体に丁寧にぼかしながら広げ、目元に自然な明るさを (プラスする/プラスします)。

(2)	白書	自然の保全と健全利用に関する思想普及等に関して [昭和] 五十九年度は以下の施策を (行った／行いました)。
(3)	法律	特許業務法人の社員は、すべて業務を執行する権利を有し、義務を (負う／負います)。
(4)	知恵袋	これって病気なんですか・・・？何科に行けばいいのか (分かりません／分からない)。
(5)	ブログ	年末年始のお休みの影響と、おいらの更新が滞ったおかげで、急に、1日当たり訪問者数が (落ち込んだ／落ち込みました)。
(6)	広報誌	地域の皆さんの出会い・ふれ合いの場を提供し、地域デビューのお手伝いを (している／しています)。
(7)	教科書	今から約2億年前まで、地球上のすべての大陸はひとつに集まってパンゲア大陸を (形成していた／形成していました)。
(8)	ブログ	端午節句 [※5月5日の「こどもの日」のこと] で (忙しい／忙しいです) ! 皆さん元気になってくれ!
(9)	新聞	トヨタ自動車、ホンダ、日産自動車の自動車大手三社は六日、スマトラ沖地震の被災地に向けた義援金などの支援策を (発表した／発表しました)。
(10)	書籍	この本が書かれてからもうすでに三十年近くが経過しているため、今でもその現状が変わらないのかというとそれは (疑問だ／疑問です)

【タスク C-II】 答え合わせをしよう。

(1) プラスする；(2) 行った；(3) 負う；(4) 分かりません；(5) 落ち込みました

(6) しています；(7) 形成していた；(8) 忙しい；(9) 発表した；(10) 疑問だ

上記の問題の中、難しいと感じる問題がありましたか？ (ある・なし)

あるならどちらですか (複数回答可) ? 問題番号 : _____

以上、13.3 では、既存の教科書の単元を利用しつつ、日本語学習者が日本語スタンスマーカーへの理解を深められるよう、授業の中で追加的に利用できるタスクシートの在り方

について検討してきた。こうしたシートを利用することで、スタンスマーカー指導用の付属教材を充実させることができるだけでなく、コーパスからとった実際の用例を導入することで、学習者にオーセンティックな日本語に触れる機会を提供することができる。また、「気づき・理解・取り込み」の学習過程を導入することで、学習者の自主的・協働的な学習を促進したうえで、十分な言語知識および運用能力の獲得につながることを期待されるだろう。

13.4 本研究の制約と課題

本研究では有益な知見が得られたが、一方、課題も残されている。この節では、今後研究を深めるにあたっての5つの課題について述べたい。

1点目は、調査に使用したデータの問題である。すでに述べたように、本研究は、現代日本語におけるスタンス表出を調査する際に、主として現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)を対象としている。この点については、2つの問題が認められる。1つ目は、本研究で使用したコーパスはスタンスマーカーの属性分析を前提として構築されたものではないことである。BCCWJは、日本語を構成する多様なジャンルを含んでおり、一定の程度で日本語のスタンス表出の実態を反映しているが、スタンスはきわめて状況的・可変的なものであるため、特定の文脈でしか使用されないスタンスマーカーも存在する。今後の研究においては、分析の安定性を高めるために、スタンスマーカーを使用する義務的な文脈を設定し、スタンス表出の用例を幅広く収集することが必要になってくるだろう。2つ目は、話し言葉におけるスタンス表出が十分に調査できなかったことである。8章「現代日本語におけるヘッジ使用」の調査では、産出モード(書き言葉と話し言葉)がスタンスマーカーの使用に影響を及ぼす可能性が示された。それをふまえると、今後の研究においては、日本語日常会話コーパス(CEJC)などの話し言葉データを併用し、スタンスマーカーをより多面的に捉えていくことを試みたいと考える。

2点目は、調査対象の項目の問題である。本研究では、スタンスマーカーを広い枠組みで捉え、無数に存在するスタンスマーカーの中で、一人称代名詞、文末詞、陳述スタイル、ヘッジの4種を代表として選出し、現代日本語におけるスタンスマーカーの使用実態や中国人日本語学習者によるスタンスマーカー使用の特徴を捉えることを目的とした。しかしながら、すでに述べたように、スタンスマーカーには幅広い言語項目が含まれており、従来の先行研究で取り上げられていないが、実際にスタンスマーカーとして使用される語も存在する。したがって、今後の研究においては、調査対象の範囲を広げ、スタンスマーカーの振

る舞いや機能についてさらに詳しく調査する必要があると思われる。

3点目は、本研究で対象とした学習者が中国で学ぶ中国人日本語学習者に限られているという問題である。今後の研究においては、中国で学ぶ学習者のみならず、他国で学ぶ学習者も分析対象者に含めることで、学習環境や母語の違いがスタンスマーカの使用にどのように影響しているかを究明できると考える。

4点目は、研究アプローチに関する問題である。本研究は、中国人日本語学習者のスタンスマーカ使用を調査する際に、学習者によるスタンスマーカ使用の全体像を捉えることを優先し、あえて学習者の正用・誤用を区別しなかった。学習者が産出したスタンスマーカの全体使用量に着目し、量的な分析に重きを置きながら、いくつかの用例を取り上げ、用例の適切さ、学習者が犯す誤用の原因などについて検討し、一部質的な分析を加えるにとどまった。しかしながら、学習者の言語使用を分析する際、質的研究と量的研究を偏りなく取り入れることは、十分な調査結果を得るうえで不可欠である。従って、今後の研究において、学習者によるスタンスマーカの用例を幅広く集めたうえで、学習者の正用・誤用・非用を区別し、学習者はどのような使用意識や使用意図に基づいて、それを使用したのか（あるいはその使用を回避したのか）について、インタビューを行うことも必要になってくるだろう。

5点目は、日本語教育への応用に関する問題である。本研究では各章で得られた調査結果をもとに、本章において教育的応用の可能性という形でまとめるにとどまった。今後の研究においては、個々のスタンスマーカの取り扱い方について、教科書や教材の詳細な分析を行い、問題点を指摘したうえで、具体的にスタンスマーカを導入する学習段階、指導項目、指導方法について、検討していきたいと考えている。また、学習者に対してのみならず、現場の教師に対して「スタンスマーカ」の指導意識や指導方法を尋ねるインタビューの実施も取り入れていきたい。

本研究で明らかになった点を踏まえ、上述した視点を取り入れた研究を重ねていくことで、日本語教育に貢献できるスタンス研究に携わっていきたいと考える。

参考文献

- 庵功雄・中西久実子・高梨信乃・山田敏弘（2001）『中上級を教えるための日本語文法ハンドブック』 東京：スリーエーネットワーク.
- 生田少子・井出祥子(1983)「社会言語学における談話研究」『言語』 12(12), 77-84.
- 石川慎一郎（2011）『わたしはマイク・ミラーです』を再考する—日本語コーパスの教育応用をめぐる一—『高知大学留学生教育』 12, 1-18.
- 石川慎一郎（2018）「L2 日本語語彙の習得プロセスについて—LARP コーパスに見る台湾人学習者による日本語作文の縦断分析—」『統計数理研究所共同研究レポート』 400, 1-13.
- 石川慎一郎（2020）『ベーシックコーパス言語学』（第2版）東京：ひつじ書房.
- 石川慎一郎（2021）「絵描写作文課題における L2 日本語学習者の動詞使用と習熟度の関係—I-JAS の SW1 課題データの計量的概観—」『統計数理研究所共同研究レポート』444, 1-22.
- 石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠（編著）（2010）『言語研究のための統計入門』東京：くろしお出版
- 石黒圭（2006）「日本語学者の文章表現講座 第五回『です・ます形』と『だ・である形』の共存」『本が好き』（光文社） 5, 41-47.
- 井上優（2010）「モダリティ」 大西拓一郎（編）『方言文法調査ガイドブック』 東京：国立国語研究所全国方言調査委員会.
- Vanbaelen, Ruth（2003）「性差マーカーの『自然さ』—小説中の会話文と実際の会話との比較—」『日本語と日本文学』（筑波大学国語国文学会） 36, 54-67.
- 宇佐美まゆみ（1995）「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『学苑』（昭和女子大学近代文化研究所） 662, 27-42.
- 袁青（2018）「日本語と中国語字幕に見られるヘッジ表現—ポライトネスの観点から—」『通訳翻訳研究への招待』 19, 109-125.
- 大浜るい子・荒牧ちさ子・曾儀婷（2001）「日本語教科書に見られる自称詞・対称詞の使用について」『教育会研究紀要 第二部』（中国四国教育学会） 47(2), 342-352.
- 小川早百合（1997）「現代の若者会話における文末表現の男女差」小出詞子先生退職記念編集委員会（編）『日本語教育論集—小出詞子先生退職記念—』（pp.205-219）東京：凡人社.

- 小川早百合 (2004) 「話し言葉の男女差一定義・意識・実際」『日本語とジェンダー』 4, 26-39.
- 尾崎喜光 (1995) 「若者の敬語：学校生活における自称詞・対称詞の使用状況」『青少年問題』(青少年問題研究会) 42(11), 11-16.
- 金蘭美・金庭久美子 (2016) 「書き言葉における日本語学習者の文体の使用状況：『YNU 書き言葉コーパス』を用いて」『ときわの杜論叢』(横浜国立大学) 3, 47-65.
- 熊谷滋子(2001) 「新聞投書による文体の効果—『ですます体』と『非ですます体』の混用を通して—」『人文論集：静岡大学人文学部社会学科・言語文化学科研究報告』 52(1), 273-285.
- 熊坂亮 (2003) 「対人関係の修辞としてのヘッジ」『独文学研究年報』 30(12), 23-40
- 熊抱ゆかり (2006) 「言語とジェンダー—日英語に表れる性差—」『福岡大学人文論叢』 38 (1), 215-229.
- 小磯花絵・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉 (2017) 「『日本語日常会話コーパス』の構築」『言語処理学会第 23 回年次大会発表論文集』 (pp.775-778) .
- 国立国語研究所コーパス開発センター (2015) 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』利用の手引(第 1.1 版)」 <https://ccd.ninjal.ac.jp/bccwj/doc.html> (最終閲覧日:2022.01.15)
- 小玉博昭 (2016) 「成人日本語学習者における人称代名詞の使用—僕と俺を中心に—」『日本学刊』(香港日本語教育研究会) 19, 36-48.
- 後藤斉 (2003) 「言語理論と言語資料：コーパスとコーパス以外のデータ」『日本語学』(明治書院) 22(5), 6-15
- 後藤斉 (2007) 「コーパス言語学と日本語研究」『日本語科学』 22, 47-58.
- 小森万里 (2016a) 「中級以上の日本語学習者に対するアカデミック・ライティングのための日本語文法教育—引用動詞を用いた意見述べの文末表現をめぐって—」『ヨーロッパ日本語教育：2015 日本語教育シンポジウム報告・発表論文集』 20, 303-308.
- 小森万里 (2016b) 「日本語を母語とする大学教員と日本語学習者の意見文におけるメタディスコースの比較」『CAJLE 2016 Annual Conference Proceedings』 144-153.
- 迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子 (2016) 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス International Corpus of Japanese as a Second Language」『国語研プロジェクトレビュー』 6 (3), 93-110.

- 澤田治美 (2006) 『モダリティ』 東京：開拓社.
- 澤田美佳 (n.d.) 「テレビドラマにおける女性文末詞の変遷」
<https://slidesplayer.net/slide/11165575/> (最終閲覧日：2020.01.05)
- 篠崎佳恵 (2012) 「初対面二者間会話におけるスピーチレベルの変遷とその要因—普通体の指標的意味に着目して—」 『桜美林言語教育論叢』 8, 15-28
- 島田むつみ (2017) 「『読売新聞』における敬体・常体・文語体の推移—明治七年から二十年まで—」 『国際日本学研究論集』 6, 43-62.
- 周平・陳小芬 (編) (2009) 『新編日語』. 上海：上海外語教育出版社
- 肖錦蓮 (2019a) 「日本語学習者の文体の変化：自由作文における常体シフトの発生要因の解明」 『コーパスと文体論のインタフェース 2018 発表論文集』, 47-64.
- 肖錦蓮 (2019b) 「現代日本語における常体・敬体を再考する—BCCWJ に基づく調査—」 『統計数理研究所共同研究レポート』 414, 129-143.
- 肖錦蓮 (2019c) 「現代日本語における一人称単数代名詞の選択と書き手スタンスの表出」 『電子情報通信学会技術研究報告』 119(114), 19-24.
- 肖錦蓮 (2021) 「書き言葉・話し言葉 10 ジャンルのコーパス頻度調査に基づく現代日本語における高頻度ヘッジ語形の抽出と使用環境によるグルーピングの試み」 『統計数理研究所共同研究レポート』 444, 103-122.
- 新村出 (編) (2008) 『広辞苑』 第6版. 東京：岩波書店.
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』. 東京：岩波新書.
- 鈴木睦 (2007) 「言葉の男女差と日本語教育」 『日本語教育』 134, 48-57.
- 鈴木睦 (2010) 「変わりゆく日本語と日本語教育の今」 『ジャーナル CAJLE』 (カナダ日本語教育振興会) 11, 10-22.
- スリーエーネットワーク (2012) 『みんなの日本語初級 I』 東京：スリーエーネットワーク.
- スリーエーネットワーク (2012) 『みんなの日本語初級 II』 東京：スリーエーネットワーク.
- 曹英南 (2010) 「韓日言いさし表現における使用状況の要素」 『日本文化研究』 35, 451-466.
- 曹春玲 (2015) “日语终助词在男女用语中的差异” 《海南大学学报 人文社会科学版》 3, 95-100.
- 曹大峰 (編) (2010) 『基礎日語総合教程 (第3冊)』. 北京：高等教育出版社
- 高野愛子 (2011) 「レポート・論文の文体に関する学習者の認識—許容範囲を探るために—」 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』 37, 77-87.

- 竹内理・水本篤（編著）（2014）『外国語教育研究ハンドブックー研究手法のより良い理解のためにー』東京：松柏社.
- 田中牧郎（2004）「雑誌『太陽』創刊年における口語文一敬体を中心にー」飛田良文（編）『言文一致運動』（pp 78-108）東京：明治書院.
- 田中牧郎（2016）「演説の文末表現の変遷ー明治時代から昭和 10 年代までー」相澤正夫・金澤裕之（編）『SP 盤演説レコードがひらく日本語研究』（pp 248-270）東京：笠間書院.
- 因京子（2003）「マンガに見るジェンダー表現の機能」『日本語とジェンダー』3, 17-36.
- 因京子（2007）「翻訳マンガにおける女性登場人物の言葉遣いー女性ジェンダー標示形式を中心にー」『日本語とジェンダー』7, 124-136.
- 陳淑娟（2007）「作文における漢語語彙の習得についての考察：LARP at SCU のデータに基づく事例研究」『台湾日本語文学報』22, 379-404.
- 張佩霞（1996）「中国語，日本語における人称代名詞の使用とそこに窺われる文化の違い」『語文論叢』23, 1-19.
- 鶴澤佳奈子（2009）「児童向け作品の文章論的研究ー『こどものとも』にみる絵本の言葉ー」『日本文学』105, 211-232.
- 鄭惠先（2001）「複数を表す「たち」と「ら」の使用における選択条件：シナリオの分析結果を中心として」『社会言語科学』4(1), 58-67.
- 鄭惠先（2017）「スポーツ情報番組のジャンルによる語用論的特徴：日韓対照で見られるスピーチレベルシフトの相違に注目して」『北海道大学国際教育研究センター紀要』21, 1-13.
- 寺尾綾（2010）「文末形式の運用とスタイル切り換えー日本語を学ぶ中国語母語話者の縦断データからー」『阪大日本語研究』22, 113-142.
- トムソン木下千尋・尾辻恵美（2009）「ビジネス日本語教科書とジェンダーの多面的考察」『世界の日本語教育：日本語教育論集』19, 49-67.
- 中村重穂（2011）「文体混用に関する一考察：『だ・である』体の『です・ます』体への混用について」『北海道大学留学生センター紀要』15, 20-39.
- 中山治（1985）「『ぼかし』の構造ー日本語の表現心理」『言語』14(11), 64-69.
- 西川由紀子（2003）「子どもの自称詞の使い分け：『オレ』という自称詞に着目して」『発達心理学研究』14(1), 25-38.

- 仁田義雄 (2009) 「丁寧体と普通体」日本語記述文法研究会 (編) 『現代日本語文法 7』 (pp.269-279) 東京：くろしお出版.
- 入戸野みはる (2004) 「ヘッジの形とその機能—友人間の会話に見る—」南雅彦・浅野真紀子 (編) 『言語学と日本語教育Ⅲ』 (pp.287-304) 東京：くろしお出版.
- 入戸野みはる (2018) 「日本語学習者の『書き』に見るヘッジの使用」AATJ Annual Spring Conference (Washington, DC)
<https://www.aatj.org/resources/conferences/2018/spring/AATJ2018SpringConferenceProgram.pdf#search=%27AATJ+2018+Spring+Conference%27> (最終閲覧日：2020.01.05)
- 野田尚史 (1998) 「『ていねいさ』からみた文章・談話の構造」『国語学』 194, 102-189.
- 野田尚史 (2005) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』 東京：くろしお出版.
- 野田尚史 (2010) 「日本語教育と日本語研究の新しい関係を目指して」トムソン木下千尋・牧野成一 (編) 『日本語教育と日本研究の連携 — 内容重視型外国語教育に向けて』 (pp.127-143) 東京：ココ出版.
- 范晓维 (2012) 「女性終助詞についての研究」《青年文学家》 11, 150.
- 東泉裕子・高橋圭子 (2020) 「現代日本語における『もちろん』のヘッジ用法—現代語コーパスの用例より—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』 12, 26-34.
- 堀田智子・堀江薫 (2012) 「日本語学習者の『断り』行動におけるヘッジの考察—中間言語用論分析を通じて—」『語用論研究』 14, 1-19.
- 前川喜久雄 (2007) 「コーパス日本語学の可能性：大規模均衡コーパスがもたらすもの」『日本語科学』 22, 13-28.
- 松村明 (編) (2006) 『大辞林 (第3版)』. 東京：三省堂.
- 松村明 (監修) 小学館国語辞典編集部 (編) (2012) 『大辞泉 (第2版)』. 東京：小学館.
- 丸山岳彦 (2016) 「大正～昭和前期の演説に現れる文末表現のバリエーション」相澤正夫・金澤裕之 (編) 『SP 盤演説レコードがひらく日本語研究』 (pp 271-291) 東京：笠間書院.
- 丸山岳彦・田野村忠温 (2007) 「コーパス言語学の射程」『日本語科学』 22, 5-12.
- 水本光美 (2010) 「主張度の高い女性文末詞の使用の変遷—4世代にわたる調査分析—」『北九州市立大学国際論集』 6, 129-149.
- 水本光美 (2011) 「日本語教師の意識調査分析—日本語教科書における女性文末詞使用に関

- して」『北九州市立大学基盤教育センター紀要』 9(3), 55-80.
- 水本光美 (2012) 『ジェンダーから見た日本語教科書』 岡山：大学教育出版.
- 水本光美・福盛壽賀子 (2007) 「主張度の強い場面における女性文末詞使用—実際の会話とドラマとの比較—」『北九州市立大学国際論集』 5, 13-22.
- 水本光美・福盛壽賀子・高田恭子 (2007) 「会話指導における女性文末詞の扱い」 関西 OPI 研究会 (編) 『第 6 回 OPI 国際シンポジウム：発表論文集』 (pp.85-90) .
- 水本光美・福盛壽賀子・高田恭子 (2008) 「ドラマに使われる女性文末詞—脚本家の意識調査より—」『日本語とジェンダー』 8, 11-26.
- 水本光美・福盛壽賀子・高田恭子 (2009) 「日本語教材に見る女性文末詞—実社会における使用実態調査との比較分析—」『日本語とジェンダー』 9, 12-24.
- 水本光美・福盛壽賀子・福田あゆみ・高田恭子 (2006) 「ドラマに見る女ことば『女性文末詞』—実際の会話と比較して—」『九州市立大学国際論集』 4, 51-70.
- 三牧陽子 (1993) 「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」『大阪教育大学紀要 I 人文科学』 42(1), 39-51.
- 三牧陽子 (2002) 「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示—初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心に—」『社会言語科学』 5(1), 56-74.
- 三牧陽子 (2007) 「文体と日本語教育」『日本語教育』 138, 58-67.
- 宮崎和人 (2002) 「モダリティの概念」 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 (編) 『モダリティ』 (pp.1-14) 東京：くろしお出版.
- 宮島達夫 (1977) 「単語の文体的特徴」 松村明教授還暦記念会 (編) 『国語学と国語史：松村明教授還暦記念』 (pp.871-903) 東京：明治書院.
- 三輪正 (2010) 『日本語人称詞の不思議—モノ・コト・ヒト・キミ・カミ』 京都：法律文化社.
- 村上嘉英 (1999) 「中国語と日本語の人称代名詞について」『中国文化研究』 16, 21-38.
- 山川史 (2011) 「学習者のヘッジ使用 OPI におけるレベル別会話分析」『日本語教育研究』 57(10), 124-142.
- 山崎誠 (2011) 「文末表現の分布と文体」—『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を利用して—『Japio YEAR BOOK 2011』, 280-283.
- 山路奈保子 (2006) 「小説における女性形終助詞『わ』の使用」『日本語とジェンダー』 6,

20-29.

山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄（編）（2005）『新明解国語辞典』. 東京：三省堂

李在鎬・石川慎一郎・砂川有里子（編著）（2018）『新・日本語教育のためのコーパス調査入門』 東京：くろしお出版

Lee 凧子・楊彩虹（2013）「日本語・英語・中国語の新聞の社説に現れる Stance 表現と Engagement 表現—中国語の特徴を中心に—」 *Studies in language science* (立命館大学) 3, 75-91.

龍満金・許家金（2010）“大学生英汉同题议论文中立场标记的对比研究”《外语与外语教学》252(3), 21-24.

Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S., & Finegan, E. (1999). *Longman grammar of spoken and written English*. Pearson Education.

Crismore, A., Markkanen, R., & Steffensen, M. (1993). Metadiscourse in persuasive writing: A study of texts written by American and Finnish students. *Written Communication, 10*, 39-71.

Du Bois, J. W. (2007). The stance triangle. In R. Englebretson (Ed.), *Stancetaking in discourse: Subjectivity, evaluation, interaction*. John Benjamins Publishing Company.

Filimonova, E. (2005). *Clusivity: Typology and case studies of inclusive-exclusive distinction*. John Benjamins Publishing.

Fraser, B. (2010). Pragmatic competence: The case of hedging. In G. Kaltenbock, W. Mihatsch & S. Schneider (Eds.), *New approaches to hedging* (pp.15-34). Emerald Group.

Halliday, M. A. K. (1994). *An introduction to functional grammar* (2nd ed.). Edward Arnold.

Hunston, S., & Thompson, G. (2000). Evaluation: An introduction. In S. Hunston & G. Thompson (Eds.), *Evaluation in text: Authorial stance and the construction of discourse* (pp.1-26). Oxford University Press.

Hyland, K. (2005). Stance and engagement: A model of interaction in academic discourse.

- Discourse Studies*, 7(2), 173-192.
- Hyland, K., & Tse, P. (2004). Metadiscourse in academic writing: A reappraisal. *Applied Linguistics*, 25(2), 156-177.
- Kawasaki, K., & McDougall, K. (2003). Implications representations of casual conversation: A case study in gender-associated sentence final particles. 『世界の日本語教育』 13, 41-55.
- Lauwereyns, S. (2002). Hedges in Japanese conversation: The influence of age, sex, and formality. *Language Variation and Change*, 14, 239-259.
- Lakoff, G. (1972). Hedges: A study in meaning criteria and the logical of fuzzy concepts. *Chicago Linguistic Society Papers*, 8, 183-228.
- Martin, J. R. (2000). Beyond exchange: Appraisal systems in English. In S. Hunston & G. Thompson (Eds.), *Evaluation in text: Authorial stance and the construction of discourse*(pp.142-175). Oxford University Press.
- McEnery, T., Xiao, R., & Tono, Y. (2006). *Corpus-based language studies: An advanced resource book*. Routledge.
- Nittono, M. (2003). *Japanese hedging in friend-friend discourse*. Ann Arbor, MI: UMI.
- Okamoto, S. (1995). "Tasteless Japanese": Less "feminine" speech among young Japanese women. In K. Hall & M. Bucholtz. (Eds.), *Gender articulated: Language and the socially constructed self*(pp.297-325). Routledge.
- Palmer, F. R. (1986). *Mood and modality*. Cambridge. UK: Cambridge University Press.
- Tannen, D. (1989). *Talking voices: Repetition, dialogue, and imagery in conversational discourse*. Cambridge University Press.
- Vande Kopple, W. J. (1985). Some explanatory discourse on metadiscourse. *College Composition and Communication*, 36, 82-93.
- Wieczorek, A. (2013). In-group and out-group markers in the service of political legitimization: a critical-methodological account. In I. Witzak-Plisiecka (Ed.), *Pragmatics of semantically-restricted domains*(pp.65-78). Cambridge Scholars Publishing.

付録

付表1 ジャンルごとのヘッジ語形頻度 (8.2)

ヘッジ	ST	I	RP	D	CEJC	PN	B1	B2	OT	PM
が	420.9	166.5	311.5	259.7	11.8	292.9	332.5	383.3	162.3	290.5
という	115.5	120.7	114.5	37.9	0.2	224.4	441.6	301.3	231.1	333.5
ようだ	82.5	184.2	119.1	416.6	85.1	150.9	381.6	421.3	555.7	276.9
～的	0.0	120.7	87.0	21.6	62.8	189.2	398.1	103.9	265.6	198.0
ね	90.8	2179.6	1232.1	692.5	2827.9	26.7	66.1	205.3	47.8	144.8
だけ	8.3	103.9	87.0	16.2	139.5	77.1	113.1	155.8	84.2	129.0
でしょう	0.0	124.6	169.5	156.9	60.5	14.8	50.9	58.7	46.3	48.3
だろう	0.0	109.3	27.5	27.0	94.3	36.6	68.5	281.4	79.3	66.5
けれど	74.3	1216.4	1268.8	292.1	682.0	17.8	40.5	106.4	14.1	90.5
ほう	41.3	198.0	659.6	238.0	162.0	19.5	53.3	97.7	27.3	53.0
と思う	8.3	285.6	480.9	135.2	146.6	23.2	44.4	50.3	15.9	54.4
とか	16.5	943.6	485.5	227.2	573.1	14.0	41.3	51.4	8.1	45.9
くらい	0.0	215.2	183.2	37.9	203.1	11.6	31.3	45.0	20.7	43.4
しそうだ	74.3	215.2	27.5	86.6	73.3	31.4	17.9	73.1	13.1	39.5
少し	16.5	19.2	32.1	32.5	15.4	12.4	24.9	50.3	20.4	30.2
頃	16.5	75.8	0.0	0.0	17.5	31.9	33.1	38.8	45.2	31.0
ちょっと	24.8	420.6	1539.0	156.9	350.5	5.6	13.0	34.7	4.1	27.0
かな	33.0	198.5	197.0	178.5	261.1	6.0	7.1	24.5	52.3	18.2
みたいだ	0.0	290.6	22.9	81.1	279.0	4.1	8.5	34.8	3.0	19.0
感じ	16.5	226.0	77.9	146.1	146.4	5.1	9.1	16.0	6.6	20.5
らしい	0.0	17.7	4.6	0.0	38.0	6.1	8.8	33.1	3.8	11.8
なんか	8.3	210.8	55.0	75.7	702.6	2.0	7.5	22.1	1.3	10.8
可能性	0.0	1.5	0.0	0.0	5.4	29.4	16.8	7.6	6.2	15.0
のではないか	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	8.6	11.8	12.0	3.7	7.7
気がする	0.0	21.7	18.3	0.0	21.3	3.8	5.3	19.4	2.2	8.1
しばらく	0.0	5.4	27.5	0.0	2.6	2.6	6.1	21.2	5.3	6.1

方向	0.0	3.9	13.7	5.4	5.6	6.9	11.3	5.4	24.4	8.7
なんとか	0.0	6.4	55.0	0.0	28.0	3.7	5.4	12.6	1.2	6.0
んじゃないの	0.0	3.0	4.6	0.0	24.3	0.1	0.6	3.4	0.1	1.1
と思われる	8.3	1.0	0.0	37.9	0.0	2.3	11.0	5.1	2.2	4.0
けっこう	0.0	207.8	109.9	21.6	115.4	1.0	3.1	4.3	0.3	6.2
たぶん	0.0	175.3	100.8	75.7	124.4	1.3	3.7	12.2	0.8	4.0
おそらく	8.3	9.8	22.9	37.9	2.0	1.1	8.2	11.2	1.9	3.9
と考えられる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.6	12.9	1.3	22.1	3.5
ただ	8.3	53.2	114.5	59.5	34.3	20.5	19.9	43.2	8.8	22.1
～げ	0.0	0.5	0.0	0.0	2.1	3.1	2.6	18.1	1.6	5.3
とりあえず	0.0	18.2	36.6	0.0	21.3	0.4	2.5	4.5	0.2	3.5
やや	0.0	1.0	0.0	0.0	1.3	3.4	5.2	4.7	3.8	7.4
ある程度	0.0	9.8	0.0	0.0	4.1	1.2	4.6	1.2	1.3	3.9
～得る	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.1	7.9	2.2	2.2	1.5
必ずしも	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	1.8	5.4	1.6	2.6	1.7
っぽい	0.0	10.8	0.0	0.0	13.9	0.9	1.6	4.7	0.8	7.4
少々	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	1.4	4.0	2.9	0.3	7.9
なんとなく	0.0	3.0	0.0	0.0	8.7	0.8	2.1	5.2	0.6	2.3
単なる	0.0	1.0	0.0	0.0	0.8	1.3	4.5	2.9	1.7	2.5
場合もある	0.0	0.5	0.0	0.0	1.0	0.8	3.8	0.5	4.4	1.8
恐れがある	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	3.1	2.0	0.7	1.2	0.8
概ね	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.9	1.4	0.6	0.6	0.7
もしかしたら	0.0	4.4	32.1	27.0	5.1	0.2	0.9	3.0	0.1	1.0
ように思われる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	2.6	1.8	0.6	0.7
とは限らない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	1.8	1.2	1.7	1.0
めく	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	0.7	2.6	0.2	0.9
万一	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.6	1.3	0.4	0.5
ように考えられる	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.2	0.0	0.1	0.0
あいにく	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.4	0.3	0.9	0.0	0.3

っていう	0.0	266.4	114.5	10.8	2.5	1.0	5.1	10.6	0.6	10.7
やはり	0.0	341.3	302.3	0.0	158.9	7.1	17.6	30.6	9.3	25.7
あまり	0.0	213.2	100.8	0.0	58.4	6.5	16.2	20.9	6.3	15.8
なかなか	16.5	41.4	32.1	0.0	18.9	1.6	8.6	10.0	6.4	9.9
せっかく	33.0	3.9	13.7	0.0	6.9	0.9	2.3	4.3	0.4	2.8
あの(う)	0.0	3.0	9.2	0.0	688.9	0.0	0.2	1.1	0.2	0.1
かも	0.0	93.6	114.5	86.6	121.3	17.4	33.7	68.4	9.0	41.0
まあ	8.3	370.8	178.6	21.6	294.6	0.6	3.8	19.4	0.3	5.6
あたり	0.0	9.4	13.7	16.2	5.7	2.9	8.3	22.9	11.7	8.4
ほど	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	4.1	0.7	1.7	0.3	1.0
一応	0.0	41.4	36.6	0.0	34.6	0.1	2.7	4.6	0.2	1.8
なんて	8.3	32.0	0.0	0.0	57.4	5.4	11.9	42.7	1.1	21.7
大抵	0.0	6.9	0.0	0.0	1.6	1.1	3.6	4.1	1.0	1.8
大体	0.0	39.9	0.0	5.4	32.8	0.9	4.0	4.9	2.2	3.7
風	0.0	0.5	0.0	0.0	2.6	4.6	4.9	4.9	2.6	14.6
系	0.0	14.3	4.6	0.0	14.1	20.6	20.8	4.2	31.7	32.7
感覚	0.0	3.4	0.0	0.0	6.9	5.2	8.4	6.5	5.2	13.3
ほとんど	0.0	20.2	9.2	5.4	11.3	13.4	26.4	20.8	17.2	19.6
関係	0.0	10.8	0.0	0.0	21.0	28.0	27.7	6.7	19.7	14.0
ふう	8.3	39.9	45.8	5.4	30.3	1.1	5.6	12.9	2.4	5.7
たしか	0.0	11.3	0.0	0.0	6.4	0.1	0.7	3.7	0.2	1.2
だいぶ	0.0	6.9	9.2	5.4	10.8	0.4	1.1	2.8	0.1	1.1
もちろん	8.3	24.6	36.6	0	18.9	5.8	2.7	22.8	5.0	25.6
たり	0.0	335.4	155.7	535.6	82.6	37.6	76.2	61.4	119.4	75.4
多くの	0.0	0.5	0.0	0.0	0.2	17.4	25.3	6.7	37.1	13.2
少ない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	3.1	3.1	1.0	2.3	1.9
~にくい	0.0	2.5	9.2	0.0	6.1	6.6	8.6	4.0	16.0	12.5
んです	107.3	1394.2	1836.8	427.4	213.1	14.1	38.5	91.6	2.2	105.0

付表2 「が」の語義整理 (8.3)

大辞林	新明解	広辞苑	本研究における分類
(1)前置きを本題に結びつける。	(8)なんらかの意味で対比される事柄を続けて言うことを表わす。		前置きを本題に結びつける。
(2)二つの事柄を単に結びつける。	(9)話の緒(イトグチ)として述べ		二つの事柄を単に結びつける。
(3)ある事柄に、それと逆の、または関係のうすい事柄を結びつける。	られた事柄をごく軽い気持ちで、次に述べる事柄と結びつけることを表わす。	(12)活用語の終止形に付き、前に述べた事柄から続くと考えられる事以外の事が後に続く意を表す。	対比される二つの事柄を結びつける
(4)事実とは反対の事柄を願う気持ちを表す。	(10)実現のむずかしそうな事柄や、事実と反対の		事実と反対の事柄や実現しにくい事柄が実現するのを望む気持ちを表す。
(5)実現しそうにない、はかない願いを表す。	事柄の実現を願う気持ちを表わす。		
(6)はっきり言わず、遠回しに述べる気持ちを表す。	(11)あとを言いさしにしたような形で、婉曲に述べることを表わす。	(13)言いさしの文の最後に付けて、ためらったり相手の反応を待ったりする柔らかな表現。	あとを言いさしにしたような形で、えんきよくに述べる気持ちを表わす。
(7)軽蔑し、軽んじる気持ちを添える。			軽蔑し、軽んじる気持ちを添える。

付表3 「けれど」の語義整理 (8.3)

大辞林	新明解	広辞苑	本研究における分類
(1)前置きを本題に結びつける。	(8)なんらかの意味で対比される事柄を続けて言うことを表わす。		前置きを本題に結びつける。
(2)二つの事柄を単に結びつける。	(9)話の緒(イトグチ)として述べられた事柄をごく軽い気持ちで、次に述べる事柄と結びつけることを表わす。		二つの事柄を単に結びつける。
(3)ある事柄に、それと逆の、または関係のうすい事柄を結びつける。		(12)活用語の終止形に付き、前に述べた事柄から続くと考えられる事以外の事が後に続く意を表す。	対比される二つの事柄を結びつける
(4)事実とは反対の事柄を願う気持ちを表す。	(10)実現のむずかしそうな事柄や、事実と反対の事柄の実現を願う気持ちを表わす。		事実と反対の事柄や実現しにくい事柄が実現するのを望む気持ちを表す。
(5)実現しそうにない、はかない願いを表す。			
(6)はっきり言わず、遠回しに述べる気持ちを表す。	(11)あとを言いさしにしたような形で、婉曲に述べることを表わす。	(13)言いさしの文の最後に付けて、ためらったり相手の反応を待ったりする柔らかな表現。	あとを言いさしにしたような形で、えんきよくに述べる気持ちを表わす。
(7)軽蔑し、軽んじる気持ちを添える。			軽蔑し、軽んじる気持ちを添える。

付表4 「たり」の語義整理 (8.3)

大辞林	新明解	広辞苑	本研究における分類
(1)並行する,あるいは継起する同類の動作や状態を並べあげるのに用いる。	(4)その事柄が交互に行われることを表わす。	(7)動詞の連用形に付いて「…たり…たり」の形で,動作の並行・継起することを表す。	動作の並行・継起することを表す
(2)一つの動作や状態を例としてあげ,他に同類の事柄がなおあることを暗示する。	(5)ある動作を例示的に上げ,関連する他の場合を言外に暗示することを表わす。	(8)同様のことが他にあるのを暗示しつつ,例示する。	一つの動作や状態を例示的にあげ,他に同様のことがあることを暗示する。
(3)同じ動作を「…たり…たり」と繰り返してあげ,命令や勧誘の意を表す。	(6)〔終助詞的に〕軽い命令を表わす。	(9)命令・勧誘の意を表す。	命令・勧誘の意を表す

付表5 「ね」の語義整理 (8.3)

大辞林	新明解	広辞苑	宇佐美 (1999)	本研究における分類
(1)相手の同意を求める気持ちを表す	(6)相手に同意を求める気持ちを表す	/	(12)同意の「ね」	同意・共感を表す
(2)軽い詠嘆を表す				
/	(7)事の真偽などについて相手に確かめる	/	(13)発話内容の確認	発話内容の確認
(3)軽く念を押す気持ちを表す	(8)相手を納得させようとする気持ちを表す	(10)語句の切れ目に付いて,相手に念	(14)聞き手の感情や心理に配慮して使用される	念を押したり,相手を納得させたりす

	す	を押し、または軽い感動を表す。	「発話緩和」	る気持ちを表す
	(9) (感) 親しい間柄にある人に対して、注意を喚起、念を押ししたりする気持ちを表す	(11) (感) 親しみをこめて呼びかけ、または念を押しに用いる語。	(15) 聞き手を自分の話題に引き込むために使用する「注意喚起」	親しみをこめて呼びかけ、または注意を喚起したり、念を押ししたりするのに用いる
(4) 文節の末尾について用いられる。語勢を添えたり、声のつながりとしたりする。「あのね」、「そうだね」などの形で、感動詞的に用いられる			(16) 言いよどみやことばを探すフィラーとして使用される「発話埋め合わせ」	聞き手を自分の話題に引き込むため、語勢を添えたり、言いよどみを埋めたりするのに用いる
(5) 問いかける気持ちを表す。				質問・疑念・反問を表す

付表6 「ちょっと」の語義整理 (8.3)

大辞林	新明解	広辞苑	岡本・斎藤 (2004)	本研究における分類
(1)数量・程度などがわずかなさま。時間が短いさま。	(6)数量・程度がわずかであって、問題にするほどでもない様子	(10)わずか。少し。		CH1 数量・程度がわずかであるさま
(2)軽い気持ちで行うさま。特に何という考えもなく行うさま。		(11)ほんのついでに。「一寄ってみる」		
(3)大層というほどではないが、かなりの程度・分量であるさま。	(7)大したことではないとばかりに無視するわけにもいかない程度である様子	(12)(逆説的に)存外。かなり。		(除外)
(4)(下に打ち消しの語を伴って)簡単には(…できない)。	(8)否定表現と呼応して、その可能性はほとんどないと判断する様子	(13)(否定の語を伴って)少々のことでは。そう簡単には。		打ち消しの語と呼応して、その可能性はほとんどないと判断する様子
(5)軽く相手に呼び掛ける語。もしもし。	(9)同等以下の相手に呼びかける語	(14)しばらく。(呼びかけにも使う)「一待っ	(15)呼びかけ	呼びかけ

		て下さい」 「一、あなた」		
			(16)否定的な内容の前置き	否定的な内容を断定することを避ける
			(17)依頼や希求、指示行為の負担をやわらげる	依頼や希求、指示行為の負担をやわらげる
			(18)間つなぎ	間つなぎ
			(19)断りを受けやすくなる	断り、負の評価など言いにくい後件を省略し、話し手の心理的負担を弱める
			(20)とがめ	とがめ

付表7 「やはり」の語義整理 (8.3)

大辞林	新明解	広辞苑	本研究における分類
(1)様々ないきさつがあつて、結局、初めに予測した結論に落ち着くさま。一般的な常識・うわさなどに違わないさま。	(4)他の可能性も考えられたものの、最終的な結論としては、同類の他のものと変わらない状態が認められる様子。	(7)思ったとおりに。案の定。いろいろ考えてみても結局は。	予想通りに、いろいろ考えてみても結局は。一般的な常識・うわさなどに違わないさま。
(2)前もつてした予想や判断と同様であるさま。また、他の例から類推される状況と現実が同じであるさま。	(5)他の可能性も考えられないではなかつたものの、結果として当初予測(期待)した通りのことが認められる様子。		
(3)以前と同じ状況であるさま。事態が変わらずに続いているさま。	(6)時間の経過にも関わらず以前のままの状態が認められるさま。	(8)もとのまま。前と、または他と同様に。	過去、または他と同様であることを示す。

付表8 「ほう」の語義整理 (8.3)

大辞林	新明解	広辞苑	本研究における分類
(1)方角, 方向	(6)方角。方向。方位	(12)向き	方角。方向。方位
(2)大体その方向にあたる場所(直接さすのを避けた言い方)	(7)方面。部門。分野。(言葉をぼかしたり婉曲に言ったりする場合にも用いられる)	(13)部面・分野	話題のものをぼかして, その部面であることをいう
		(14)話題のものをぼかして, その部面であることをいう	
(3)物をいくつかに分けて考えた場合, 条件に合うものとして選ばれた1つ	(8)対立的に存在するものの一方。	(15)並べていくつか考えられるものの, 一つ	並べていくつか考えられるものの, 一つ
	(9)二者を取り上げて比較するときの一方		
(4)大小・優劣など相対する観点から物事を捉えた時, 条件に合うどちらかの部類に属する事	(10)どちらかという, そういう性質のあるもの	(16)どちらかといえばこれだという部類をいう語	どちらかという, そういう性質のあるもの
(5)方がいい。相手にそうするよう勧める(しないよう忠告する)意を表す			方がいい。相手にそうするよう勧める(しないよう忠告する)意を表す
	(11)方法。手段。		方法。手段。

付表 9 「感じ」の語義整理 (8.3)

大辞林	新明解	広辞苑	本研究における分類
(1)外界の刺激によって生じる感覚「指先の感じが鈍る」	(4)皮膚・舌などの感覚器官が何かに触れた時に感じる刺激。	(7)皮膚などで外界の刺激を受けること (8)刺激に対する反応。	感覚器官に受ける刺激によって生じる反応。感覚。
(2)物事に接して感じたこと。印象や感想、感触など	(5)接した人の態度や対した物事の周囲から総合的に受ける、当人自身にも分析・否定を許さぬ全体印象	(9)物事を見聞したり、人に接したりしたときに受ける気持ち。印象や感想。	物事に接して感じたこと。印象や感想。
(3)そのものらしい味わいや雰囲気	(6)その時その物が置かれた雰囲気や臨場感	(10)その物事に特有の雰囲気。	そのものらしい味わいや雰囲気。

付表 10 「頃」の語義整理 (8.3)

大辞林	新明解	広辞苑	本研究における分類
(1)時間・時期を限定する語に付いて、だいたいその時であることを示す	(4)話題として取り上げたある時を、その前後も含めて幅広くさす語。時分。	(5)時を、その前後を含めて漠然と指す語	時を、その前後を含めて漠然と指す語
(2)時節。時期。文語的な言い方。		(6)時節。季節	時節。季節
(3)適当な時期。頃合い。		(7)ある事にちょうどよい時機。	適当な時期。頃合い。
		(8)ある期間。日数。	ある期間。日数。

付表 11 母語話者内省調査用の質問項目 (8.4)

	番号	用例
1	NE1-1	A : その子は主人公ではないんですね。 B : そうですね。
2	NE1-2	A : えー夢ですか B : はい。なんか今お勉強されてることもありますよね。 A : あーそうですよね。ま、今、このまま、看護の仕事に関してはまあ、ま夢というかまあ一応仕事というか。
3	NE1-3	A : いいですよー。 B : そうですね。嬉しかったです。
4	NE1-4	わたしたちにとってのいかにも時計らしい時計のありかたですね。
5	NE2-1	A : そっか。このあと受験って感じなのね。 B : うん。
6	NE2-2	A : あそこの二、あれ、二階なんだよね。第一庁舎の。 B : うん。
7	NE2-3	奥さん、あなたはそんな言葉ばかりを探しておられたんですね。
8	NE2-4	谷川 : かなり自信がでてきたということです。 高良 : はい。
9	NE3-1	僕が何ゆってもそうゆうふうに言われるんだったらもう続けられないね。
10	NE3-2	そういったことを全部抜きにしてやるというのはいいと思いますね。
11	N3-3	人間の問題と経営の問題というのは、どちらかというとな人の問題に比重がかかっているということでしょうね。
12	NE3-4	歴史学がもっと盛んになってもいいと思いますね。
13	NE4-1	A : ね、ね、すごい敷地が広い。 B : マンション、建てるんだろーね
14	NE4-2	A : ね、ね。 B : 何、何 A : ちょっと待って、あとでゆう

15	NE4-3	A : <u>ね</u> , かおちゃん, おっきくなってるもんね。 B : うん
16	NE4-4	<u>ね</u> , なんか地域の人も今年は少なかったってゆってた。
17	NE5-1	(占いの話) A : 寅のほうが強そうじゃん。 B : 五黄は <u>ね</u> , 頑固なんですよ。五黄の人って
18	NE5-2	これ <u>ね</u> , 千葉の九十九里は <u>ね</u> , すごい甘いんですよ。
19	NE5-3	年賀状って <u>ね</u> , どんどん減るのかなって思ったら, 逆に。
20	NE5-4	季節が <u>ね</u> , 変わり始めるからまた体気をつけてください <u>ね</u> 。
21	NE6-1	ちょうど合いますか <u>ね</u> 。-はい, 合います。
22	NE6-2	田舎でも, 問題ないですか <u>ね</u> 。就職先がもしあれば。
23	NE6-3	プロの人が思いつくんだなっていうところに感心するような感じですか <u>ね</u> 。
24	N6-4	どうしたんでしょうか <u>ね</u> 。あの時はほんとにショックだったんですけど。
25	KO-1	A : 学校の, 学校はどうでした, 学校は好きでしたか? B : あー, 好きでした <u>ね</u> 。小学校の <u>頃</u> も, 中学校も高校も好きでした <u>ね</u> 。
26	KO-2	幕末の <u>ころ</u> の一両は五万円という専門家の推算があり, 江戸時代初期なら十倍とみておかしくない。
27	KO-3	一方, 円仁が入唐帰国後, 中国の巡礼を紹介したことによって巡礼熱が高まり, 十一世紀 <u>ころ</u> に今日の三十三か所の形がととのったらしい。
28	KO-4	私が移転した <u>頃</u> は道は悪く雨が降ると駅までの道は長靴をはいても困難で, その上に街灯もなく…
29	YA1-1	<u>やはり</u> 駅というものは一つの社会の顔であるわけで, ましてや首都北京の中央駅であるから
30	YA1-2	アメリカのカリフォルニアには, <u>やはり</u> ハリウッドという映画の都がありますから, 銀行も映画に対する融資というものに理解を持っているんです。
31	YA1-3	大人の思考を持つヨーロッパでは, <u>やはり</u> 個人情報 ^が が国家に管理されるのが嫌らしい。

32	YA1-4	本音を言うと、 <u>やはり</u> サッカーをやっている以上、1回は海外で挑戦したいと思っている。
33	YA2-1	A：(サンタクロス) のこと信じてましたか？ B： <u>やっぱり</u> 小さい頃は、信じてましたけど。
34	YA2-2	A：普段 <u>やっぱり</u> 電車の時間とか急いだりしてるんで B：そうですね、時計をしょっちゅう見てしまいますもんね。
35	YA2-3	まあ、 <u>やっぱり</u> なんか他の人が行ったと聞いたりとか、本とか、ポスターとかも結構駅に貼ってあるから、気になるなって思っ。
36	YA2-4	やっぱりそういうの(ドラマ・映画)をみて、なんか、行ってみたいなのというのはあるかもしれない。
37	CH1-1	A：印象に残っている本とかありますか。 B：西尾維新さんっていう作者さんが書いている、 <u>ちょっと</u> 不思議な、お話。
38	CH1-2	A：一昔ってゆうか半期 <u>ちょっと</u> 前今年話題の『アナと、アナと雪の女王』 B：それだけは見ました。
39	CH1-3	「いくらでもにらんで下さい」と、久井は言った。「そういう目で見られるのは慣れてます」。妹尾は、 <u>ちょっと</u> 口調を変えた。
40	CH1-4	声をかけると、「本当ですね」と、 <u>ちょっと</u> はにかんで応じてくれました。
41	CH2-1	まったく人生を楽しむということにかけて、彼女たちほど有能な人種も他に <u>ちょっと</u> 見当たらない。
42	CH2-2	すると彼は、自分の戦術など、歴史書を読み、その教えを学ぶことで身につけたのだと答えました。 <u>ちょっと</u> 信じられない気がしました。
43	CH2-3	何が原因か <u>ちょっと</u> わかんないんだけど。
44	CH2-4	作者の意図は奈辺にあるかが、 <u>ちょっと</u> わからない。
45	CH3-1	A：5歳はこうみたいな、わかってるこっちゃない。 B：ま、 <u>ちょっと</u> ね、だってちっちゃい子には注意向けるだろうしね。
46	CH3-2	しかも <u>ちょっと</u> 今年さ、めっちゃ繰越金あるんだ。多分来年使ってくれ。
47	CH3-3	つい考えちゃうのよ。来なかったらどうしよとかさ。なんか <u>ちょっと</u> さいろいろね。

48	CH3-4	A : <u>ちょっと</u> どうかしら。 B : あれ, 延長じゃないよね。
49	CH4-1	その一, えっと一, 大学の方の色々課題とかが <u>ちょっと</u> 多くなってきておりまして, <u>ちょっと</u> , 今の段階でもうかなり, <u>ちょっと</u> 厳しいんですね。
50	CH4-2	私たちは <u>頑張って</u> やるけれども, 治すのは <u>ちょっと</u> 難しいかもしれない。
51	CH4-3	<u>ちょっと</u> レポートが追いつかなくて, 結構あんまり寝てないところのお仕事にも迷惑かけそうで。
52	CH4-4	<u>ちょっと</u> , 実はあの私事で大変恐縮なんですけれども, <u>ちょっと</u> , あの, 勉強ですとかその他のことが <u>ちょっと</u> 忙しくなって
53	CH5-1	答に窮する人がいたら, 買い物をする前に, <u>ちょっと</u> 考えて欲しいことがある—「なぜ, 自分は評判になっているバッグにだけ興味をそそられるのだろうか。」
54	CH5-2	あそこは <u>ちょっと</u> 加減してほしいと思うよね。ケチだあとと思わせる内容だから。
55	CH5-3	バイトのシフトを変更したいと思ってるんです, そのご相談を <u>ちょっと</u> したくて。
56	CH5-4	心配するな。それより, お前, <u>ちょっと</u> 聞いて回ってくれないか。
57	CH6-1	A : なんか旅行まで行って時間に縛られるのは <u>ちょっと</u> … B : わかります。
58	CH6-2	A : まあ, もしまた, お金があれば, 買いたいですけど B : あー, そうですか A : 今は <u>ちょっと</u> , はい, ていう感じですね。
59	CH6-3	どっちかなら, お金ですかね。お金で時間を買うという選択ができるかなと <u>ちょっと</u> …
60	CH6-4	A : 虫がいるからだめか。 B : そう, 虫が <u>ちょっと</u> …
61	CH7-1	<u>ちょっと</u> , 和也くん, デザートのプリンがないんじゃない。
62	CH7-2	蕾は3階の窓からフワット外に飛び出した。おい! 蕾! <u>ちょっと</u> !

63	CH7-3	A : え, <u>ちょっと</u> 待って, 何, 何 B : それは知らないですけど。
64	CH7-4	<u>ちょっと</u> 待てよ。誰だこの女。見たこともない女が玄関を通った。
65	GA1-1	お忙しいところすみませんが, よろしくお願ひします。
66	GA1-2	あの一, 申し訳ないんですが, 私が, このお仕事をさしていただひてるのは, 一つ, 目標がありまして。
67	GA1-3	この世の中で聖人ほど「楽観主義者」はいないと思ひます。例として挙げればきりがありませんが, ここでは「ユーモアを求める祈り」をつくった聖トマス・モアを取り上げてみましょう。
68	GA1-4	A : あ, すいません。あの先ほどちょっとお電話した者なんですが, えっときょうアドベンチャーコース予約がいっぱいってことなんですけれども, えっと一つはあのキャンセル待ちってゆうのはできますか。
69	GA2-1	ただ, ところ変われば品変わるといひますが, ブラジルでうまくいったことがパキスタンでうまくいかない場合がある。
70	GA2-2	数百キロも南にあり, 千八百三十一年にロスが発見したときはブーシア半島南西部の陸上にあつたが, 少しずつ移動して今はバサースト島付近にある。
71	GA2-3	駅からは少し歩いた記憶がありますが, 近くにスーパーがある。
72	GA2-4	飲み放題お時間になりますか, ラストオーダーか延長か選べますが。
73	GA3-1	葉がザワッと鳴る。おおきな木なら, 暗がりや木蔭をつくる。根があるが, 根は見えない。
74	GA3-2	入り口は数段ですが, 階段があるため重い荷物を持つてる人は少しめんどい
75	GA3-3	小説も好きで読みますが, ただ, 最近読む頻度の方が少ないですね。
76	GA3-4	そんなにすごく熱中してるとゆう程でもないんですが, 私あのカードを作るのが好きなので。
77	GA4-1	A : 講義なんかさえすりゃどこへ泊まろうが, 勝手じゃねえかって言っさ, そうしたら松野がすげえ怒ってさ, 何言っただ君たちは。 B : そうそうそう。

78	GA4-2	A : まほんとに邪馬台国がどこに <u>あろうが</u> , 何だろうが, まあここに昔あの一, ちゃんとした何王朝があったのは確かなんだろうなって感じがしますやっぱり。 B : へー, そうなんですね。
79	GA4-3	キャンセル料がかかろう <u>が</u> かかるまいが, 泊まれない時は泊まれないから。
80	GA4-4	ゴミを焼却炉で全てプラスチックだろう <u>が</u> なんだろうが, 燃やしてるみたい感じ。
81	GA5-1	よくいけばいい <u>が</u> , 悪くいけばこれは非常に危険なものであると私は思っております
82	GA5-2	それでこの騒乱がおさまればいいが, そうはいかないだろう。
83	GA5-3	しばらくすると, だんだん風がよわまってきました。これで, おさまるといいが。
84	GA5-4	N I C U (新生児集中治療室) に入らずにすめばいい <u>が</u> , 入らない可能性はある。
85	GA6-1	ちょっと習い事を始めてしまって, 子供のこともあって, 三日から二日に変えていただきたいんですが…
86	GA6-2	A : 不便さは全く厭わない。 B : ま, 限度はありますが <u>が</u> 。
87	GA6-3	二十四以外なら, 二十か二十三だとありがたいんですが <u>が</u> 。
88	GA6-4	A : 大体いつものパターンだと十日か十七とかその辺かなとは思いますが… B : 十日とか, うんうんうん。 A : いかがでしょうね。
89	KE1-1	申し訳ないんですけど, 他の人あたってみてもらっていいですか。
90	KE1-2	ちょっとずれちゃいますけど, 今, なんか動画投稿サイトで, 誰でも好きに, 送ってしまう世の中なんですけど。
91	KE1-3	うまく言えない <u>けど</u> , 学校に行く意味がわかりません。

92	KE1-4	このあいだから思っていたのです <u>けど</u> 、浅見さんてメモを取らないのですね」
93	KE2-1	名前はちょっと覚えていないんです <u>けれど</u> 、小学校の時に担任だった女性の方です。
94	KE2-2	おっしゃる通り全体の要素を考えたら、メリットもデメリットもあるし、鍼治療もそうでしょう <u>けれど</u> 、効く人と効かない人がいるし。
95	KE2-3	金曜日に合わなかったんだけど、もう入院してっから、だからか。
96	KE2-4	まだ決定はしてない <u>けど</u> 、すごく面白い空間になると思うよ。
97	KE3-1	そう言ってくださるのは本当嬉しいです <u>けど</u> 、やっぱり僕としては外のほうが好きなので。
98	KE3-2	なんか人がたくさん集まると、いいこともある <u>けれども</u> 、良くないこともおきるじゃないですか。
99	KE3-3	お金はあってもいいと思うんです <u>けれど</u> 、お金ではできないことが時間があったらできると思うので。
100	KE3-4	それは一つの例だ <u>けど</u> 、どっちにしても予約をそんなに早く取る必要はないと思う
101	KE4-1	ほんとはわたしたちが入るのがいいんだ <u>けど</u> 。書けない場合もあるから入れない場合もあるでしょう。
102	KE4-2	ほんとは東京駅まで行けるといいん <u>すけど</u> 。
103	KE4-3	数時間お手伝いとかだったら全然いいんです <u>けど</u> 、ちょっと今はまだ厳しいかも。
104	KE4-4	自分の世界を今の家庭に支障のない範囲で持てるといいなと思うんです <u>けど</u> 。
105	KE5-1	なんかその一番左の濃いブルーいいと思う <u>けど</u> 。
106	KE5-2	てっきり仲間みたいな話しに行くかと思ったんです <u>けど</u> ...
107	KE5-3	一応来週ぐらいに、来週か再来週ぐらいに、あの、貸し半纏のお知らせ回すんで、一応登録した人一応七百円当日もらっていたきたいんです <u>けど</u> ...
108	KE5-4	八時半九時ならまあ大丈夫だと思うんだ <u>けど</u> ...

109	HO1-1	A : まあ、こっちは山っていう感じがしますけど。 B : ああそうですね、うん、西の <u>ほう</u> 。 A : 平地な感じなんですか？
110	HO1-2	橋の、先の <u>ほう</u> に、と言いますか、橋の横の川では、子供が二人遊んでます。
111	HO1-3	長い年月の中で、ところどころ上の <u>ほう</u> が壊れてはいるが、全体として、その姿をよくとどめていた。
112	HO1-4	彼女の目は、どこだかわからない遠くの <u>方</u> を睨んでいた。
113	HO2-1	えーと、この日を除けば、私、体のほうの都合もいいんだけど…
114	HO2-2	その学生たちのかなりの部分が音楽の <u>ほう</u> へ進んだことで、現在ビデオを接点とした音楽と視覚芸術の接近の基礎となる要因をつくったと語っている。
115	HO2-3	A : まあ、あのNHK地上波の <u>ほう</u> でやってたんで、深夜に日曜日の深夜に、だから録画して、ずっと見れたんですけどね B : あー、そうだったんですね、へー、なるほど。
116	HO2-4	飲食店を構えたいってゆうつもりで入ったわけじゃなく、お客様とのコミュニケーションの <u>ほう</u> で勉強させていただきたいと思ってやったので。
117	HO3-1	A : どっちがいいですか？実習とが座学は。 B : 座学だと眠くなっちゃうので、実習の <u>方</u> が時間が過ぎるのは早いので
118	HO3-2	若い人たちは古いものを知らないのに、決まって近代的かつ進歩的なもの <u>ほう</u> を好みます。
119	HO3-3	A : でも母の <u>ほう</u> が認知が結構進んできてるってゆうか、ま両方進んでるって弟は言うんだけどね。(父の状況と比べるときの話) B : うん、うん
120	HO3-4	豊田商事の事件などは騙される <u>ほう</u> にも問題があると思います」#と率直な見解を披露した。
121	HO4-1	A : 少しだけ豪華に B : え、マクドナルドは豪華なんですね。 A : あー、わりと豪華な <u>ほう</u> ですね。

122	HO4-2	私あんまり運動神経いいほうじゃないので、あとまあ体格的にも一けっこう背が低いほうです。
123	HO4-3	私あんまり運動神経いいほうじゃないので、あとまあ体格的にも一けっこう背が低いほうです。
124	HO4-4	A：焼肉系でさ、四千二百円で食べ飲みってやばくない。 B：ま、安いほうだね。
125	HO5-1	A：やっぱちょっと話しといたほうがいいすか B：だってさ、だって、やっぱいきなりいきなりさ、本番の時に、はいどーんつってさ
126	HO5-2	(父は)「好きでもない男といっしょに暮らすよりは別れたほうがいい」と言ってくれました。
127	HO5-3	とすれば、その基本的な前提条件は、ひとまずのんで、話を先にすすめた方が賢明らしい
128	HO5-4	初恋の人には会わないほうがいいよね。
129	KA1-1	この場合は非常になんだろ、暗い感じ。なんとも言えない。
130	KA1-2	彼女はいくらか痩せて、すらりとした感じに見えたが、印象は全く変わっていなかった。
131	KA1-3	バターとミルクとかがあんまり入ってなくてこう香ばしい感じがしない。
132	KA1-4	A：この辺はなんかだいぶ、開拓されてるとゆうか、きれいな感じですよ ね。 B：まだね、きれいになりましたけどねー、でもなんか、お昼ご飯どこに買いに行こうかみたいなの。
133	KA2-1	疲労回復のために行こうみたいな感じになりますね。
134	KA2-2	A：さくら水産とかと一緒にだよね。意外と安いような感じがするんだけど。 B：うんうん。そそそ。 A：結果ひらいてみたらあ結構したなってゆう
135	KA2-3	一体これは何という人物だろう、と思ったのですが、結局まあ、ある意味で、男の一生というものを象徴したような感じもしましたね。

136	KA2-4	男谷は眼光の鋭い鍛えあげた鋼鉄のような <u>感じ</u> で、身長は五尺五、六寸で、 そう小さい方ではないが…
137	KA3-1	優雅にワルツを踊ったり、まさに上流社会の社交場という感じだ。
138	KA3-2	顔一杯に、不精髭が生えていて、画家というより山男の <u>感じ</u> だった。
139	KA3-3	ここでは、祝日の <u>感じ</u> がしない。
140	KA3-4	韓国人男性は儒教思想の教育のせい、礼儀正しく、男らしい <u>感じ</u> がする。
141	TA1-1	悲しくなったり、怒りがこみ上げてきたり、感情は揺れ動いた。
142	TA1-2	親密な関係は、結婚式などに招待したりされたり、とか、一緒に旅行をするなどの例でわかるように、どちらかというとも家族同様な関係となります。
143	TA1-3	A：スポーツが好きなので、体育館に行ったり、プールに行ったり、歩いたり、比較的外に行きますね。 B：アウトドアな感じなんです。
144	TA1-4	A：ええ、多分一番したいのは今ね研究進めたいんですけど、それを除くと。 B：まあまず、そうですね、まあでもゆっくり本読んだり、テレビ見たりとか…
145	TA2-1	普段お買い物の際は一人で自転車でなんか遠くまで行ったりしてるみたいで。
146	TA2-2	コンタクトとかしてたんで、よくコンタクトが取れたりとか。
147	TA2-3	A：多分ね、公文の先生になるじゃん。登録するじゃん B：うんうん A：そのあとにたぶん近いところを紹介してくれたりとかするんだと思うんだよね。
148	TA2-4	A：好きなもの、調べるために図書館行って、本借りたりとかしてるんですけど。B：うーん。

付表 12 ヘッジ語形の意味緩和度のスコア (8.4)

	A	B	C	D	E	F	G
NE1-1	3	2	4	1	1	2	3
NE1-2	4	1	1	1	1	1	1
NE1-3	4	4	4	3	2	5	4
NE1-4	5	3	4	4	4	4	4
NE2-1	2	1	3	4	2	1	2
NE2-2	2	1	1	5	2	2	1
NE2-3	1	1	1	1	1	1	1
NE2-4	1	2	1	1	1	2	1
NE3-1	2	2	1	5	2	2	1
NE3-2	5	4	4	5	4	5	4
NE3-3	4	2	1	5	1	4	3
NE3-4	3	2	2	1	1	4	2
NE4-1	1	2	2	1	2	2	4
NE4-2	1	1	1	1	3	1	1
NE4-3	4	4	3	4	4	1	3
NE4-4	2	4	1	5	2	4	1
NE5-1	2	4	1	5	2	4	2
NE5-2	5	4	1	4	3	3	5
NE5-3	2	2	1	1	1	3	1
NE5-4	2	1	1	4	2	5	4
NE6-1	2	1	1	1	1	3	3
NE6-2	2	1	1	4	1	3	1
NE6-3	2	2	2	1	2	2	3
NE6-4	2	3	1	2	1	4	2
KO-1	5	4	3	5	3	3	3
KO-2	1	1	4	1	2	3	4
KO-3	3	4	3	5	4	4	5

KO-4	4	4	5	5	4	4	4
YA1-1	1	3	1	4	3	2	2
YA1-2	1	4	1	5	2	1	1
YA1-3	4	4	4	1	1	4	4
YA1-4	1	4	4	1	2	3	4
YA2-1	2	4	2	5	4	4	3
YA2-2	1	1	1	1	2	1	1
YA2-3	4	4	5	5	5	5	4
YA2-4	1	4	2	5	3	2	2
CH1-1	5	4	2	5	4	3	4
CH1-2	2	4	1	5	4	1	2
CH1-3	4	4	5	4	5	4	2
CH1-4	2	4	1	4	1	3	1
CH2-1	4	5	4	3	4	4	1
CH2-2	2	4	3	2	3	1	1
CH2-3	5	4	5	4	4	3	4
CH2-4	5	4	4	5	3	4	4
CH3-1	2	3	3	4	2	2	1
CH3-2	4	5	4	5	2	4	5
CH3-3	5	5	4	4	4	4	5
CH3-4	2	4	1	1	3	1	1
CH4-1	2	4	1	1	3	3	2
CH4-2	1	2	1	1	2	1	1
CH4-3	1	2	2	1	4	1	4
CH4-4	4	4	4	4	2	4	1
CH5-1	1	2	1	3	1	3	1
CH5-2	4	4	3	4	4	4	2
CH5-3	1	1	1	1	1	1	1
CH5-4	3	1	3	4	5	1	2

CH6-1	3	2	2	1	1	5	1
CH6-2	3	4	3	1	4	4	3
CH6-3	2	4	3	2	1	3	4
CH6-4	2	4	1	4	2	4	1
CH7-1	2	2	1	2	1	5	4
CH7-2	4	4	4	4	4	4	1
CH7-3	2	3	1	2	2	4	1
CH7-4	3	2	1	1	1	4	1
GA1-1	4	4	3	1	1	2	4
GA1-2	2	4	3	5	2	4	5
GA1-3	2	2	3	5	2	2	4
GA1-4	2	4	1	2	2	3	1
GA2-1	2	4	1	1	1	4	1
GA2-2	5	4	1	4	3	4	1
GA2-3	2	2	1	1	2	1	1
GA2-4	4	1	1	4	4	1	4
GA3-1	1	2	1	5	4	1	3
GA3-2	2	3	1	4	2	5	1
GA3-3	5	4	3	4	3	5	4
GA3-4	3	4	2	2	1	4	4
GA4-1	2	4	3	2	4	1	1
GA4-2	5	4	1	4	4	4	2
GA4-3	1	1	1	2	2	1	1
GA4-4	3	4	1	4	5	1	3
GA5-1	2	4	1	1	2	1	1
GA5-2	2	4	1	5	2	4	1
GA5-3	1	1	1	4	4	1	2
GA5-4	4	4	1	5	2	2	1
GA6-1	5	4	3	5	5	5	4

GA6-2	4	2	1	4	5	1	5
GA6-3	3	2	2	4	5	4	4
GA6-4	2	4	3	5	2	4	1
KE1-1	4	4	1	4	2	4	4
KE1-2	2	4	1	4	2	1	1
KE1-3	4	4	3	5	2	4	5
KE1-4	2	5	1	5	4	4	3
KE2-1	3	4	1	2	4	1	1
KE2-2	2	4	1	4	2	4	1
KE2-3	2	2	1	2	1	4	1
KE2-4	4	4	3	4	4	4	4
KE3-1	3	2	1	3	3	1	1
KE3-2	5	5	1	4	4	4	2
KE3-3	2	3	1	2	1	2	1
KE3-4	1	1	1	2	1	1	1
KE4-1	2	4	1	3	2	1	1
KE4-2	3	4	3	4	1	4	1
KE4-3	5	2	1	4	5	1	4
KE4-4	2	2	1	2	1	1	1
KE5-1	4	4	2	4	5	3	2
KE5-2	4	4	3	2	1	4	2
KE5-3	2	4	1	4	1	2	2
KE5-4	4	4	1	5	4	1	2
HO1-1	2	4	3	5	2	1	4
HO1-2	4	4	4	4	4	4	2
HO1-3	2	3	1	2	1	3	1
HO1-4	2	4	4	4	4	4	2
HO2-1	2	4	1	4	1	1	1
HO2-2	1	2	2	4	1	4	4

H2-3	1	2	1	4	1	1	1
HO2-4	4	4	4	5	1	4	4
HO3-1	5	4	4	5	1	4	5
HO3-2	4	4	1	1	1	1	1
HO3-3	2	4	1	4	5	1	4
HO3-4	1	4	1	2	4	2	2
HO4-1	4	4	3	5	4	1	4
HO4-2	3	4	1	5	4	1	2
HO4-3	3	4	2	2	1	4	1
HO4-4	2	4	1	4	1	1	1
HO5-1	5	4	1	5	4	4	2
HO5-2	5	2	4	2	5	4	4
HO5-3	1	1	1	2	3	1	3
HO5-4	3	4	2	4	3	4	4
KA1-1	3	4	1	4	3	1	2
KA1-2	4	4	3	4	4	3	5
KA1-3	2	4	1	5	4	1	2
KA1-4	5	4	3	2	3	4	1
KA2-1	4	4	2	2	4	1	2
KA2-2	5	5	3	5	2	1	2
KA2-3	4	4	1	5	4	2	3
KA2-4	2	4	2	1	1	4	1
KA3-1	2	4	1	5	2	4	1
KA3-2	3	4	4	4	4	3	4
KA3-3	2	4	1	4	2	3	2
KA3-4	4	4	2	4	2	4	4
TA1-1	5	5	4	5	4	5	3
TA1-2	2	4	1	4	2	1	1
TA1-3	3	2	1	1	2	4	1

TA1-4	2	2	1	4	2	1	4
TA2-1	3	4	1	1	4	1	1
TA2-2	4	4	1	2	4	1	1
TA2-3	3	4	3	1	1	4	2
TA2-4	5	5	4	5	4	4	3

謝辞

本研究を進めるにあたり、多くの方々にご指導・ご協力をいただきました。お力添えをいただいた方々に、心から深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

まず、終始、丁寧にご指導およびご鞭撻をいただいた主指導教員である石川慎一郎教授に心より感謝申し上げます。研究生として入学してから後期課程に至るまでの4年間、先生には、言語学・言語教育学の最新の知見はもとより、研究作法や論文書式、統計手法に至るまで丁寧にご指導をいただきました。また、研究が遅々として進まないときにも、わずかな進展を見出し、温かく励ましてくださいました。本研究は先生のご指導や力強い励ましなくしては、完成しえなかつたと存じます。

また、審査委員として貴重なご助言やご指摘をいただいた柏木治美先生と李在鎬先生、ならびに、コース集団指導の度に丁寧にご指導や数々の有益なアドバイスをいただいた外国語コンテンツ論コースの木原恵美子先生、グリア・ティモシー先生、朱春躍先生、芹澤円先生、大和知史先生に、厚くお礼を申し上げます。先生方からいただいたご助言は本研究の各所に反映されております。

さらに、学外の先生方や研究会でお会いした方々からも、様々な激励やご助言をいただきました。とりわけ、学部時代にご指導くださった天津外国語大学の李丹蕊先生、ならび到北京外国語大学大学院博士前期課程の指導教員であった曹大峰先生に深く感謝の意を申し上げます。李先生のご講義で日本語教育の魅力に触れたことが日本語教育研究を志す契機となりました。曹先生には日本語教育をコーパス言語学という視点から研究することを勧めていただき、日本語教育研究の基礎のみならず、研究者としての心構えを教えてくださいました。

後期課程在学中、文部科学省より国費留学生として支援を受けることができました。ご支援に御礼申し上げますとともに、受けた御恩を今後の研究生活を通して還元していく所存です。

最後に、様々な場面で励ましてくれた石川研究室の先輩方、ゼミ生の皆様、そして落ち込んでいるときにも温かく支えてくれた友人や家族にこの場を借りて感謝申し上げます。